之を賣り、爲に富を致すこと鉅萬なり。因つて他人の田地を兼幷し、以て己が有となし、其の豪富に矜りて金衣玉食するに至る。壯勇の徒亦ここに屋を比べて住居し、輕捷なること慶忌の如く、勇烈なること專諸の如く、或は高冠を戴きて出で、或は刀劍を按じて趨り、鮫函を著け、屬鏤の劍を佩ぶ。其等の武器たる、之を兵庫より取るを要せず、閭里の民皆之を私有し、戶戶に鶴膝の矛を藏し、人人犀渠の楯を有し、兵車は石頭城の府庫に盈ち、戈船の多きこと實に江湖を掩ふ。

露往き霜來り日月其れ除ぬれば、草木(二七四)節解し鳥獸腯膚す。鷹隼を觀(二七五)征夫を誡め、(二七六)組甲を坐ゐ祀姑を建て、(二七七)官帥に命じて鐸を擁せしめ、將に(二七八)具區に(二七九)校獵せんとす。(二八〇)烏滸、狼朊、夫南、西屠、儋耳、黑齒の酋、(二八一)金鄰象郡の渠あり。(二八二)驫駭鳳翥(二八三)輟雪驚捷して前途に先驅し、(二八四)俞騎路に騁せ(二八五)指南方を司り、出車(二八六)鑒鑒、(二八七)被練鏘鏘たり。吳王乃ち玉輅を巾り(二八八)驌驦を軺し、魚須を旗にして(二八九)重光を常に

【二七四】節解。凋落すること。
【二七五】征夫。兵卒なり。
【二七六】組甲。甲冑なり。祀姑は旗なり。
【二七七】官帥。將帥なり。
【二七八】具區。澤の名なり。
【二七九】校獵。埒を作り禽獸の逃路をさへぎりて獵すること。
【二八〇】烏滸。以下皆南夷の名。黑齒は齒を黑く染むること。
【二八一】金鄰、象郡。南夷の國名。
【二八二】驫駭鳳翥。衆馬の走る貌。
【二八三】輟雪。走ること疾き貌。
【二八四】俞騎。先導の騎なり。
【二八五】指南。指南車なり、方角を示す車なり。
【二八六】鑒鑒。車の聲。
【二八七】鏘鏘は行列の貌。被練。甲を被れる兵士。
【二八八】驌驦。良馬なり。軺は車に馬をつくること。
【二八九】重光。日月なり。

し、(二九〇)烏號を攝り(二九一)干將を佩き、羽毛蕤を揚げ(二九二)雄戟鋩を耀し、(二九三)貝冑象弭ありて(二九四)織文鳥章あり。(二九五)六軍袀服して(二九六)四騏龍驤す。

【大意】秋去り冬來り草木凋落して鳥獸肥腯すれば、乃ち鷹を檢し兵士を戒め、甲冑を連ね軍旗を建て、將帥をして鐸を鳴らして號令を傳へしめ、將に具區澤に狩獵せんとす。南夷異俗の首長亦馬を驅りて吳王の爲に前驅し、俞騎路に騁せ指南車方角を司り、車聲轔轔として從騎雲の如し。吳王乃ち玉輅に乘り駿馬を駕し、日月を畫ける旗を建て魚須を以て旗竿となし、烏號の弓を執り干將の劍を佩び、兵士は羽旗を揚げ矛戟を耀かし、貝冑を被り象弭を執り、烏文の旗幟を飜し、武裝して之に從ふ。駟馬驕りて龍の驤るが如し。

(二九七)峭格周く施し、(二九八)罻罝普く張り、(二九九)罼罕瑣のごとく結び(三〇〇)罠蹏網を連ね、阹(三〇一)九疑を以てし、禦ぐに(三〇二)沅湘を以てし、(三〇三)輶軒蓼擾して(三〇四)彀騎焆煌たり。(三〇五)袒裼して徒搏

【二九〇】烏號。弓の名。
【二九一】干將。劍の名。
【二九二】雄戟。勁戟といふが如し。
【二九三】貝冑。貝を以て飾りし冑。象弭は象牙を以て飾りしユハズ。
【二九四】織文鳥章。織は幟の誤、旗幟の上に鳥の形を畫きしもの。
【二九五】六軍。大軍なり、天子の軍をいふ。袀服は軍服なり。
【二九六】四騏。駟馬なり。
【二九七】峭格。網を張る木なり。
【二九八】罻罝。鳥を捕ふる網。
【二九九】罼罕。麋を捕ふる網なり。
【三〇〇】罠蹏。兎を捕ふる網。
【三〇一】九疑。山の名。
【三〇二】沅湘。川の名。
【三〇三】輶軒。輕車なり。蓼擾は亂るる貌。
【三〇四】彀騎。弓を張る騎兵。焆煌は疾き貌。
【三〇五】袒裼。肌ぬぎすること。

し、(三〇六)拔距して石を投ぐるの部、(三〇七)猨臂駢脅(三〇八)狂趨獷猱し、鷹のごとく瞵鶚のごとく視、(三〇九)參譚狻猊して離るるが若く合ふが若き者、相與に(三一〇)莽罠の野に騰躍す。干鹵殳鋋、(三一一)暘夷勃盧の旅、長殺(三一二)短兵、(三一三)直髮馳騁し、(三一四)儇佻坌竝し(三一五)枚を銜んで聲なく、(三一六)悠悠たる旆旌の者相與に(三一七)昧莫の坰に(三一八)聊浪し、鉦鼓山に疊ひ、火烈林に熛え、飛爛浮煙、載ち霞み載ち陰り、(三一九)莅攝として雷硠し、巒を崩し岑を弛し、鳥は木を擇ばず、獸は音を擇ばず。

【大意】既に網を張るの格を立てて、普く網を張り、山川を以て逃路を遮り、輕車亂れ走り弓を張る者疾く馳せ、袒裼して獸を暴にし、拔距りて石を投ぐる者、猨臂駢脅の壯士縱横に奔走し、目を張ること鷹鶚の如く、或は離れ或は合ひ廣野に騰躍し、干戈を執り甲冑を被れる者、頭髮を立てて馳驅し、各〻枚を銜み旌旗を建て、獸を逐ひて廣原に奔馳し、鐘鼓山に震ひ火焰林を燒き、天の霞めと。

【三〇六】拔距。兩人手を以て相案じ、能く之を拔引くなり。

【三〇七】猨臂。身體の割合に臂の長きこと猨の如きなり、故に弓を引くに便なり。駢脅とは一枚肋とて肋骨の一枚板になり居る人なり。

【三〇八】狂趨。走ること。獷猱は勇なり。

【三〇九】參譚狻猊。相隨ふこと衆多の貌。

【三一〇】莽罠。廣大の貌。

【三一一】暘夷。鎧の名。勃盧は矛の名。

【三一二】短兵。刀劍なり。

【三一三】直髮。髮を逆立つること。

【三一四】儇佻坌竝。疾走の貌。

【三一五】枚。大きさ箸の如し、横に之を銜みて發聲を防ぐ具。

【三一六】悠悠。流るる貌、旆旌は旗なり。

【三一七】昧莫。廣大なり。

【三一八】聊浪。かけまはること。

【三一九】莅攝雷硠。崩れ摧くる聲。

るが如く、陰るが如く、士卒怒號して山巒爲に崩れ、鳥は木を擇ばず、獸は音を擇ばず、忽ちにして捕獲せらる。

(三一〇)虤虤を暴にし(三一一)麋麌を絹し、(三一二)六駮に驀り、(三一三)飛生を追ひ、(三一四)鸞鵠を彈し、(三一五)猱猋を射、白雉落ちて(三一六)黑鴆零ち、(三一七)嶚嶕を陵絶りて聿に巉嶮を越え、竹栢を跳踰して(三一八)杞柟を獑豫し、(三一九)封豨蛇き(三二〇)神螭掩はれ、剛鏃潤ひ(三二一)霜刃染まる。是に於て(三二二)節を弭め轡を頓め、鑣を齊へ(三二三)蹕を駐めて、徘徊倘佯し、目を(三二四)幽蔚に寓せ將帥の(三二五)拳勇と士卒の抑揚とを覽る。羽族は背距を以て刀鈹となし、毛羣は齒角を以て矛鋏となし、皆體に著いて卒なるに應ずるも、挂扢られて(三二六)創痏をなし、衝踣られて筋骨を斷つ所以にして、鋭を衄き鋩を挫き、(三二七)拉捭摧藏せざるはなし。石林の(三二八)岧嶤たるありと雖も、請ふ臂を攘げて之を靡かし、(三二九)雄虺の九首

【三一〇】虤虤。虤は白虎、虤は黑虎。

【三一一】麋麌。麋は大槃なり、鹿の類の獸。

【三一二】六駮。駮は獸名、白身黑尾、一角にして虎爪なり。

【三一三】飛生。鼯なり、和名ムササビ。

【三一四】鸞鵠。鳥の名、彈はハジキ弓にて射ること。

【三一五】猱猋。獸の名。

【三一六】黑鴆。鳥の名、體に毒あり。

【三一七】嶚嶕。高き貌。

【三一八】杞柟。木の名。獑豫は奔走すること。

【三一九】封豨。大なる豕のしし。

【三二〇】神螭。猛獸なり。

【三二一】霜刃。するどき刃。

【三二二】節。一種の旗の如きもの。天子の鹵簿の一なり。

【三二三】蹕。天子の行列なり。

【三二四】幽蔚。繁りたる林なり。

【三二五】拳勇。拳は健に通ず、たくましくつよきこと。

【三二六】創痏。キズなり。

【三二七】拉捭摧藏。撓ち折くこと。

【三二八】岧嶤。深險なり。

【三二九】雄虺。毒蛇なり、首九あり。

ありと雖も、將に足を抗げて以て之を跳まんとす。

【大意】　猛獸を暴にし飛鳥を追ひ、巉巖を越えて竹栢の間を涉り、杞柟の下に奔走すれば、利鏃は流血に潤ひ、白刃は赤血に染まる。是に於て天子駕を駐め徘徊倘佯して將帥士卒の拳勇抑揚を覽れば、則ち鳥獸の背距刀戟の如く、體に著きて、急卒に應ずるありと雖も、皆磨摧せられて瘡痍をなし、抵觸せられて筋骨を斷たざるはなく、鋒鋩之が爲に挫折せざるはなし。石林深險の處と雖も、臂を擧ぐれば則ち之を倒し、毒蛇の九頭なるも將に足を擧げて之を踏まんとす。

巢に居るを顚覆し、窟に宅るを剖破し、仰いで(三四〇)鵁鶄を攀ぢ、俯して(三四一)豺貘を蹴み、熊羆の室を刦剖し、虎豹の落を剽掠め、猩猩啼いて擒に就き、(三四二)鵰鶚笑ひて格され、(三四三)巴虵を屠りて(三四四)象骼を出し、鵬翼を斬りて廣澤を掩ふ。輕禽狡獸(三四五)周章夷猶し、糾中に(三四六)狼跋し、其の(三四七)睒睗する所以を忘れ、其の去就する所以を失ひ、魂褫はれ氣懾れて自ら踢趺す者、弦に應じて羽を飲み、形僨れ景僵るる者累積して增益し、雜襄錯繆りて藪薄を傾け岬岫を倒し、巖穴には(三四八)豜豵なく、麛

【三四〇】鵁鶄。鳥の名。
【三四一】豺貘。獸の名。
【三四二】鵰鶚。人を食ふ獸、人を見れば手を執りて笑ひ、乃ち之を食ふ。
【三四三】巴虵。大蛇なり。
【三四四】象骼。象の骨なり。巴虵よく象を食ふ、故に之を殺して其骨を出すなり。
【三四五】周章。狼狽すること。夷猶は猶豫すること。
【三四六】狼跋。狼狽なり。
【三四七】睒睗。疾く視ること。
【三四八】豜豵。獸の子。

菅には(三四九)麛麚なし。道を(三五〇)豐隆に假らんことを思ひ、重霄を披いて高く狩り、烏兎を日月に籠め、飛走の棲宿を窮む。

【大意】　鳥巢を顚覆し獸窟を剖破すれば、猩猩は啼いて擒に就き、鵰鶚は笑ひて殺され、巴虵を屠りては其腹中の象骨を出し、大鵬垂天の翼を斬りては廣澤を掩ふ。輕禽狡獸皆網中に狼狽して、其の視看を忘れ、其の去就を失ひ、恐懼すること特に甚しく、顚蹶する者は弓弦に應じて羽を沒し、僵仆する者は累積して益多く、藪澤岬岫禽獸索然として盡き、雛小の者と雖も、復た地上に存するなし。乃ち道を雷神に借り、此の重雲を排して天に上り、以て雲上に狩獵し、日中の烏月中の兎を網にし、鳥獸の棲を窮め盡さんことを思ふ。

(三五一)巉澗闋として　(三五二)岡岵童たり。(三五三)罾罘滿ちて效獲衆し。靶を廻らして行き漁を三江に睨觀す。(三五四)舟航を彭蠡に汎べ、萬艘を渾べて既に同うす。弘舸舳を連ね巨檻艫を接へ、(三五五)飛雲海を蓋ひ制常模にあらず。華樓を疊ねて島のごとく峙ち、時に(三五六)方壺に髣髴たり。(三五七)鷁首に比ぶるに裕なるあり。(三五八)艅艎に往初に邁

【三四九】麛麚。麛は鹿の子、麚は雉の子。
【三五〇】豐隆。雷の神。
【三五一】巉澗。山間の谷。闋は寂として人なきこと。
【三五二】岡岵。山に草木多きを岵といふ。童とは草木なきをいふ。
【三五三】罾罘。網なり。
【三五四】舟航。舟なり。彭蠡は湖の名。
【三五五】飛雲。船の名。
【三五六】方壺。海中の仙山の名、方丈ともいふ。
【三五七】鷁首。天子の船なり、船首に鷁と稱する鳥の形を畫く。
【三五八】艅艎。船の名、左傳に楚吳師ヲ敗リ其乘舟餘皐ヲ獲タリとあり。

ぎたり。(三五九)組帷を張り　(三六〇)流蘇を構へ、(三六一)軒幌を開き水區に鏡み、(三六二)篙工楫師閩禺より選ばれ、長風に(三六三)習御し　(三六四)靈胥を狎れ翫び、千里を(三六五)寸陰に責め、聊か期に先だちて須臾なり。

【大意】山澗の禽獸已に空しく、岡岵の草木既に盡き、網羅の中禽獸皆滿ち捕獲衆多なり。乃ち罾を廻らして漁を三江の中に觀んとし、舟を彭蠡湖上に浮べ、萬艘混雜して波を同うし、大船巨舶舳艫相銜み、飛雲海を掩ひて其制常に異り、華樓重疊して島の峙つが如く、方壺の宮闕に髣髴たり。綺麗なると鷁首に勝り、往昔の餘艧に過ぎ、帷帳を張り流蘇を垂れ、舟子は閩禺の選にして、長風を便用し靈胥を輕侮し、千里を往くこと寸陰の間に在り。期に先だちて須臾にして至る。櫂謳唱へて(三六六)簫籟鳴り、洪流響いて諸禽驚き、(三六七)弋磻放ちて　(三六八)鷦鷯を稽め、(三六九)虞機發して(三七〇)鵁鶄を留む。鉤餌縱横にして　(三七一)網罟緒を接へ、術は(三七二)詹公を兼ね、巧は(三七三)任父を傾け、(三七四)魰鱈を筌にし、鱨鯊を鱺り、兩鮒を罩にし鰡鰕を罩にし、乘鼉黿鼉罭を同うし羅を共にし、

【三五九】組帷。綵色あるトバリ。
【三六〇】流蘇。帷に垂るる飾、フサなり。
【三六一】軒幌。軒のトバリ。水區は河中なり。
【三六二】篙工楫師。船頭なり。閩禺は地名、其地の人水に慣る。
【三六三】習御。便用すること。
【三六四】靈胥。伍子胥の神、水を濟らんとする者は皆之を祠り水路の無事を禱る。
【三六五】寸陰。僅かなる時間。
【三六六】簫籟。笛の類なり。
【三六七】弋磻。箭の名。
【三六八】鷦鷯。鳥の名。
【三六九】虞機。虞は狩場を掌る官、機は弩牙なり。
【三七〇】鵁鶄。鳥の名。
【三七一】網罟。アミなり。
【三七二】詹公。詹何なり、釣に巧なる人。
【三七三】任父。任公子なり、釣に巧なる人。
【三七四】魰鱈。魚の名。

(三七五)沈虎潛鹿(三七六)櫳俾束せられ、(三七七)黴鯨の背　(三七八)羣犗に中る　(三七九)擽搶暴に出でて相屬き、復た河に臨んで鯉を釣ると雖も、鮒を井谷に射るに異るなし。輕舟を結んで競ひ逐ひ、潮水を迎へて繒を振ひ、(三八〇)靈夔を鮫人に訪ふ。(三八一)精衞石を銜んで繳に遇ひ、(三八二)文鰩夜飛んで綸に觸れ、北山その翔翼を亡ひ、西海その游鱗を失ふ。

【大意】棹歌起り簫管鳴り、洪流響きて禽鳥驚き、弓箭を放ちて鵠鵰を射、弩を發して鵁鶄を獲、香餌を鉤上に置き、縱横に之を流し、繩を結んで網となし、之を四方に張る、其巧妙なること遙に詹公任父に勝り、或は筌にて取り或は網にて取り、魚類一一擧げ盡し難し。鯨魚の背羣犗の如く、其の死するや妖星天に現れ、河に臨んで大鯉を釣るを覩ること、小鮒を井中に釣るが如し。競渡既に畢れば復た網を擧げて魚を取り、蒲實の復た現れんことを想ひ、靈夔を獲て之を鮫人

【三七五】沈虎潛鹿。皆魚なり。櫳俾束は網の中に陷ること。
【三七六】黴鯨。大魚の名。
【三七七】羣犗。衆牛なり。
【三七八】擽搶。妖星なり、淮南子に鯨魚死シテ彗星出ヅとあり。
【三七九】蒲實。孔子家語に楚ノ昭王江ヲ渡ル、江中ニ物アリ、大キサ斗ノ如シ、圓クシテ赤シ、舟人之ヲ取ル、王使ヲシテ孔子ニ問ハシム、子曰ク此レ所謂蒲實トイフ者ナリ、剖イテ食フベシ、唯霸者ノミ能ク獲トナスとあり。
【三八〇】靈夔。山海經に東海中ニ獸アリ、牛ノ如クニシテ蒼身、角ナク一足アリ、水ニ入レバ則チ風吹ク、其聲雷ノ如シ、其皮ヲ以テ鼓ヲ冒ヘバ五百里ニ聞ユ、名ケテ夔トイフとあり。鮫人は人魚なり。
【三八一】精衞。北山に居る小鳥の名なり、昔炎帝の女東海に溺れ、化して精衞となる、常に西山の木石を銜んで東海を塡めんとせしも其效なし。
【三八二】文鰩。魚の名。常に西海に行き東海に游ぶ、夜飛んで行く。

に問ひ、精衞文鰩共に之を獲、西海北山また其鱗翼を留めざるに至る。

(三八三)雕題の士、鏤身の卒、飾を虬龍に比べ蛟螭と與に對す。其華質を簡べば則ち(三八四)錦繢よりも亶費たり。(三八五)其虓勇を料れば則ち鵰のごとく悍く狼のごとく戾る。相與に潛險を味し(三八六)瓌奇を搜り、(三八七)蟠蝟を摸り(三八八)觜蠵を捫り、巨蚌を回淵に剖き、(三八九)明月を漣漪に濯ぎ、天下の至異に畢るまで、訖に索めて臻らざるなく、谿壑之が爲に(三九〇)一罄し、(三九一)川瀆之が爲に(三九二)中貧し。(三九三)澹臺の謀られしを哂ひ、聊か海に襲りて珍を徇め、(三九四)漢女を後舟に載せ、(三九五)晉賈を追ひて塵を同うし、(三九六)汨として流に乘りて以て(三九七)砰宕たり、(三九八)颶風の颼颼たるに翼し、直に濤を衝いて瀨に上り、(三九九)沛沛として以て

【三八三】雕題。題は額なり、額にイレズミせる人。鏤身は身にイレズミすること、南夷の風俗なり。卒は音スヰ、叶韻。
【三八四】錦繢。錦繡といふ如し。亶費は美しき貌。
【三八五】虓勇。猛勇なり。
【三八六】瓌奇。寶玉なり。
【三八七】蟠蝟。龜の類なり。
【三八八】觜蠵。大龜なり。
【三八九】明月。珠なり。
【三九〇】一罄。盡き果つること。
【三九一】川瀆。川流なり。
【三九二】中貧。半にして窮ること。
【三九三】澹臺。博物志に澹臺子は子羽、千金ノ璧ヲ賚ス、河伯之ヲ得ント欲シ、波浪急ニ起リ兩蛟舟ヲ夾ム、子羽怒ツテ曰ク、河神吾ガ璧ヲ取ラント欲スレバ、義ヲ以テスベシ、威ヲ以テスベカラズト、乃チ劍ヲ以テ蛟ヲ斬リテ之ヲ殺ス、浪乃チ止ム、子羽璧ヲ河中ニ投ジ、三タビ投ジテ三タビ之ニ歸ル、子羽璧ヲ毀チテ去ルとあり。
【三九四】漢女。漢水の神女。
【三九五】晉賈。賈の大夫なり、容貌醜惡なり、妻を取りて三年なるも其妻言はず笑はず、御して以て皐に往き雉を射て之を獲、其妻始めて笑つて言ふ。
【三九六】汨。疾き貌。
【三九七】砰宕。舟水を擊つ貌。
【三九八】颶風。疾風なり。颼颼は風の聲。
【三九九】沛沛。流るゝ貌。悠悠は遠き貌。

悠悠たり。汔に休ふべくして凱み歸らんとし、(四〇〇)天吳と陽侯とに揖す。

【大意】雕題文身の卒、文彩を龍螭と等しくし、其美は錦繡の如く、其勇は鵰鶚豺狼の暴戾なる如く、相與に潛險を犯して寶玉を搜索し、大龜を捕へ巨蚌を剖き、明月の珠を漣漪の間に搜り、天下の奇物索めて得ざるはなく、谿谷之が爲に物なく川瀆之が爲に空盡し、澹臺の璧の爲に河神の謀る所となりしを哂ひ、乃ち復た水に入りて其珍寶を求め、漢女を載せ水に入りて寶を求むるは、晉賈が妻と皐に往きて雉を射たるが如し。舟流水に隨つて漂蕩し、疾風に駕して進むこと、鳥の翼ありて風に乘るが如し。舟遊の興既に極まり將に歸りて休息せんとす。乃ち水神と波神とに揖禮して別れ去る。

(四〇一)包山を指して期となし、洞庭に集りて淹留り、(四〇二)軍實を桂林の苑に數へ、(四〇三)戎旅を落星の樓に饗し、酒を置くこと(四〇四)淮泗の若く、肴を積むこと山丘の若く、輕軒を飛ばして(四〇五)綠醽を酌み、雙轡を方べて(四〇六)珍羞を賦つ。飲むときは烽起り醻すときは鼓震ひ、士は倦むを遣れ衆は忻を懷き、館娃の宮に幸し、女樂を張りて羣臣を娛ましめ、金石と絲竹とを羅ね、(四〇七)鈞天

【四〇〇】天吳。水の神。陽侯は波の神。
【四〇一】包山。洞庭湖中にある山の名。
【四〇二】軍實。士卒殺獲の實數なり。
【四〇三】戎旅。士卒なり。
【四〇四】淮泗。ともに川の名。
【四〇五】綠醽。酒の名。
【四〇六】珍羞。旨き食物。
【四〇七】鈞天。天上の神樂なり。下陳、天より下りて陳列せること。

の下陳せるが若し。(四〇八)東歌を登げ　(四〇九)南音を操り、(四一〇)陽阿を胤ぎ　(四一一)韎任を詠じ、(四一二)荆豔楚舞吳愉越吟あり。(四一三)翕習容裔靡靡愔愔たり。

【大意】包山を指して期となし、洞庭に集りて滯留し、獲物を桂林苑に數へ、士卒を落星樓に饗し、酒は流水の如く、肴は山丘の如く、輕舟を以て酒を運び、駟馬を馳せて肴を分ち、飲む時は烽を擧げ、飲み終れば鼓を鳴らし、士卒疲勞を忘れて欣悅す。天子乃ち館娃宮に幸して女樂を設け羣臣を娛ましむ。實に天上の神樂下りて下土に陳せるかと疑はれ、吳愉越吟間雅幽麗なり。

此の若き者と夫の唱和の隆響と、(四一四)鐘磬の鏗玈たるを動かし、(四一五)殷坻前に頹れ(四一六)曲度勝へ難きあり。皆謠俗と汁ひ協ひ、(四一七)律呂相應ず。其の樂を奏するや、則ち木石潤色あり、其の哀を吐くや、則ち淒風暴に興り、或は(四一八)延露と駕辯とに超え、(四一九)或は淥水と採菱とに踰え、軍馬髦を弭かして仰ぎ秣かひ、淵魚鱗を竦げて上り升る。(四二〇)酣

【四〇八】東歌。晏子春秋に築東歌チ作ルとあり。
【四〇九】南音。南國の音なり。
【四一〇】陽阿。舞なり。
【四一一】韎任。東夷の樂を韎といひ、南夷の樂を任といふ。
【四一二】翕習。盛なる貌。容裔靡靡愔愔は閑雅幽麗なり。
【四一三】荆豔。楚歌なり。吳愉は吳歌なり。越吟は越人の吟なり。
【四一四】鐘磬。ともに樂器の名。鏗玈は樂聲なり。
【四一五】殷坻。高き山。
【四一六】曲度。曲調といふが如し。
【四一七】律呂。調子なり。
【四一八】延露。駕辯。古の曲名。
【四一九】淥水。採菱。古の曲名。
【四二〇】酣滯。酒酣にして樂むなり。

滯半して　(四二一)八音并せ、歡情留りて　(四二二)良辰征き、(四二三)魯陽戈を揮ひて高く麾き、(四二四)曜靈を太淸に廻らし、將に西日を轉じて再び中せしめ、既往の精誠に齊からんとす。

【大意】上に奏する所の歌舞と叶唱する所の高響とあり。之に加ふるに鐘磬の鏗玈たるを以てす。山岳も前に頹るべく、曲調變轉して勝げて記すべからず。皆俗の歌謠と和合し律呂相應ず。和樂の音を奏すれば木石も潤色あり、哀怨の音を奏すれば、淒風俄に起る。遙に延露駕辯等の古曲の上に在り。されば馬の草を嚙む者之を聞いて首を仰ぎ、魚の水に潛む者之を聞いて鱗を竦げて出づ。酣樂纔に半にして八音兼ね奏し、歡情を留めんと欲すれば、良辰忽ち去る。是に於てか魯陽廻日の故智に倣ひて、天上の白日を廻らし、西天の日を再び中天に歸し、古人の精誠に倣ひて、日輪をして其景を駐めしめんとす。

昔者　(四二五)夏后氏羣臣を茲土に朝せしめ、玉帛を執る者以て萬國なり。蓋し亦先王の　(四二六)高會せる所にして、四方の軌則とする所なり。(四二七)春秋の際、要盟の主、闔閭其威を申べ、夫

【四二一】八音。金石絲竹匏土革木の八種の樂聲なり。
【四二二】良辰。辰は時なり、愉快なる時。
【四二三】魯陽。淮南子に魯陽公韓ト遘ヒ、戰酣ニシテ日暮ル、戈ヲ援イテ之ヲ麾ク、日之ガ爲ニ反ルコト三舍とあり。
【四二四】曜靈。天日なり。太淸は天なり。
【四二五】夏后氏。左傳に禹諸侯ヲ塗山ニ會ス、玉帛ヲ執ル者萬國アリとあり。玉帛は諸侯の天子に朝する時の贈物なり。塗山は吳にあり、故に茲土といふ。
【四二六】高會。大會なり。
【四二七】春秋。支那の時代の名。要盟は諸侯の間の誓約なり。

差其武を窮め、内には（四二八）五員の謀を果し、外には（四二九）孫子の奇を騁せ、彊楚に（四三〇）栢舉に勝ち、勁越を（四三一）會稽に棲ましめ、溝を（四三二）商魯に闕り、長を（四三三）黄池に爭ふ。徒に以んみるに江湖嶮陂にして物産殷に充ち、（四三四）繞雷も未だ其固を言ふに足らず、（四三五）鄭白も未だ其豐を語るに足らず。士は堅を陷るるの鋭あり、俗は（四三六）節概の風あり。（四三七）睚眦すれば則ち劍を挺き、（四三八）唔嗚すれば則ち弓を彎く。之を擁する者は龍のごとく騰り、之に據る者は虎のごとく視、城を麾くと槁たるを振ふが若く、旗を搴ると顧み指すが若し。甲を帶ぶること一朝なりと雖も、元功遠く致し、（四三九）葉を累ぬると百疊なりと雖も、富彊相繼ぎ、樂滑其方域を衍み、列仙其土地に集り、（四四〇）桂父形を練りて色を易へ、（四四一）赤須蟬蛻して附き麗ぐ。

【大意】昔夏の禹王諸侯を此地に會せしむるや、玉帛を執りて來り會せる者萬國なりきといふ。されば此地は先王高會の地にして、四方の軌則とする所なり。宜なるかな春秋の時、諸侯の盟主たる

【四二八】五員。伍子胥なり、吳の賢臣なり。
【四二九】孫子。孫武なり、兵法を以て名あり。
【四三〇】栢舉。地名なり。
【四三一】會稽。山の名。越王此山を保ちて和を請へり。
【四三二】商魯。地名なり。
【四三三】黄池。地名なり。
【四三四】繞雷。地名なり。
【四三五】鄭白。地名なり。
【四三六】節概。氣概節操あること。
【四三七】睚眦。目を怒らして睨むこと。
【四三八】唔嗚。怒を含むこと。
【四三九】葉。世なり。百疊は百世なり。
【四四〇】桂父。仙人の名、顏色時に黑く時に白く時に赤し、南海の人之に尊事す。
【四四一】赤須。仙人の名。もと吳人にあらず、故に附麗すといふ。

闔閭夫差の二王、此地に出で、其盛を極め、其武を窮め、内には伍員の謀を用ひ、外には孫子の奇計を用ひ、强楚を破り强越を破り、溝を深くし長を爭ひしや。更に江山險絶、物産豐富にして、繞雷の險、鄭白の饒も、以て比するに足らず。士の勇壯なる者あり、堅敵と雖も必ず破る。又節概の士あり、目を怒らしては劍を拔き、怒を含んでは弓を彎く。此の驍勇の衆を擁し、此の險絶の土に據る者は、必ず龍騰虎視し、以て强霸の鴻業を建て、城を攻むること枯木を摧くが如く、旗を搴ぐること指して之を取るが如し。甲冑を被ること一朝にして大功を立て、世を歷ること百世と雖も富彊絶ゆることなし。樂美の事皆此の方域の中に出で、仙人此地に集り、桂父赤須の如き輩あり。

中夏を禹に比ぶるに、世を畢へて見ること罕なり。（四四一）丹青其象を圖し、（四四二）珍瑋其寶利を貴ぶ。舜禹焉に游び、齒を沒るまで歸るを忘れ、精靈其の山阿に留り、其の奇麗を翫ぶ。（四四三）庶士を剖判し（四四四）萬俗を商搉すれば、國（四四五）鬱鞅にして顯敞なるあり。邦（四四六）湫阨にして蹐蹋なるあり。伊れ茲都の（四四七）函弘なる、（四四八）神州を傾けて韞櫝し、（四四九）南斗を

【四四一】丹青。繪畫なり。
【四四二】珍瑋。珍寶なり。
【四四三】庶士。衆事なり。剖判は分別すること。
【四四四】萬俗。萬國の風俗。商搉は是非善惡をはかり定むること。
【四四五】鬱鞅。盛なる貌。顯敞は高廣の貌。
【四四六】湫阨。低くして狹きこと。蹐蹋はかがまりて舒びざること。
【四四七】函弘。廣大なり。
【四四八】神州。中國をいふ。韞櫝は櫃に藏むること。
【四四九】南斗。星の名。斗はもと酒を酌む具なり。

仰いで以て斟酌し、(四五一)二儀の優渥を兼ぬ。此に由りて之を揆れば、西蜀の東吳に於けるは、小大の相絕たること、亦猶(四五二)棘林螢燿と夫の(四五三)尋木龍燭とのごとく、(四五四)否泰の相背けること、亦猶(四五五)帝の懸解と夫の(四五六)疏屬に桎梏せられたるとのごとし。庸ぞ世を共にして(四五七)巨細を論じ、年を同うして(四五八)豐确を議すべけんや。(四五九)其幽遐獨邃寥廓間奥なるに暨んでは、耳目の該ばざる所、(四六〇)足趾の蹈まざる所なり。(四六一)倜儻の極異、(四六二)崑詭の殊事、理を(四六三)終古に藏めて、未だ(四六四)前覺に寤られざるなり。吾子の傳ふる所の若きは、(四六五)孟浪の遺言なり、略其(四六六)梗概を擧げて、未だ其要妙を得ざるなりと。

【大意】中夏の國を以て、之を我が吳都の珍異に比するに、神仙の如きは中夏に於ては世を畢へて見ざる所にして、僅に丹青の其の形象を圖畫するを見るのみ。珍寶に於ても亦然り。ただ

【四五一】二儀。天地なり。
【四五二】棘林。イバラの林。螢燿は螢の光なり。
【四五三】尋木。大木なり。山海經に尋木長サ千里とあり。龍燭は鍾山の神の名、此神視れば晝となり。瞑すれば夜となる。
【四五四】否泰。安泰なると不安なると。
【四五五】懸解、解放といふが如し自由を許さるること。帝は天帝なり。
【四五六】疏屬。山の名。山海經に貳負𤣥𤣥ヲ殺ス、帝乃チ之ヲ疏屬ノ山ニ梏シ、其右足ヲ桎シ、兩手ヲ反縛スとあり。桎梏は手かせ足かせを加ふるも。
【四五七】巨細。大小といふが如し。
【四五八】豐确。厚薄といふが如し。
【四五九】幽遐云云。寬深の處ないふ。
【四六〇】足趾。足なり。
【四六一】倜儻。殊絕なり。
【四六二】崑詭。奇異なり。
【四六三】終古。永遠なり。
【四六四】前覺。先覺に同じ。昔の識者なり。
【四六五】孟浪。あてもなきそらごと。
【四六六】梗概。大略なり。

其の貴ぶべく利とすべきを知るのみにして、未だ之を目擊せることなきなり。宜なるかな舜禹此地に遊んで歸るを忘れ、遂に此地に歿し、其靈魂永く此地に留まりて、其奇麗を玩賞するや。衆事を分別し萬國の俗を考量するに、或は鬱茂にして高顯なるあり、或は狹隘にして蹉跎なるあり。ただ我が吳都は獨り寬博廣大にして中國を包含し、南斗を仰ぎ取りて以て酒を酌み、實に天地の優游を極む。此に由りて之を觀れば、西蜀の東吳に於けるは、其大小の異ること、恰も棘林螢光と尋木龍燭との大小を異にするが如く、又其泰否の相反せるは、恰も天帝の解放を得たる自由鄉と、疏屬山に桎梏せられたる拘束鄉との相反するが如し。其大小厚薄は、到底年を同うして論ずべからざるなり。殊に其の非常詭異の處に至りては、耳目の及ばざる所、足未だ其地を蹈まざる所にして、又先覺者の未だ知らざる所なり。足下の說く所の蜀都の美麗の如きは、孟浪の妄言のみ。余今吳都の大略を述べたるのみ。其の奥妙に至りては、未だ說き及ぶに遑あらざるなりと。

(一)魏都の賦

左太冲

(二)魏國先生(三)睟たる其容あり。乃ち(四)盱

【一】魏都。曹操鄴に都し、國を魏と號す。
【二】魏國先生。假に設けたる人物なり。
【三】睟。溫潤なり。
【四】盱衡。目を張り眉を擧ぐ

衡して詰げて曰く、異なるかな㊂交益の士。蓋し㊃音に楚夏あるは土風の乖けばなり。情に㊄險易あるは習俗の殊なればなり。則ち㊅常を生すと雖も、固より㊆自得の謂にあらざるなり。昔㊇市南の宜僚、丸を弄して㊈兩家の難解けぬ。聊か吾子の爲に復た㊉德音を翫び、以て㊋二客の㊌辯囿に競ふことを釋かん。

【大意】魏國先生もと溫乎たる風貌あり。今東吳王孫と西蜀公子と、(吳都賦、蜀都賦參照)各〻其都の華麗を競ひて爭論するを見、乃ち目を張り眉を擧げて之に告げて曰く、異なるかな二子の相爭ふや。蓋し言語に楚夏の差異あるは、土壤風俗の同じからざればなり。情に險易の別あるは、習俗の異るに因るのみ。積習の結果、人の常性となることありと雖も、固より天性の自然にあらず。昔宜僚丸を弄して兩家の爭論を解けりといふ。余今亦吳蜀二客の爲に、德音を以て其爭論を止めんと。

【五】交益。交は交趾なり、吳の地なり。益は益州、蜀の地なり。

【六】楚夏。楚は南夷の國、夏は中國なり。音は人の語音なり。荀子に人楚ニ居レバ楚、夏ニ居レバ夏、天性ニアラザルナリ、積靡然ラシムルナリとあり。

【七】險易。好惡なると穩當なると。

【八】常を生す。積習常性となるなり。

【九】自得。自然の天性といふが如し。

【一〇】市南。地名なり。宜僚は人名。丸を弄すると巧なり。

【一一】兩家。白公楚の子西と戰はんとす、白公宜僚を召して之を用ひんとす、宜僚從はず丸を弄すること自若たり、白公之に感じて遂に兵を止む、是れ兩家の爭難解けたるなり。

【一二】德音。德義の言なり。

【一三】二客。西蜀公子と東吳王孫とを指す。蜀都賦の二五、二六を見よ。

【一四】辯囿。議論なり。

夫れ㊀泰極剖判して㊁造化權輿し、體晝夜を兼ね、理淸濁を包ね、流れて江海となり、結んで山嶽となり、列宿㊂其野を分ち、㊃荒裔其隅を帶り、巖岡潭淵は蠻を限り夷を隔つる峻危の竅なり。㊄蠻陬夷落、㊅譯導して通ずる者は鳥獸の蹠なり。㊆位を正し體に居る者は㊇中夏を以て㊈襟帶となさず。㊉邊陲を以て㊋喉舌となし、㊌世に長とし甿を字ふ者は、道德を以て藩となし、㊍襲險を以て屏となさず。而して㊎子は大夫の賢なるも、尙曾て㊏等威を翼けんとを庶ひ、㊐皇極に附麗し、㊑正朔を稟けんことを思ひ、㊒貢職に率ふを樂まずして、徒に㊓匪民に詭隨し、絕域に宴安し、其㊔文身を榮とし、其㊕險棘に驕らんことを務め、默語の常倫を謬り、㊖膠言に牽かれて踰え侈り、㊗華離を飾りて以

【一】泰極。太極なり、天地萬物の大本をいふ。剖判は分ること。

【二】造化。萬物を生成する自然力なり。權輿は始めて起ること。

【三】其野。野とは星の分野なり。

【四】荒裔。遠方の邊地。

【五】蠻陬夷落。蠻夷の住する處。

【六】譯導。蠻譯して意思を通すること。

【七】位を正し。位は天子の位なり。體は天子の體なり。

【八】中夏。中國なり。

【九】喉舌。樞要の處に喩ふ。

【一〇】邊陲。蠻夷邊鄙の地。

【一一】襟帶。樞要の地に喩ふ。

【一二】襲險。重險なり。

【一三】子。吳蜀二客を指す。

【一四】等威。等差威儀なり。

【一五】皇極。大中至正の道。附麗は附著といふが如し。

【一六】正朔。曆をいふ。臣として事ふるを正朔を受くといふ。

【一七】貢職。貢を納め職責を奉すること。

【一八】匪民。蠻夷なり。詭隨は善を去りて惡に隨ふこと。

【一九】文身。身にイレズミすること、蠻夷の風俗なり。

【二〇】險棘。險阻なり。

【二一】膠言。義を度らざるの言なり。

【二二】華離。地形の犬牙交錯するをいふ。矜然は誇ること。

て矜然たり。㊂七倔彊を假りて臂を攘げ、醇粹の方に壯なるにあらず、㊂八蹐駮を王義に謀る。孰れか㊂九靡萍を中逵に尋ね、㊃〇沐猴を棘刺に造るに愈らんや。㊃一劒閣嶝しと雖も之を憑む者は蹶る。根を深くし蔕を固くする所以にあらず。㊃二洞庭瀦しと雖も之を負む者は北る。人を愛し國を治むる所以にあらず。彼の㊃三桑榆の末光は㊃四長庚の初暉に踰ゆ。況んや㊃五河冀の爽塏と㊃六江介の湫湄とをや。故に將に子に語るに㊃七神州の略、㊃八赤縣の畿、魏都の㊃九卓犖、㊄〇六合の樞機を以てせんとす。

【大意】夫れ太極分れて造化の功起り、一畫一夜既に昏明をなし、一清一濁是を天地となす。流れて江海となり聚りて山岳となり、九州の分野各〻星紀あり。荒遠の國中國の隅に帶在し、巖岡江河を以て、蠻夷峻危の地を限る。蠻夷の言語は中國と相通ぜず。乃ち譯を借りて其意を通ずれば、則ち禽獸と擇ぶ所なきなり。抑〻君の位

【三七】倔彊。心の暴戾なること。
【三八】蹐駮。乖亂なり。
【三九】靡萍。流るる水草。中逵は中路といふが如し。
【四〇】沐猴。猿猴なり。棘刺はイバラのトゲ。韓非子に衞人曰ク、臣ヨク棘刺ノ端ヲ以テ母猴ヲ爲ランとあり。
【四一】劒閣。蜀に在る山の名。
【四二】洞庭。吳の境に在る湖の名。
【四三】桑榆。日の入る處。
【四四】長庚。太白星卽ち宵の明星なり。
【四五】河冀。黃河冀州なり。魏都は河冀の間に在り。爽塏は土地の高燥なること。
【四六】江介。介は界に通ず、吳は楊子江の界に在り。湫湄は狹小なる濕地。
【四七】神州。中國なり。
【四八】赤縣。中國なり。
【四九】卓犖。高越なり。
【五〇】六合。上下四方をいふ。樞機は樞要なり。

を正し君の體に居る者は、中夏を要地となす。豈に蠻夷邊陲の處を以て要地となさんや。世に長となり、民を養ふ者は、道德を以て守となす。豈に險阻を以て守となさんや。足下の如きは大夫の賢者なりと雖も、尙ほ此意に昧く、等差威儀を翼け大中の道に附き、我が魏王の正朔を奉じて、之に臣事するを樂まず、徒に道を曲げて蠻夷に隨ひ、絕遠の地に安逸し、文身を以て榮となし（吳に就いて言ふ）險阻を以て驕となし（蜀に就いて言ふ）語默の道を誤り、不義の言に迷ひ、地形の不正を飾りて之を矜り（蜀に就いて言ふ）士卒の暴戾勇悍を誇り（吳に就いて言ふ）純美の道に乖き、王者の義を乖亂せんことを謀る。是れ實に水草を陸路に尋ね、棘刺を以て沐猴を造らんとするに異らず。たとひ劒閣險なりと雖も、之を憑んで德を修めざれば必ず敗る。固より根を深うし本を固うする所以にあらず。（蜀に就いて言ふ）洞底深しと雖も、之を負んで德を修めざれば必ず敗る。固より民を愛し國を治むる所以にあらず。夫れ日輪の餘光は、尙ほ太白金星の明にまさる。我が魏都の高燥なるは、固より江邊の小洲（吳を指す）にまさること遠し。故に余將に二子に語るに我が魏都の高絕を以てせんとす。時に㊄一運陽九に距り、㊄二漢網維を絕ち、㊄三姦回內に贔り、兵㊄四紫微に纏り、㊄五翼翼たる京室

【五一】運陽九。運は世運、陽九は災厄なり。
【五二】漢網。漢室の法度なり。
【五三】姦回。姦邪の徒なり。宦官を指す。漢室の亂は宦官より起る、故に內に贔るといふ。
【五四】紫微。天帝の居なり、因つて天子の宮殿をいふ。
【五五】翼翼。美なる貌。京室は京師なり。

(五六)耽耽たる帝宇、巢のごとく焚け原のごとく燎え、變じて煨燼となる。故に荆棘庭に旅り、(五七)殷殷たる寰内、(五八)繩繩たる八區、鋒鏑縱横し、化して戰場となる。故に麋鹿城に寓り、(五九)伊洛は榛曠にして(六〇)崤函は荒蕪し、(六一)臨菑は牢落にして(六二)鄢郢は丘墟たり。而して是れ(六三)有魏國を開くの日、(六四)締構の初、萬邑焉を譬ふれば、亦猶ほ(六五)犨麋と(六六)子都と、(六七)培塿と方壺とのごとし。且つ魏土は(六八)畢昴の應ずる所、(六九)虞夏の餘人、(七〇)先王の桑梓、(七一)列聖の遺塵なり。之を(七二)四隈に考ふれば則ち(七三)八埏の中なり。之を寒暑に測れば則ち霜露の鈞うする所なり。(七四)卜偃前に識りて其隆を賞し、(七五)吳札歌を聽いて其風を美む。則ち(七六)衰代なりと雖も、盛德管

【五六】耽耽。深邃の貌。帝宇は帝居なり。
【五七】殷殷。盛衆の貌。寰内は天下なり。
【五八】繩繩。衆盛の貌。八區は八方なり。
【五九】伊洛。共に川の名、洛陽をいふ。榛曠は草木の繁茂すること。
【六〇】崤函。ともに關所の名、長安をいふ。
【六一】臨菑。齊の地名。牢落は寂寞なり。
【六二】鄢郢。楚の地名。
【六三】有魏。有は單に添ふる詞、魏をいふ。
【六四】締構。結構に同じ。
【六五】犨麋。昔の醜人の名。
【六六】子都。美人の名。
【六七】培塿。小阜也。方壺は方丈也、東海中に在る神山の名。
【六八】畢昴。星の名。魏は畢昴の分野なり。
【六九】虞夏。虞は舜、夏は禹、魏は舜禹の都せし地なり。餘人は後裔といふが如し。
【七〇】先王。虞夏を指す。桑梓は故郷なり。
【七一】列聖。虞夏を指す。遺塵は遺跡なり。
【七二】四隈。四隅なり。
【七三】八埏。八方なり。
【七四】卜偃。晉の卜筮を司る官吏の名。晉の獻公畢萬を魏に封ず。卜偃曰く、畢萬の後必ず大ならんと。故に其隆を賞すといふ。
【七五】吳札。吳の季札なり。襄公十九年。吳の公子季札魯に來聘し、魏風を歌ふを聽き、美して曰く、美なるかな大にして婉なり、險にして行ひ易

絃に形れ、(七七)千祀を踰ぎたりと雖も、舊を懷ひて(七八)遐年に蘊む。

【大意】世運災厄に遇ひ、漢室其勢を失ふや、姦邪の臣内に怒り、亂兵宮殿を圍み、宮室盡く灰燼となり、庭中荆棘を生じ、天下一變して戰亂の巷となり、東西二京、臨菑鄢郢、皆荒蕪壞亂して丘墟となりぬ。是時に當りて我が魏、其國を開き、創業の初、既に萬邑相竝べり。之を譬ふれば吳蜀は猶ほ醜人小阜の如く、魏は美人神山の如し。且つ魏地は畢昴二星の分野に應じ、虞舜夏禹の遺都にして、方隅を考ふれば八方の中央に當り、寒暑を測れば霜露の均く被る所にして、卜偃前に之を識り其隆盛を賞し、吳の季札歌を聽いて其風を美めたり。其時方に衰微に當れりと雖も、盛德管絃に形れて、季札の知る所となり、歌風已に千歲に沒せりと雖も、我が魏復た此に都す。是れ古を懷ひて古昔に繼ぐ所以なり。

爾して其疆域は則ち齊秦を旁極し、(七九)冀道を結湊し、(八〇)冑を殷衞に開き、燕趙を跨り躡み、山林(八一)幽峽にして川澤廻繚し、(八二)恆碣青霄に礙碍として(八三)河汾浩涆として皓渺たり。南のかた(八四)淇澳を瞻れ

し。德を以て此に居らば、則ち明主たらんと。
【七六】衰代。春秋時代を指して言ふ。
【七七】千祀。千年なり。
【七八】遐年。遠き昔。
【七九】冀道。冀は州の名、道は國の名。
【八〇】冑。前といふが如し。殷は朝歌に都す、鄴の南に在り、衞も亦南に在り。故に陶を開くといふ。
【八一】幽峽。深邃なり。
【八二】恆碣。二山の名。礙碍は高き貌。
【八三】河汾。二川の名。浩涆は水の流るる貌。皓渺亦同じ。
【八四】淇澳。二川の名。

ば、則ち綠竹(八五)純茂し、北のかた(八六)漳滏に臨めば、則ち冬夏沼を異にし、(八七)神鉦高巒に迢遞として、靈響時に(八八)四表を驚かし、溫泉(八九)毖涌して自ら浪たち、(九〇)華淸邪を蕩して老い難し。(九一)墨井鹽池玄滋素液あり。(九二)厥田は惟れ中なり、厥壤は惟れ白し。(九三)原隰畇畇として(九四)墳衍斥斥たり。或は(九五)嵬壘として複陸たり、或は(九六)糙朗として拓落たり。(九七)乾坤交泰して烟熅し、(九八)嘉祥徽顯して豫め作る。是を以て(九九)振古に兆朕し(一〇〇)疇昔に萌柢し、氣を(一〇一)讖緯に藏め、象を(一〇二)竹帛に閟ち、時世を迥にして(一〇三)淵

【八五】純茂。美しく茂ること。
【八六】漳滏。二川の名。漳水は冷にして滏水は熱し。故に冬夏沼を異にすといふ。
【八七】神鉦。金の聲なり。鼓を節する所以のものなり。鄴の西北に鼓山あり、上に石鼓あり、時々自ら鳴るといふ。今神鉦といふも實は鼓なり、字の誤なり。迢遞は遠く響くこと。
【八八】四表。四方の外なり。
【八九】毖涌。湧き出づること。
【九〇】華淸。華美にして淸潔なること。邪は疾病なり。
【九一】墨井。井中に石あり墨の如きなり。鹽池は鹽水の池なり。玄滋は黑き水なり、墨井の色をいふ。素液は白き水なり。鹽池の色をいふ。
【九二】厥田。書經の禹貢に田地を九等に分てり、冀州の田地は第五等にして中の中なり。
【九三】原隰。平原及び濕地。畇畇は平坦の貌。
【九四】墳衍。墳は堤なり、低くして平なるを衍といふ。斥斥は廣大の貌。
【九五】嵬壘。高低の貌。複陸は重疊すること。
【九六】糙朗。光明なり。拓落は寬廣の貌。
【九七】乾坤交泰。天氣と地氣と安らかに交ること。烟熅は氣の相交ろ貌。
【九八】嘉祥。瑞祥なり。徽顯は明に顯るること。
【九九】振古。往昔なり。兆朕はキザシをあらはすこと。
【一〇〇】疇昔。往昔なり。萌柢は本を生ずること。
【一〇一】讖緯。未來記といふが如し。
【一〇二】竹帛。書籍なり。
【一〇三】淵默。沈靜なり。

默たり。(一〇四)期運に應じて光赫たり。(一〇五)聖武の龍飛するに暨び、肇めて命を受けて(一〇六)光宅す。

【大意】我が魏の領域たる、東は齊に及び、西は秦に達し、北は冀道に跨り、南は殷衞燕趙に跨り、山林深邃にして川流之を繚り、恆山碣石、青雲の上に聳え、河汾滔滔として流れ、南方淇澳を見れば、綠竹茂生し、北方漳滏二水は、水の冷熱を異にし、神鼓山上に在りて、響四方を驚かし、溫泉湧出して病を醫し壽を延ばす。又墨井鹽池あり、一は白水を湛へ一は黑水を湛ふ。其田地は中の中にして、土壤白色なり。高田低圃高低して連續し、天地の氣相交りて祥瑞夙にあらはれ、王者の氣象遠く昔時に現はれ、讖緯竹帛に密藏せらる。曠大沈靜の量あらば、乃ち期運に應じて大業を建つべし。我が武帝天命を受くるに及んで、乃ち此に都せり。爰に初め臻りしより、言に其良を占ふ。(一〇七)龜に謀り筮に謀るに、亦既に允に臧し。(一〇八)其鄂郭を修め其城隍を繕め、(一〇九)經始の制百王を(一一〇)牢籠し、(一一一)雍豫の居を畫き、(一一二)八都の宇を寫し、(一一三)茅茨を陶唐に鑒み、(一一四)卑宮

【一〇四】期運。豫期なり。光赫は大に盛なること。
【一〇五】聖武。魏の武帝曹操なり。
【一〇六】光宅。都すること。
【一〇七】龜。龜の甲を燒きて卜すること。筮は筮竹なり、筮竹を以て占ふこと。
【一〇八】鄂郭。外郭なり。
【一〇九】經始。始めて經營すること。
【一一〇】牢籠。包括すること。
【一一一】雍豫。雍は西京長安。豫は東京洛陽なり。
【一一二】八都。八方の都。
【一一三】茅茨。屋根を葺く草なり。陶唐は堯なり。曇子に堯舜ハ茅茨剪ラズとあり。
【一一四】卑宮。宮室を低くして節約せしこと。論語に禹ハ宮室ヲ卑クスとあり。

を夏禹に察し、(二九)古公草創して　(二八)高門閲たるあり。宣王中興して室を築くこと　(二七)百堵なり。(二八)聖哲の軌を兼ね　(二九)文質の狀を并せ、(三〇)豐約を商りて折中し、當年に准へて量をなし、(三一)重爻を思ひ大壯に摹り、(三二)荀卿を覽　(三三)蕭相に采り、(三四)拱木を林衡に僝へ、全模を　(三五)梓匠に授く。(三六)遐邇悅豫して子の如く來り、工徒　(三七)擬議して巧を騁せ、(三八)鉤繩の筌緒を闡き、(三九)二分の正要を承け、日晷を揆り星耀を考へ、(三〇)社稷を建て　(三一)清廟を作り、(三二)曾宮を築きて以て廻匝し、(三三)岡隙に比べて陂くことなし。(三四)文

【二五】古公。文王の祖古公亶父なり。戎狄の爲に國を侵され岐山の下に遷り都邑を創建す。草創は始めて作ること。

【二六】高門閲。閲は門限なり。門を作るに唯内外を限るのみなりしをいふ。

【二七】百堵。一丈を板といひ、五板を堵といふ。周の宣王中興して復た宮室を修め儉約にして室を築くこと百堵なり。

【二八】聖哲。堯禹古公宣王を指す。

【二九】文質。文飾と質素。

【三〇】豐約。奢侈と儉約。

【三一】重爻。易なり、易に云く上古ハ穴居野處ス、聖人之ニ易フルニ宮室ヲ以テス、棟ヲ上ニシ宇ヲ下ニシ以テ雨風ヲ待ツ、蓋シ之ヲ大壯ニ取ルと。大壯は易の卦名。

【三二】荀卿。荀子に宮室臺榭ハ以テ燥濕ヲ避ク、奢侈ノ爲ニアラザルナリとあり。

【三三】蕭相。漢の相蕭何なり、蕭何漢の未央宮を作れり。

【三四】拱木。ひとかかへの大きさを拱といふ。林衡は山林を主るの官なり。

【三五】梓匠。木工なり。

【三六】遐邇。遠近なり。悅豫は悅び樂むこと。

【三七】擬議。はかり議すること。

【三八】鉤繩。鉤は曲尺。繩はスミナハ。筌緒は古の良工の遺法なり。

【三九】二分。春分秋分なり。春分秋分の日。日景の正しき時以て東西の位を正すなり。

【三〇】社稷。社は土地の神を祭る祠、稷は穀物の神を祭る祠。

【三一】清廟。祖廟なり。

【三二】曾宮。層宮なり。

【三三】岡隙。小丘なり。

【三四】文昌。正殿の名。

昌の廣殿を造り、棟宇の　(三五)弘規を極め、(三六)對たること崇山の若く、崛起して以て　(三七)崔嵬たり。(三八)髣髴たること玄雲の蜺を舒べ以て高く垂るるが若し。

【大意】武帝初め茲に都するに方り、先づ其吉凶を卜筮に問ふ。其卜既に吉なり。乃ち外郭を修め城池を繕め、百王の制度を參考し、東西二京竝に八方の都を參酌し、唐堯夏禹古公宣王の節儉に倣ひて取捨折衷し、當年の豐儉に准ひ人力を量りて之を使ひ、周易大壯の說と、荀卿蕭何の說とに則り、林衡の官をして拱木を備へしめ、木工に授くるに法度を以てす。是に於て遠近の民皆悅び來りて工事を助け、恰も子の來りて父の事を成すが如く、工匠の徒忖度して巧妙を馳せ、古名工の遺法を繼ぎ、日星を度りて方角を正し、社稷宗廟を建てて遂に層宮に及ぶ。岡丘を廻匝して傾くことなく、文昌殿を造りて規模の廣大を極む。其狀高山の崛起するが如く、其色黑雲の霓を舒べて垂るるが如し。(三九)瓌材世に巨にして　(四〇)埴壥參差たり。(四一)枌榛複ね結び、欒櫨疊ね施し、丹梁虹申して以て竝び亙り、朱桷(四二)森布して支離たり。(四三)綺井列疏りて以て蔕を懸け、(四四)華蓮葩を重ねて倒に披き、

【三五】弘規。廣大なる規模。

【三六】對。高き貌。

【三七】崔嵬。山の高き貌。

【三八】髣髴。垂るる貌。

【三九】瓌材。美材なり。

【四〇】埴壥。相接する貌。參差は等しからざる貌。

【四一】枌榛。棟梁なり。欒櫨は斗栱なり。

【四二】森布。多く竝ぶこと。支離は分散する貌。

【四三】綺井。屋上の承塵板の井形をなせるもの。飾るに丹青を以てし綺文の如きなり。

【四四】華蓮。蓮花なり。井中に皆蓮花を畫く。

(一四五)龍首を齊うして霤を涌し、時に(一四六)澎池に梗概たり。旅楹間に列り、暉(一四七)挾振を鑒し、榱題(一四八)黮黮たり。(一四九)階隋嶙峋たり。長庭砥のごとく平に、(一五〇)鐘虡夾み陳り、風ふけども微津なし。(一五一)巖巖たる北闕は(一五二)南端の遵ふ攸、(一五三)竦峭して雙び碣ち、駕を方べ輪を比べ、西のかた(一五四)延秋を闢き、東のかた(一五五)長春を啓き、用て(一五六)羣后を覲し(一五七)享を觀賓を頤ふ。

【大意】美材の當世に大なる者を集め、枌檳を結聚し斗拱を累ね施し、梁栱は塗るに朱を以てし、綺井下に向つて行布すること花蔕の懸るが如く、井中の蓮花は、下より之を見れば皛め倒に披けるが如く、龍首を爲りて檐の四隅に置き、以て霤を承け、雨水涌いて澎池に髣髴たり。楹列りて光屋内を照らし、榱題は塗るに黑を以てし、階欄は等級をなし、長庭は平なること砥の如く、鐘虡夾み陳り、風吹けども埃を揚ぐるなく、雨ふれども潤ふことなし。北門巖巖として聳え南門之に法り、相對して竝び立ち、廣大にして車を竝べて行くべし。西には延秋門あり、東

【一四五】龍首。龍の首なり。霤を受くるものなり。
【一四六】澎池。灌漑用の貯水池なり。梗概は髣髴に同じ、相似たること。
【一四七】挾振。屋内なり。
【一四八】黮黮。黑き貌。
【一四九】階隋。階は階段。隋は闌干。嶙峋は階段を成せる貌。
【一五〇】鐘虡。虡は鐘を懸くる框。
【一五一】巖巖。高き貌。北闕は北門なり。
【一五二】南端。正南の門なり。
【一五三】竦峭。峻高といふが如し。
【一五四】延秋。門の名。
【一五五】長春。門の名。
【一五六】羣后。諸侯なり。覲は面會すること。
【一五七】享。饗に同じ。

には長春門あり。天子此殿(文昌殿)に於て諸侯を見、賓客を饗養す。

左には則ち(一五八)中朝赩たるあり。(一五九)聽政寢を作り、(一六〇)樸にもあらず斲れるにもあらず、泰を去り甚しきを去り、木には(一六一)彫鏤なく土には(一六二)綈錦なく、(一六三)玄化の甄る所(一六四)國風の稟くる所なり。前には則ち(一六五)宣明顯陽順德崇禮あり。(一六六)重闈洞り出でて(一六七)鏘鏘濟濟たり。珍樹(一六八)猗猗たり、(一六九)奇卉萋萋たり。(一七〇)蕙風薰の如く甘露醴の如し。(一七一)禁臺省中、闥を連ね廊を對し、(一七二)直事の繇る所。(一七三)典刑の藏する所、(一七四)藹藹たる列侍金蜩光を齊うし。(一七五)詰朝幄に陪し、(一七六)納言章あり、亞ぐに(一七七)柱後を以てし、(一七八)執法内に侍し、(一七九)符節謁者、璽を典り吏を

【一五八】中朝。内朝なり。赩は赤き貌。
【一五九】聽政。殿の名。文昌殿の東に聽政殿あり。内朝ここに存す。寢は正殿なり。
【一六〇】樸。彫琢を加へざる木。
【一六一】彫鏤。彫鏤なり。
【一六二】綈錦。飾を施すなり。
【一六三】玄化。聖化。德化に同じ。
【一六四】國風。詩經の國風。
【一六五】宣明。以下皆門の名。
【一六六】重闈。重なれる宮門。
【一六七】鏘鏘濟濟。衣冠の盛なる貌。
【一六八】猗猗。美盛の貌。
【一六九】奇卉。珍しき草。萋萋は盛なる貌。
【一七〇】蕙風。蕙は香草なり。
【一七一】禁臺省中。天子の居る所を禁中といひ、諸公の居る所を省中といふ。闥は門なり。
【一七二】直事。當直といふが如し。
【一七三】典刑。典籍刑法なり。
【一七四】藹藹。衆盛の貌。列侍は多くの侍臣なり。金蜩は金蟬なり。侍中常侍の冠は皆金蟬を飾とす。
【一七五】詰朝。平旦なり。早朝なり。幄は天子の居る所の帳なり。
【一七六】納言。言を出納すること。
【一七七】柱後。御史の官なり。
【一七八】執法。天子に侍りて人の過を察する官。
【一七九】符節。符契印璽を掌る官。璽は天子の印なり。

儲け、(一八〇)膳夫官あり、藥劑司あり。(一八一)肴醳時に順つて、腠理則ち治る。

【大意】其東には中朝あり。衣冠盛袚にして光あり。聽政殿を以て正殿となす。此殿樸にあらず斲れるにあらず。奢らず吝ならず。務めて中法を取り、木には彫飾を加へず、土には締錦を施さず。實に聖化の成る所にして、國風の贊する所なり。聽政殿の前には宣明顯陽順德崇禮の諸門相通じ、衣冠の往來鏘鏘濟濟たり。草樹の香、風之を傳へて火の香を焚くが如く、甘露草樹の上に墜ち、其香芬酒醴の氣の如し。禁臺省中門を連ね廊を對し、當直者の由りて出入する所、典籍刑法の蓄藏せらるる所にして、列侍の臣金蟬の冠を戴き、早朝より天子の帷幄に侍し、言議を出納すること文章あり。之に次ぎて御史執法の官あり。或は印璽を司り、或は吏事を通ず。膳夫藥劑の官あり。或は酒肴を供し、或は肌膚を治む。後には則ち(一八二)椒鶴文石、(一八三)永巷壺術あり。(一八四)次舍甲乙あり。其戸を西南にし之を成すこと日あらず。(一八五)丹青炳煥として特に(一八六)溫室あり。宇宙を儀形し賢聖を(一八七)曆象し、圖するに百瑞を以てし(一八八)粹するに

【一八〇】膳夫。天子の食を掌る官。藥劑は藥品を掌る官。
【一八一】肴醳。醳は醇酒なり。腠理は肌脈なり。
【一八二】椒鶴。聽政殿の後に鳴鶴堂、楸梓坊、木蘭坊、文石室あり、後宮婦人の居る所なり。後宮は椒を壁に塗る。故に椒鶴といへるなり。
【一八三】永巷。庭なり。壺術は道なり。
【一八四】次舍甲乙。宮舍の次序、甲乙の順序あるなり。
【一八五】丹青。彩色なり。炳煥は光りかがやく貌。
【一八六】溫室。殿の名。
【一八七】曆象。曆は歷に同じ、一一像を畫くこと。
【一八八】粹。五彩を合せ施したる繒。藻詠は頌詠すること。

藻詠を以てす。(一八九)茫茫たる終古此に則ち鏡み、(一九〇)有虞繢を作し茲に亦等しく競ふ。右には則ち(一九一)疎圃曲池下畹高堂あり。(一九二)蘭渚は莓莓として石瀨は(一九三)湯湯たり。弱菱實を係け輕葉芳を振ひ、奔龜躍魚(一九四)呂梁を瞰るがごときあり。(一九五)馳道果下に周屈し、(一九六)延閣宇に胤いで以て經營し、(一九七)飛陛輦を方べて西に徑り、(一九八)三臺列び峙ちて崢嶸たり。(一九九)亢陽陰基に臺し、(二〇〇)華山の削成に擬へ、上に棟を累ねて霤を重ね、下に冰室ありて沍え冥し。

【大意】聽政殿の後に後宮婦人の宮あり。宮門或は西に向ひ、或は南に向ひ、日ならずして之を成す。溫室殿は特に文彩爛然として、天地の形、聖賢の像、百瑞の物を畫さ、藻するに贊頌の辭を以てし、人主をして之を見て以て安危の理を知り、古を以て鏡となさしめ、虞舜の繢畫彝器を作りて鑑戒となしたると、其意を等うす。西には菜園曲池平田小亭あり。渚蘭は莓莓と

【一八九】茫茫。遠き貌。終古は往古なり。
【一九〇】有虞。有はただ添ふる辭にて意義なし、虞舜をいふ。繢は五彩にて畫ける繒。書經益稷篇に舜の言を擧げて予古人ノ象ヲ觀ント欲シ。日月星辰山龍華蟲繪チナスとあり。
【一九一】疎圃。疎は蔬に通ず、菜園なり。曲池は池なり。畹は田なり。高堂は園中の亭なり。
【一九二】蘭渚。蘭を植ゑたる曲池の渚。莓莓は盛なる貌。
【一九三】湯湯。急に流るる貌。
【一九四】呂梁。川の名、其水急に流る。莊子に見ゆ。
【一九五】馳道。天子の御成道。
【一九六】延閣。連延せる高閣。
【一九七】飛陛。飛棧といふが如し。
【一九八】三臺。中央に銅雀臺あり、南に金鳳臺あり。北に氷井臺あり。崢嶸は高き貌。
【一九九】亢陽。高き屋根なり。陰基は基なり。下にある故陰といふ。
【二〇〇】華山。山の名。

して茂り、奔湍は湯湯として走り、枝頭に果實を綴り輕葉芬芳を吐き、龜奔り魚躍りて呂梁の如く、馳道は果下に屈曲し、樓閣は連延し、棧道は輦を竝べて馳すべし。三臺峰巒として聳え、華山の削り成せるが如く、上には屋簷を重ね、下には氷室あり。

(二〇一)周軒天に中し　(二〇二)丹墀猋に臨み、(二〇三)增構峩峩として淸塵　(二〇四)彫彫たり。(二〇五)雲雀甍を蹤んで首を矯げ、(二〇六)壯翼鏤を靑霄に摛べ、雷雨(二〇七)窈冥にして未だ半ならず、皦日光を(二〇八)綺寮に籠め、(二〇九)步頓を習ひて以て升降し、春服を(二一〇)御して逍遙し、(二一一)八極を寸眸に圍むべく、萬物を一朝に齊うすべし。(二一二)長塗牟首豪徼互に經、(二一三)晷漏肅唱して　(二一四)明宵程あり。附くるに(二一五)蘭綺を以てし、宿するに禁兵を以てし、司衞邪を閑ぎ　(二一六)鉤陳驚くことなし。是に於て崇墉濬洫(二一七)堞を嬰り　(二一八)涘を帶び、四門(二一九)轗轗と

【二〇一】周軒。長廊の窓あるものありて周廻せるをいふ。
【二〇二】丹墀。丹漆を以て地を塗る。宮殿の庭なり。猋は風なり。
【二〇三】增構。層構なり。高きかまへ。峩峩は高き貌。
【二〇四】彫彫。輕く擧る貌。
【二〇五】雲雀。鳳なり。
【二〇六】壯翼。健翼なり。鏤は彫刻なり。
【二〇七】窈冥。暗きこと。
【二〇八】綺寮。綺窓なり、ウスギヌにて飾れる窓。
【二〇九】步頓。進退步趨なり。
【二一〇】御。著ること。
【二一一】八極。八方のはてなり。
【二一二】長塗。長き途。牟首は閣道の室あるもの。豪徼は道なり。
【二一三】晷漏。時刻を報ずる屋なり。
【二一四】明宵。晝夜なり。
【二一五】蘭綺。兵器の架なり。
【二一六】鉤陳。星の名、帝宮を侍衞す。故に衞兵をいふ。
【二一七】堞。城の上のヒメガキ。
【二一八】涘。水涯なり。
【二一九】轗轗。高き貌。

して　(二二〇)隆厦重り起り、(二二一)太淸に憑りて以て混成し、(二二二)埃壒を越えて資り始め、(二二三)邈邈として摽危し　(二二四)亭亭として峻峙し、(二二五)焦原に臨むも悅へられず、誰か勁捷にして猥ることなけん。岡岑と與にして　(二二六)永に固く、(二二七)世祀を期することあるにあらず。(二二八)陽靈曜を其表に停め、(二二九)陰祇霧を其裏に濛くす。

【大意】周廊高く中天に聳え、丹墀下飈風に臨み、屋宇深淨にして塵濁なく、屋上の大鳳鏤刻を靑霄に輝かし、雷雨陰暗僅に高臺の半に達し、日光高く綺窓を籠む。天子步趨を學んで此に升降し春服を著て徜徉す。八極の遠きも之を寸眸に收むべく、萬物の異も一時に之を齊一にすべし。長途大道互に相經過し、刻漏嚴肅にして晝夜之を報ず。禁兵此に宿し蘭錡此に屬し、侍衞の人其の邪惡を防ぎて驚擾することなし。宮闕高城の堞を繞り、深溝の涯を帶び、四門高く聳え大厦重り立ち、天に憑りて混成するが如く、塵を超えて造作し、焦原に臨むと雖も、比況する能はず。勁捷の人と雖も、懼れざるはなし。堅固なること山の如く、千歲を經るも崩るることなし。白日光を停めて其上に在り。雲雨の神烟霧を其內に暗くす。

【二二〇】隆厦。大屋なり。
【二二一】太淸。天なり。
【二二二】埃壒。塵昏の氣なり。
【二二三】邈邈。遠き貌。摽危は高く立つこと。
【二二四】亭亭。高き貌。
【二二五】焦原。山の名、山東省莒縣の南に在り。尸子ニ莒ニ石焦原アリ、廣サ尋長サ五十步。百仞ノ溪ニ臨ムとあり。
【二二六】世祀。歲月なり。
【二二七】陽靈。日なり。
【二二八】陰祇。雲雨の神なり。

(三九)苑するに玄武を以てし、陪するに幽林を以てし、垣を繚らし囿を開き、觀宇相臨み(三〇)碩果灌叢し、園木(三一)竦尋なり。(三二)篁篠風を懷き蒲桃陰を結び、囘淵灌くして積水深く、(三三)蒹葭鬱として(三四)藿蒻森たり。丹藕波を凌いで(三五)的礫たり。綠芰濤に泛んで(三六)浸潭たり。(三七)羽翮頡頏し(三八)鱗介浮沈し、栖む者は木を擇び、雌く者は音を擇び、(三九)渤澥と姑餘とに咆くが若く、常に鳴鶴ありて陰に在り。(四〇)清籞を表し(四一)虞箴を勒し、國郵を思ひて禽に從ふことを忘れ、(四二)樵蘇往くも忌むことなく、鹿に卽くも縱にして禁ずるにあらず。(四三)腜腜たる坰野(四四)奕奕たる(四五)菑畝あり。甘茶伊れ蠢たり、芒種斯れ阜なり。(四六)西門其前に漑ぎ(四七)史起其後に灌ぎ、(四八)墱流十二にして、源を同うし口を異にし、蓄りて屯雲となり、泄れて行雨となる。水には稷稌を滫

【三九】苑。苑なり。玄武は苑の名。
【三〇】碩果。大なる果實。灌叢は羣生すること。
【三一】竦尋。大なること。
【三二】篁篠。叢竹なり。
【三三】蒹葭。ヨシ、アシ。贅は分別の貌。
【三四】藿蒻。ともに草の名。
【三五】的礫。水に映ずる貌。
【三六】浸潭。浮ぶ貌。
【三七】羽翮。鳥をいふ。頡頏は飛上り飛下ること。
【三八】鱗介。魚貝なり。
【三九】渤澥。姑餘。皆海なり。
【四〇】清籞。池水中に竹籬を編みて魚を養ふ處。イケス。
【四一】虞箴。虞人の箴言なり。虞人とは狩場を主る官なり、其辭左傳に見ゆ。
【四二】樵蘇。きこり、くさかり。
【四三】腜腜。美なる貌。坰野は郊野なり。
【四四】奕奕。盛なる貌。
【四五】菑畝。荒草の生えたる田。
【四六】西門。人名。西門豹なり。西門豹漳水を引いて鄴に漑ぎ以て魏の河内を富ませり。
【四七】史起。人名。鄴の令となり、遂に漳水を引いて鄴に漑げり。
【四八】墱流。川の支流なり。

る、陸には稷稌を蒔る、(四九)黝黝たる桑柘、(五〇)油油たる麻紵あり。(五一)均田疇を畫りて(五二)蕃廬錯り列り、薑芋充茂して桃李蔭翳し、家〻其所に安んじ、美を服して自ら悅び、邑屋相望み、隔踰して世を奕ぬ。

【大意】鄴城の西に玄武苑あり。苑中に幽林あり。墻を繞らして苑囿を開き、觀宇處處に點在し、果實累累として園木長大なり。叢竹風を含み葡萄陰を成し、深淵積水あり。蒹葭叢生し、紅蓮綠芰水波と相映じ、飛鳥上下し魚鼈浮沈し、木を擇んで棲み音を擇んで鳴き、各〻其所を得て優游自得し、渤澥姑餘の大海に在ると一般にして、其天性を失はず。池籞を公開し虞箴を戒勒して、人の取るに任せ、國人の憂を思ひて狩獵の樂に耽るなく、樵蘇の出入を禁せず、苑中の鹿を狩るも忌むことなし。蓋し民と其樂を偕にするなり。又沃野美田あり。甘荼此に生じ稻麥共に豐なり。嘗て西門豹史起の二公、漳水を引きて此に漑ぎ、支流十二あり。集りては屯雲となり、別れては行雨となる。水田には稷稌を植ゑ、陸田には稷黍を植ゑ、桑柘麻紵盛に茂り、均田其分界を定め、廬舍錯雜し、家〻其食を甘しとして其服を美とし、邑屋相望むも阻絕して世を終るまで相往來せず。實に太平の樂土なり。

內には則ち街衢輻湊して朱闕隅を結び、石杠飛梁あり(五三)漳渠を出し控き、通溝を疏して以て路に濱

【四九】黝黝。黑き貌。
【五〇】油油。盛なる貌。
【五一】均田。人民に分ち與ふる田地なり。
【五二】蕃廬。蕃は屏なり。廬は屋舍なり。
【五三】漳渠。川の名、漳水なり。

ひ、青槐を羅ねて以て塗を蔭ひ、(二五四)滄浪に比べて濯ぐべく、(二五五)步欄に方べて踰ゆるあり。(二五六)習習たる冠蓋、(二五七)莘莘たる蒸徒あり。(二五八)斑白提げず行旅衢を讓り、官を設け職を分ち、營に處り署に居り、之を夾むに(二五九)府寺を以てし、之に班ぐに里閭を以てす。其府寺は則ち位(二六〇)三事に副ひ官(二六一)六卿に踰え、(二六二)太常の號、(二六三)大理の名あり。厦屋揆を一にし華屏(二六四)榮を齊うし、(二六五)肅肅たる階闥あり、重門再び扃し、(二六六)師尹爰に止り、世を毗け禎を作す。(二六七)其閭閻は則ち(二六八)長壽、吉陽、永平、思忠あり。亦(二六九)戚里ありて宮の東に寘く。閈には長者を出し巷には諸公を苞ね、(二七〇)都護の堂殿綺窓を居き、輿騎朝に猥り其中に(二七一)蹀敍す。客館を營みて以て坊を周らし、賓侶の集る所を飾り、豐樓の(二七二)閈閎を瑋しくし、(二七三)建安より起りて首めて立て、葺牆

【二五四】滄浪。川の名、楚辭に滄浪ノ水清マバ以テ吾ガ纓ヲ濯フベシとあり。
【二五五】步欄。長廊なり。
【二五六】習習。盛なる貌。冠蓋は冠及び車蓋。高官の人をいふ。
【二五七】莘莘。衆き貌。蒸徒は衆民なり。
【二五八】斑白。白毛まじりの老人。
【二五九】府寺。役所なり。
【二六〇】三事。豆德、利用、厚生なり。書經大禹謨に見ゆ。
【二六一】六卿。周禮の六官なり。
【二六二】太常。官名、宗廟を主る。
【二六三】大理。官名、刑獄を斷ずる事を主る。
【二六四】榮。屋翼なり。
【二六五】肅肅。嚴整の貌。兩階の間を闥といふ。
【二六六】師尹。國の政事を主る大官。
【二六七】閭閻。里門なり。
【二六八】長壽。以下皆里坊の名。
【二六九】戚里。天子の外戚の居る里なり。
【二七〇】都護。將軍曹淵なり。
【二七一】蹀敍。累積といふが如し。
【二七二】閈閎。閈は巷門。閎は門中の道なり。
【二七三】建安。年號なり。

幕室あり、房廡雜り襲ぎ、(二七四)剞劂掇むことなく、(二七五)匠斲積み習ひ、(二七六)廣成の傳も以て儔ぶなく、(二七七)稾街の邸も及ぶ能はず。

【大意】鄴城の内には街衢輻湊し、朱樓角を結び、石橋引いて漳水の上に在り。溝渠を路傍に流通し、列植するに青槐を以てし、渠の清きは以て滄浪の纓を濯ふに比ぶべく、槐樹の蔭は長廊の下に踰ぐるあり。貴賤の往來頻繁にして、斑白の老者は道路に負戴せず、行旅の人互に道を相讓る。官司を設け職務を分ち、居處を營置して府寺を夾み、閭里の間に分布し、各〻其所を得しむ。府寺の官は三事に副ひ六卿に踰え、太常大理等の名號あり。厦屋墻屏皆其制を同うし、階闥嚴整にして門闕を複ね、公卿此に在り天子を輔けて政をなす。民居には長壽、吉陽、永平、思忠等の坊あり。戚里亦帝宮の東に在り。門には長者を出し、巷には公侯の宅あり。都護の堂殿亦ここに在り、飾るに綺窓を以てし、車馬の客、朝朝其中に雜遝す。又諸處に客舍を設け、賓客集會の所となす。建安中の創建に係り、牆を葺き室を塗り、斧斤工人輟むことなく、積習して以て漸く理む。廣成の傳舍、稾街の夷邸も、及ぶ能はざる所なり。

(二七八)三市を廓にして(二七九)廛を開き、(二八〇)平逵の九

【二七四】剞劂。斧斤なり。
【二七五】匠斲。工人なり。
【二七六】廣成。秦の客館の名。傳は傳舍なり、客館をいふ。
【二七七】稾街。長安にある蠻夷の邸なり。
【二七八】三市。晝市、朝市、夕市の三なり。

達に籍り、列肆を班きて以て兼羅し、(二八一)闤闠を設けて以て襟帶し、有無の(二八二)常偏を濟ひ、日中に距りて畢く會し、(二八三)旗亭の嶢辟たるを抗げ、眺る所の博大なるに侈る。(二八四)百隧轂擊して軫を連ぬること萬貫、(二八五)軾に憑り馬に捶ち、(二八六)袖幕紛半たり。八方を一にして混同し、風采の異觀を極め、(二八七)質劑平うして交易し、(二八八)刀布貿へて算なし。(二八九)財は工を以て化し(二九〇)賄は商を以て通じ、得難きの貨は此に則ち容れず、器は用を周くして長く務め、物は窳きに背いて攻きに就き、邪を鬻いで豫め賈はず、(二九一)馴致の醇醸を著す。(二九二)白藏の藏富有隄なく、賑を(二九三)大内に同うし、世資を控引し、(二九四)賓幏積み墆へ(二九五)琛幣充ち牣ち、(二九六)關石の和鈞する所、財賦の底し愼む所なり。(二九七)燕弧庫に盈ちて勁を委み、(二九八)冀馬廐に塡ちて(二九九)駔駿なり。

【二七九】廛。市道なり。
【二八〇】平遠。平なる道なり。
【二八一】闤闠。市中の巷。
【二八二】常偏。貨物の一方に偏することなり。
【二八三】旗亭。市樓なり。嶢辟は高峻の貌。
【二八四】百隧。隧は市道なり。轂擊は車のコシキの打ち合ふこと。
【二八五】軾。車前の横木。人の憑る所のものなり。
【二八六】袖幕。史記に衽ヲ連ネテ帷ヲ成シ、袂ヲ擧ゲテ幕ヲ成スとあり。紛半は紛然たること。
【二八七】質劑。預り證文なり。
【二八八】刀布。貨幣なり。
【二八九】財。材料なり。
【二九〇】賄。貨物なり。
【二九一】馴致。古道に遵ふこと。醇醸は酒の厚きなり、政の敦厚なるに喩ふ。
【二九二】白藏。倉の名。
【二九三】大内。天子の寶庫なり。
【二九四】賓幏。賓は南夷の稅の名。幏は布なり。
【二九五】琛幣。珠玉を琛といひ、布帛を幣といふ。
【二九六】關石。秤なり。和鈞は平なり。
【二九七】燕弧。角弓なり。幽燕の地より出づ。
【二九八】冀馬。冀北より產する駿馬。
【二九九】駔駿。駔は壯なり。

【大意】三市を平道九達の處に開き、肆店を列ねて貨物を羅列し、市中の巷路市を繞りて衣の襟帶の如く、以て有無相通ぜしむ。市樓は高大にして物資は極めて豐富なり。軾に憑る者、馬に鞭つ者、隧路の間肩摩轂擊し、相連貫して萬數に至る。各種の風采を一所に觀衣袖繽紛たり。八方を混同して一所に歸せしめ、各種の材料は工人之に加工るを得、質劑刀布公平にして賣買無數なり。各種の邪惡の物を鬻ぎて射利を事とせず、古道に遵つて醇厚の風を存す。白藏の藏は大内と豐を同うし、富有限りなく天下の資財を控引し、珠玉布帛、南夷の產また此に充滿し、秤量公平にして、財物貢賦の致す所の者、常を失ふことなく、幽燕の弧庫に盈ち、冀北の馬廐に滿つ。

勍敵(三〇〇)糾紛し(三〇一)庶土寧きことなきに至り、(三〇二)聖武興つて言に將に威靈を曜かさんとし、(三〇三)介冑重襲し旌旗莖を躍らし、(三〇四)弓珧(三〇五)檠を解き(三〇六)矛鋋英を飄し、(三〇七)三屬の甲、(三〇八)縵胡の纓、弦を控いて簡び發ち、妙(三〇九)更

【三〇〇】糾紛。入亂るる貌。
【三〇一】庶土。天下なり。
【三〇二】聖武。魏の武帝曹操なり。
【三〇三】介冑。甲冑なり。重襲は重ねて著ること。
【三〇四】弓珧。弓なり。蛤骨にて飾れる弓なり。
【三〇五】檠。弓の曲りたるを矯むるもの。
【三〇六】矛鋋。矛なり、英は矛の飾。
【三〇七】三屬。屬は連なり。三札相重り連れる甲。
【三〇八】縵胡。武士の纓の名。纓は冠の紐なり。
【三〇九】更。贏。古の善射者の名。戰國策に見ゆ。

贏に擬へ、(三二〇)被練を齊へて戈を銛くし、(三二一)偏袤を襲て以て(三二二)讃列し、畢く出征して(三二三)律に中り、(三二四)奇正を執りて以て四に伐ち、(三二五)碩畫精通し、目るところ制に匪るなく、鋒を推し(三二六)紀を積み、(三二七)鋩氣彌〻鋭く、(三二八)三たび接り(三二九)三たび捷ち、既に畫にして亦月なり。(三三〇)方命を剋剪し、(三三一)咆咻を呑滅し、(三三二)叛換を撤け、席のごとく(三三三)虔劉を卷き、威を雲のごとく(三三四)八紘に浸にし、(三三五)荒阻率ひ由り、(三三六)兵を海島に洗ひ馬を江洲に刷ひ、(三三七)振旅輷輷として反旆(三三八)悠悠たり。(三三九)凱歸して同じく飲み、爵を

【三二〇】被練。甲裘なり。
【三二一】偏袤。左右色を異にする衣。軍服の名。
【三二二】讃列。ならぶこと。
【三二三】律。軍隊の規律。
【三二四】奇正。奇計正計なり。奇計を用ひて敵の不意に出づるを奇といひ、正正堂堂の計を用ふるを正といふ。
【三二五】碩畫。大に奇計を畫策すること。
【三二六】紀。十二年を一紀といふ。武帝は初平元年より兵を起し、建安二十年に至り、軍克たざるなし。故に紀を積むといふ。
【三二七】鋩氣。鋭氣といふが如し。
【三二八】三たび接り。一日に三度接戰すること。易に晝日三接とあり。
【三二九】三たび捷ち。一月に三度勝つこと。詩に一月三捷とあり。
【三三〇】方命。王命に逆ふ者。
【三三一】咆咻。咆哮に同じ。
【三三二】叛換。叛は反。換は易。常道に反易せる人。
【三三三】虔劉。殺すこと。
【三三四】八紘。八方といふが如し。
【三三五】荒阻。遠方の人をいふ。
【三三六】兵を云云。魏武兵接要に曰く、大將將ニ行カントスルトキ、雨衣冠ヲ濡ス、是ヲ洗兵トイフ。
【三三七】振旅。兵の戰地より還るをいふ。輷輷は衆聲なり。
【三三八】悠悠。旌旗の飛ぶ貌。
【三三九】凱歸。凱旋なり。凱旋の後、飲至として將士を饗會する禮あり。

疏つこと普く疇しく、朝に(三三〇)刓印なく國に(三三一)費留なし。喪亂既に弭んで能く宴く、武人(三三二)獸を歸して戰を去り、(三三三)蕭斧柯を戢めて以て刃を柙め、(三三四)虹旌麾を攝めて以て卷に就き、(三三五)洪範を斟み典憲を酌み、恆にする所を觀其變に通じ、上は(三三六)垂拱して契を司り、下は(三三七)緣督して自ら勸み、道來りて斯れ貴く、利往きて則ち賤しく、(三三八)囹圄寂寥にして、(三三九)京庾流衍す。

【大意】大賊亂れ起りて天下安からざる時、武帝奮起して、大に其威を耀かし、甲冑を被り旌旗を建て、弓箭を執り戈戟を振ひ、弓弦を滿引し處を擇んで發てば、物として中らざるはなく、其巧妙なること更贏に過ぎたり。士卒は服練を整へ利戈を執り、偏袤の衣を著て以て行列をなし、行伍軍律に叶ひ、奇正の計を用ひて四方を征討す。畫策する所悉く妙理に通じ、爲す所制度に合はざるはなし。鋒を擧げて戰ふこと數十年、鋭氣益〻加り、一日に三たび接戰し、一月に三度捷を得、晝夜休む時なく、王命に逆ひ咆哮して服從せざる者は、之を除剪呑滅

【三三〇】刓印。角のすりへりし印なり。項羽は功臣に爵邑を與ふるを惜み、手に印を持ちながら容易に與へざる故、印角皆すりへりたりといふ。
【三三一】費留。功あるも賞せざるをいふ。孫子に出づ。
【三三二】獸を歸す。周の武王殷を平げて歸り、馬を歸し牛を放ち其戰士を去る。
【三三三】蕭斧。剛利の斧なり。柯は斧の柄。
【三三四】虹旌。虹を畫きし旗。
【三三五】洪範。天下を治むる大法をいふ。
【三三六】垂拱。衣を垂れ手を拱ぬきて無爲なること。
【三三七】緣督。緣は順、督は中、中道に順ふこと。
【三三八】囹圄。牢獄なり。
【三三九】京庾。京は大、庾は倉なり。流衍は滿ち溢るること。

し、常道に反する者あれば雲の如く去り席の如く卷いて、盡く之を殺し、漸く威德を八方に布く。則ち荒遠の俗皆相率ゐて歸服せざるはなし。戰勝つて將に兵を休し師を還さんと欲し、乃ち兵馬を海島江洲に洗刷し、歸りて飲至の禮を行ひ、其爵邑を分つに疇しく度りて其功に當らしめ、刓印なく費留なし。天下既に平にして能く宴樂をなし、牛馬を放ち戰士を歸し、斧鉞を斂め其刃を藏め、旌旗を卷きて之を藏め、復た用ひざるを示し、治國の大法と常憲とを斟酌し、人の恆理を觀、其變に通じて民をして倦まざらしむ。是に於てか上は無爲にして天下を治め、下は中道に順つて自ら勵み、道を貴んで利を賤み、牢獄は空虛にして大倉は滿溢せり。

是に於て(三四〇)東鰓序に卽き(三四一)西傾軌に順ひ、(三四二)荆南憓はんことを懷ひ(三四三)朔北韙を思ひ、負し、譯を重ねて(三四四)篚を貢し、(三四五)髦首の豪、鏤耳の傑、其(三四六)荒服を服し、衽を(三四七)魏闕に斂め、(三四八)文昌に置酒し、(三四九)高張宿め設け、其夜未だ遽ならざるに、庭燎(三五〇)晰晰たり、客あり

【三四〇】東鰓。箱に入れたる貢物。
【三四一】西傾。國の名。軌は車迹なり。
【三四二】荆南。國の名。
【三四三】朔北。北方の地方。韙は美なり。
【三四四】篚。箱に入れたる貢物。
【三四五】髦首。夷人なり。
【三四六】荒服。夷の服なり。
【三四七】魏闕。帝闕なり。
【三四八】文昌。殿の名。置酒は酒宴を張ること。
【三四九】高張。高く幕を張りて作り設けたる宴席。
【三五〇】晰晰。光明なり。

(三五一)祁祁たり、載ち(三五二)華載ち裔、(三五三)岌岌たる冠縱、(三五四)纍纍たる辮髮あり。(三五五)清酤濟の如く、(三五六)濁醪河の如く、凍醴澌を流し、溫酎波を躍らし、豐肴(三五九)衍衍たり(三六〇)行庖皤皤たり。(三六一)愔愔として醧醼し(三六二)酣滑して譁しきことなし。(三六三)廣樂を延ね(三六四)九成を奏し、(三六五)韶夏を冠して(三六六)六英五莖を冒め、(三六七)傮響起りて震霆かと疑はれ、(三六八)天宇駭き地廬驚き、(三六九)億なること(三七〇)大帝の興作せる所、(三七一)二嬴の曾て聆きし所の若し。金石絲竹の恆韻、(三七二)匏土革木の常調、(三七三)干戚羽旄の飾好、(三七四)清謳微吟の要妙、(三七五)世業の日

【三五一】祁祁。衆多なり。
【三五二】華。中國の人。裔は四裔遠方の人。音エツ、叶韻。
【三五三】岌岌。高き貌。
【三五四】纍纍。かさなる貌。辮髮は夷人の髮なり。
【三五五】清酤。清酒なり。濟は河の名、其水清し。
【三五六】濁醪。濁酒なり。河は黃河、其水濁れり。
【三五七】衍衍。多き貌。
【三五八】行庖。食を行ることを主る者。皤皤は多き貌。
【三五九】愔愔。和悅の貌。醧醼は飲み樂むこと。
【三六〇】醧滑。醧醉といふが如し。
【三六一】廣樂。天帝の音樂。
【三六二】九成。九たび奏すること。
【三六三】韶夏。韶は舜の音樂、夏は禹の音樂。
【三六四】六英。帝嚳の音樂。五莖は顓頊の音樂。
【三六五】傮響。かまびすしき音。
【三六六】天宇。天なり。地廬は地なり。
【三六七】大帝。天帝なり。
【三六八】二嬴。嬴は秦の姓なり、秦の穆公と趙簡子とをいふ。
【三六九】秦と趙とは祖を同うす。穆公簡子皆曾て天帝其の廣樂を奏すと夢みたり。
【三七〇】匏土革木。ヒサゴ、土、ナメシカハ、木にて作れる樂器。
【三七一】干戚、干は盾、戚は斧。羽は雉の羽、旄は旄牛の尾、皆舞人の手に持つ物。
【三七二】清謳。きよらかなる歌。
【三七三】世業。音樂は以て淫を防ぎ元氣を和す、故に王者世業と爲す、一日も廢すべからざるなり。

に用ふる所、耳目の聞覺する所、雜糅紛錯、兼該汜博、韙韙掌る所の音、韎昧任禁の曲、以て四夷の君を娛ましめ、以て八荒の俗を睦ぐ。

【大意】是に於て東鯷西傾二國の人、次序に就き車迹を同うし、荆南朔北の夷、皆惠に懷き美を思ひ、遠く山水を越え、其土物を負うて來り貢し、夷人の酋長袖を斂めて帝闕の下に拜す。天子乃ち文昌殿に置酒し、以て宴を蠻夷に賜ふ。宿に供張し庭燎を焚き、中夏の諸侯四裔の人と相雜り、諸侯の冠は岌岌として、蕃夷の辮髮は纍纍たり。清酒は清くして濟水の如く、濁醪は濁りて黄河の如く、衆皆和悅酣飲して諠譁すること なし。因つて鈞天の廣樂を陳ね九成を奏し、首に韶夏を出し、六英五莖を籠め、響宙の轟くが如く、天地も爲に震動し、其宏大なること天帝の作りし所、二嬴の曾て聽きし所のものの如し。金石絲竹匏土革木の樂、干戚羽旄の飾、清唱微吟の妙、悉く混同兼該し、四夷の樂亦備はり、以て四夷の君八方の人を和睦せしむ。

既に苗し既に狩し、爰に遊び爰に豫み、藉田禮を以て動き大閱義を以て擧げ、法駕を

【三七五】聞覺。耳目の聰明を開發すること。
【三七六】雜糅。混合すること。
【三七七】兼該。混同すること。汜博は廣大なり。
【三七八】韙韙。周の音樂を掌る官。
【三七九】韎昧。東夷の音樂。南夷の樂を任といひ。北夷の樂を禁といふ。
【三八〇】八荒。八方の遠地。
【三八一】苗。夏の獵を苗といふ。冬の獵を狩といふ。
【三八二】藉田。天子親ら田を耕し以て祭祀に供するの禮なり。
【三八三】大閱。今日の觀兵式の如し。武を講ずるの禮なり。
【三八四】法駕。天子の車。

備へ秋御を理め、文武の壯觀を顯はし梁騶の著しし所に邁ぐ。林には柿を搓らず、澤には天を伐らず、斧斨時を以てし、罟網道を以てし、德木理を連ね、仁芝草を挺き、皓獸之が爲に藪に育し、丹魚之が爲に沼に生じ、喬雲翔龍あり、澤馬阜に彳み、山には其石を圖し、川には其寶を形し、黑きとして烏にあらざるはなく、三趾して來儀し、赤きとして狐にあらざるはなく、九尾にして自ら擾れ、嘉穎離合して以て蕣尊たり、醴泉涌き流れて浩浩たり、禎祥を顯して以て曲に成し、固に物に觸れて兼ね造る。蓋し亦明靈の酬酢する所、休徵の偉兆する所なり。旼旼たる率土、善に遷りて置きことなく、福應に沐浴し心を醇粹に宅き、餘糧故に栖んで收めず、頌聲路に載ちて洋溢し、河洛奥を開き符命用て出で、翩翩たる黄鳥、書を銜んで來り訊げ、人

【三八五】秋御。馬を御する法なり。
【三八六】梁騶。天子の獵なり。
【三八七】木理。孝經援神契に德草木ニ至レバ則チ木ニ連理アリとあり。
【三八八】芝草。靈草なり。古瑞命記に王者慈仁ナレバ則チ芝草生ズとあり。
【三八九】皓獸。瑞獸なり。
【三九〇】丹魚。赤き魚。
【三九一】喬雲翔龍。皆瑞祥の物なり。
【三九二】三趾。三本足の烏。
【三九三】九尾。尾の九本ある狐。
【三九四】嘉穎。穗を合せたる稻なり。
【三九五】蕣尊。茂盛の貌。
【三九六】浩浩。泉の流るる貌。
【三九七】禎祥。祥瑞なり。
【三九八】明靈。神明なり。
【三九九】旼旼。和樂の貌。率土は天下なり。
【四〇〇】福應。休徵なり。
【四〇一】醇粹。醇厚に同じ。
【四〇二】符命。天子となるべき天の命令。
【四〇三】翩翩。飛ぶ貌。

謀の尊ぶ所、鬼謀の秩づる所、(四〇四)劉宗馭を委て其(四〇五)神器を毀り、(四〇六)玉策を全勝に闕ひ、圖錄を(四〇七)石室に案じ、(四〇八)歷數の在る所を考へ、(四〇九)五德の莅む所を察にし、(四一〇)寸旬を量り吉日を涓び、(四一一)中壇に陟り帝位に卽き、(四一二)正朔を改め服色を易へ、絕世を繼ぎ廢職を脩め、(四一三)徽幟以て變じ器械以て革り、仁を顯して翌明にし、用を減めて玄默なり。言を菲くし行を厚くし、化を陶し學に染み、(四一四)篆籀を讎校し、篇章畢く覿、優賢(四一五)揚歷に著れ、(四一六)匪孽親戚に形る。

【大意】狩獵遊豫、耤田大閱、皆禮儀に遵つて之を行ひ、駕御を正くし、文武の壯觀を顯すこと、梁騶の記述にまさり、林には蘖を斬らず、澤には夭獸を伐らず、木を斬るには葉落つるの時を以てし、網を張るには其道を以てす。仁德の結果、種種の祥瑞を致し、連理の木あり、芝草の生ずるあり、白獸出で、丹魚現はれ、嶠雲あり翔龍あり、澤馬あり、三足の烏、九尾の狐、嘉禾醴泉あり。是れ皆仁德神明を感せしめ、遂に其

【四〇四】劉宗。漢の皇室をいふ。漢は劉氏なればなり。馭を委つとは天下統治の權を棄つること。
【四〇五】神器。天子の位。
【四〇六】玉策。帝王の跡を記錄せる竹簡なり。金縢は金匱なり。
【四〇七】石室。秘書を藏する所。
【四〇八】歷數。天子となるべき順序。
【四〇九】五德。五行なり。天子の立つは五行の相生に由る。
【四一〇】寸旬。司馬法に明王ハ咫尺ノ玉ヲ寶トセズシテ寸陰ノ旬ヲ愛ムとあり。
【四一一】中壇。祭壇なり。
【四一二】正朔。曆なり。
【四一三】徽幟。旌旗なり。
【四一四】篆籀。古代の字體の名。
【四一五】揚歷。賢才を擧げて歷試すること。
【四一六】匪孽。匪は非。孽は私なり。公平なり。

の酬を得たればなり。醇厚の化、人心に入り、年穀豐饒にして田畝に滿ち、鳥の巢に栖むが如く、人之を收紀せず。頌德の謠路に滿ち、洋洋として耳に盈ち、河洛圖書を出し、秘奧を開いて大魏の符命以て出で、黃鳥其書を銜んで來り告ぐ。歌謠祥瑞の結果、漢主其尊位を棄てて魏に讓る。乃ち金匱石室の秘書を窺ひ、歷數の在る所を考へ、吉日を擇んで帝位に卽き、漢の正朔服色を變更し、嗣を絕つ者には命じて之を繼がしめ、職を失ふ者には更に之を復せしめ、旌旗兵器皆改革す。文帝之に嗣ぎ仁明の德あり、用を內に藏し、玄默を守りて言はず。德化益〻著れ、經史篆籀の書を校讎し、篇什文章盡く見ざるはなく、賢才を擧げて之を歷試し、私情を以て親戚に臨まず、極めて公平を保てり。

本枝榦を別ち、皇家に(四一七)蕃屏たり。勇は(四一八)任城の若く、才は(四一九)東阿の若く、旁を抗ぐれば則ち威秋霜より嶮く、翰を摛ぶれば則ち華春葩より縱なり。(四二〇)英喆雄豪命を帝室に佐け、相は(四二一)二八を兼ね將は(四二二)四七より猛く、(四二三)赫赫震震として(四二四)開務謐たるあり。故に斯民をして(四二五)泰階の平なるを覩、屋を比べて

【四一七】蕃屏。藩屏に同じ。
【四一八】任城。曹操の子彰、勇萬夫を蓋ひ力よく鼎を扛ぐ、任城王に封ぜらる。
【四一九】東阿。曹操の子植、詩文に巧なり。東阿王に封ぜらる。
【四二〇】英喆。喆は哲に同じ。
【四二一】二八。舜の臣八元八凱の十六人をいふ。
【四二二】四七。後漢光武帝の二十八將をいふ。
【四二三】赫赫震震。壯なる貌。
【四二四】開務。開物成務なり。謐は安らかなること。
【四二五】泰階。三つの星なり、この三階平なれば陰陽和し、風雨時あり、天下平なり。

一となるべからしむ。(四二六)算祀紀あり　(四二七)天祿終あり。業を傳へ祚を禪り、高く萬邦を謝る。皇恩綽にして帝德冲し。其天下を讓り臣たること至公なり。操行の獨得を榮とし、百王の(四二八)庸庸に超え、追うて(四二九)卷領と結繩とに亙ぎ、睠みて(四三〇)重華を留めて蹤を比べ、(四三一)尊盧赫胥、羲農有熊、自ら以て道洪に化〔以爲〕隆に、世篤くして(四三二)玄同なりと爲すと雖も、奚ぞ遽に之と武を踵ぎ、其風を齊うする能はざらんや。是故に其建國を料り、其法度を析ち、(四三三)其考室を諮り、其(四三四)擧厝を議り、之を復して斁ふなく、之を申べて裕なるあり。(四三五)疏糲の士の能く精うする所にあらず、鄙俚の言の能く具にする所にあらざるなり。

【大意】諸兄弟の侯王たる者、皆皇帝の同體にして、木の根を同うして枝幹を別にするが如く、悉く皇室の藩屏たり。武勇なること任城王曹彰の如きあり、威猛秋霜の如く、文藻あること東阿王曹植の如きあり。佐命の臣亦豪傑の士多く、相は舜の八元八凱に比すべく、將は光武の二十八將に勝り、皆よく物を開き務を成し、天下をして清謐ならしめ、よく天下をして一家たらしむ。

【四二六】算祀。年を歷ること。紀は數なり。
【四二七】天祿。天より與へられたる幸福。
【四二八】庸庸。凡庸にして奇異なきなり。
【四二九】卷領、繩。上古有道の君なり。
【四三〇】重華。舜なり。
【四三一】尊盧。以下皆大古の王者。
【四三二】玄同。大同といふが如し。
【四三三】考室。宮室を作ること。
【四三四】擧厝。厝は措に同じ、賢人を擧げて不才なる人の上に置くこと。
【四三五】疏糲。粗率なり。

然れども魏氏年を算すること數あり。天祿已に其身を去る。乃ち帝業を晉に傳へ、位を退き、以て萬國を棄つ。其情寬綽にして其德冲深、臣たること實に至公なり。其獨得の美行讓德、百王庸常の道に超え、卷領結繩の主にまさり、心を舜の位を禹に讓りし事に留む。かの尊盧赫胥諸王、自ら其道大に化高く、世醇厚にして宇內大同なりとなすも、魏氏豈其蹤を繼ぎ其風を齊うする能はざらんや。其都邑を建て、法度を定め、宮室を營み、擧措をなすこと、皆よく法則に合ひ、反覆して厭倦なく、之を用ふること寬裕なり。是れ皆粗率の士の知る能はざる所、鄙俚の言の能く盡す能はざる所なり。

山川の(四三六)倬詭、物產の(四三七)魁殊なるに至りては、或は名奇にして稱せられ、或は實異にして書すべくざる所なり。其中には則ち(四三八)鴛鴦、交谷、虎澗、龍山、掘鯉の淀、(四三九)蓋節の淵あり。(四四〇)狼狽たる精衞、木を銜み怨を償ひ、(四四一)常山、平干、鉅鹿、河間、(四四二)列眞一にあらず、往往にして出で、(四四三)昌生生の常に厚うする所、(四四四)洵美の渝らは、(四四五)生生の常に厚うする所、(四四六)洵美の渝ら

【四三六】倬詭。絕異なり。
【四三七】魁殊。偉大にして奇異なること。
【四三八】生生。天地の萬物を作り成す力。
【四三九】洵美。まことに美なること。
【四四〇】鴛鴦。以下皆川の名。
【四四一】蓋節。淵の名。
【四四二】狼狽。飛ぶ貌。精衞は鳥の名。吳都賦三七四を見よ。
【四四三】常山。以下皆地名。
【四四四】列眞。多くの仙人。
【四四五】昌容。仙人の名、列仙傳に常山ノ道人ナリ、自ラ殷王ノ女ト稱ス。二百餘年ニシテ顏色年二十ノ人ノ如シとあり。故に色を練るといふ。

容色を練り、(四四六)犢眉連に配し、(四四七)玄俗影なく(四四八)木羽仙に偶ひ、(四四九)琴高水に沈んで濡はず、時に赤鯉に乘りて周旋し、(四五〇)師門火を使ひて以て術を驗す、故に將に去らんとして林燔く。(四五一)易陽の壯容、衞の(四五二)稚質、(四五三)邯鄲の躚步、趙の(四五四)鳴瑟、(四五五)眞定の梨、(四五六)故安の栗、(四五七)醇酎は中山、(四五八)流湎すること千日、(四五九)淇洹の筍、(四六〇)信都の棗、雍丘の(四六一)粱、(四六二)清流の稻、錦繡の(四六三)襄邑、羅綺の(四六四)朝歌、緜纊の(四六五)房子、縑總の(四六六)清河あり。此の若きの屬、繁富(四六七)夥够にして、單く究むべきにあらず。是

【四四六】犢。犢子なり、仙人の名、陽都女といふ者あり。生れて連眉、耳細くして長し、たま〳〵犢子來りて都女に過る、都女之を悅び遂に留めて奉侍す。門を出で共に犢の耳を牽いて走る。能く之を追ふ者なし。

【四四七】玄俗。仙人の名。河間の人なり。其形を見るに影なし。

【四四八】木羽。鉅鹿の人なり。仙人の來り迎ふるに遇ひて共に去る。

【四四九】琴高。趙人なり。赤鯉に乘りて浮遊す。

【四五〇】師門。仙人の名、よく火を使ふ。

【四五一】易陽。易水の北なり、中に美女多し。壯容は少年妙齡をいふ。

【四五二】稚質。童顏なり。

【四五三】邯鄲。趙の地名。亦美女多く、善く行步す。躚步は步行なり。

【四五四】鳴瑟。趙の中山はよく琴瑟を鼓す。

【四五五】眞定。趙の中山郡に屬する地名、其地梨を出す。

【四五六】故安。范陽に屬する地名、栗を出す。

【四五七】醇酎。美酒なり、中山郡より美酒を出す。

【四五八】流湎。長く醉ふこと。玄石といふ者中山の酒を飲み、醉ふこと、千日なりきといふ。

【四五九】淇洹。川の名、衞に屬す、其地竹を出す。

【四六〇】信都。安平に屬する地名。

【四六一】粱。米のよきもの。

【四六二】清流。地名なり。

【四六三】襄邑。地名なり。

【四六四】朝歌。地名なり。

を以て抑へて未だ罄さざるなり。

【大意】山川の卓絕、物產の異常なる、或は名の奇なるを以て稱せられ、或は實の奇なるを以て稱せらる。是れ皆天地生生の德の結果にして、洵美永く變らざる所なり。隨つて多くの仙人此に輩出し、各種の物產一一擧げ盡し難し。蓋し物を比べて以て辭を錯へ、(四六八)清都の閑麗を述べ、言を選んで以て章を簡ぶと雖も、徒に(四六九)九復して旨を遺す。(四七〇)大易と春秋とを覽るに、(四七一)殊隱を判ちて一致なり。(四七二)上林の牆を隤てるを末とし、(四七三)前脩に本づいて以て系を作す。其(四七四)軍容犯さず其果毅を信べ、華を糾し(四七五)戎を絞じて以て公室を戴き、元勳(四七六)管敬の績に配し、(四七七)歌鐘邦君の肆を析つは、則ち(四七八)魏絳の賢(四七九)令聞あるなり。(四八〇)隘巷に閒居し室は邇く心は遐く、仁に富み義を寵し(四八一)職競に

【四六五】房子。地名なり。

【四六六】清河。地名なり。

【四六七】夥够。多きこと。

【四六八】清都。魏都を指す。

【四六九】九復。幾度も繰り返すこと。

【四七〇】大易。易經なり。易は隱に本づいて以て顯を示し、春秋は現實を推して隱微を說く。

【四七一】殊隱云云。隱顯異れども德を合すること一の如しとの意。

【四七二】上林。司馬相如の上林賦を指す。

【四七三】前脩。昔の賢人。

【四七四】軍容。軍隊の容儀。司馬法に軍容國ニ入ラズとあり。

【四七五】戎、夷狄なり。

【四七六】管敬。管仲なり、齊の桓公を佐けて諸侯を九合せり。

【四七七】歌鐘。晉の綽公魏絳に女樂二八、歌鐘一肆を賜ふ。邦君は悼公を指す。

【四七八】魏絳。晉の悼公を輔けて七たび諸侯を合せたり。

【四七九】令聞。美譽なり。

【四八〇】隘巷。陋巷といふが如し。

【四八一】職競云云。寂然として俗と競はざること。

羅らず、(四八二)千乘之が爲に廬に軾し、(四八三)諸侯之が爲に戈を止むるは、則ち(四八四)干木の德、自ら紛を解くなり。貴きは吾が尊きにあらず、士を重んずること山に踰え、親ら(四八五)監門に御し、謙謙として軒を同うし、秦を搦へ趙を起し、威(四八六)八蕃に振ふは、則ち信陵の名蘭芬の若きなり。(四八七)英辯枯を榮し、能く其厄を濟ひ、位將相を加へ、隙を窒ぐの策、四海鋒を齊うするも(四八八)一口の敵する所なるは、則ち(四八九)張儀張祿も亦云ふに足れり。

【大意】以上述べし所の如く、土地物產を歷擧し、文辭をつらねて我が魏都の閑麗を述べ、章句を選擇せりと雖も、徒に反復陳述せるのみにして、終に其美旨を遺れぬ。かの易と春秋とを覽るに、隱顯異りと雖も、然も德を合することの如し。上林賦に牆を頹し壍を塡むといへるは、漢代苑囿の大なるが爲に、(是れ顯なり)之を頹し山澤の人をして至ることを得しめんと欲すればなり。而かも我が魏には苑囿の大なるなく、山川に隱士あり、侯嬴といふ。家貧にして大梁夷門の監者となる、魏の公子信陵君親ら御して之を其邸に迎へ、之を禮遇す。後其力を借りて秦軍を拒ぎ趙を救ふことを得たり。

【四八二】千乘云云。千乘は諸侯なり、魏の文侯段干木を敬し、其門外を過ぐる時は必ず軾に憑りて敬禮したりといふ。

【四八三】諸侯云云。秦君魏を攻めんと欲す、司馬康諫めて曰く、段干木は賢者にして魏之を禮す、乃ち兵を加ふべからずと、秦君乃ち兵を止む。

【四八四】干木。段干木とて魏の賢者なり。

【四八五】監門。門の番人なり。魏

【四八六】八蕃。八方の蠻夷なり。

【四八七】英辯。雄辯なり。

【四八八】一口。一言といふ如し。

【四八九】張儀張祿。戰國の時の辯士にして共に魏の人なり。張祿は卽ち范雎。

萬物皆自然に符す、(是れ隱なり)是れ牆を頹すを以て末事となし、古聖賢の道を守りて、之を系襲せんことを本となせばなり。而して是れ實に我が魏都の美旨なり。以下我が魏都の先賢を列擧せんか。軍容民を犯さず果毅を發揮し、中夏を糾合し戎狄を安撫し、以て公室を戴き、その大功管仲に比すべく、國君の歌鐘を賜はりしは、魏絳の賢にして、今尙ほ令聞あり。陋巷に閑居し居室近しと雖も、其心は遠大、仁義に富み、俗と競はず、諸侯も或は之を禮し、或は兵を止めしは、段干木の德にして、能く國家の紛亂を解けり。自ら尊大にせずして、士を重んずること山の如く、親ら監門の爲に馬を御して同乘し、秦を抑へ趙を起し、其威八方に振ひしは、則ち信陵君にして、其名蘭の如く芳し。雄辯を振ひて死を活かし枯を榮し、時艱を濟ひ、位將相に至り、天下鋒を聯ねて秦を攻めたりと雖も、よく一言を以て此に對敵せしは、張儀張祿二公にして、亦ここに擧ぐるに足る。(以上專ら魏都の勝を說けり)

摧に惟るに(四九〇)庸蜀は鴟鵲と窠を同うし、(四九一)句吳は鼉黿と穴を同うす。一は自ら禽鳥なりと以爲ひ、一は自ら魚鼈なりと以爲へり。山阜(四九二)猥積して崎嶇し、泉流迸集して(四九三)映咽し、(四九四)隰壤濕

【四九〇】庸蜀。地名。庸は江漢の南に在り、蜀を主としていふ。鴟鵲は鳥の名。

【四九一】句吳。吳をいふ。鼉黿は蛙なり。

【四九二】猥積。集り重なること。崎嶇はけはしきこと。

【四九三】映咽。流れ通ぜざる貌。

【四九四】隰壤。濕地なり。濕漏は水漏れ出づるなり。沮洳は水泥相和する貌。

漏して沮洳たり、林藪(四九五)石留して蕪穢なり、窮岫雲を泄らし日月恆に翳れ、(四九六)宅土熇暑して封疆(四九七)障癘あり、(四九八)蔡莽螫刺あり、(四九九)昆蟲毒噬し、漢の罪(五〇〇)流禦せられ秦の餘(五〇一)徙裂せらる。貌を宵くること(五〇二)蕞陋、質を稟くること(五〇三)蓬脆、巷に(五〇四)杼首なく、里に(五〇五)者耋罕なり。或は(五〇六)魋髻して(五〇七)左言し、或は膚を鏤めて髮を鑽り、或は明發まで(五〇八)嬥歌し、或は浮泳して歳を卒へ、風俗は(五〇九)蹙悍を以て嬾しとなし、人物は(五一〇)殘害を以て藝しとなし、威儀の攝せざる所、憲章の綴ねざる所なり。

【大意】(以下吳蜀を折くなり)思ふに蜀は山林多く地狹し、是れ鴟鵲と居を共にするものなり。吳は江湖卑濕の地なり、是れ蛙鼈と居を共にするものなり。それ居は其志を移すといふ。されば蜀人は禽鳥の心を以て心となし、吳人は魚鼈の心を以て心となす。一は山阜崎嶇として連り(蜀)、一は泉流映咽し(吳)、一は卑濕にして常に沮洳たり(吳)、一は林藪礫多くして蕪穢なり(蜀)、一は山岫常に陰雲を出し、日月を見ず(蜀)、一

【四九五】石留。土地に石多きなり。
【四九六】宅土。土地といふが如し。熇暑は熱甚しきなり、
【四九七】障癘。毒氣なり。
【四九八】蔡莽。毒草なり。螫刺は人を刺すトゲ。
【四九九】昆蟲。蝮蛇の類なり。
【五〇〇】流禦。流遷すること。
【五〇一】徙裂。流罪にすること。
【五〇二】蕞陋。醜惡なり。
【五〇三】蓬脆。輕躁なり。
【五〇四】杼首。長首なり。
【五〇五】者耋。老人なり。
【五〇六】魋髻。髮を以て兩耳に結びて垂るもの。
【五〇七】左言。文字を知らざること。
【五〇八】嬥歌。巴の土人の歌なり。
【五〇九】蹙悍。狹勇なり。
【五一〇】殘害。人を殺害すること。

は炎熱にして毒氣あり(吳)、また毒草蝮蛇の人を害するあり。秦漢の時、罪人を此に遷流せり。されば此地の人容貌醜惡、身體虛弱にして、夭死者多くして長壽者稀なり。或は文身して髮を斷ち(吳)、或は明發に至るまで嬥歌し(蜀)、或は魋髻して左言し(蜀)、或は江湖に游泳して歳を終る(吳)。その風俗は狹勇を以て美となし、人を殺害するを以て能となす。固より威儀に叶はず憲章の載せざる所なり。

重山の(五一一)束阨に由り、長川の裾勢に因り、遠關を距いで以て(五一二)闕闠し、時に(五一三)高樔して(五一四)陛制す。薄戍(五一五)緜冪、蛛蝥の網に異るなく、弱卒(五一六)瑣甲、螳蜋の衞に異るなし。(五一七)先代と與にして常に然り、信に險なりと雖も勦絶せり。既往の前跡を揆り、將來の後轍に卽き、(五一八)成都迄に已に傾覆せり、(五一九)建業則ち亦(五二〇)顚沛せん。願ふに(五二一)壘棊に累卵するに非るも、焉んぞ形を觀て怛を懷くに至らん。權くも日を假りて以て餘榮あり、朝華に比して(五二二)菴藹たり。(五二三)麥秀と黍離とを覽、謠を(五二四)吳會に作るべし。

【五一一】束阨。束縛といふが如し。
【五一二】闕闠。中國を窺ふこと。
【五一三】高樔。澤中に設けたる番小屋。
【五一四】陛制。制約といふが如し。
【五一五】緜冪。微細なり。
【五一六】瑣甲。碎けたる鎧。
【五一七】先代。吳の先代は吳王夫差を指し、蜀の先代は公孫述を指す。
【五一八】成都。蜀都なり。
【五一九】建業。吳都なり。
【五二〇】顚沛。顚覆すること。
【五二一】壘棊。碁石をかさぬること。累卵は卵をかさぬること。
【五二二】菴藹。小暗き貌。
【五二三】麥秀、黍離。ともに亡國の跡を悲む詩なり。
【五二四】吳會。吳をいふ。

【大意】　蜀は重山に由りて其民を束ね、遠關を拒守して我が中國を窺ひ、吳は長川の要害に因り、高樓を設けて其民を拘制す。然も二國の戍兵微弱にして、蜘蛛の網に異らず。弱卒碎甲は螳螂の斧を振つて車轍に當るに同じ。何ぞ以て衞となすに足らんや。且つ先代よりして國常に存する者あらず。險を恃むも皆滅亡せざるはなし。故に前後軌轍を同うし、蜀は已に滅亡せり。吳も亦將に顚覆せん。顧ふに疊棊の上に卵を累ぬるの實例を待たず。其形勢を見て然る後始めて懼を抱くにあらず。(形勢を見ざるも滅亡の懼を抱くに足るとの意)、苟も天日の餘光を借り、木槿の朝榮を恃むも、忽ちにして暮烟藹然として至り、華亦忽ちに落ちん。かの麥秀黍離亡國の謠、復た吳の爲に作るべきなり。(蜀は先に滅び、吳は後に亡びたり、故にかく言ふなり)。

先生の言未だ卒らざるに、吳蜀の二客(三二)矍然として相顧み、(三六)瞭焉として所を失ひ、(三七)靦曹の容あり。神藥り形茹れ、氣を弛め坐を離れ、(三八)惕墨して謝して曰く、僕黨(三九)清狂にして(三〇)閩濮に怵迫し、(三一)蓼蟲の辛きを忘るるに習ひ、進退の惟れ谷まるに翫ふ。常に寐ねて覺るなきにあらず。(三二)皇輿の軌躅を覩ざればなり。過りて(三三)汎剽の單

【三二】矍然。懼るる貌。
【三六】瞭焉。意を失ふ貌。
【三七】靦曹。慚づること。
【三八】惕墨。慚ぢて氣色の下ること。
【三九】清狂。疾なくして迷ふをいふ。
【三〇】閩濮。閩は吳をいひ、濮は蜀をいふ。
【三一】蓼蟲。蓼を食ふ蟲。
【三二】皇輿。魏都を指す。
【三三】汎剽。輕薄なり。單惠は小才なり。

惠を以て、(三四)執古の醇聽に歷ひ、兼ねて性を重ねて以て繆を貶ね、(三五)辰光に偃いて定まるなし。先生玄識にして、(三六)深頌測るなし。上德の至盛、憂を(三七)有聖に同うするにあらざるを聞くを得たり。

【大意】　魏國先生の言未だ終らざるに、吳蜀の二客驚いて相顧み、心死し形解け、慚ぢて謝して曰く、吾等清狂にして吳蜀の地に逼迫し、吳蜀の誇るべきを知りて魏都の誇るべきを知らず。蓼蟲の辛味を忘るるが如く、深谷の中に往きて進退據所を失へるが如し。是れ常に寐ねて覺めざるにあらず。蓋し習慣の然らしむる所にして、魏都の軌跡を見ざればなり。今輕薄小才の身を以て、醇厚の古道を聽く。顧ふに從來誤を重ねたるは、日光に背いて定視することなきが如くなりしのみ。先生は實に深識の人にして、深容測るべからず。今先生喩すに上皇の盛德、聖人と憂を同うせざる(周易繫辭傳の語)ことを以てせらる。

抑〻春霆響を發して(三八)驚蟄飛び競ひ、潛龍景を浮べて幽泉高く鏡すが若し。(三九)星に風雨の好あり、人に異同の性ありと雖も、庶に(三〇)蔀家と(三一)剝廬との、世を蘇りて政きに居るにあらざるを覩る。且夫れ寒谷の黍に豐なるは、(三二)律を吹いて以て之を暖むればなり。

【三四】執古。古人の道を執る。
【三五】辰光。日光なり。
【三六】深頌。頌は容なり、貌なり。音ヨウ。
【三七】有聖。聖人なり。聖人は天下を以て憂となす。
【三八】驚蟄。冬季地中に潛みし蟲。春雷を聞けば振ひ出づ。
【三九】星に云云。書經洪範に庶民ハ惟レ星、星ニ風ヲ好ムアリ、星ニ雨ヲ好ムアリとあり。
【四〇】蔀家。幽暗の處をいふ。
【四一】剝廬。困窮の地をいふ。
【四二】律。音律に叶へる風。

昏情の(五四三)爽曙は箴規の以て之を顯せばなり。明珠寸を兼ね尺璧盈つるあり、車を曜すこと(五四四)二六にして(五四五)三たび五城を傾くと雖も、未だ典章を申錫ふの遠しとなすに若かざるなり。亮に曰く、日は雙び麗らず、世に兩帝なしと。天經地緯、理大歸あり。安んぞ(五四六)齊給して其小辯を守るを得んやと。

【大意】抑〻先生の言、我が心を啓發すること、春雷始めて震ひて蟄蟲の飛動するが如く、又潛龍の天に升り高く幽泉を照すが如し。人心の同じからざるは、星の好む所を異にするが如しと雖も、幸に蔀家剝廬の凶にして、世を悟りて正道に居るといふべきにあらざることを見たり。且つ寒谷黍に豐かなるは暖風之を吹けばなり。昏愚の心明に曉るを得たるは、先生の教誡の致す所なり。されば珠璧貴ぶべしと雖も、未だ先生が教誡を賜ふの遠大なるに如かざるなり。語に曰く、天に二日なく地に二王なしと。天地の經緯萬物を覆育す。王者之に法りて行ふ。帝位の立つ所、天人の心に歸す。吾等復た焉んぞ小辯を弄するをなさんやと。

【五四三】爽曙。明かになること。

【五四四】二六。車十二乘なり、魏の惠王の明珠、車の前後十二乘を照したりといふ。

【五四五】三たび云云。趙の惠文王、楚の和氏の璧を得たり、秦の昭王十五城を以て之に易へんと請ふ。

【五四六】齊給。辯說なり。

卷の第四

賦丁

(一)郊祀

(二)甘泉の賦並序　揚子雲

孝成帝の時、客に、雄が文、(四)相如に似たりと薦むる者あり、(五)上方に甘泉の(六)泰畤、(七)汾陰の后土を郊祀し、以て繼嗣を求めんとす。雄を召して(八)承明の庭に待詔せしむ。(九)正月從つて甘泉に上り、還りて甘泉の賦を奏して以て(一〇)風す。其辭に曰く、

惟れ漢の(一一)十世、將に(一二)上玄を郊し泰時を定め、(一三)神休に

【一】郊祀。天を祭るを郊といひ、地を祭るを祀といふ。

【二】甘泉。宮殿の名。

【三】揚雄。字は子雲。蜀郡の人なり、少うして學を好む、年四十餘、蜀より來りて京師に遊ぶ、大司馬王音召して門下の史となし　待詔に薦む、歲餘にして、郎中給事黃門となる。成帝嘗て趙飛燕の子なきが爲に往いて甘泉宮に祠る、雄制度壯麗なるを見、因つて此賦を作り以て之を諷す。

【四】相如。漢の司馬相如なり、賦を以て名あり。

【五】上。孝成帝を指す。

【六】泰時。壇の名。神靈の止まる所を時といふ。

【七】汾陰。汾水の南。后土は地祇なり。

【八】承明。殿の名。石渠門外に在り、雄材術を以て知られ承明殿に直し、詔を待ちて卽ち天子に見ゆ。故に待詔といふ。

【九】正月。漢書に永始四年正

擁けられて(一四)明號を尊くし、(一五)符を三皇に同うし、功を五帝に錄し、胤を邺へ羨なるを錫へ、迹を拓き統を開かんとす。是に於て廼ち(一六)羣僚に命じて吉日を歷び(一七)靈辰に協はしむ。星のごとく陳りて天のごとく行り、(一八)招搖と(一九)太陰とに詔し、(二〇)鉤陳に伏して兵を當らしめ、(二一)堪輿に屬するに壁壘を以てし、(二二)蘧廬を搢ちて獡狂を扶ち、(二三)八神奔りて(二四)警蹕し、振く(二五)殷轔として軍裝し、(二六)蚩尤の倫(二七)干將を帶びて(二八)玉戚を秉り、飛ぶものは(二九)蒙茸し走るものは(三〇)陸梁し、齊しく(三一)總總として以て撙撙たり。其相(三二)膠轕して(三三)猋のごとく駭き雲のごとく迅く、奮ひて以て(三四)方攘し、(三五)

月甘泉ニ行幸スとあり。

【一〇】風。諷に同じ。諷刺すること。

【一一】十世。孝成帝なり。上玄。天なり。

【一二】神休。休は美なり、神明の祥瑞なり。

【一四】明號。天子の大號。

【一五】符を云云。功德を三皇五帝と同じうすること。

【一六】羣僚。百官なり。

【一七】靈辰。善き時なり。

【一八】招搖。星の名、北斗の杓端に在り。

【一九】太陰。星の名、太歲の前の二辰なり。

【二〇】鉤陳。星の名、紫微宮の外營に在り。王者亦之に倣ひて鉤陳營を設く。

【二一】堪輿。天地なり。屬は託なり。

【二二】蘧廬、獡狂。並に惡神なり。

【二三】八神。八方の神。

【二四】警蹕。天子出入の時行路を警むること。

【二五】殷轔。衆盛の貌。

【二六】蚩尤。古の善く武器を用ひし人の名。史記に黃帝蚩尤ト涿鹿ノ野ニ戰フとあり。

【二七】干將。名劒の名。

【二八】玉戚。戚は斧なり、玉を以て其柄を作る。故に玉戚といふ。

【二九】蒙茸。亂れ走る貌。

【三〇】陸梁。亂れ走る貌。

【三一】總總撙撙。束聚の貌。

【三二】膠轕。雜亂の貌。

【三三】猋。回風なり。

【三四】方攘。分散の貌。

【三五】駢羅列布。前後にならびつらなること。

駢羅列布して鱗のごとく以て雜沓し、(三六)傑傂參差として魚のごとく頡り鳥のごとく盱り、(三七)翕赫曶霍として霧のごとく集り蒙のごとく合ひ、(三八)半散照爛し粲として以て章を成す。

【大意】漢の成帝祭天の儀を擧げ、神明の加護に據りて己の明號を尊くし、功德を三皇五帝に比し、繼嗣と豐饒とを賜はり、事績を廣め統緒を開かんと欲し、乃ち羣臣に命じて吉日良辰を選び以て祭事を營ましむ。是に於て羣臣の陳列すること星の如く、天子行を啓いて天の運るが如く、招搖太陰に詔し鉤陳營に伏して兵を主らしめ、天地の神に託して軍の壘壁を知り惡神を擊ち去らしめ、八方の神奔走して天子の爲に警蹕し、皆軍裝して之に從ひ、蚩尤の輩干將の劍を佩び玉斧を執りて左右に亂走し、聚散すること風雲の如く、其行くこと魚の躍り鳥の翔るが如く、衆盛なること雲霧の合するが如く、燦爛として文章を成す。

是に於て(三九)乘輿廼ち夫の(四〇)鳳皇に登りて(四一)華芝を翳し、(四二)蒼螭を駟にし(四三)素虬を六にし、(四四)蠖略蕤綏、(四五)灕虖襂纚たり。(四六)帥爾として(四七)雪然として陰閉し、(四八)清

甘泉の賦

【三六】傑傂參差。齊整ならざる貌。

【三七】翕赫。盛なる貌。曶霍は疾き貌。

【三八】半散。分散の貌。照爛はてりかがやくこと。

【三九】乘輿。天子をいふ。

【四〇】鳳皇。天子の車をいふ。鳳凰を以て車の飾となせばなり。

【四一】華芝。車蓋なり。

【四二】蒼螭。蒼龍なり。龍とは馬を美するなり。駟は馬四頭を一車に駕するなり。

【四三】素虬。白龍なり。六は馬六頭を一車に駕するなり。

【四四】蠖略蕤綏。龍の行く貌。

【四五】灕虖襂纚。龍の羽の垂る

霄に騰りて(四九)浮景を軼ぐ。夫れ何ぞ(五〇)旗旄郅偈の(五一)旖旎たる。(五二)星旄を流して以て電のごとく燭き、咸く(五三)翠蓋にして(五四)鸞旗なり。萬騎を(五五)中營に屯ねて(五六)玉車の千乘を方べ、聲(五七)駢隱として以て(五八)陸離たり。輕きこと疾雷に先だちて(五九)遺風よりも駁く、(六〇)高衍の嶱嵷たるに臨み、(六一)紆譎の清澄なるを超え(六二)椽欒に登りて天門に狂り、(六三)閶闔に馳せて(六四)凌兢に入る。この時未だ夫の甘泉に臻らず、廼ち(六五)通天の(六六)繹繹たるを望めば、下は(六七)陰潛して以て慘懍たり、上は(六八)洪紛して相錯り、直に(六九)嶢嶢とし

【四六】帥爾。衆ろ貌。陰閉は衆ろ貌をいふ。
【四七】雪然。散ずる貌。陽開は散ずるをいふ。
【四八】清霄。清天なり。
【四九】浮景。倒景なり。天上至高の處をいふ。日月の上に在り、反つて下より照す、故に其景倒なればなり。
【五〇】旗旄。旗上に鳥を畫けるを旗といひ龜を畫けるを旄といふ。郅偈は旗竿なり。
【五一】旖旎。旌旗の風にたなびきひらめく貌。
【五二】星旄。旄は旄牛の尾を以て作りし旗にて、飾るに星文を以てするもの。
【五三】翠蓋。翡翠鳥の羽を以て飾りし蓋、高唐賦に蜺ヲ旌トナシ翠ヲ蓋トナスとあり。
【五四】鸞旗。鸞を畫ける旗、蔡邕獨斷に天子出ヅル時ハ前驅ニ鸞旗ナル者アリとあり。
【五五】中營。天子の營なり。
【五六】玉車。玉を以て飾りし車。
【五七】駢隱。車騎の聲なり。
【五八】陸離。參差なり。奔馳する貌。
【五九】遺風。疾風なり。王褒の聖主得賢臣頌に奔雷ヲ追ヒ遺風ヲ逐フとあり。
【六〇】高衍。高くして平なるなり。嶱嵷は山の峰の貌。又上り下りの多き貌。
【六一】紆譎。曲折なり。
【六二】椽欒。山の名、甘泉宮の南に在り。
【六三】閶闔。天門の名。
【六四】凌兢。寒涼の處なり。
【六五】通天。臺の名、武帝の元封二年に作る。漢書舊儀に高さ三十丈、長安城ヲ望見スとあり。
【六六】繹繹。高き貌。音ヤク。
【六七】陰潛。くもること。慘懍は明かならざる貌。
【六八】洪紛。紛亂なり。
【六九】嶢嶢。高き貌。

て以て天に造り、その高きこと慶に(七〇)彌度るべからず。平原の唐其れ(七一)壇漫として(七二)新莫を(七三)林薄に列ね、(七四)幷閭と茇葀とを攢め、紛として(七五)被麗して其れ鄂なし。丘陵の(七六)駿駼たるを崇くし、深溝(七七)嶔巖として谷をなし、(七八)逞逞離宮あり般りて以て相燭き、(七九)封巒石闕あり(八〇)迤靡として連屬す。

【大意】天子乃ち凰鳳の輿に乘り華芝の蓋を翳し、駟馬を駕し六馬を聯ぬ。儀仗の聚散離合すること陰陽の開閉するが如く、清天を凌いで高く、騰れば旌旗風に飄りて電光の如く、其衆千乘萬騎あり。神速なること疾雷に過ぎ、馳すること疾風よりも速なり。或は高遠の地を經、或は清澄の流を涉り、椽欒山に登りて天門に至り、閶闔を過ぎて寒涼の處に入る。時に未だ甘泉宮に達せず、遠く通天臺を望めば繹繹然として高く聳え、其下陰暗にして分明ならず、其上高く天空に錯り、嶢然として天を衝き其高きこと量るべからず。平原廣大の道を行けば、香草徧く林薄の間に列り、瑞草紛披して際涯なし。山阜の高きを登り溝渠の深を經て進めば、處處に離宮別館あり、分布して相輝き、封巒石闕の二觀、亦相連屬す。

【七〇】彌度。彌は終なり。量り盡すこと。
【七一】壇漫。廣大の貌。
【七二】新莫。香草なり。
【七三】林薄。草の叢生する處を薄といふ。
【七四】幷閭、茇葀。皆瑞草の名。
【七五】被麗。分散する貌。
【七六】駿駼。高き貌。
【七七】嶔巖。深き貌。
【七八】逞逞。往往なり、處處なり。
【七九】封巒石闕。三輔黃圖に甘泉ニ石闕觀、封巒觀アリとあり。觀は樓臺をいふ。
【八〇】迤靡。相連る貌。

是に於て大廈雲のごとく譎しく波のごとく詭しく（八一）摧嵯として（八二）觀を成す。仰いで首を矯げて以て高く視れば、目（八三）冥眴して見るとなく、正に（八四）瀏濫にして以て（八五）弘惝なり。東西の（八六）漫漫たるを指し、徒に（八七）徊徊して以て徨徨し、魂魄（八八）眇眇として昏亂す。（八九）幹軒に據りて（九〇）周流すれば、忽ち（九一）坱圠として垠なし。玉樹の（九二）青葱を翠にし馬犀の（九三）璘瑏を壁にし、（九四）金人仡仡として其れ（九五）鐘虡を承け、（九六）嵌巖巖として其れ龍鱗のごとく、光曜の（九七）燎燭たるを揚げ、（九八）景炎の炘炘たるを垂れ、（九九）帝居の（一〇〇）縣圃に配し、（一〇一）泰壹の威神に象り、（一〇二）洪臺崛として其獨り出で、（一〇三）北極の嶟嶟たるに極り、（一〇四）列宿廼ち（一〇五）上榮に施き、日月纔に（一〇六）柍振を經り、雷（一〇七）巖突に鬱律として、電（一〇八）牆藩に倏忽たり。鬼魅も自ら逮ぶ能はず、長途に半して下り顛ち、倒景を歷て（一〇九）飛梁を絕り、（一一〇）蠖蠓を浮ぎて天を撇ひ、（一一一）欃槍を左にして（一一二）玄冥を右にし、（一一三）熛闕を前にして（一一四）應門を後にし、西海と（一一五）幽都とを蔭し、（一一六）涌醴汨として以て川を生し、蛟龍東厓に（一一七）連蜷して、白虎（一一八）崑崙に敦圉し、（一一九）樛流を高光に覽、（一二〇）方皇を西青に溶にし、（一二一）前殿崔巍として（一二二）和氏玲瓏たり。（一二三）浮柱の飛榱を抗げ、（一二四）神莫莫として傾くを扶け、（一二五）閌閬閬として其れ（一二六）寥廓たり、（一二七）紫宮の崢嶸たるに似たり。（一二八）駢交錯して（一二九）曼衍し、（一三〇）峻嶂陳として其れ相嬰り、（一三一）雲閣に乘りて上下し、（一三二）紛蒙籠とし

【八一】摧嵯。材木の積み重なりたる貌。
【八二】觀。闕なり。タカドノなり。
【八三】冥眴。昏亂すること。
【八四】瀏濫。清淨なり。
【八五】弘惝。高大なり。
【八六】漫漫。廣くして際涯なき貌。
【八七】徊徊、徨徨。心驚くない ふ。
【八八】眇眇。迷亂の貌。
【八九】幹軒。欄干なり。
【九〇】周流。あるきまはること。
【九一】坱圠。廣大の貌。
【九二】青葱。あを〳〵せること、玉樹の色なり、漢の武帝玉樹を此宮に植ゑ、碧玉を以て葉となし、又璧馬犀牛等を作りて飾となせり。
【九三】璘瑏。文彩なり。
【九四】金人。金製の像なり。仡仡は勇壯なる貌。
【九五】鐘虡。虡とは鐘を懸くる架なり。
【九六】嵌巖巖。鱗の開張せる貌。
【九七】燎燭。てりかがやくこと。
【九八】景炎。日なり　炘炘は熱氣の貌。
【九九】帝居。天帝の居る處。
【一〇〇】縣圃。層城縣圃閬風は崑崙山の三重にして天帝の居る處なり。配は匹敵すること。
【一〇一】泰壹。太一に同じ、天神なり、紫微宮に居る。
【一〇二】洪臺。大なる樓臺。崛は高く聳ゆる貌。
【一〇三】北極。北極星なり。嶟嶟は峻秀の貌。
【一〇四】列宿。列星なり。
【一〇五】上榮。榮は屋翼（ヤネヅ

マ）なり。
【一〇六】柍振。柍は屋宇の中央、振は屋宇の端なり。
【一〇七】巖突。幽深の處なり。鬱律は小聲なり。
【一〇八】牆藩。垣なり。倏忽は疾き貌。
【一〇九】飛梁。閣道なり。
【一一〇】蠖蠓。遊氣なり。
【一一一】欃槍。星の名。
【一一二】玄冥。北方水神の名。
【一一三】熛闕。赤色の闕なり。
【一一四】應門。正門なり。
【一一五】幽都。山海經に北海ノ内ニ山アリ、名ケテ幽都トイフとあり。
【一一六】涌醴。醴泉湧き出づるなり。汨は盛なる貌。
【一一七】連蜷。長くして曲れる貌。
【一一八】崑崙。天帝の居る山の名。敦圉は盛に怒る貌。
【一一九】樛流。長遠の貌。高光は宮の名。
【一二〇】方皇。觀の名。西青は西廂清淨の處なり。
【一二一】前殿。正殿なり。諸宮に皆是あり。漢書に未央宮ニ前殿ヲ立ツとあり。崔巍は高き貌。
【一二二】和氏。璧なり、以て殿を飾る。玲瓏は光明の貌。
【一二三】浮柱。梁上の柱なり。飛榱は榱なり。
【一二四】莫莫。衆多の貌。
【一二五】閌閬閬。高き貌。
【一二六】寥廓。虛靜の貌。
【一二七】紫宮。紫微宮なり。崢嶸は高深の貌。
【一二八】駢交錯。檐棟の相交るをいふ。
【一二九】曼衍。分布すること。
【一三〇】峻嶂陳。山の高く長き貌。
【一三一】雲閣。樓閣の高く雲に連るをいふ。
【一三二】紛蒙籠。暗き貌。

て以て混成し、紅采の(一三三)流離たるを曳き、翠氣の(一三四)宛延たるを颺げ、(一三五)琁室と傾宮とに襲ぎ、高きに登り遠き〔亡國〕を眇み、肅乎として淵に臨むが若し。(一三六)廻猋肆くして其れ(一三七)碭駭し、(一三八)桂椒を破いて(一三九)栘楊を鬱にし、香(一四〇)芬茀として以て(一四一)穹隆し、(一四二)薄櫨を擊つて榮に將び、(一四三)薌呋肸として以て(一四四)棍批し、聲駢隱として鐘を歷ち、(一四五)玉戸を排いて(一四六)金鋪を颺げ、(一四七)蘭蕙と芎藭とを發し、帷(一四八)弸環として其れ(一四九)拂汨し、稍く暗暗として(一五〇)靚深なり。陰陽清濁して、(一五一)穆羽相和し、(一五二)夔牙の琴を調するが若く、(一五三)般倕其の(一五四)剞劂を棄て、(一五五)王爾其の(一五六)鉤繩を投げ、(一五七)征僑と偓佺とを方にすと雖も、猶ほ(一五八)彷彿として其れ夢の若し。

【一三三】流離。分散の貌。
【一三四】宛延。長く曲れる貌。
【一三五】琁室、傾宮。玉を以て飾りし宮室。桀王琁室を作り紂王傾宮を作る。
【一三六】廻猋。回風なり。
【一三七】碭駭。忽ち起ること。
【一三八】桂椒。香木なり。
【一三九】栘楊。木の名。
【一四〇】芬茀。香氣の盛なる貌。
【一四一】穹隆。盛なる貌。
【一四二】薄櫨。櫨櫨に同じ、梁上の短柱なり。
【一四三】薌。香に同じ。呋肸は疾く散ずる貌。
【一四四】棍批。むらがり打つこと。
【一四五】玉戸。玉を以て飾りし戸。
【一四六】金鋪。門の飾なり、環を銜む所にて龜蛇の形をなし、銅にて作る。
【一四七】蘭蕙、芎藭。香草の名。
【一四八】弸環。風の帷帳を吹く聲。
【一四九】拂汨。動く貌。
【一五〇】靚深。靜清なり。
【一五一】穆羽。聲細くして羽聲の如く、穆然として相和するなり。
【一五二】夔牙。夔は舜の樂官、牙は伯牙、皆古の音樂に巧なる人。
【一五三】般倕。般は魯般、倕は舜の共工たり。皆古の巧人。
【一五四】剞劂。刀鑿なり。
【一五五】王爾。古の巧匠の名。
【一五六】鉤繩。鉤は曲尺、繩はスミナハ。
【一五七】征僑、偓佺。皆古の仙人の名。
【一五八】彷彿。視ること諦ならざる貌。

【大意】既に甘泉宮に達するや、廈屋變巧にして雲氣水波の相譎詭するが如く、高く木材を積んで觀闕を成し、首を擧げて高く望めば、目昏迷して見る所なし。觀闕清淨高大にして、東西を指すに際涯なく、魂魄其の壯麗に驚き、眇然として迷惑す。欄干に據りて周行すれば、廣大にして際限なし。武帝嘗て玉樹を此宮に植ゑ、碧玉を以て葉となし、馬犀の文彩を以て飾となし、勇壯なる金人をして鐘虡を負はしめ、その肌膚龍鱗の如し。宮觀曜曜として上下に照映し、日光の下照するが如く、實に天神の宮居にも比すべし。大臺高く聳えて上北極星に至り、列星日月その屋角を繞り、雷聲微に幽深の處に聞え、電光忽ち牆垣の上に見ゆ。されば鬼神も其上に及ぶ能はず、當に半途にして墜落すべし。高く倒景を超え遊氣を過ぎ、閣道を絶りて青天を拂ふべく、欃槍を左にし玄冥を右にし、前に赤闕を造り正門其後に在り。門闕は高く西海と幽都とを蔭ひ、醴泉湧出して川を成し、蛟龍東岸に偃蹇し、白虎崑崙（甘泉宮中に在り）に怒吼し、高光方皇の二觀、また西廂清閑の處に在り。前殿は飾るに和氏の璧を以てし、其光玲瓏たり。檐宇高峻にして衆神其の傾側を扶持するが如く、檐棟相連續し、上下蒙蒙として混成し、紅采翠氣其側に流離宛延し、其華麗なること實に夏桀の琁室と、殷紂の傾宮とに繼ぐ。されば恰も高きに登り彼の夏殷二亡國の跡を望みて、肅然として懼るること、深淵に臨むが如きものあらん。

回風疾起して鬱起し、香木を披拂して栫楊を鬱茂し、香氣盛に起り構櫨を擊つて屋翼に及び、風と同じく鐘を擊ち、騁隱として聲を發し、風玉戸を開いて金鋪を飄颻し、蘭蕙芎藭の氣を發し、帷帳を卷いて微動し、闇然として深靜なり。風清濁の音を擧げ、其細きこと羽聲の如く、穆然として相和し、恰も夔牙の琴瑟を鼓するが如し。建築の美妙なるを見ては、般倕王爾も猶ほ刀鑿を投じて嘆息すべく、仙人ここに遊ぶも、亦其形狀を識らず、髣髴として夢中の如くなるべし。是に於て事變じ物化し、目駭き耳回る。蓋し天子、珍臺閒館、(一五九)琁題玉英、(一六〇)蟺蜎蠖濩たる中に(一六一)穆然たり。惟ふに夫れ心を澄まし魂を清くし、精を儲へ(一六二)恩を垂れ、天地を感動し、鼇を(一六三)三神に逆ふる所以の者なり。廼ち逑を搜び偶を索め、(一六四)皐伊の徒(一六五)倫に冠たり能に魁にたり。(一六六)甘棠の惠を函にし、(一六七)東征の意を挾み、相與に(一六八)陽靈の宮に齋し、(一六九)薜荔を靡かして席となし、瓊枝を折りて以て芳となし、清雲の流霞を嗡ひ、(一七〇)若木の(一七一)露英を飲み、(一七二)禮神の囿に集り、

【一五九】琁題。題は頭なり、玉なは玉に英華の色あるなり。玉英以て椽の頭を飾るなり。
【一六〇】蟺蜎蠖濩。刻鏤の形なり。
【一六一】穆然。靜默の貌。
【一六二】恩。李善本思に作る。
【一六三】三神。天地人の神。
【一六四】皐伊。皐は皐陶。堯の臣なり、伊は伊尹、湯の臣なり。
【一六五】倫に冠。羣類に傑出す。
【一六六】甘棠。詩篇の名、召公を美するなり。
【一六七】東征。周公東のかた管蔡を征し、周の功業を成す。
【一六八】陽靈。宮の名。
【一六九】薜荔。草の名、まさきのかづら。
【一七〇】若木。神木なり。
【一七一】露英。露を含める花。
【一七二】禮神。神を祭ること。

(一七三)頌祇の堂に登る。光耀の長旃を建て、(一七四)華覆の(一七五)威威たるを昭にし、(一七六)琁璣を攀ぢて下視し、行〻日を(一七七)三危に遊ばしめ、衆車を(一七八)東阬に陳ね、(一七九)玉軑を肆にして下り馳せ、(一八〇)龍淵に漂んで(一八一)九垠を還り、地底を窺ひて上り廻る。(一八二)風縱縱として轄を扶け、鸞鳳紛として其(一八三)蕤を銜み、(一八四)弱水の(一八五)滯潑たるを梁り、(一八六)不周の(一八七)逶迤たるを躡み、(一八八)西王母を想ひ、欣然として壽を上り、(一八九)玉女を屏けて(一九〇)宓妃を却け、玉女も其(一九一)清矚を眺る所なく、宓妃も曾て其(一九二)蛾眉を施すを得ず。方に道德の精剛を攬り、神明に侔うして之と(一九三)資をなす。

【大意】宮觀の上、彫鏤變化し、皆人の耳目を驚かす。天子乃ち珍臺閒館の中に坐し、默然として祭祀の事を思ふ。蓋し心を澄まし魂を清くしめ、以て福を三神に求むる所以なり。因つて伊尹皐陶にも比すべき、羣傑に冠たる賢人を求め、

【一七三】頌祇。神を祭ること。
【一七四】華覆。華蓋なり。
【一七五】威威。蕤蕤なり、盛に垂るる貌。
【一七六】琁璣。北斗星なり。
【一七七】三危。山の名。
【一七八】東阬。東海なり。
【一七九】玉軑。玉にて飾れる車轄。
【一八〇】龍淵。淵の名、張掖に在り。
【一八一】九垠。九重の淵なり。
【一八二】縱縱。疾き貌。
【一八三】蕤。綏なり、車中の把、トリテなり。
【一八四】弱水。川の名、崑崙山の東に在り。
【一八五】滯潑。よどみて流れざる貌。
【一八六】不周。山の名、西海の外に在り。
【一八七】逶迤。長く曲れる貌。
【一八八】西王母。仙女なり。
【一八九】玉女。美女なり。
【一九〇】宓妃。洛水の神女なり。
【一九一】清矚。美しき瞳子。
【一九二】蛾眉。美しき眉。
【一九三】資。用なり。

周公召公の心を以て心となし、共に陽靈宮に齋戒す。香草を以て席となし、瓊枝を折りて佩となし、雲表の霞、若木の露を吸ひて、以て精神を清め、此に始めて齋宮を去りて祭所に往く。ここに乃ち長旗を建て華蓋を垂れ、北斗星を攀ぢ、三危山を望み、衆車を東海に陳ね、車騎を肆にして下り馳せ、龍淵の九重なるに漂び、地底を窺ひて上り還る。疾風をして車轄を扶けしめ、鸞鳳をして綏纓を銜ましめ、弱水の小流を渡り、不周山を超え、既に西極に至るや、王母を想ひて壽を上り（是れ好色の敗德を娛むもの、作者諷刺の在る所なり）玉女と宓妃とを屏く。故に玉女宓妃も其眉目を呈する所なし。乃ち道德精微の理を取り、神明に侔うして資用となす。

是に於て、欽み（一九四）柴し宗び祈り、（一九五）皇天に（一九六）燎熏すれば、（一九七）皐搖泰壹（一九八）洪頤を擧げ靈旗を樹て、（一九九）樵蒸焜り上り（二〇〇）配蓼して四に施き、東のかた滄海を燭し、西のかた（二〇一）流沙を耀し、北のかた幽都を横し、南のかた（二〇二）丹厓を煬す。（二〇三）玄瓚觮觴として、（二〇四）秬鬯泔淡たり。（二〇五）盼嬰豐融して（二〇六）懿懿芬芬たり。炎黃ふ、弱水の餘波流沙に入る。沙は音シ、叶韻。

【一九四】柴。柴を燒き天を祭る。
【一九五】皇天。皇は大なり。天神。
【一九六】燎熏。牲玉を燒き天に熏して祭るなり。
【一九七】皐搖、泰壹。五臣本皐を招に作る。皆星神の名。
【一九八】洪頤。旌の名。
【一九九】樵蒸。炬火なり。
【二〇〇】配蓼。披離なり。
【二〇一】流沙。西北方の沙漠をいふ、弱水の餘波流沙に入る。沙は音シ、叶韻。
【二〇二】丹厓。丹水の涯なり。厓は音ギ、叶韻。
【二〇三】玄瓚。黑玉を以て飾りし酒器、之を以て鬯を灌ぐなり。觮觴は玄瓚の貌なり。
【二〇四】秬鬯。黑黍にて釀しし香酒、之を灌ぎて神を降すなり。泔淡は滿つるなり。

龍を感ぜしめ、熛（二〇七）碩麟を訛す。（二〇八）巫咸を選んで（二〇九）帝閽に叫ばしめ、天庭を開いて羣神を延く。（二一〇）儐暗藹として清壇に降り、瑞穰穰として委ること山の如し。是に於て事畢り功弘まり、車を廻らして歸り、（二一一）三巒を度りて（二一二）棠梨に偈ふ。（二一三）天閶決けて地垠開け、（二一四）八荒協ひて萬國諧ぐ。（二一五）長平に登りて雷鼓磕り、天聲起りて勇士厲み、雲飛揚して雨（二一六）滂沛たり、于に胥德ありて萬世に麗し。

【二〇七】盼嬰。分布すること。豐融は饒衍なり。
【二〇八】懿懿芬芬。香氣の盛なる貌。
【二〇七】碩麟。大なる麒麟。
【二〇八】巫咸。古の神巫の名。
【二〇九】帝閽。天門なり。
【二一〇】儐。神賓なり。暗藹は衆盛なり。
【二一一】三巒。蓋し封巒なり。觀の名。漢書に甘泉ニ封巒棠梨アリとあり。
【二一二】棠梨。館の名。
【二一三】天閶。閶は門限なり。
【二一四】八荒。八方なり。
【二一五】長平。坂の名、池陽の南に在り。
【二一六】滂沛。雨の降る貌。

【大意】是に於て恭敬して柴を燔き、尊崇祈求して以て祭れば、招搖泰壹旌旗を擧げて導き、燎燔樵蒸の光披離して四方に施き、其光遙に四方極遠の處を照す。乃ち秬鬯を灌ぎて神を招くや、玄瓚は觮觴として秬鬯は湛湛たり。其香氣四方に分散し、神物を感動せしむ。乃ち神巫を選んで天門に呼び、以て百神を招かしむれば、百神相率ゐて清壇に降り、祥瑞穰穰として積んで山を成す。祭事ここに終り、功績既に成るや、天子乃ち車を回らして歸り、三巒觀を度り棠梨館に憩ふ。天地の門始めて開通して德澤を出し、八荒萬國皆諧和せざるはなし。天子長平坂に登り鼓を擊てば、其

聲大にして雷の如く、扈從の勇士皆嚴整なり。かくて恩澤の多きこと雲行き雨施すが如く、君臣皆聖德あり、故に華麗永く萬世に至る。

(二七)亂に曰く、(二八)崇崇たる(二九)圜丘隆く天に隱り、登降(三〇)峛崺して單いにして(三一)堽垣たり。(三二)增宮參差として駢んで(三三)嵯峨たり。(三四)岭嶒嶙峋洞かにして厓なく、上天の縡杳にして(三五)旭卉たり。(三六)聖皇穆穆として信に厥れ對ひ、(三七)郊禋に徠り祇んで神の依る所なり。徘徊(三八)招搖して(三九)靈棲遲し、輝光眩燿して厥福を降し、子子孫孫長に極なし。

【大意】亂に曰く、圜丘高く天に憑り、升降上下すれば、廣大にして圓し、宮宇駢列して高く聳え、高深にして其涯を知らず。上天の事は高遠にして知るべからざるも、天子穆穆として其德よく天に配す。乃ち來りて郊禋を行へば、天神の依附する所となり、神靈徘徊して此に遊息し、福を降して子子孫孫長に絶ゆることなからしむ

【三七】亂。理なり、篇末に於て一賦の旨意を發理する詞也。
【三八】崇崇。高き貌。
【三九】圜丘。天を祭る壇。
【三〇】峛崺。斜に行くこと。
【三一】堽垣。圓き貌。
【三二】增宮。層宮なり。
【三三】嵯峨。高き貌。
【三四】岭嶒嶙峋。深くして涯なき貌。
【三五】旭卉。幽昧の貌、知り難きなり。
【三六】聖皇。天子なり。
【三七】郊禋。天の祭なり。
【三八】招搖。逍遙に同じ、徘徊に同じ。
【三九】靈。神靈なり。棲遲は遊息すること。

耕藉

(二)藉田の賦

(三)潘安仁

伊れ晉の四年正月(三)丁未、(四)皇帝親ら(五)羣后を率ゐて(六)千畝の甸に藉す。禮なり。是に於て乃ち(七)甸帥をして畿を淸め、(八)野廬をして路を掃はしめ、(九)封人をして宮を壝き(一〇)掌舍をして桓を設けしむ。靑壇蔚として其れ嶽のごとく立ち、翠幕(一一)黝として以て雲のごとく布き、崇基の(一二)靈址を結び(一三)四塗の(一四)廣阼を啓き、沃野(一五)墳腴にして(一六)膏壤(一七)平砥し、淸洛濁渠流を引

【一】藉田。天子親ら田を耕し、以て祭祀に供する儀式。晉書に云く泰始四年正月丁亥、世祖初メテ千畝に藉ス、司空掾潘岳藉田頌ヲ作ルと。
【二】潘安仁。潘岳、字は安仁、滎陽中牟の人。
【三】丁未。晉書に丁亥ニ藉田シ戊子ニ大赦スとあり。丁未となすは誤なり。
【四】皇帝。晉の武帝なり。
【五】羣后。羣卿といふが如し。
【六】千畝。天子藉田の定數なり。
【七】甸帥。周禮に甸帥ハ其屬ヲ帥キテ王藉ヲ耕耨スルコトヲ掌ルとあり。師は長なり。今師を改めて帥となせるは晉の景帝の諱を避けしなり。畿は王畿なり。
【八】野廬。周禮に野廬氏ハ國ノ道路ヲ達スルコトヲ掌ルとあり。
【九】封人。周禮に王の社壝ヲ設ケ、畿封ヲナシテ之ヲ樹ツルコトヲ掌ルとあり。
【一〇】掌舍。王の會同の舍を掌る官。桓。かき。やらい。
【一一】黝。黑き貌。
【一二】靈址。壇の基なり。
【一三】四塗。四方の途。
【一四】廣阼。廣き階段。
【一五】墳腴。土地肥えたる也。
【一六】膏壤。肥沃なる土地。
【一七】平砥。平にして砥の如きなり。

き水を激ぎ、(一八)遐阡繩のごとく直く、邇陌矢の如し。(一九)繆轄縹軛に服し(二〇)紺轅黛耜を綴り、(二一)儲駕を麈左に儼にして、(二二)萬乘の躬ら履むを俟つ。(二三)百僚先づ置き、位職を以て分ち、上より下に下るまで、具に惟れ(二四)命臣なり。春服の(二五)萋萋たるを襲け、(二六)游車の轔轔たるに接ぎ、微風(二七)輕幰に生じ纖埃朱輪に起り、(二八)森として璋を奉げて以て(二九)階列し、(三〇)皇軒を望んで肅み震れ、(三一)湛露の朝陽に晞き、衆星の(三二)北辰に拱ふが若し。

【大意】晉の武帝泰始四年正月丁亥、天子躬ら羣公を率ゐて藉田の禮を行ふ。蓋し古禮に倣ふ也。先づ甸帥をして王畿を清め、野廬をして路を掃ひ、封人掌舍をして宮舍を築かしめ、青壇高く聳え翠幕廣く張り、基礎を高くし階段を廣くす。沃野平かにして砥の如く、河洛の水を引いて田に灌ぎ、畔道直くして繩と矢との如し。青牛青色の軛を著け、紺色の轅に青耜を附け、駕牛を麈左に儲けて、天子の親ら履み耕す

【八】遐阡。遐は遠なり、南北の道を阡といひ、東西を陌といふ。
【九】繆轄。青き牛。縹軛は青色のクビキ。
【一〇】紺轅。深青色の轅。黛耜は青色のスキ。
【一一】儲駕。豫め用意せる駕牛。麈はアキチ。
【一二】萬乘。天子をいふ。
【一三】百僚。百官なり。
【一四】命臣。天子より爵命を加へられし臣。
【一五】萋萋。盛なる貌。
【一六】游車。天子の從車。轔轔は車の聲。
【一七】輕幰。幰は車の幌。
【一八】森。衆盛の貌。
【一九】階列。爵位の順に列ぶ。
【二〇】皇軒。天子の車。
【二一】湛露。しげき露。
【二二】北辰。北極星なり。論語に政ヲナスニ德ヲ以テスルハ、譬ヘバ北辰ノ其所ニ居テ衆星ノ之ニ共フガ如シとあり。

を俟つ。先づ百官を置き各〻職掌を分ち、上下悉く命臣なり。皆春服を著け車駕に隨從す。その聲轔轔たり。微風輕幌を卷き、輕塵朱輪に起り、羣臣皆珪璧を捧げて立ち、天子の車を望んで肅然たり。其狀恰も湛露の朝陽に晞き、衆星の北極星に向ふが如し。

是に於て前驅魚のごとく麗り、(二三)屬車鱗のごとく萃り、(二四)闔闔洞に啓きて(二五)參塗に駟を方べ、(二六)常伯陪乘し(二七)太僕轡を秉り、后妃種稑の種を獻じ、(二八)司農播殖の器を撰へ、(二九)挈壺升降の節を掌り、(三〇)宮正門閭の(三一)蹕を設く。天子乃ち玉輦に御し(三二)華蓋に蔭はれ、(三三)衝牙錚鎗として絹紈(三四)綷縩たり。(三五)金根照耀して以て炯晃し、(三六)龍驥騰驤して沛艾し、(三七)朱玄を(三八)离坎に表し、(三九)青縞を(三〇)震兌に飛ばし、(三一)中黃曄として以て暉を發し、(三二)方綵紛として其れ繁く會ひ、(三三)

【二三】屬車。隨從の車。
【二四】闔闔。洛陽宮の門。
【二五】參塗。三筋の道。
【二六】常伯。官名。
【二七】太僕。官名。
【二八】司農。官名。
【二九】挈壺。官名。刻漏を掌る。
【三〇】宮正。官名。
【三一】蹕。行者を止め道を清むること。
【三二】華蓋。車上の蓋なり。
【三三】衝牙。佩玉なり。錚鎗は玉の聲。
【三四】綷縩。衣の聲なり。
【三五】金根。瑞車なり。
【三六】龍驥。馬の大なるもの。
騰驤、沛艾は馬の行く貌。
【三七】朱玄。赤黑なり。
【三八】离坎。李善本离を離に作る、離は南方の卦、坎は北方の卦なり。五行說によれば南は赤にして北は黑なり。
【三九】青縞。青と白。
【四〇】震兌。震は東方の卦、兌は西方の卦、東は青にして西は白なり。
【四一】中黃。中は中央、五行說によれば中央は黃なり。
【四二】方綵。四方の色。
【四三】五輅。五種の車。周禮に玉ノ五輅とあり。玉輅、金輅、象輅、革輅、木輅、是れなり。

五輅鑾を鳴らし、(五四)九旗旆を揚げ、(五五)瓊鈒入り蘂り(五六)雲罕晻藹たり。簫管(五七)嘲晰として以て(五八)秋嘈たり。鼓鞞(五九)砿隱として以て、(六〇)砰磕たり。(六一)筍虡嶷として以て(六二)軒翥し、洪鐘區外に越え、(六三)震震塡塡として、塵のごとく騖りて天に連り、以て藉田に幸す。(六四)蟬晃頰として以て(六五)灼灼たり、(六六)碧色肅として其れ(六七)芊芊たり。(六八)夜光の荆璞を剖けるに似、茂松の山巓に依れるが若し。

【大意】是に於て法駕始めて臨幸せんとす。前驅の行列魚鱗の聚るが如く、宮門洞に開けて、三條の大道に駟馬を騈べ、常伯陪乘し、太僕轡を執り、后妃穜稑の種を獻じ、司農耒耜を具へ、挈壺升降の儀節を掌り、宮正行路の警蹕を掌る。天子乃ち鳳輦に乘り華蓋に蔭はれ、佩玉鏘鏘として鳴り、素衣綷縩として聲あり。玉車耀きて駿馬躍り、車服旌旗皆四方の色を備へて前引し、瓊鈒入り亂れ、幡旆衆盛なり。簫鼓の聲殷殷として雷の如く、大鐘の聲踰越

【五四】九旗。日月を畫けるを常といひ、蛟龍を畫けるを旂といひ、通帛を旃といひ、雜帛を物といひ、熊虎を旗といひ、鳥隼を旟といひ。龜蛇を旐といひ、全羽を旞といひ、析羽を旌といふ。

【五五】瓊鈒。玉を以て飾りしホコ。

【五六】雲罕。幡なり。晻藹は盛なる貌。

【五七】嘲晰。笛の聲なり。

【五八】啾嘈。かまびすしきこと。

【五九】砿隱。鼓の聲。

【六〇】砰磕。鼓の聲。

【六一】筍虡。鐘を懸くる架の猛獸を以て飾とせるもの。

【六二】軒翥。猛獸の高く飛びあがること。

【六三】震震。車馬の聲。塡塡は羣行の聲。

【六四】蟬晃。侍中の冠なり。頰は輝くこと。

【六五】灼灼。かがやく貌。

【六六】碧色。蟬の形の碧玉の色。

【六七】芊芊。かがやくこと。

して區外に在り。ここに藉田の所に幸す。從臣の衣冠芊芊として輝き、夜光の璧の楚璞より出で、茂松の山巓に依るが如く、光彩陸離たり。是に於て、我が皇乃ち靈壇に降りて(六九)御耦を撫る。(七〇)坻場屨を染め(七一)洪縻手に在り。(七二)三たび推して舍め、庶人故を終へ、貴賤班を以て、或は五たびし或は九たびす。斯時に于て、居、都鄙となく、民、(七三)華裔なく、長幼(七四)雜遝して以て交集し、士女(七五)頒斌して咸く戾り、(七六)褐を被り裾を振ひ、髣を垂れ髻を總ね、踵を躡み肩を側て、裳を掎き袂を連ね、黃塵之が爲に四に合ひ、陽光之が爲に潛翳し、容を動かし音を發して觀る者、康衢に(七七)抃舞し、聖世を(七八)謳吟せざるはなく、情(七九)昏作を欣樂して、力を(八〇)樹藝に盡さんことを慮り、(八一)推督することなけれども常に勤め、之を課することなけれども自ら勵む。躬ら勞に先だちて悅を以て使ふ、豈刑を嚴にして制を猛にせんや。

【大意】天子乃ち靈壇に降りて耦を執り、土壤を履み牛轡を手にして三たび推し、公卿其位次に隨つて、或は五推し或は九推し、庶人其後を承

【六八】夜光。玉の名。荆璞は楚の璞なり。

【六九】御耦。天子の用ふるスキ。

【七〇】坻場。士壤なり。

【七一】洪縻。牛の轡。

【七二】三たび云云。藉田の禮を行ふ時、天子耦を執りて三推し、公は五推し卿諸侯は九推し、庶人は盡く耕すなり。

【七三】華裔。裔は邊陬の地。華夷といふが如し。

【七四】雜遝。衆多の貌。

【七五】頒斌。相雜る貌。

【七六】褐。粗衣なり。

【七七】抃舞。手を打ちて喜び舞ふこと。

【七八】謳吟。聖德を頌歌すること。

【七九】昏作。勤めて働くこと。

【八〇】樹藝。耕作といふが如し。

【八一】推督。督責なり。

けて、盡く千畝を耕す。斯時に於て都鄙華夷を論せず、老幼士女悉く其所に至りて盛儀を觀、黄塵四に起りて天日を蔽ふに至る。觀る者皆容儀を動かし音聲を發し、衢路に抃舞して聖德を謳歌せざるはなく、人の責罰なき勤勉を樂み、力を農耕に盡さんことを欲せざるはなく、自ら勤勞し、程課をなすことなきも自ら勉勵す。是れ天子親ら勞に先んじて悅樂を以て人を使へばなり。豈嚴刑酷罰を以て、民を制威するが爲ならんや。

邑老田父あり、或は進んで稱して曰く、蓋し(八二)損益は時に隨ふ。理常に然るあり。高きは下きを以て基となし、民は食を以て天となす。(八三)其末を正うせんとする者は(八四)其本を端うし、其後を善くせんとする者は其先を愼む。夫れ(八五)九土の宜任せず、(八六)四人の務一ならず、野に(八七)菜蔬の色あり、朝に(八八)代耕の秩なく、(八九)儲稽の以て災を虞るなく、徒に歲を望んで以て自ら畢ふ。(九〇)三季の衰皆(九一)此物なり。今聖上(九二)昧旦に丕顯にして、夕まで(九三)惕若として慄れ、匱しきを豐なるに圖り、儉を逸に防ぎ、欽む

【八二】損益云云。耕せば則ち益あり、耕さざれば則ち損あり、故に時に隨ふといふ。
【八三】其末。末とは商賈をいふ。
【八四】其本。本とは農耕をいふ。
【八五】九土。九州の土地。宜とは其土地に適する物なり。
【八六】四人。四民なり、士農工商をいふ。一は專一なり。
【八七】菜蔬の色。野菜の如き青白き顏色。
【八八】代耕。禮記に夫レ祿ハ以テ其耕ニ代フルニ足ルとあり。秩は祿なり。
【八九】儲稽。穀物の貯。
【九〇】三季。三代の末、即ち夏桀、殷紂。周の幽王なり。
【九一】此物。前述の事。
【九二】昧旦。早朝なり。丕顯は大に德を明にすること。
【九三】惕若。懼るる貌。

かな欽むかな、惟れ穀を之れ恤へ、(九四)三時の弘務を展べ、倉廩を盈溢に致す。固に堯湯の用心にして、存救の要術なり。

【大意】邑老進んで頌して曰く、蓋し損益は各其時に隨ふ。耕せば益あり耕さざれば損あり。是れ理の常にして怪むに足らず。夫れ貴は賤を以て基となし、民は食を以て先となす。故に其末を正うせんとする者は、先づ其本を端うせざるべからず。其後を善くせんとする者は、其先を愼まざるべからず。九州の土宜も之を貢せず、四民の務專一ならず、民に菜色あり、吏に俸祿なく、倉廩の以て凶災に備ふるなく、徒に歲を望んで空しく終へしは、三季の衰へし所以にして、農耕を修めざりし過なり。今天子旦に其德を明にし、以て夕まで愼み懼れ、乏しきを圖るに豐時に於てし、儉約を安逸に防ぎ、常に農穀を以て憂となし、農務を勤めて以て倉廩を盈さんことを謀る。是れ實に帝堯成湯の心術にして、救民の要道なり。

若し乃ち(九五)廟祧に事あり、(九六)祝宗日を諏れば、(九七)簠簋普に淖ぐも、則ち此れより實ち、(九八)罔を蕭茅に縮らすも、又是に於てか出で、黍稷馨香にして、(一〇〇)旨酒嘉栗なり。宜なり其の民和ぎ年登りて、

【九四】三時。春夏秋なり。これ農耕の季節なり。
【九五】廟祧。宗廟なり。事とは祭なり。
【九六】祝宗。祝は神官。宗は宗人。
【九七】簠簋。黍稷を盛る祭器。
【九八】罔。神を祭る時地に灌ぐ酒。
【九九】蕭茅。香草の名、之を用ひて酒をこすなり。
【一〇〇】旨酒。美酒なり。嘉栗は能く愼むこと。

神之に吉を降すや。古人言へるあり曰く、聖人の德は以て孝に加ふるなきか。夫れ孝は天地の性、人の由りて靈なる所なりと。昔は明王孝を以て天下を理む。其の之に繼ぐ或る者、鮮いかな希なるかな。我が皇晉に逮んで、實に斯道を光にし、(一〇一)儀刑萬國に孚あり、愛敬(一〇二)祖考に盡く。故に(一〇三)稼を躬して以て(一〇四)粢盛に供するは、孝を致す所以なり。(一〇五)穡を勸め以て百姓を足らしむるは、本を固くする所以なり。本を能くして孝あり。盛德大業至れるかな。此れ(一〇六)一役にして、(一〇七)二美具る。亦遠からずや、亦重からずやと。敢て頌を作りて曰く、

【大意】 邑老尙ほ語を續けて曰く、宗廟の祭に、祝宗吉日を選び、簠簋豐溢して、德能く大に和するも、亦藉田に因りて充實し、蕭茅を用ひて酒を縮らすも、亦藉田の中より出づ。黍稷馨しくして美酒を灌ぐこと謹敬なり。其の民和ぎ年豐にして、神之に吉祥を降すも亦宜なり。曾子孔子に問ひて曰く、聖人の德以て孝に勝るものなきかと。孔子答へて曰く、天地の性、人を貴しとなす。人の行は孝より大なるはなし。夫れ聖人の德、又何を以て孝に加へんやと。昔は聖明の君、孝を以て天下を理めたるも、其後よく之に繼ぐ者少し。今我が晉皇に及び、實に此の孝道を光にし、

【一〇一】儀刑。儀表法則なり。
【一〇二】祖考。祖先なり。
【一〇三】稼。穀を種うること。
【一〇四】粢盛。黍稷を粢といふ、盛は器に入るるなり、神に供ふる物。
【一〇五】穡。穀を收斂すること。
【一〇六】一役。一事といふが如し、藉田を指す。
【一〇七】二美。本を固くすると、孝を致すと。

儀範を垂れて萬國に信孚せられ、愛敬の道、祖先に事ふるに極まる。故に躬ら耕して粢盛に供するは、孝を祖先に致す所以にして、稼穡を勸めて百姓を富ますは、本を固くする所以なり。本を固くして孝を致すは、實に盛德大業の至なり。藉田の一事よく此の二美を備ふ。亦遠重の至ならずやと。予因つて頌德の辭を作ること次の如し。

思樂しいかな旬畿や、薄か其茅を採る。(一〇八)大君戾りて、言に其農に藉す。其農三推し、萬方以て祗む。我が公田を耨り、實に我が私に及ぶ。我が簠斯れ盛、我が簋斯れ(一〇九)齊、我が倉陵の如く、我が庾坻の如し。茲を念ふこと茲に在り。永く言に孝あり。民力普く存し(一一〇)祝史辭を正す。神祇の歆る攸、(一一一)逸豫期なし。一人(一一二)慶あれば(一一三)兆民之に賴る。

【大意】 我近畿の民たるを樂しみ、ここに其茅を採る。ここに天子來りて藉田の禮を行ふ。天子先づ耦を執りて三推すれば、萬方の民皆謹んで之に從ふ。先づ我が千畝の公田を耨り、遂に其私田に及ぶ。之によりて祭祀の簠簋に盛るべき粢盛を得、我が倉廩丘陵の如し。此の藉田を念ふは、實に此の孝敬に在り。永く此に孝道あり。民力普く存し、祝史辭を正して神に告ぐれば、神之を享け逸豫の福を降すこと限なし。天子善德あれば、天下の民皆其德澤を蒙るなり。

【一〇八】大君。天子なり。
【一〇九】齊。粢なり。晉シ。
【一一〇】祝史。神官なり。
【一一一】逸豫。安樂なり。
【一一二】慶。善なり。
【一一三】兆民。天下中の人民

(一)畋獵上

子虛の賦

(三)司馬長卿

楚、(三)子虛をして齊に使せしむ。(四)王悉く車騎を發し(五)使者と出でて畋せしむ。畋罷んで子虛過りて(六)烏有先生に妊る。(七)亡是公存せり。坐定まる。烏有先生問うて曰く、今日の畋樂きかと。子虛曰く樂しと。獲多きかと。曰く少しと。然らば則ち何ぞ樂しきと。對へて曰く、僕、齊王の僕に夸るに車騎の衆を以てせんと欲し、而して僕對ふるに雲夢の事を以てせしを樂むなりと。曰く得て聞くべきかと。子虛曰く、可なり。(八)王車千乘を駕し徒萬騎を選び、海濱に畋す。列卒澤に滿ち(九)罘網山に彌り、兎を掩ひ鹿を(一〇)轔り、麋を射麟を脚り、(一一)鹽浦に騖せ、鮮を割きて輪を染め、射中りて獲多く、矜りて自ら功とす。顧みて僕に謂つて曰く、楚も亦平原廣澤遊獵の地の、

【一】畋獵。狩獵なり、獸を取りて祭祀庖厨の用に供するなり。
【二】司馬長卿。司馬相如、字は長卿、蜀郡の人なり、漢の景帝の時、梁に遊んで子虛の賦を著す。
【三】子虛。假に設けたる人の名。
【四】王。齊王なり。
【五】使者。子虛を指す。
【六】烏有先生。假に設けたる人の名。烏有とは、いづくんぞ有らんやとの意なり。
【七】亡是公。假に設けたる人の名、亡是公とは有ることなき公の意なり。
【八】王。齊王なり。
【九】罘網。罘は、獸を捕ふる網。
【一〇】轔。轢なり。
【一一】鹽浦。海濱の鹽を出す處。

饒にして樂しきこと此の若きものあるか。楚王の獵(一二)寡人に孰與ぞやと。僕車を下り對へて曰く、臣は楚國の鄙人なり、幸にして宿衞を得ること十有餘年、時に從つて出遊し、後園に遊び有無を覽たり。然も猶ほ未だ徧く覩る能はざるなり。又焉んぞ以て其(一三)外澤を言ふに足らんやと。齊王曰く、然りと雖も略子の聞見せる所を以て之を言へと。僕對へて曰く、(一四)唯唯、臣聞く楚に七澤ありと。嘗て其一を見たるも、未だ其餘を覩ざるなり。臣の見たる所は蓋し特其小小なるもののみ。名づけて(一五)雲夢といふ。

【大意】楚王子虛をして齊國に使せしめたる時、齊王は悉く車騎を出して子虛と畋せしむ。蓋し其盛を誇示せんが爲なり。畋終りて後、子虛、烏有先生を訪ひて頻に大言す。時に亡是公亦坐に在り。坐定まりし時、烏有先生子虛に問ふ。今日齊王の畋樂しかりしやと。子虛答ふらく、樂しかりきと。先生因つて問ふ、獲多かりしやと。子虛答ふらく、少しと。先生曰く、獲少くば樂しといふべからず、然るに今樂しといふは何故ぞと。子虛答へて曰く、吾が樂む所は獲の多きに在らず。齊王余に誇示するに、車騎の多きを以てせんと欲す。余却つて我が楚の雲夢の盛大を說き、以て齊王の膽を破りしを以て樂しとなすなりと。先生曰く請ふ吾が爲に雲夢の事を語れと。子虛曰く

【一二】寡人。王侯の謙稱。齊王自ら謂ふなり。
【一三】外澤。遠方にある狩場。
【一四】唯唯。はいはいと諾ふ詞。
【一五】雲夢。楚の大澤の名。

可なりと。因つて先づ齊王の畋を說きて曰く、齊王今日車千乘、卒萬騎を選びて海濱に畋す。士卒山澤に滿ち網罘山野を覆ひ、網を以て兎を捕へ、車にて鹿を轢き、麋を射、脚を持ちて麟を捕へ、進んで鹽浦に馳せ鮮肉を割きて車輪を染め、鹽にて之を食ふ。かくて獸を獲ること多く自ら其功に矜り、顧みて余に謂つて曰く、楚にもかかる大澤ありや、楚王の畋と吾が齊國の畋と、孰か勝れると。余乃ち答へて曰く、臣はもと楚の鄙人なるも、幸に宿衞の士となるを得ること十餘年の久しきに及び、時時楚王に從つて後園に遊び、其有無を見たり。然も猶ほ未だ見盡す能はず。焉んぞ山澤の多きを知るに足らんやと。齊王曰く、然らば唯汝の聞見せる所を述べよと。余答へて曰く、楚に七澤あり、嘗て其一を見たり。然も臣の見たる所は其最小なる者のみ。其名を雲夢澤といふ。

雲夢は方九百里、其中に山あり。其山は則ち(一六)盤紆崩鬱、隆崇崒嵂、(一七)岑崟參差として、日月も蔽れ虧け、(一八)交錯糾紛して上青雲を干し、(一九)罷池陂陁として下江河に屬く。其土は則ち(二〇)丹青赭堊、(二一)雌黃白坿、(二二)錫碧金銀あり。衆色炫耀し、照爛すること龍鱗のごとし。

【一六】盤紆。わだかまり曲ること。崩鬱は山の高き貌。隆崇は聳え立つこと。崒嵂は山の高き貌。

【一七】岑崟。けはしき峰。參差は高低の一樣ならざる貌。

【一八】交錯糾紛。入り亂るること。

【一九】罷池。倦頽るる貌。陂陁は寬廣の貌。

【二〇】丹青。赤土と青土。赭は赤土。堊は白土。

【二一】雌黃、白坿。石英なり。

【二二】錫碧。錫は白臘、碧は青玉。

其石は則ち赤玉、(二三)玫瑰、(二四)琳瑤昆吾、(二五)瑊玏玄厲、(二六)礫石碔砆あり。其東には則ち(二七)蕙圃蘅蘭、茝若射干、芎藭菖蒲、茳蘺麋蕪、諸柘巴苴あり。其南には則ち平原廣澤ありて、登降陁靡、(二九)案衍壇曼して、緣らすに大江を以てし、限るに(二〇)巫山を以てす。其高燥には則ち(二一)蔵薪苟荔、薛莎青薠を生じ、其(二二)埤濕には則ち(二三)藏莨蒹葭、東蘠彫胡、蓮藕茈薦、菴蘭軒于を生じ、衆物之に居り、勝げて圖くべからず。其西には則ち湧泉清池あり、激水推し移る。外には芙蓉菱華を發し、內には鉅石白沙を隱す。其中には則ち(二四)神龜蛟鼉、瑇瑁鼈黿あり。其北には則ち陰林巨樹、(二五)楩柟豫樟、桂椒木蘭、檗離朱楊、櫨梨樓栗、橘柚の芬芳なるあり。其上には則ち(二六)鵷雛孔鸞、(二七)騰遠射干あり。其下には則ち白虎玄豹、(二八)蠼蜒貙犴あり。

【大意】雲夢澤の廣さは方九百里にして、其中に山あり。詰屈高峻にして日月を擁蔽し、山勢交錯

【二三】玫瑰。火齊珠なり。

【二四】琳瑤。美石なり。昆吾は山の名。美金を出す。

【二五】瑊玏。石の玉に次ぐもの。玄厲は黑石の礪とすべきもの。

【二六】礫石、碔砆、皆石の玉に次ぐもの。

【二七】蕙圃。香草の圃なり。以下皆香草の名。

【二八】陁靡。斜に長き貌。

【二九】案衍。くぼき貌。壇曼は平にして寬き貌。

【三〇】巫山。山の名。

【三一】蔵薪。以下皆草の名。

【三二】埤濕。低くして濕へる地。

【三三】藏莨。以下皆草の名。

【三四】神龜。以下皆龜の類。

【三五】楩柟。以下皆木の名。

【三六】鵷雛、孔鸞。皆鳥の名。

【三七】騰遠、射干。皆猿の類なり。

【三八】蠼蜒。大獸の名。貙犴は皆獸の名。

して青雲を犯し、崩れて坂をなし、其足遠く曳きて江河に連り、其土は赤きあり青きあり、白きあり黒きあり。衆色相照し爛然として龍鱗の如し。美石亦少からず。其東には蕙衛等の香草芬芳を吐き、其南には平原廣澤ありて上下寛廣にして、繞らすに大江を以てし、巫山を以て限となす。高原には蔵薪等の草を生じ、卑濕には藏萇蒹葭等の水草を生じ、一一其象を圖畫すべからず。西には泉あり池あり。水波激揚し、外には芙蓉、菱花あり。内には大石白沙あり、互に相映發し、其中には龜鼈の類あり。其北には種種の樹木常に香氣を放ち、林木の上には鵷雛等の鳥、騰遠等の獸あり。其下には白虎黒豹等の大獸あり。

是に於てか乃ち(三九)専諸の倫をして此獸を(四〇)手格せしむ。楚王乃ち(四一)馴駁の駟に駕し、彫玉の輿に乗り、(四二)魚鬚の橈旃を靡かし(四三)明月の珠旗を曳き、(四四)干將の雄戟を建て(四五)烏號の彫弓を左にし、(四六)夏服の勁箭を右にし、(四七)陽子驂乗し、(四八)孅阿御となり、(四九)節を案じて未だ舒びざるに、即ち狡獸を陵ぎ、(五〇)蛩蛩を蹴、

【三九】専諸。吳の勇士の名。
【四〇】手格。から手にて擊つこと。
【四一】馴駁。なれたる駁、駁は獸の名。此を以て馬に代ふるなり。
【四二】魚鬚。魚の鬚にて作れる旗竿。
【四三】明月云云。明月の珠を綴りて飾れる旗。
【四四】干將。韓の刀工の名。
【四五】烏號。黄帝の弓の名。
【四六】夏服。夏后氏の箙。
【四七】陽子。伯樂の字なり、伯樂は古の馬を相するに善き人。驂乘はソヒノリすること。
【四八】孅阿。古の善く馬を御する人の名。
【四九】節を案ず。馬足を節すること。徐行すること。

(五一)距虛を轔り、(五二)野馬を軼ぎ、(五三)騊駼を轘り、(五四)遺風に乗り、(五五)游騏を射、(五六)倏眒倩浰として雷のごとく動き猋のごとく至り、星のごとく流れ霆のごとく擊ち、弓は虛しく發せず、中れば必ず眦を決し、胷を洞き掖を達し、(五七)心繫を絶ち、獲獸を雨すが若く、草を揜ひ地を蔽ふ。是に於て楚王乃ち(五八)節を弭めて徘徊し、(五九)翺翔容與し、陰林を覽、壯士の暴怒すると猛獸の恐懼するとを觀て、劾むを徼り訓るを受け、殫く衆物の變態を覩る。

【大意】楚王乃ち勇士をして此等の獸を格殺せしめんとし、駟馬に駕し玉輿に乗り旗を靡かし、戟を執り弓を張り、出でて此に狩す。陽子陪乘し孅阿馬を御して行く。徐行して馬足未だ馳せざるに、早くも狡捷の獸を凌轢し、奔逐の神速なること風雷の流擊するが如く、胸を貫き腋を透し、心系を絶つ。かくて獸を殺すこと算なく、天の獸を降らして地を蔽へるが如し。是に於て楚王志を安んじ從容自得し、幽深の林を見、壯士の奮怒と猛獸の恐懼とを見、倦める者を迎へ遮り、力屈せる者を受け收め、衆獸驚變の姿を見て乃ち止む。

是に於て(六〇)鄭女曼姬(六一)阿緆を被り、(六二)紵縞

【五〇】蛩蛩。青獸の名。
【五一】距虛。獸の名。
【五二】野馬。獸の名。
【五三】騊駼。獸の名。
【五四】遺風。千里の馬の名。
【五五】游騏。天上の獸。
【五六】倏眒倩浰。奔り逐ふ貌。
【五七】心繫。心臟のつな。
【五八】節を弭め。志を安んすること。
【五九】翺翔容與。ゆつたりとして徘徊すること。
【六〇】鄭女。夏姬なり、古の美女の名。曼姬は楚の武王の夫人鄧曼なり。
【六一】阿緆。細布なり。

を揄き、(六三)纖維を雜へ、(六四)霧縠を垂れ、(六五)襞積褰縐、(六六)紆徐委曲、(六七)鬱橈たること谿谷のごとし。(六八)紛紛裴裴として袘を揚ぐること(六九)戌削たり。(七〇)纖を蜚ばし、(七一)髯を垂れ、輿を扶けて(七二)猗靡たり。(七三)翕呷萃蔡として下は蘭蕙を靡で、上は(七四)羽蓋を拂ふ。(七五)翡翠の蔿蕤たるを錯へ、(七六)繆繞たる(七七)玉綏あり。(七八)眇眇忽忽として神仙の髣髴たるが若し。是に於て乃ち相與に蕙圃に獠す。(七九)嫛姍勃窣として(八〇)金隄に上り、翡翠を揜へ(八一)鷫鸃を射、(八二)微矰出で(八三)孅繳施し、白鵠を(八四)弋し(八五)鴛鴦を連ね、(八六)雙鶴下り玄鶴(八七)加へらる。怠みて後、發して清池に游び、(八八)文鷁を浮べ(八九)旌枻を揚げ、(九〇)翠帷を張り羽蓋を建て、瑇瑁を網し紫貝を鉤し、金

【六二】紵縞。細繒なり。ウスギヌ。
【六三】纖羅。薄絹なり。
【六四】霧縠。穀の細くして霧の垂るるが如きなり、以て裳となす。
【六五】襞積褰縐。縫ひ綴れる貌。
【六六】紆徐委曲。裙の下垂する貌。
【六七】鬱橈。文理の茀鬱たること。
【六八】紛紛裴裴。衣の長き貌。
【六九】戌削。裁制の貌。
【七〇】纖。上衣の飾。
【七一】髯。燕尾なり、婦人の上衣の飾。
【七二】猗靡。相隨ふ貌。
【七三】翕呷。衣の張ること。萃蔡は衣の聲なり。
【七四】羽蓋。車の蓋なり。
【七五】翡翠。鳥の名。かはせみ。羽毛極めて美し。蔿蕤は羽毛の貌。
【七六】繆繞。綏の長き貌。
【七七】玉綏。綏とは車に登る時持つ所のトリテなり。
【七八】眇眇忽忽。かすかなる貌。
【七九】嫛姍勃窣。美人の隄に上る貌。
【八〇】金隄。堤の名。
【八一】鷫鸃。鳥の名。
【八二】微矰。細き矢。
【八三】孅繳。細きイグルミ。
【八四】弋。イグルミにて捕ふること。
【八五】鴛鴦。鳥の名。
【八六】雙鶴。鳥の名。
【八七】加。制すること。
【八八】文鷁。鷁首の船。
【八九】旌枻。旌はハタ。枻は楫。
【九〇】翠帷。翡翠の羽を以て飾りしトバリ。

鼓を樅ち(九一)鳴籟を吹き、(九二)榜人歌ひて聲(九三)流喝し、(九四)水蟲駭き(九五)波鴻沸き、涌泉起り(九六)奔揚會し、(九七)礧石相擊ち、(九八)硠硠磕磕として、雷霆の聲、數百里の外に聞ゆるが若し。將に(九九)獠者を息はしめんとし、(一〇〇)靈鼓を擊ち烽燧を起せば、車は行を案じ騎は隊に就き、(一〇一)纚乎として淫淫たり。(一〇二)般乎として裔裔たり。是に於て楚王乃ち(一〇三)雲陽の臺に登り、(一〇四)怕乎として爲すことなく、(一〇五)憺乎として自ら持し、(一〇六)勺藥の和具りて後之を(一〇七)御す。(一〇八)大王の終日馳騁して曾て輿を下らず、(一〇九)膊割輪焠して自ら以て娛となすが若くならず。臣竊に之を觀るに、齊は殆んど如かずと。是に於て齊王以て僕に應ふるなし。

【大意】是に於て美女綺縠の衣裳を被り、袖を振ひ袂を揚げて楚王の車輿を扶持し、翠羽を以て首飾となし、玉を以て綏を飾り、窈窕として神仙の如し。相與に蕙圃に獵し蹣跚として金隄に上り、矢を發し繳を施し以て水禽を獲、倦みて後清池に遊び、船を浮べ旌を靡かして瑇瑁紫貝を取り、金鼓を擊ち簫笛を吹き、榜人之に和して歌ひ、其聲遠く響き、魚

【九一】鳴籟。鮹笛なり。
【九二】榜人。船手なり。
【九三】流喝。響き渡ること。
【九四】水蟲。魚鼈の類をいふ。
【九五】波鴻。水鳥なり。
【九六】奔物。急波をいふ。
【九七】礧石。大石なり。
【九八】硠硠磕磕。石の相擊つ聲。
【九九】獠者。獵卒なり。
【一〇〇】靈鼓。六面の鼓なり。
【一〇一】纚乎。行く貌。淫淫は分列の貌。
【一〇二】般乎。めぐる貌。裔裔は分列の貌。音アイ、叶韻。
【一〇三】雲陽。臺の名。
【一〇四】怕乎。無爲の貌。
【一〇五】憺乎。無爲の貌。
【一〇六】勺藥。調和なり。
【一〇七】御。食ふこと。
【一〇八】大王。齊王を指す。
【一〇九】膊割輪焠。肉を割きて車

鼈驚き水鳥亂れ、湧泉起りて波と相打ち、大石相擊ちて聲遠雷の如し。將に獵者を休息せしめんとし、鼓を擊ち烽火を擧ぐれば、車騎各〻次を以て隊に就き、部伍整齊なり。楚王乃ち雲陽臺に登り、無爲の道を以て自ら持し、五味を和して然る後食ふ。大王の終日馳せ獵して、曾て輿を下らず。肉を割き車を染め、野食して娛樂となすが如くならざるなり。是に因つて之を觀れば、齊の畋は殆んど楚王の畋に如かざるなりと。余の齊王に語りし所此の如し。齊王余が言を聞きて答ふる能はざりきと。

烏有先生曰く、是れ何ぞ言の過てるや。足下千里を遠しとせず、來りて齊國に覘す。王悉く境內の士を發し、車騎の衆を備へ、(二一〇)使者と出でて畋せしむ。乃ち力を戮せ獲を致し、以て(二一一)左右を娛ましめんと欲す。何ぞ名づけて夸るとなさんや。楚地の有無を問へるは、大國の(二一二)風烈、(二一三)先生の餘論を聞かんことを願へばなり。今足下楚王の德の厚きを稱せずして、盛に雲夢を推して以て高奢となし、淫樂を言ひて侈靡を顯す。竊に足下の爲に取らざるなり。必ず言ふ所の若くんば、固に楚國の美にあらず。有りて之を言はば、是れ君の惡を彰すなり。無くして之を言はば、是れ足下の信を害するなり。君の惡を彰して私の義を傷る。二者一も可なるなし。而るに先生之を行ふ。必ず且に齊に輕

【二一〇】使者。子虛を指す。
【二一一】左右。使者の侍者をいふ、使者を尊んで之を斥言せず、其侍者を斥して言ふなり。
【二一二】風烈。風俗事業といふが如し。
【二一三】先生。子虛を指す。

んぜられて、楚に累あらんとす。

【大意】烏有先生曰く、足下の言大に過てり。足下遠く我が齊國に惠貺す。齊王車騎を發して、足下と出でて畋せしむ。是れ多く禽獸を獲て、足下を樂ましめんが爲なり。其盛を誇示せんが爲にあらざるなり。且つ楚地の有無を問へるは、楚國の功業と足下の高論とを聞かんが爲なり。然るに楚王の德を稱せずして、雲夢の事を稱し、淫樂を言ひ奢侈を顯すは大に非なり。足下の言ふ所の如きは、楚國の美事にあらず。此事ありて之を言ひたりとすれば、君主の惡を暴露するなり。此事なくして之を言ひたりとすれば、足下の信を傷るなり。君主の惡を暴露するも己の信義を傷るも共に非なり。今足下之を行ふ。必ず齊國に輕蔑せられ、累を楚國に及ぼさん。

且つ齊は東鉅海に渚し、南に(二一四)琅邪あり。(二一五)成山に觀し、(二一六)之罘に射、渤澥に浮び、(二一七)孟諸に游び、邪に(二一八)肅愼と鄰をなし、右は(二一九)暘谷を以て界となす。秋(二二〇)青丘に田し海外に彷徨す。雲夢の若き者八九を呑むも、其胷中に於て曾て(二二一)蔕芥せず。若し乃ち(二二二)俶儻瑰瑋、(二二三)異方殊類、珍怪鳥獸、萬端にして鱗のごと

【二一四】琅邪。臺の名。
【二一五】成山。山の名。觀は宮闕なり。
【二一六】之罘。山の名。
【二一七】孟諸。大澤の名。
【二一八】肅愼。國の名。
【二一九】暘谷。日の出づる處。東に在り、左を東となす、今右とあるは左の誤なり。
【二二〇】青丘。國の名、海東三百里に在り。
【二二一】蔕芥。さはりて邪魔になること。
【二二二】俶儻。非常なり。瑰瑋は珍怪なり。
【二二三】異方殊類。珍奇なる物。

く崒り、其中に(二四)充牣し、勝げて記すべからず。(二五)禹も名づくる能はず、(二六)卨も計ふる能はず。然れども諸侯の位に在れば、敢て遊戲の樂、苑囿の大を言はず。先生又客とせらる。是を以て王辭して復へざるなり。何ぞ以て應ふるなしとなさんやと。

【大意】且つ我が齊國は、東、海に濱し、南に琅邪臺あり。成山に宮闕あり。以て遊覽すべく、之罘の山は以て狩獵すべく、渤澥に浮び孟諸に遊び、遠く肅愼暘谷に通じ、秋には遠く海外の靑丘に出獵するを得。その境土の大なること、雲夢七八を呑むも猶ほ餘裕あり。其中には非常珍怪の物充滿し、禹も名づくる能はず、卨も算ふる能はざるなり。然れども諸侯の位に在るを以て、敢て遊戲苑囿の盛を言はず。又足下を待つに賓客の禮を以てす。故に我が王辭避して敢て答へざりしのみ。何ぞ答ふる能はずとなすを得んやと。

【二四】充牣。充滿なり。
【二五】禹。堯の司空となり。よく草木を分別す。
【二六】卨。堯の司徒となり。五敎を敷き。數計を善くす。

(一)上林の賦

司馬長卿

(三)亡是公(三)听然として笑つて曰く、楚は則ち失せり。而も齊も亦未だ得たりとなさず。夫れ諸

【一】上林。苑の名、天子の苑なり。
【二】亡是公。子虛の賦七に見よ。

侯をして納貢せしむるは、財幣の爲にあらず。(四)職を述ぶる所以なり。疆を封じ界を畫るは、守禦の爲にあらず。淫を禁ずる所以なり。今齊は列して東藩となす。而も外(五)肅愼に私し、國を捐て限を踰え、海を越えて田す。其の義に於ける固に未だ可ならざるなり。且夫れ(六)二君の論は、君臣の義を明にし諸侯の禮を正うせんことを務めず。徒に游戲の樂、苑囿の大を爭ふを事とし、奢侈を以て相勝ち、荒淫をもて相越えんと欲す。此れ以て名を揚げ譽を發すべからずして、適に以て君を貶し自ら損するに足る。且夫れ齊楚の事、又焉んぞ道ふに足らんや。(七)君未だ夫の巨麗を覩ず。獨り天子の上林を聞かずや。

【大意】亡是公は烏有先生と子虛との問答(子虛の賦參照)を默聽せしが、ややありて笑つて曰く、楚使(子虛)の言大に理を失へり。然も齊(烏有先生)の言も、亦未だ理に叶へりとなすに足らず。夫れ諸侯の貢を天子に納むるは、財幣の爲にあらず。守る所の職を述べんが爲なり。國境を立つるは、外敵を守禦せんが爲にあらず。淫荒を杜絕せんが爲なり。今齊は漢の東藩たり。然も恣に肅愼國と交通し、國境を越えて海外に畋するは、君臣の義を傷る者なり。且つ二君の論は君臣の大義

【三】听然。笑ふ貌。
【四】職を述ぶ。諸侯天子に朝するを述職といふ。尙書大傳に古ハ諸侯ノ天子ニ於ケル、五年ニ一タビ朝見シ其職ヲ述ブとあり。
【五】肅愼。國の名。
【六】二君。子虛と烏有先生を指す。
【七】君。子虛と烏有先生とを指す。

を明にし、諸侯の禮を正うせんことを務めずして、徒に苑囿に遊樂するを夸り、奢侈荒淫を以て相競ふなり。是れ名を揚げ譽を發する所以にあらず。君德を汙損し己の德を害するのみ。且つ齊楚苑囿の盛未だ人に誇るに足らず。思ふに二君は未だ天子上林の巨麗を聞かざるなり。吾今二君の爲に之を語らん。

(八)蒼梧を左にし　(九)西極を右にし。　(一〇)丹水其南を更、　(一一)紫淵其北を徑り、(一二)灞滻を始終し、(一三)涇渭を出入し、(一四)酆鎬潦潏、(一五)紆餘委蛇として、其內に　(一六)經營し、(一七)蕩蕩乎として　(一八)八川分流し、相背いて態を異にし、東西南北に　(一九)馳騖往來し、(二〇)椒丘の闕を出で、(二一)洲淤の浦に行き、(二二)桂林の中を經り　(二三)泱漭の墜を過ぎ　(二四)汨乎として混流し　(二五)阿に順つて下り、隘陿の口に赴き、(二六)穹石に觸れ　(二七)堆埼に激し、(二八)沸乎として暴怒

【八】蒼梧。郡名、長安の東南に在り。故に左といふ。
【九】西極。幽國をいふ、爾雅に幽國ニ至リテ西極トナスとあり。長安の西に在り、故に右といふ。
【一〇】丹水。川の名。
【一一】紫淵。紫澤なり、澤の名。
【一二】灞滻。二水の名。此の二水始終苑中に盡きて復た出でず、故に始終すといふ。
【一三】涇渭。二水の名。此の二水苑外より來り又苑を出でて去る、故に出入すといふ。
【一四】酆鎬潦潏。四水の名。
【一五】紆餘委蛇。屈曲の貌。
【一六】經營。周旋といふが如し。
【一七】蕩蕩乎。流るる貌。
【一八】八川。灞滻以下の八川をいふ。
【一九】馳騖。交錯といふが如し。
【二〇】椒丘。丘の名。兩山俱に起り、形、雙闕に似たり。
【二一】洲淤。淤も洲の類なり。
【二二】桂林。林の名、苑中にあり。
【二三】泱漭。廣大なる野。
【二四】汨乎。疾く流るる貌。
【二五】阿。山曲なり。
【二六】穹石。大石なり。
【二七】堆埼。岸曲なり。
【二八】沸乎。水の聲なり。

し、(二九)洶涌して　(三〇)彭湃し、(三一)滭弗宓汨、(三二)偪側泌瀄して、横に流れ逆に折れ、(三三)轉腾澈洌、(三四)滂濞沆漑、(三五)穹隆雲橈。(三六)宛潬膠盭し、(三七)踰波浥に趨き　(三八)茫茫として瀨を下り、巖を批ち　(三九)擁を衝き、　(四〇)奔揚滯沛し、坻に臨み壑に注ぎ、(四一)瀺灂として　(四二)霣墜し、(四三)沈沈隱隱、(四四)砰磅訇礌、(四五)滴滴淈淈、(四六)滮潗して鼎のごとく沸き、馳波跳沫　(四七)汨濦として漂疾し、(四八)悠遠長懷し、(四九)寂寥にして聲なく、(五〇)肆乎として永く歸り、然る後　(五一)灝溔漢漾として、安に翔り徐に回り、(五二)翯乎として　(五三)滈滈たり。東のかた(五四)太湖に註いで　(五五)陂池に衍溢す。是に於てか蛟龍　(五六)赤螭　(五七)魋鱨鄰離、鰅鱀鰬�、禺禺魚鰨あり、鰭を揵げ尾を掉ひ、鱗を振ひ翼を奮

【二九】洶涌。跳起するなり。
【三〇】彭湃。水の聲なり。
【三一】滭弗。盛なる貌。宓汨は去ること疾きなり。
【三二】偪側。相迫るなり。泌瀄は相擊つなり。
【三三】轉腾。相過ぐるなり。澈洌は相擊つなり。
【三四】滂濞。水の聲なり。沆漑は徐に流るること。
【三五】穹隆雲橈。石の隴の如く隆起し雲の屈橈するが如きをいふ。
【三六】宛潬膠盭。縈曲する貌。
【三七】踰波。後波前波を凌ぐなり。
【三八】茫茫。水の聲。
【三九】擁。隈曲なり。
【四〇】奔揚滯沛。湧き流るる貌。
【四一】瀺灂。水の聲。
【四二】霣墜。落つること。
【四三】沈沈。深き貌。隱隱は盛なる貌。
【四四】砰磅訇礌。水の聲。
【四五】滴滴淈淈。水の涌き出づること。
【四六】滮潗。水の沸くこと。
【四七】汨濦。水の聲。
【四八】悠遠長懷。懷は歸なり、水奔放して長く淵海に歸るなり。
【四九】寂寥。清深なり。
【五〇】肆乎。奔放する貌。
【五一】灝溔漢漾。水の際限なき貌。
【五二】翯乎。水の光る貌。
【五三】滈滈。水の白く光る貌。
【五四】太湖。震澤なり。
【五五】陂池。江の傍の小水なり。
【五六】衍溢。溢れ出づること。
【五七】赤螭。龍の子を螭といふ。魋鱨。以下皆魚の名。

ひて、深巖に潛み處り、魚鼈讙しく聲き、萬物衆夥にして、(五八)明月の珠子、江靡に(五九)的皪たり。(六〇)蜀石黃礫、(六一)水玉磊砢、(六二)磷磷爛爛、采色(六三)澔汗して、其中に叢り積り、(六四)鴻鸊鵠鶂、鴛鴦屬玉、交精旋目、頰鶩庸渠、箴疵鵁鶄ありて、其上に羣り浮び、(六五)沈淫泛濫して、風に隨つて(六六)澹淡たり。波と搖蕩して水渚を(六七)掩薄し、(六八)菁藻を唼喋して(六九)菱藕を咀嚼す。

【大意】上林の苑たる、東に蒼梧郡あり、西に豳國あり、南に丹水あり、北に紫淵あり。灞滻二水其中に始終し、涇渭二水其中を出入し、酆鎬潦潏の四水曲折して其中を周流し、八水分流して各姿態を異にし、椒丘を經て洲浦に行き、桂林を經て大野を過ぎ、山隈を下りて峽口に赴き、奔流擊騰して谿谷に墜ち、東のかた太湖に注ぎ、更に溢れて小池に出づ。魚龍深巖に潛み、明珠岸渚に輝き、水石光を其中に放ち、水禽其上に浮遊す。

是に於てか、崇山(七〇)矗矗、(七一)龍嵲崔巍として、深林巨木あり、(七二)巔巖嵾嵳たり。(七三)九嵕巀嶭、(七四)南山峩峩、(七五)巖陁巆錡、(七六)摧崣崛崎して、溪を振め谷に通じ、(七七)蹇產たる(七八)溝瀆あり。(七九)谽呀豁閜にして阜陵陽に別れ、(八〇)崴磈嵔廆、(八一)丘虛堀礨、(八二)隱轔鬱壘、登降(八三)施靡し、(八四)陂池貏豸、(八五)沇溶淫鬻し、(八六)夷陸に(八七)散渙し、(八八)亭皐千里にして、(八九)築を被らざるはなし。揜ふに(九〇)綠蕙を以てし、被らすに(九一)江蘺を以てし、糅ふるに(九二)蘼蕪を以てし、雜ふるに(九三)留夷を以てし、(九四)結縷を布き(九五)戾莎を攢め、(九六)揭車衺蘭、槀本射干、茈薑蘘荷、(九七)蔵橙若蓀、鮮支黃礫、蔣芧青熲あり。閎澤に(九八)布濩し、太原に延蔓し、(九九)離靡廣衍して、風に應じて披靡し、芳を吐き烈を揚げ、(一〇〇)郁郁菲菲として衆香發越し、(一〇一)肸蠁布寫し

【五八】明月。珠の名。江靡は江のほとり。
【五九】的皪。光明の貌。
【六〇】蜀石黃礫。石の玉に次ぐもの。
【六一】水玉。水精なり。磊砢は積み累れる貌。
【六二】磷磷爛爛。玉石の輝く貌。
【六三】澔汗。照り輝くこと。
【六四】鴻鸊。以下皆水鳥の名。
【六五】沈淫泛濫。水鳥の浮遊すること。
【六六】澹淡。縱に漂ふ貌。
【六七】掩薄。掩ひ集ること。
【六八】菁藻。水草の名。
【六九】菱藕。水草の名。ひし、はちす。
【七〇】矗矗。高く聳ゆる貌。
【七一】龍嵲崔巍。高峻の貌。
【七二】巔巖嵾嵳。峯嶺の貌。

【七三】九嵕。山の名。巀嶭は高峻の貌。
【七四】南山。山の名。終南山なり。峩峩は高峻の貌。
【七五】巖陁巆錡。傾く貌。
【七六】摧崣崛崎。嶮しき貌。
【七七】蹇產。屈曲すること。
【七八】溝瀆。溝渠なり。
【七九】谽呀。大なる貌。豁閜は空虛なり。
【八〇】崴磈嵔廆。山勢高峻の貌。
【八一】丘虛堀礨。山勢高峻の貌。
【八二】隱轔鬱壘。堆隴不平の貌。
【八三】施靡。斜につづくこと。
【八四】陂池貏豸。傍頽れて相連る貌。
【八五】沇溶淫鬻。水谿谷の間を流るるなり。
【八六】夷陸。平地なり。
【八七】散渙。寬廣の貌。
【八八】亭皐。皐は澤なり。隄上十里に一亭を置く、之を亭皐といふ。
【八九】築。築いて平ならしむるをいふ。
【九〇】綠蕙。香草の名。
【九一】江蘺。香草の名。
【九二】蘼蕪。草の名。
【九三】留夷。香草の名。
【九四】結縷。草の名。
【九五】戾莎。細草の名。
【九六】揭車。以下皆香草の名。
【九七】布濩。布き施すこと。
【九八】離靡廣衍。ひろがりつづくこと。
【九九】郁郁菲菲。香美の貌。
【一〇〇】肸蠁布寫。分散すること。

(一〇一)晻藹咇茀たり。是に於てか周く覽泛く觀れば、(一〇二)縝紛軋芴として(一〇三)芒芒恍忽たり。之を視れども端なく、之を察れども崖なく、日(一〇四)東沼より出でて(一〇五)西陂に入る。其南は則ち隆冬にも生長し、(一〇六)涌水躍波あり。其獸は則ち(一〇七)獼旄貘犛、沈牛麈麋、赤首圜題、窮奇象犀あり。其北は則ち盛夏にも凍を含んで地を裂き、氷を涉りて河を揭る。其獸は則ち(一〇八)麒麟角端、騊駼橐駞、蛩蛩驒騱、駃騠驢贏あり。

【大意】山には九嵕、終南あり。高峻にして傾欹し、溪谷相通じ溝渠屈曲し、皆濶大空虛にして陵島に隔り別れ、山勢平衍にして溪水其間を流れ遂に廣平の地に達す。十里毎に一亭を置き、遠く千里に及ぶまで、築いて平にせざるはなし。衆草地を覆ひて雜生し、其中に分布し、芳香を吐き烈華を揚げ、郁郁として發越す。林苑廣遠にして、望視するも目亂れて辨ずる能はず。日は朝に苑中の東池より出で、暮に苑中の西陂に入る。苑南、陽に向ふの地は盛冬にも草木生長し、絶えて氷を見ず、煖國の獸ここに滿ち。苑北、潛陰の地は、盛夏にも氷を結び、氷上を涉りて河を渡る。寒國の獸亦ここに滿つ。

【一〇一】晻藹咇茀。香氣の盛なるをいふ。
【一〇二】縝紛。衆盛なり。軋芴は緻密なり。
【一〇三】芒芒恍忽。目亂るる貌。
【一〇四】東沼。苑の東方の池。
【一〇五】西陂。苑の西方の池塘。
【一〇六】涌水躍波。水の凍らざるをいふ。
【一〇七】獼旄。以下皆南方の獸の名。
【一〇八】麒麟。以下皆北方の獸の名。

是に於てか、離宮別館、山に彌り谷に跨り、(一〇九)高廊四に注ぎ、(一一〇)重坐曲閣あり。(一一一)華榱璧璫にして、(一一二)輦道纚屬し、(一一三)步櫚周流して、長途に中宿す。(一一四)嶮を夷げ堂を築き、(一一五)累臺增成して(一一六)巖突に洞房あり。俯せば杳眇にして見ることなく、仰げば㝠を攀ぢて天を捫し、(一一七)奔星閨闥を更へ、(一一八)宛虹楯軒に拖き、(一一九)青龍東廂に蟉蟉し、(一二〇)象輿西清に(一二一)婉蟬し、(一二二)靈圃閒館に燕し、(一二三)偓佺の倫(一二四)南榮に暴し、(一二五)醴泉清室に涌き、通川中庭を過ぎ、(一二六)磐石崖を振へ(一二七)嶽巖として倚り傾き、(一二八)嵯峨嶕嶫として刻削峥嶸たり。(一二九)玫瑰碧琳、珊瑚叢生し、(一三〇)瑤玉旁唐して(一三一)玢豳たる文鱗あり。(一三二)赤瑕駁犖として其間に雜はり乖み、(一三三)晁采琬琰として(一三四)中清淨の處なり。

【一〇九】高廊。行廊なり。
【一一〇】重坐曲閣。閣に兩重あり、上級下級皆坐すべし。故に重坐といふ。
【一一一】華榱。彩飾せる椽。璧璫は璧を以て椽首を飾るなり。
【一一二】輦道。閣道なり。纚屬は連屬なり。
【一一三】步櫚。步廊なり。周流は周徧なり。
【一一四】累臺。重れる臺。增成は層成なり。
【一一五】巖突。巖底なり。洞房は潛室なり。
【一一六】奔星。流星なり。
【一一七】宛虹。曲れる虹。
【一一八】青龍。車なり。東廂は東方の前堂なり。
【一一九】蟉蟉。龍の行く貌。
【一二〇】象輿。車なり。西清は廂中清淨の處なり。
【一二一】婉蟬。動く貌。
【一二二】靈圃。仙人の名。間館は閑居の館。
【一二三】偓佺。仙人の名。
【一二四】南榮。南の檐。
【一二五】醴泉。璫水なり。
【一二六】嶽巖。欹つ貌。
【一二七】嵯峨嶕嶫。高き貌。
【一二八】峥嶸。直峻の貌。
【一二九】玫瑰。火齊珠なり。碧琳は玉なり。珊瑚は珠なり。
【一三〇】瑤玉。玉の名。旁唐は磐礴といふが如し。
【一三一】玢豳。文理ある貌。
【一三二】赤瑕。赤玉なり。駁犖は文彩なり。
【一三三】晁采。玉の名。琬琰は玉の光澤ある貌。
【一三四】和氏。璧なり。

和氏出づ。是に於てか盧橘夏熟し、(一三五)黄甘橙榛、枇杷橪柿、檸柰厚朴、梬棗楊梅、櫻桃蒲陶、隱夫薁棣、荅遝離支あり。後宮に羅り北園に列り、丘陵に䟽り平原に下り、翠葉を揚げ紫莖を枕し、紅華を發し、(一三六)朱榮を垂れ、(一三七)煌煌扈扈として鉅野に照曜し、(一三八)沙棠櫧櫧、華楓枰櫨、留落胥邪、仁頻并閭、欃檀木蘭、豫章女貞あり。長さ千仞大いさ連抱にして、夸條直に暢び、實葉(一三九)蔆楙なり。攢り立ち叢り倚り、(一四〇)連卷欐佹、(一四一)崔錯癹骫、(一四二)坑衡�砢たり。垂條(一四三)扶疎として、落英(一四四)幡纚たり、(一四五)紛溶箭蓼、(一四六)猗狔として風に從ひ、(一四七)瀏莅卉歙たり。蓋し金石の聲(一四八)管籥の音に象り、(一四九)偈池茈虒として後宮に旋り還り、雜襲(一五〇)絫輯して山に被り谷に緣り、坂に循ひ隰に下り、之を視れども端なく、之を究むれども窮まり なし。

【大意】宮館山谷に據り、行廊四邊を匝り、閣道は上下共に人を坐せしむべく、榱頭は皆飾るに璧

【一三五】黄甘。以下皆果木の名。
【一三六】朱榮。赤き花。
【一三七】煌煌扈扈。鮮明の貌。野は音ショ、叶韻。
【一三八】沙棠。以下皆木の名。
【一三九】蔆楙。大に盛なること。
【一四〇】連卷。曲ること。欐佹は支へ重ること。
【一四一】崔錯癹骫。木の相交ること。
【一四二】坑衡閎砢。倚り傾く也。
【一四三】扶疎。分布の貌。
【一四四】幡纚。飛揚する貌。
【一四五】紛溶。繁り大なる貌。
【一四六】箭蓼は高く長き貌。
【一四七】猗狔。猶ほ阿那といふが如し。風に隨ふ貌。
【一四八】瀏莅卉歙。風衆木を吹く聲なり。
【一四九】管籥。笛の類。
【一五〇】偈池茈虒。參差といふが如し。
【一五〇】絫輯。絫は古の累の字。輯は集と同じ。

を以てし、中途に一宿して始めて其上に達すべし。山を夷げて堂を築き、高樓層を成し、巖底に潛室あり、以て樓上に通ず。樓上より俯觀すれば、深遠にして其地を見ず。仰いで椽を攀づれば、手を以て天を摸るべく、流星虹霓門窓欄干の上を經過す。仙輿東西に往來し、靈圄(仙人の名)閑館に燕臥し、偓佺(仙人の名)南軒に暴背し、醴泉清室に湧き、流れて中庭に至り、磐石を以て渠岸を整へ、倚り欹きて崢嶸たり。種種の果樹、宮園に羅列し、丘陵に連亙し、更に平原に及び、花葉盛に茂りて、大野を輝かし、沙棠櫧櫧等の樹木、長さ千仞にして大いさ連抱なるあり。枝を垂れ葉を搖かして重疊累積し、風衆木を拂つて、管籥を吹くが如し。樹木の多きこと此の如く後宮を繞りて累集し、山谷陵隰に徧くして、其の際涯を見ず。

是に於てか(一五一)玄猨素雌、雌獲飛蠝、蛭蜩蠼猱、獑胡穀蛇ありて、其間に棲息し、長嘯哀鳴し、(一五二)翩幡として互に經、(一五三)枝格に(一五四)天蟜し、杪顛に假寐し、(一五五)絕梁を踰え(一五六)殊榛に騰り、垂條を捷り(一五八)希間に掉き、(一五九)牢落陸離、(一六〇)爛熳として遠く遷る。此の若き者數百千處、娛游往來して、宮に宿り館に舍り、庖厨徙さず、後宮移さず、百官備

【一五一】玄猨。以下皆獸の名。
【一五二】翩幡。翩翩といふが如し。
【一五三】枝格。格は枝長きなり。
【一五四】天蟜。飛び騰る貌。
【一五五】假寐。舞ふ貌。
【一五六】絕梁。絕えたるヤナ。
【一五七】殊榛。離れたる切株。
【一五八】希間。枝のすきたる處。
【一五九】牢落陸離。羣りて奔走する貌。
【一六〇】爛熳。羣り走る貌。

具す。是に於てか秋に背き冬を涉りて、天子(一六一)校獵し、(一六二)鏤象に乘り(一六三)玉虬を六にし、(一六四)蜺旌を拖き(一六五)雲旗を靡かし、(一六六)皮軒を前にし(一六七)道游を後にし、(一六八)孫叔轡を奉じ(一六九)衞公參乘し、扈從橫行して(一七〇)四校の中より出づ。(一七一)嚴鏄を鼓ちて獠者を縱ち、江河を阹となし泰山を櫓となし、車騎靁のごとく起りて、天に殷ひ地を動かし、先後(一七二)陸離、離散して別れ追ひ、(一七三)淫淫裔裔として陵に緣り澤に流れ、雲のごとく布き雨のごとく施し、貔豹を生にし豺狼を搏ち、熊羆を手にし(一七四)犖羊を足にし、(一七五)騧蘇を蒙り白虎を絝し、(一七六)斑文を被り犖馬に跨り、(一七七)三嶮の危きを凌ぎ、(一七八)磧歷の坻を下り、峻を徑り險に赴き、壑を越え水を厲り、(一七九)飛廉を椎ち(一八〇)獬豸を弄び、(一八一)瑕蛤を格ち(一八二)猛氏を鋋き(一八三)騶褭を羈し(一八四)封豕を射、箭は苟くも害せず。脰を解き腦を陷れ、弓は虛しく發せず、聲に應じて倒る。

【一六一】校獵。校隊を出して獵すること。
【一六二】鏤象。象路なり、象牙を鏤めたる車。
【一六三】玉虬。玉龍なり。六は一車に六頭を駕すること。
【一六四】蜺旌。虹を畫きし旗。
【一六五】雲旗。雲氣を畫きし旗。
【一六六】皮軒。虎皮を以て飾りし車。
【一六七】道游。車の名。
【一六八】孫叔。太僕公孫賀、字は子叔といふ。
【一六九】衞公。大將軍衞青をいふ。
【一七〇】參乘。陪乘なり。
【一七一】四校。四隊なり。
【一七二】嚴鏄。嚴鼓と大鐘。獠者獵卒なり。
【一七三】陸離。參差なり。分布する貌。
【一七四】淫淫裔裔。往來する貌。
【一七五】犖羊。獸の名。
【一七六】騧蘇。騧は鳥の名、雉に似たり、鬬ふ時は死すとも退かず。蘇は析羽なり。
【一七七】斑文。虎豹の皮なり。
【一七八】三嶮。山の名。
【一七九】磧歷。平ならざること。
【一八〇】飛廉。獸の名。
【一八一】解豸。獸の名。
【一八二】瑕蛤。獸の名。
【一八三】猛氏。獸の名。
【一八四】騶褭。馬の類の獸。
【一八五】封豕。大豬なり。

【大意】又獸類頗る多く、長嘯哀鳴して樹梢の間に翩翻たり。絕梁を踰え殊榛に騰り、參差として羣走す。此の如き者苑中に數百千處あり。天子此に往來娛遊して、宮館に止宿す。庖廚後宮百官の屬、皆此に備はりて、改め移すを要せず。乃ち秋より冬に至るまで此に校獵す。象車に乘り六龍を駕し、雲霓の旗を靡かし、皮軒と道游とを前後にし、孫太僕馬を御し、衞將軍驂乘し。扈從の士皆禁軍より出で、嚴鼓を擊ちて獵卒を縱ち、江河を以て走路を遮り、泰山を以て望樓となし、車騎の聲天地を震動し、禽獸を散逐し、山澤に流徧して雲雨の布き施すが如く、或は手を以て熊羆を捉り、或は足を以て野羊を踏む。獵卒皆鵾羽を蒙り白虎を絡ひ、斑文を被り野馬に跨り、山に上り坂を下り、峻嶮を徑り壑水を涉り、猛獸を格殺す。矢は苟くも害せず、頭頸に中る。弓は虛しく發せず、射れば必ず聲に應じて倒れ死す。

是に於てか乘輿(一八五)節を弭めて徘徊し、(一八六)翺翔往來し、(一八七)部曲の進退を睨、將帥の變態を覽、然る後(一八八)侵淫して節を促にし、(一八九)儵敻として遠く去り、(一九〇)輕禽を流離し、狡獸を(一九一)蹙履し、白鹿を轘り

【一八五】節を弭め。徐行すること。
【一八六】翺翔。徘徊といふに同じ。
【一八七】部曲。部隊なり。
【一八八】侵淫。漸進する貌。
【一八九】儵敻。倏忽なり。
【一九〇】輕禽。飛鳥なり。流離は放散なり。
【一九一】蹙履。急に躡むこと。

狡兎を捷り、赤電を軼ぎ光耀を遺し、(一九二)怪物を追ひて宇宙より出で、(一九三)蕃弱を彎きて白羽を滿て、游梟を射(一九四)飛遽を櫟ち、肉を擇びて後に發し、中るに先だちて處を命じ、弦矢分れて藝殪れ仆す。然る後、節を揚げて上り浮び、驚風を凌ぎ(一九五)駭猋を歷、虛無に乘りて神と俱にし、玄鶴を躪み(一九六)昆雞を亂し(一九七)孔鸞を遒り(一九八)鵁鶄を促り、(一九九)翳鳥を拂ひ鳳皇を捎ち、(二〇〇)鵷雛を捷り(二〇一)焦朋を揜り、道盡き塗殫きて車を廻らして還り、(二〇二)招搖乎として(二〇三)儴佯し(二〇四)北紘に降集し、(二〇五)率乎として直に指し、(二〇六)晻乎として反り鄉ひ、(二〇七)石闕を蹙み(二〇八)封巒を歷、(二〇九)鵠鵲に過りて(二一〇)露寒を望み、(二一一)棠梨に下りて(二一二)宜春に息ひ、西のかた(二一三)宣曲に馳せ、鷁を(二一四)牛首に濯ひ、(二一五)龍臺に登り、(二一六)細柳に掩り、士大夫の(二一七)勤略を觀、獵者の得獲する所を均うし、徒車の轔み轢む所、步騎の蹂み若る所、人臣の蹈み藉く所と、

【一九二】怪物。奇禽なり。
【一九三】蕃弱。夏后氏の良弓の名。
【一九四】飛遽。天上の神獸。
【一九五】駭猋。猋は回風なり。
【一九六】昆雞。鳥の名。
【一九七】孔鸞。鳥の名
【一九八】鵁鶄。鳥の名。
【一九九】翳鳥。鳥の名。
【二〇〇】鵷雛。鳥の名。
【二〇一】焦朋。鳥の名。朋は音ハウ、叶韻。
【二〇二】招搖。逍遙なり。
【二〇三】儴佯。徜徉に同じ。
【二〇四】北紘。八紘の一。北方。
【二〇五】率乎。忽然なり。
【二〇六】晻乎。速なる貌。
【二〇七】石闕。宮觀の名。
【二〇八】封巒。宮觀の名。
【二〇九】鵠鵲。宮觀の名。
【二一〇】露寒。宮觀の名。
【二一一】棠梨。宮觀の名。
【二一二】宜春。宮觀の名。
【二一三】宣曲。宮の名、昆明池の西に在り。
【二一四】牛首。池の名、上林苑の西頭に在り。
【二一五】龍臺。觀の名、豐水の西北にあり、渭水に近し。
【二一六】細柳。觀の名、昆明池の南に在り。
【二一七】勤略。略は巡行なり。

其の(二一八)窮極倦劲、(二一九)驚憚讋伏し、創刃を被らずして、怖れて死する者と、(二二〇)他他藉藉として阬に塡ち谷に滿ち、平を掩ひ澤に彌る。

【大意】是に於て天子節を案じて徐行し、徘徊往來して將士進退の態を視、然る後漸く行伍を促にして遠く去り、輕捷なる禽獸を追ひ踏み、其疾速なること遙に赤電光耀に過ぐ。奇禽を追ひて宇宙を離れ、良弓を彎きて白羽を呑み、射るべき所を選んで後發し、矢の著く所皆先づ其處を言ふ。故に準的に應じて、能く禽獸を斃す。乃ち更に騰游して風飈を凌ぎ、虛無に乘り、神靈と共にして飛鳥を捕へ、遊獵の途既に盡き、車を回らして行遊し、北紘に降り集り、速に帝鄉に還らんとす。石闕、封巒、鵠鵲、露寒、棠梨、宜春の諸觀に息ひ、西のかた宣曲宮に馳せて、鷁首の船を濯ひ、龍臺觀に登り細柳觀に止まり、士卒の勤勞を觀、獵者の殺獲を均分す。車騎の踐踏する所のものと、疲癲怖懼し傷かずして死するものと、山澤に徧滿す。

是に於てか游戲懈怠し、酒を(二二一)顥天の臺に置き、樂を(二二二)膠葛の寓に張り、(二二三)千石の鐘を撞き、萬石

【二一八】窮極倦劲。疲癲すること。
【二一九】驚憚讋伏。怖れて動かざる貌。
【二二〇】他他藉藉。多く横はる貌。
【二二一】顥天。臺の名。
【二二二】膠葛。廣大なる貌。寓は屋なり。
【二二三】千石。石は重量の名。千石は十二萬斤なり。

の(二三四)虞を立て、(二三五)翠華の旗を建て、(二三六)靈鼉の鼓を樹て、(二三七)陶唐氏の舞を奏し、(二三八)葛天氏の歌を聽き、千人倡へて萬人和し、山陵之が爲に震動し、川谷之が爲に波を蕩し、(二三九)巴渝宋蔡、淮南于遮、文成顚歌、族り居て遞に奏し金鼓迭に起り(二四〇)鏗鎗闛鞳として、心を洞し耳を駭かし(二四一)荆吳鄭衞の聲、(二四二)韶濩武象の樂、(二四三)陰淫案衍の音、(二四四)鄢郢繽紛として、(二四五)激楚結風し、(二四六)俳優侏儒、狄鞮の倡、耳目を娛しめ、心意を樂ましむる所以のもの、前に(二四七)麗靡爛漫として、後に(二四八)靡曼美色あり。若し夫れ(二四九)青琴宓妃の徒、(二五〇)絕殊にして俗を離れ、(二五一)妖冶嫺都、(二五二)靚粧刻飾、(二五三)便嬛綽約、(二五四)柔橈嫚嫚、(二五五)嫵媚孅弱にして、(二五六)獨繭の(二五七)褕袪なるを曳き、(二五八)眇閻易として以て(二五九)邱創せるがごとく(二六〇)便姍婆娑として俗と服を殊にし、芬芳、(二六一)溫鬱、(二六二)酷烈淑郁、(二六三)皓齒粲爛、(二六四)宜笑的皪、長眉連娟(二六五)微睇縣藐として(二六六)色授け魂與へ、心側に愉ぶ。

【二三四】虞。鐘を懸くる架なり。
【二三五】翠華。翠羽を以て飾りし旗。
【二三六】靈鼉の鼓。鼉皮を張りて作りし鼓。
【二三七】陶唐氏。堯なり。堯の舞を咸池といふ。
【二三八】葛天氏。三皇の時の君の號なり。其の樂、三人牛尾を操り、足を投じて歌ふなり。
【二三九】巴渝。以下各地の歌曲の名。
【二四〇】鏗鎗。鐘の聲なり。闛鞳は鼓の音なり。
【二四一】荆吳鄭衞。其音皆淫哇なり。
【二四二】韶濩。韶は舜の樂。濩は湯の樂。武は武王の樂。象は周公の樂なり。
【二四三】陰淫案衍。流沔の聲なり。
【二四四】鄢郢。楚の地名。繽紛は舞ふなり。
【二四五】激楚。歌曲なり。結風は廻風を縈結するなり。
【二四六】俳優、侏儒。皆樂人なり。狄鞮は西戎の樂名。
【二四七】麗靡爛漫。美音聲なり。
【二四八】靡曼美色。姿態多きことなり。
【二四九】青琴。古の神女なり。宓妃は洛水の神女なり。
【二五〇】絕殊。容色の極めて美しきこと。
【二五一】妖冶。美しきこと。嫺都はみやびやかなること。
【二五二】靚粧刻飾。化粧を加ふること。
【二五三】便嬛綽約。たをやかなること。
【二五四】柔橈嫚嫚。しなやかなること。

【大意】遊獵既に疲倦し、乃ち置酒して樂を張り、鐘を懸けて之を撞き、翠華を建てて鼉鼓を擊ち、千人歌ひて萬人和し、山陵之が爲に波を揚げ、鏗鏗として心を洞し耳を驚かし、楚舞迅急にして回風を縈結し、俳優侏儒の伎、耳目を娛しめ心意を樂ましむるもの前後に滿ち、美女の容色絕倫なる者、衣服を飾り長袖を曳きて舞ひ、其容刻畫して作れるが如く、香氣溫鬱として皓齒鮮白、長眉連娟たり。色を以て其君に授くれば、君其の神魂を溺らして恩寵を與へ、其側に愉悅す。

【二五五】嫵媚。なまめき媚ぶること。孅弱は容體の纖弱なること。
【二五六】獨繭。一つの繭にて衣を作るなり。
【二五七】褕袪。輕く長き貌。
【二五八】眇閻易。回轉する貌。
【二五九】邱創。刻畫して作ること。
【二六〇】便姍婆娑。衣服婆娑たる貌。
【二六一】溫鬱。香氣の盛なる貌。
【二六二】酷烈淑郁。香氣の盛なること。
【二六三】皓齒粲爛。白き齒の輝くこと。
【二六四】宜笑的皪。笑へば白き齒の鮮白に見ゆるなり。
【二六五】連娟。曲りて細き貌。
【二六六】微睇。遠く視ること。縣藐は遠く視る貌。
【二六七】色授け。彼の色來りて授くれば、我が魂往きて之に接するなり。

是に於て酒中にして樂酣なるや、天子(二六八)芒然として思ひ、亡ふあるが若きに似たり。曰く嗟乎此れ太だ奢侈なり。朕(二五九)覽聽の餘間、事なくして日を棄つるを以て、(二六〇)天道に順つて以て殺伐し、時に此に休息す。恐らくは(二六一)後葉靡麗し、遂に往いて返らざらんことを。繼嗣の爲に業を創め統を垂るる所以にあらざるなりと。是に於てか乃ち酒を解け獵を罷め、有司に命じて曰く、地の墾闢すべきもの悉く(二六二)農郊となし、以て(二六三)萌隸を贍らしめ、墻を頹し塹を塡め、山澤の人をして至るを得しめ、陂池を實てて禁ずるなく、宮館を虛うして仞つるなく、倉廩を發いて以て貧窮を救ひ足らざるを補ひ、(二六四)鰥寡を恤み(二六五)孤獨を存し、(二六六)德號を出し刑罰を省き、制度を改め服色を易へ、(二六七)正朔を革めて天下と(二六八)更始せよと。是に於て吉日を歷んで以て齋戒し、朝服を襲て(二六九)法駕に乘り、華旗を建て玉鑾を鳴らし、(二七〇)六藝の囿に游び、仁義の塗に馳騖し、(二七一)春秋の林を覽觀し(二七二)貍首を射て(二七三)騶虞を兼ね、(二七四)玄鶴

【二五八】芒然。自失する貌。
【二五九】覽聽。政を聽くこと。
【二六〇】天道。秋氣に因るをいふ。
【二六一】後葉。後世なり。靡麗は奢侈なり。
【二六二】農郊。耕作地なり。
【二六三】萌隸。百姓なり。
【二六四】鰥寡。老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といふ。
【二六五】孤獨。幼にして父なきを孤といひ、老いて子なきを獨といふ。存は卹むこと。
【二六六】德號。號令なり。
【二六七】正朔。曆法なり。
【二六八】更始。革新なり。
【二六九】法駕。天子の乘物。
【二七〇】六藝。禮樂射御書數なり。
【二七一】春秋。孔子の著せる書名、其書義理繁茂す、故に林といふ。
【二七二】貍首。樂章の名。
【二七三】騶虞。樂章の名。
【二七四】玄鶴。瑞鳥なり。

を弋て(二七五)干戚を舞はじめ、(二七六)雲罕を載せて(二七七)羣雅を揜へ、(二七八)伐檀を悲み(二七九)樂胥を樂ひ、容を禮園に脩め、書圃に翺翔し(二八〇)易道を述べ怪獸を放ち、(二八一)明堂に登り(二八二)清廟に坐し、羣臣を次で得失を奏せしむ。四海の內(二八三)獲を受けざるはなし。

【大意】酒半にして樂酣なるや、天子茫然として自失して曰く、ああ此れ甚だ奢れり。朕政を聽いて餘暇あり、無事にして時日を徒費するを以て、陰氣に順つて殺伐し、苑囿の中に狩獵せるも、恐くは後世我に倣ひ、奢侈を以て常となし、純樸に返るを忘れん。業を創め統を垂るる所以にあらざるなりと。乃ち酒を退け獵を罷め、有司に命じて曰く、苑囿の開墾すべきものを耕地となし、以て悉く百姓に給すべし。苑牆を崩し去り、以て山澤の利を通ずべし。陂池に魚鼈を養ひ人の取るを禁ずる勿れ。宮館は復た人を以て滿すなかれ。倉廩を開いて窮民を救ひ、速に號令を發し刑罰を省き、宮室壯大の制を改め、衣服美麗の色を易へ、正朔を革めて天下を革新せよと。乃ち吉日を選びて齋戒し、朝服を著て法駕に乘り、華旗を建て玉鑾を鳴らして、辟雍に幸し、六藝仁義の道を修め、春秋の義理を觀、詩義に則り、玄鶴を射て干戚の

【二七五】干戚。干は盾、戚は斧なり。之を執りて舞ふなり。
【二七六】雲罕。罕なり。アミなり。
【二七七】羣雅。多くの賢人。
【二七八】伐檀。詩篇の名。賢者の明王に遇はざるを刺る詩なり。
【二七九】樂胥。王者の賢材を得るを美する詩なり。
【二八〇】易道。潔靜精微の術。
【二八一】明堂。諸侯を朝せしむる堂なり。
【二八二】清廟。太廟なり。
【二八三】獲。恩澤なり。

舞を奏せしめ、雲罕の罼を載せて羣雅の士を捕へ、賢人の不遇を悲み、賢材を得て天の祜を受けんことを樂ひ、禮儀を修め讀書を勉め、潔靜精微の術を修め、怪獸を放ちて復た獵せず。明堂に登り太廟に坐し、羣臣をして政事の得失を奏言せしむ。是に於てか天下の民其恩澤に浴せざるはなし。斯の時に於て天下大に說び、風に向つて聽き、流に隨つて化し（二八四）卉然として道に興り義に遷り、刑錯いて用ひず。德（二八五）三王よりも隆く、功五帝よりも羨なり。此の若くなるが故に、獵は乃ち喜ぶべきなり。若夫れ終日馳騁し、神を勞し形を苦め、車馬の用を罷し、士卒の精を抗ひ、府庫の財を費して德厚の恩なく、務獨樂にありて衆庶を顧みず。國家の政を忘れ、雉兎の獲を貪るは、則ち仁者は繇らざるなり。此に從りて之を觀れば、齊楚の事豈哀しからずや。地方千里に過ぎずして（二八六）囿九百に居る。是れ草木墾闢するを得ず、民食ふ所なきなり。夫れ諸侯の細を以て、（二八七）萬乘の侈を樂む。僕恐らくは百姓の其尤を被らんことをと。是に於て二子（二八八）愀然として容を改め、（二八九）超若として自失し、逡巡して席を避けて曰く、鄙人固陋にして忌諱を知らず。乃ち今日敎へらる。謹んで命を受けんと。

【大意】此時天下皆王化を悅び、國風に向ふこと流に隨ふが如く、勃然として道義に興り、復た刑

【二八四】卉然。勃然なり。
【二八五】三王。三皇なり。
【二八六】囿。狩場なり。九百は九百里。
【二八七】萬乘。天子をいふ。
【二八八】愀然。色を變する貌。
【二八九】超若。忽然なり。

罰の用なきに至り、功德三皇五帝に勝る。夫れ我が天子の狩獵此の如し。故に喜ぶべきなり。若し之に反し、終日馳驅し、精神を勞し身體を苦め、府庫の物を費して、厚德百姓に及ばず、專ら己の樂を求めて庶民を顧慮せず、國家の政を忘れて禽獸を獲んことを貪るは、仁者決して之を是認せざるなり。されば齊楚の畋獵の盛を誇るが如きは、亦以て哀むべきなり。齊楚の地もと千里に過ぎざるに、苑囿九百里あり。是を以て民耕食するなし。諸侯の微を以て、天子の侈を樂むは、百姓の怨を被らんことを恐るるのみと。二子（子虛と烏有先生）之を聽き愀然として容を變じ、忽然として自失し、席を避けて曰く、我等固陋にして忌諱すべきを知らず。叨に狩獵の盛を誇る。今幸に足下（亡是公）の高敎を受く。謹んで敎命に從はんと。

（二）羽獵の賦幷序

揚子雲

羽獵の賦

孝成帝の時、（一）羽獵す。（二）雄從つて以爲へらく、昔在（三）二帝三王は、宮館臺榭、沼池苑囿、林麓藪澤、財に以て（四）郊廟に奉じ、賓客に御め庖廚に充つるに足るのみ。百姓の（五）膏腴、穀土（六）桑

【一】羽獵。羽は箭なり。士卒をして箭を負ひて獵せしむるなり。
【二】雄。揚子雲の名。
【三】二帝。堯舜なり。三王は夏禹、殷湯、周文なり。
【四】郊廟。郊は天の祭。廟は祖先の祭。
【五】膏腴。肥沃なる田地。
【六】桑柘。柘は山桑。蠶を養

柘の地を奪はず。女に餘布あり男に餘粟あり。國家殷富にして上下交足る。故に甘露其庭に零り、(七)醴泉其唐に流れ、鳳皇其樹に巣くひ、黄龍其沼に游び、麒麟其囿に臻り、(八)神爵其林に棲む。昔者禹(九)益を虞に任じて、(一〇)上下和し草木茂り、(一一)成湯田を好めども、天下の用足り、文王の囿は百里なるも、民以て尚ほ小なりとなし、齊の宣王の囿は四十里なるも、民以て泰だ大なりとなす。(一二)民を裕にすると民を奪ふとなり。武帝廣く(一三)上林を開き、東南は(一四)宜春、鼎湖、御宿、昆吾に至り、南山に旁ひ、西のかた(一五)長楊、五柞に至り、北のかた(一六)黄山を繞り、(一七)渭に濱ひて東す。周袤數百里なり。昆明池を穿ちて(一八)滇河に象り、(一九)建章、鳳闕、神明、駿娑、漸臺を營み、太液は海水の(二〇)方丈、瀛洲、蓬萊を周流するに象り、游觀(二一)侈靡にして妙を窮め麗を極め、頗る其(二二)三垂を割いて、以て(二三)齊民を贍すと雖も、然も羽獵に至りては甲車(二四)戎馬器械(二五)儲

【七】醴泉。瑞水なり。ふに用ふ。
【八】神爵。神雀なり、瑞鳥なり。
【九】益を虞。益は人名、虞は山澤を掌る官、益をして虞官たらしむ。
【一〇】上下。上は山、下は澤なり。
【一一】成湯。殷の湯王。
【一二】民を云云。文王は民を饒にし宣王は民を奪ふ。故に民文王の囿を小なりとし宣王の囿を大なりとなすなり。
【一三】上林。苑囿の名。
【一四】宜春。以下皆宮苑の名。
【一五】長楊、五柞。宮の名。
【一六】黄山。宮の名。
【一七】渭。川の名。
【一八】滇河。南夷の河の名。
【一九】建章。以下皆宮殿の名。
【二〇】方丈。以下東海中に在る仙山の名。
【二一】侈靡。奢侈なり。
【二二】三垂。西方南方東方なり。割とは侵し取りしこと。
【二三】齊民。庶民なり。
【二四】戎馬。軍馬なり。
【二五】儲偫。蓄積なり。禁禦は往來を禁止すること。

偫禁禦の營む所、尚ほ泰だ奢麗(二六)誇詡にして、堯舜成湯文王(二七)三驅の意にあらざるなり。又恐らくは後世復た(二八)前好を脩め、折中するに(二九)泉臺を以てせざらんことを。故に聊か(三〇)校獵に因り、賦して以て之を(三一)風す。其辭に曰く、

或るひと(三二)羲農を稱す。豈或は帝王の彌〻文なるかと。論者云く、否、各亦時に竝ひて宜しきを得たり。奚ぞ必ずしも條を同うして貫を共にせんや。則ち(三三)泰山の封禪んぞ七十にして二儀あるを得ん。是を以て業を創め統を垂る者、俱に其の爽へるを見ず。(三四)遐邇五三孰か其の是非を知らんと。遂に頌を作りて曰く、

【大意】或る人、伏犧、神農の質樸にして、禮に中れるを稱して曰く、後世の帝王いよいよ文飾を加へて禮に合はざるにあらずやと。論者(揚雄自ら謂ふ)答へて曰く、否然らず。帝王の文質各時に隨つて宜しきを得たり。奚ぞ必ずしも古人と條貫を同うし、然る後禮に合へりとなさんや。泰山に封禪する帝王七十二家(管子に古の太山

【二六】誇詡。誇大なり。
【二七】三驅。一面の網を張りて三面の網を解き、禽獸を去らしむること。
【二八】前好。前人の好み、武帝奢侈の事をいふ。
【二九】泉臺。春秋魯の莊公の築きし臺なり、其の禮にあらざるを以て文公に至りて之を毀てり、成帝の武帝の奢侈に倣はず、文公の泉臺を毀ちし如く、武帝の奢侈を廢せんことを希ふなり。
【三〇】校獵。校隊を出して獵すること。
【三一】風。諷に同じ。
【三二】羲農。伏犧、神農なり、太古の帝王の名。
【三三】泰山。山の名。封は封禪とて泰山の祭なり。
【三四】遐邇。遠近なり。五三は五帝三皇なり。

に封じ梁父に禪する者七十二家云云とあり）然も其禮未だ嘗て道德の差異あらざるなり。故に創業垂統の天子は、各時に隨ひて制を立て、其の差へるを見ず。五帝三皇誰か能く其の是非を知らん。蓋し各其時の宜しきに隨ふのみと。因つて頌を作ること次の如し。

麗しいかな　(三五)神聖、玄宮に處り、富既に地と訾を侔うし、貴正に天と崇を比べ、齊桓も曾て轂を扶けしむるに足らず。(三六)楚嚴も未だ以て(三七)驂乘となすに足らず。三王の(三八)阨僻なるを狹しとし、(三九)矯として高く擧りて大に興り、五帝の(四〇)寥廓なるを歷、三皇の(四一)登閎なるを涉り、道德を建てて以て師となし、仁義を友として之と朋をなす。是に於て(四二)玄冬の季月、天地(四三)隆烈として、萬物內に(四四)權輿し、外に(四五)殂落す。(四六)帝將に靈の囿に田せんことを惟ひ、(四七)北垠を開きて(四八)不周の制を受け、以て(四九)顓頊玄冥の統を終始せんとし、乃ち(五〇)虞人に詔して澤を典らしめ、東のかた(五一)昆鄰に延び西のかた(五二)圜闔に馳せ、

【三五】神聖。成帝を指す。玄宮は北方の宮なり。
【三六】楚嚴。楚の莊王をいふ。
【三七】驂乘。陪乘なり。
【三八】阨僻。陋小なり。
【三九】矯。高く擧る貌。
【四〇】寥廓。高遠なり。
【四一】登閎。高大なり。
【四二】玄冬。冬なり。
【四三】隆烈。陰氣の盛なる也。
【四四】權輿。始まること。大戴禮に孟春ニ百草權輿スとあり。
【四五】殂落。凋落なり。
【四六】帝。成帝なり。
【四七】北垠。垠は涯なり。冬は北を尙ぶ、故に北垠を開くといふ。
【四八】不周。西北方の風なり、其風、物を殺す、故に王者之に取りて制法となす。
【四九】顓頊、玄冥。皆北方の神也、殺戮を主る。統は理なり。
【五〇】虞人。山澤を掌る官。
【五一】昆鄰。地名。
【五二】圜闔。西方の門の名。

儲積(五三)共偕し(五四)戍卒道を夾み、叢棘を斬り野草を夷げ、(五五)汧渭より禦ぎて(五六)酆鎬に(五七)經營し、(五八)章皇周流して日月を出入し、天、地と沓ふ。爾して廼ち(五九)三嶮を(六〇)虎路して以て(六一)司馬となし、百里を圍經して(六二)殿門となし、外は則ち正南海を極め、邪に(六三)虞淵に界し、(六四)鴻濛沆茫として(六五)碣するに崇山を以てし、營合ひ圍會ふ。然る後先づ(六六)白楊の南、(六七)昆明靈沼の東に置き、(六八)賁育の倫盾を蒙り羽を負ひ、(六九)鏌鋣を杖ついて羅る者萬を以て計ふ。其餘は(七〇)垂天の罼を荷ひ、(七一)竟墜の罘を張り、日月の朱竿を靡かし、(七二)參星の飛旗を曳き、青雲を(七三)紛となし、(七四)虹蜺を(七五)繯となし、(七六)崑崙の墟に屬り、(七七)渙たること天星の羅れるが若く、(七八)浩たること濤水の波の如く、(七九)淫淫與與として前後に要へ遮り、(八〇)欃槍を(八一)圜となし、明月を(八二)鋏

【五三】共偕。具ふること。
【五四】戍卒。衞兵なり。
【五五】汧渭。二川の名。
【五六】酆鎬。二川の名。
【五七】經營。規度するなり。
【五八】章皇。寬饒なり。周流は周匝なり。
【五九】三嶮。山の名。
【六〇】虎路。路一に落に作る。竹を以て藩となすなり。
【六一】司馬。外門を司馬門といふ。
【六二】殿門。內門をいふ。
【六三】虞淵。日の入る處なり。
【六四】鴻濛沆茫。水草廣大の貌。
【六五】碣。表なり。
【六六】白楊。宮觀の名。
【六七】昆明。池の名、其中に靈沼あり。
【六八】賁育。孟賁と夏育、皆秦の武王の壯士なり。
【六九】鏌鋣。古の名劍の名。
【七〇】垂天。網の大なること天の四邊に垂るるが如きなり。
【七一】竟墜。墜は野の古字、野一面に滿ちわたること。
【七二】紛。旗の旒なり。
【七三】虹蜺。虹なり。
【七四】繯。旗上の飾なり。
【七五】崑崙。山の名。
【七六】渙。文章ある貌。
【七七】浩。廣大なる貌。
【七八】淫淫與與。行く貌。
【七九】欃槍。星の名。
【八〇】圜。門外の女垣なり。
【八一】候。望樓なり。

となし、(八三)熒惑命を司り　(八四)天弧射を發し、(八五)鮮扁陸離、(八六)駢衍して路に倣ち、(八七)徽車輕武、(八八)鴻絅緁獵し、(八九)殷殷軫軫として、陵に被り岸を緣り、(九〇)復なるを窮め遠きを極むる者、相與に高原の上に列り、(九一)羽騎營營として　(九二)明分して事を殊にし、(九三)繽紛として往來し、(九四)轤轤として絶えず。光るが若く滅ゆるが若き者、青林の下に布く。

【大意】　壯なる哉、成帝富地に法り尊天に比す。齊桓楚莊の二主は五霸の強盛なれども、之を成帝に比すれば、驂乘して車轂を扶くるに足らず。三王をも視て以て陋小となし、矯然として高く興り、遙に五帝三皇の上に陟り、道德仁義の事を立て、以て師法朋友となす。季冬十二月、陰氣天地に滿つるや、萬物始めて地内に萌し、草木外に凋落す。帝將に靈囿に畋せんことを思ひ、北垠を開きて不周萬物を殺すの制に倣ひ、以て顓頊玄冥殺戮の理を行はんとし、乃ち虞人に命じて、山澤を主らしめ、東は昆鄰に及び、西は圃闔門に馳せ、供具衛士道を夾み叢棘を斬り、野草を除き汧渭酆鎬の四川を以て限界となし、營域の廣き、日月其中に出入す。遠く之を望めば、天と地と相連合せるが如し。乃ち三嶾山に藩籬して司馬門となし、東南は南海を極め斜に虞淵と界を

【八一】熒惑。星の名。
【八二】天弧。星の名。
【八三】鮮扁陸離。陳列の貌。
【八四】駢衍。相連る貌。
【八五】徽車。疾き車。
【八六】鴻絅緁獵。相連る貌。
【八七】殷殷軫軫。盛なる貌。
【八八】羽騎。箭を負ふ騎兵。營營は往來する貌。
【八九】明分。分明に別るること。
【九〇】繽紛。多き貌。
【九一】轤轤。連接する貌。

なし、表するに高山を以てし、先づ供具を白楊宮の南、昆明池の東に置き、勇士盾を蒙り箭を負ひ戟を杖ついて列ぶ者、萬を以て數ふ。其餘の士卒は大網を張り、日月篲星を畫ける旗を靡かし、青雲虹霓を旗飾となし、遠く崑崙の野に連り、以て禽獸を要へ遮り、欃槍を障屏となし、明月を望樓となし、熒惑をして天子の命を司らしめ、天弧をして發射せしめ、疾車輕武の徒相連りて遠く高原の上に及び、羽箭を負ふの騎卒、各〻其事を分擔し、往來出沒し、青林の下に映ず。

是に於て天子乃ち　(九五)陽晁を以て始めて玄宮を出で、(九六)鴻鐘を撞き九旒を建て、(九七)白虎を六にし　(九八)靈輿に載り、(九九)蚩尤轂に竝ひ、(九〇)蒙公先驅し、(九一)歷天の旗を立て、(一〇〇)捎星の旃を曳き、(一〇一)霹靂烈缺火を吐き鞭を施げ、(一〇二)萃傞沇溶、(一〇三)淋離廓落として、(一〇四)八鎭を戲きて關を開き、(一〇五)飛廉雲師(一〇六)吸嚊瀟率し、鱗のごとく羅りて　(一〇七)布烈し、攢

【九三】陽晁。晁は朝の古字、陽明なる朝。
【九四】鴻鐘。大鐘なり、尙書大傳に、天子將ニ出デントスレバ則チ黃鐘ノ鐘ヲ撞クとあり。
【九五】白虎。馬の名。六は一車に六頭を駕すること。
【九六】靈輿。天子の輿なり。
【九七】蚩尤。黃帝の時の諸侯。
【九八】蒙公。髦頭なり。鹵簿中之れあり。
【九九】歷天。天を犯すなり。
【一〇〇】捎星。星を拂ふこと。
【一〇一】霹靂。雷なり。烈缺は電光なり。
【一〇二】萃傞。集り走ること。沇溶は盛多の貌。
【一〇三】淋離。長大の貌。廓落は廣大の貌。
【一〇四】八鎭。四方四隅をいふ。
【一〇五】飛廉。風の神。雲師は雲の神。
【一〇六】吸嚊。呼吸なり、瀟率は吸嚊の貌。
【一〇七】布烈。布列に同じ、しきつらなること。

りて以て龍の翰のごとく、(一〇八)啾啾蹌蹌として西園に入り、(一〇九)神光に切き(一一〇)平樂を望み、竹林を徑り、(一一一)蕙圃を蹂み、(一一二)蘭唐を踐み、烽を擧げ、火を烈し、轡者技を施し、千駟を方べ馳せ、(一一三)狡騎萬帥なり。(一一四)虓虎の陳、從横(一一五)膠轕し、猋のごとく拉り雷のごとく厲しく、(一一六)驥騂駱礌、(一一七)洶洶旭旭として、天動き地�、(一一八)羨漫半散して、數千里外に(一一九)蕭條たり。若夫れ壯士忼慨して、鄉を殊にし趣を別ち、東西南北嗜を騁せ欲を奔せ、(一二〇)蒼猋を拋へ(一二一)犀犛を跋み、(一二二)浮麋を蹶し(一二三)巨狿を斬り(一二四)玄猨を搏ち、空虛に騰り(一二五)連卷に距り、(一二六)天蟜を踔え(一二七)間間に嬉れ、(一二八)莫莫紛紛として、山谷之が爲に風猋し、林叢之が爲に塵を生ず。(一二九)獲夷の徒に至るに及んでは、松栢を蹶み(一三〇)蒺藜を掌ち、(一三一)蒙籠に獵り(一三二)輕飛を轔り、(一三三)般首を履にし修虵を帶び、赤豹を鉤け象犀を牽き、(一三四)巒阬を跇り(一三五)唐陂を

【一〇八】啾啾。衆の聲なり。蹌蹌は行く貌。
【一〇九】神光。宮の名。
【一一〇】平樂。館の名。
【一一一】蕙圃。蕙草の圃なり。
【一一二】蘭唐。蘭の生ずる塘。
【一一三】狡騎。狡は健なり。萬帥一に萬師に作る、多きをいふ。
【一一四】虓虎。勇健の貌。
【一一五】膠轕。入り亂るる貌。
【一一六】驥騂駱礌。衆の聲なり。
【一一七】洶洶旭旭。鼓の聲なり。
【一一八】羨漫。連續すること。半散は分散すること。
【一一九】蕭條。さびしき貌。
【一二〇】蒼猋。獸の名。
【一二一】犀犛。獸の名。
【一二二】浮麋。獸の名。
【一二三】巨狿。獸の名。
【一二四】玄猨。獸の名。
【一二五】連卷。樹木屈曲の貌。
【一二六】天蟜。樹木屈曲の貌。
【一二七】間間。一本に澗間に作る。
【一二八】莫莫紛紛。風塵の貌。
【一二九】獲夷。古の壯士の名。
【一三〇】茦藜。イバラなり。
【一三一】蒙籠。草樹繁密の處。
【一三二】輕飛。輕獸飛禽なり。轔は轢なり。
【一三三】般首。猛獸の名。
【一三四】巒阬。山坂なり。
【一三五】唐陂。陂塘なり。

超え、車騎雲のごとく會ひ、登降(一三六)闇藹たり。(一三七)泰華を旒となし(一三八)熊耳を綴となし、木仆れ山還りて、天外に(一三九)漫若し、大浦に(一四〇)儲與して、宇內に(一四一)聊浪す。

【大意】是に於て天子早朝に玄宮を出で、大鐘を擊ち九旒の旗を建て、六馬の輿に乘り、蚩尤髦頭轂を夾みて先驅す。威德の盛なる、能く百神を使役し、雷電之が護衞をなし、火を吐き鞭を揚げ、集り走りて八方を麾き、風雲の神、呼吸羅列して魚鱗龍翼の如し。玉鑾を鳴らして西園に入り、神光宮に近づき、平樂館を望んで竹林を經、蕙圃蘭塘を過ぎて烽火を擧げ、轡を執る者をして技能を施し千駟を齊列せしむ。勇健の夫、陣を結び、交錯して風雷の威の如く、鼓聲天地に震動し、士卒連接分散して、數千里外に蕭條たり。特に勇猛の士に至りては、行列に依らずして、別に趣向を立て、各其嗜欲に隨ひ、縱横に奔馳して、猛獸を殺獲し、空虛に騰り樹上に攀ぢ、澗間に娛戲し、風塵林谷の間に昏昧す。更に壯烈なること獲夷の徒に比すべき者あり。松栢を蹶み茨棘を打ち、蒙籠に獵りて、輕獸飛禽を轢殺し、履を以て猛獸を踏み、長蛇を帶にす。車騎山澤を超えて登降し、其盛なること雲の闇藹たるが如く、林木盡く倒れ、山之が爲に廻旋し、天外に漫然として、宇內に奔蕩す。

【一三六】闇藹。雲の罩むる貌。
【一三七】泰華。山の名、泰山と華山。
【一三八】熊耳。山の名。綴は旒なり、旗の飾。
【一三九】漫若。はびこること。
【一四〇】儲與。逍遙すること。
【一四一】聊浪。ほしいままなる貌。

是に於て天清み日晏れて、(一四一)逢蒙背を列き、(一四二)羿氏弦を控き、(一四三)皇車幽輅として光天地を純り、(一四四)望舒轡を彌し、(一四五)翼乎として徐に(一四六)上蘭に至り、圍を移し陣を徙し、(一四七)浸淫して部を蹩し、曲隊堅く重りて各〻行伍を案じ、壁壘天のごとく旋り、神のごとく抶ち電のごとく擊ち、之に逢へば則ち碎け、之に近づけば則ち破れ、鳥も飛ぶに及ばず、獸も過ぐるを得ず。軍驚き師駭き、野を刮き地を掃ふ。(一四九)罕車飛揚し武騎(一五〇)聿皇たるに至るに及んでは、飛豹を蹈み(一五一)嘘陽を羂し、(一五二)天寶を追ひ一方より出で、(一五三)騁聲に應じ流光を擊ち、野盡き山窮まり、其(一五四)雌雄を(一五五)囊括し、(一五六)沇沇溶溶として遙に紘中に噱ぎ、三軍(一五七)芒然として(一五八)窮尤闘與し、亶夫の剽禽の(一五九)紲踰し、犀兕の抵觸し、熊羆の(一六〇)挈獲し、虎豹の(一六一)凌遽し、徒に角をもて槍き題をもて注き、(一六二)蹴竦讋怖し、魂亡せて魄失せ、輻に觸れ脰を關くを觀る。妄に發するも中るを期し、進退履み獲、

(一四一)逢蒙。古の善射者の名。
(一四二)羿氏。古の善射者の名。
(一四三)皇車。天子の車なり。幽輅は車の聲。
(一四四)望舒。月の御者なり。
(一四五)翼乎。羣盛の貌。
(一四六)上蘭。宮觀の名。
(一四七)浸淫。漸く進むこと。
(一四八)罕車。獵車なり。
(一四九)聿皇。輕疾の貌。
(一五〇)嘘陽。獸の名。
(一五一)天寶。陳寶神なり。
(一五二)騁聲。神の來る聲。
(一五三)雌雄。神の雌雄なり。
(一五四)囊括。囊に入れて口をくくること。
(一五五)沇沇溶溶。禽獸奔走の貌。
(一五六)芒然。疲るる貌。
(一五七)窮尤。倦怠の貌。闘與は舒緩の貌。
(一五八)紲踰。わたりこゆること。
(一五九)挈獲。搏つこと。
(一六〇)凌遽。をどりくるしむこと。
(一六一)蹴竦讋怖。懼れてちぢまること。

(一六三)創淫れて輪と夷かに、丘のごとく累り陵のごとく聚る。

【大意】天氣晴明なるに及び、逢蒙羿氏背を決し弦を控き、皇車轔轔として轉じ、望舒轡を按じて進み、上蘭觀に至りて獵圍を移し、部伍を促し部曲を整へしむ。士卒皆神電の擊つが如く、禽獸の逢ひ近づく者、皆破碎せられ、避け隱るるに遑あらず。軍師齊く起りて殺獲し、原野を掃ひ窮む。獵車飛騰し武騎疾走し、猛獸を踏み捕へ、陳寶神を追ひて一方より出づれば、神來りて其聲騁然たり、其光流星の如く、山野を窮め盡して、其雌雄を捕獲す。かくて禽獸皆奔走疲倦して網中に喘ぎ、士卒また芒然として懈怠し、ただ羣獸の超越窘蹙し、徒に角額を以て衝突し、慴怖のあまり、自ら車輪に觸れて頸を折るを見るのみ。箭は妄發すと雖も必ず中るを期し、進むも退くも、共に能く禽獸を殺獲し、禽獸創を負ひ、血流れて車輪と平に、斃れ臥す者丘陵の如し。是に於て、禽彈きて中ごろ衰へ、相與に(一六四)靖冥の館に集り、以て(一六五)珍池に臨む。灌ぐに(一六六)岐梁を以てし、溢るるに江河を以てし、東を瞰れば目盡き、西を暢めば涯なし。(一六七)隨珠和氏其波に(一六八)焯爍たり。玉石(一六九)礬釜、(一七〇)眩燿青熒、(一七一)漢女水に潛み、怪物(一七二)暗冥にして、殫く形すべからず。

(一六三)創。創血なり。
(一六四)靖冥。深閑なり。
(一六五)珍池。珍山の下にある池。
(一六六)岐梁。岐山梁山の地方。
(一六七)隨珠、和氏。ともに珠玉の名。
(一六八)焯爍。照りかがやくこと。
(一六九)礬釜。高大の貌。
(一七〇)眩燿青熒。光明の貌。
(一七一)漢女。漢水の女神。
(一七二)暗冥。潛み隱るる貌。

(一七三)玄鸞孔雀翡翠榮を垂れ、(一七四)王雎關關、鴻雁(一七五)嚶嚶として其中に羣り嬉れ、(一七六)噍噍として昆く明き、(一七七)鳧鷖振鷺上下して(一七八)砰磕たり。聲雷霆の若し。乃ち(一七九)文身の(一八〇)伎水をして鱗蟲を格たしめ、堅冰を凌ぎ巖淵を犯し、巖を探り碕を排ひ、(一八一)蛟螭を薄め索り、獱獺を蹈み、(一八二)黿鼉を據き(一八三)靈蠕を袪へ、(一八四)洞穴に入り(一八五)蒼梧に出で、鉅鱗に乘り鯨魚に騎り、(一八六)彭蠡に浮んで(一八七)有虞を目、方に(一八八)夜光の流離たるを椎ち、(一八九)明月の胎珠を剖き、(一九〇)洛水の宓妃を鞭ち、(一九一)屈原と(一九二)彭胥とに餉す。

【大意】禽獸既に盡きて暫く憩ひ、相與に深閑の館に集り珍池に臨む、池水遠く岐梁の地に灌ぎ、溢れて江河に入り、東望西視すれども際涯なく、珠玉波中に照耀し、玉石熒熒と

【一七三】玄鸞。以下皆鳥の名。羽毛極めて美し。
【一七四】王雎。鳥の名、雎鳩ともいふ、和名みさご。關關は和鳴の聲。
【一七五】嚶嚶。鳥の鳴く聲。
【一七六】噍噍。鳥の鳴く聲。昆は同なり。明は一本に鳴に作る。今之に從ふ。
【一七七】鳧鷖。かもめ。振鷺は羣り飛ぶ鷺。
【一七八】砰磕。翅を鼓する聲。
【一七九】文身。身にいれずみすること。越人なり。
【一八〇】伎水。水中に入りて魚蟲を捕ふること。
【一八一】蛟螭。龍の類なり。
【一八二】黿鼉。大龜なり。
【一八三】靈蠕。うみがめ。
【一八四】洞穴。禹穴なり、會稽郡に在り。
【一八五】蒼梧。郡名。
【一八六】彭蠡。湖の名。
【一八七】有虞。舜なり。南に巡狩して蒼梧の野に崩ず。
【一八八】夜光。玉の名。流離は光の陸離たる貌。
【一八九】明月。珠の名。蚌中より出づ。故に胎珠といふ。
【一九〇】洛水。川の名。宓妃は洛水の神女なり。邪神なる故に鞭つなり。
【一九一】屈原。楚の賢臣なり、君を諫めて容れられず、水に投じて自殺す。
【一九二】彭胥。彭咸と伍子胥。彭咸は殷の賢大夫にして自ら水に投じて死す。伍子胥は吳王夫差の怒に觸れ江に投ぜられて死す。

して神女怪物中に潛み、其形狀を盡すべからず。また水禽羽毛を輝して其中に和鳴し、翼を鼓すること雷霆の如く、乃ち越人文身の者をして水中に沒して魚鼈を捉へしむ。堅氷を凌ぎ深淵に入り、蛟螭を捕へ黿鼉を捉へ、禹穴に入りて蒼梧に出で、彭蠡に浮んで虞舜に面し、夜光明月の珠を取り、宓妃を鞭ちて屈原と彭胥とに餉す。

茲に於てか、(一九三)鴻生鉅儒(一九四)軒冕を俄け衣裳を雜へ、(一九五)唐典を脩め(一九六)雅頌を匡して、前に(一九七)揖讓し、昭光振燿、(一九八)響忽として神の如く、仁聲北狄を惠み(一九九)武誼南鄰を動かす。是を以て(二〇〇)旃裘の王、(二〇一)胡貉の長、珍を移して來り(二〇二)享し、手を抗げて臣と稱し、前は(二〇三)圜口に入り後は(二〇四)盧山に陳る。羣公(二〇五)常伯、(二〇六)楊朱墨翟の徒、喟然として並び稱して曰く、崇いかな德、(二〇七)唐虞大夏成周の隆なるありと雖も、何を以てか茲に侈らん。夫れ古の(二〇八)東嶽を覲し(二〇九)梁基に禪

【一九三】鴻生鉅儒。大儒先生なり。
【一九四】軒冕。軒は車。冕は冠なり。
【一九五】唐典。書經堯典なり。堯の政事を記せるもの。
【一九六】雅頌。詩經の詩體なり。政事を美せるもの。
【一九七】揖讓。拱手の禮をなしてへりくだること。
【一九八】響忽。蠁曾に同じ。疾速なり。
【一九九】武誼。武事なり。
【二〇〇】旃裘。毛にて織りたる衣戎狄の服なり。
【二〇一】胡貉。北方の夷人なり。
【二〇二】享。獻なり。
【二〇三】圜口。獵營の門なり。
【二〇四】盧山。單于南庭の山なり。
【二〇五】常伯。侍中なり。
【二〇六】楊朱、墨翟。戰國の賢人の名。
【二〇七】唐虞。堯舜なり。大夏は夏の禹王なり。成は周の成王周は周公。
【二〇八】東嶽。泰山なり。覲とは封禪の祭を行ふこと。
【二〇九】梁基。梁父なり、山の名。禪は封禪なり。

するも、此世を舍きて其れ誰と與にせんやと。(三一〇)上猶ほ謙讓して未だ俞りとせず。方に將に上(三一一)三靈の流を獵り、下(三一二)醴泉の滋を決し、黃龍の穴を發き鳳凰の巢を窺ひ、麒麟の囿に臨み神雀の林に幸し、(三一三)雲夢を奢とし(三一四)孟諸を侈とし、(三一五)章華を非とし(三一六)靈臺を是とせんとし、離宮に徂くこと罕にして觀遊を輟め、土事飾らず木功彫らず。人を農桑に丞め、之に勸むるに怠らざらんことを以てし、男女を儕うして違ふなからしめ、貧窮の者徧く洋溢の饒なるを被らざらんことを恐れ、禁苑を開き公儲を散じ、道德の囿を創め、仁惠の虞を弘め、神明の囿に(三一七)馳弋し、羣臣の有亡を覽觀し、雉兎を放ち(三一八)罝罘を收め、麋鹿(三一九)芻蕘、百姓と之を共にす。蓋し玆に臻れる所以なり。是に於て(三二〇)洪鬯の德を醇くし、(三二一)茂世の規を豐にし、三皇よりも加勞し五帝よりも(三二二)昻勤す、亦至らずや。乃ち(三二三)祇莊雍穆の徒、君臣の節を立て、賢聖の業を崇び、未だ苑囿の麗しく、遊獵の靡しきに遑あらざるなり。因つて軫を廻らし衡を還らし、(三二四)阿房に背いて(三二五)未央に反る。

【三一〇】上。天子なり。成帝を指す。
【三一一】三靈。日月星の祥瑞也。
【三一二】醴泉。瑞水なり。滋は湧なり。
【三一三】雲夢。楚の大澤の名。
【三一四】孟諸。宋の大澤の名。
【三一五】章華。楚王の臺の名。
【三一六】靈臺。周の文王の臺の名。
【三一七】馳弋。馳せ獵ること。
【三一八】罝罘。網なり。
【三一九】芻蕘。薪草なり。
【三二〇】洪鬯。洪大通暢なり。
【三二一】茂世。盛世なり。
【三二二】昻勤。勉勵なり。
【三二三】祇莊。恭敬なり。雍穆は和美なり。
【三二四】阿房。山の名。
【三二五】未央。宮殿の名。

【大意】是に於て有德の儒生、軒冕を列ね、衣裳を垂れて、堯典と雅頌とを修め、御前に揖讓して光明振燿す。此に因つて皇化遠く北狄南鄰に及び、蠻夷の君長、仁惠の風を聞き、皆珍物を獻じ、之に臣事せんことを請ひ、其徒を率ゐて來り、前は既に營門に入るも後は猶ほ盧山に列れり。羣公賢士乃ち君德を頌して曰く、我が君の德高いかな。堯舜の隆も何ぞ此に勝るを得んや。古の泰山梁父に封禪せる君主（管子に古の太山を封じ梁父に禪する者七十二家云云とあり）と雖も、我が君を棄てて誰と與にせんやと。成帝之を聞きて謙讓し、未だ以て然りとなさず。益其德を修め、祥瑞を來さんことを求め、雲夢孟諸の狩獵を以て奢侈となし、楚王章臺の臺を非とし周文の靈臺を是とし、離宮に幸すること稀にして遊觀の事を止め、土木を事とせず。民に農耕を勸め、天下の男女をして期に違はずして婚姻せしめ、貧者の饒衍の樂を被らざるを恐れ、禁苑を開き倉廩を發き、道德を制して苑囿となし、仁惠を廣めて虞人となし、祥福の囿に馳せ、羣臣の有無を觀、雉兎を獵らず網罟を用ひず。麋鹿薪草は百姓と共にして禁禦せず。此れ今日の隆を致せる所以なり。是に於て大通の德を厚くし、隆世の法を廣め、勤勞すること三皇五帝に過ぐ。是に於て和美恭敬の臣、君臣の禮、賢聖の業を尙び、未だ苑囿の麗、遊獵の奢をなすに遑あらず。乃ち車を廻らして未央宮に歸る。

卷の第五

賦戊

畋獵下

(一)長楊の賦並序

揚子雲

(二)明年、(三)上將に大に胡人に誇るに禽獸の多きを以てせんとす。(四)秋、右扶風に命じて、民を發して(五)南山に入り、西のかた(六)褒斜より東のかた(七)弘農に至り、南のかた(八)漢中に(九)敺り、(一〇)羅網罝罘を張り、熊羆豪豬、虎豹狐狸、狐兎麋鹿を捕へ、載するに(一一)檻車を以てし、長楊の射熊館に輸し、網を以て(一二)周阯となし、禽獸を其中に縱ち、胡人をして手づから之を搏ちて、

【一】長楊。宮の名。
【二】明年。羽獵賦を作りし明年なり。漢書成帝紀に元延二年冬長楊宮ニ幸シ胡客ヲ縱チテ大ニ校獵スとあり。
【三】上。天子の稱。成帝を指す。
【四】秋。冬將に校獵せんとす、故に秋先づ之を命ずるなり。右扶風は郡名。
【五】南山。山の名、終南山なり、長安の南にあり。
【六】褒斜。谷の名。
【七】弘農。郡の名。
【八】漢中。郡の名。
【九】敺。一本に驅に作る。
【一〇】羅網罝罘。禽獸を捕ふる網。
【一一】檻車。獸を載する車、上に欄檻を施せるもの。
【一二】周阯。禽獸を遮る圍陣なり。

自ら其獲を取らしめ、上親しく臨み觀る。この時農民(二二)收斂するを得ず。雄從つて射熊館に至り、還りて長楊の賦を上る。聊か筆墨の文章を成すに因る。故に(二四)翰林を藉りて以て主人となし、(二五)子墨を客卿となし以て諷す。其辭に曰く、

子墨客卿、翰林主人に問ひて曰く、蓋し聞く、聖主の民を養ふや、仁霑ひて恩洽く、動くに身の爲にせずと。今年長楊に獵し、先づ右扶風に命じ(二六)太華を左にして褒斜を右にし、(二七)巖薛に椓ちて弋となし、南山を紆して以て罝となし、(二八)千乘を林莽に羅ね、萬騎を山隅に列ね、軍を帥ゐて(二九)阹に踤り、(二〇)戎に錫ひて胡に獲しめ、熊羆を搤り豪豬を拖き、(二一)木擁槍纍以て(二二)儲胥となす。此れ天下の窮覽極觀なり。然りと雖も亦頗る農人を擾はすと三旬有餘、(二三)其廛至れり、而かも功圖らず。恐らくは識らざる者之を外にしては、則ち以て娛樂の游となし、之を內にしては則ち以て(二四)乾豆の事となさざらんことを。豈民の

【二三】收斂。民皆禽獸を驅りて收穫をなす能はざるなり。
【二四】翰林。翰は筆なり、其多きこと林の如し、故に翰林といふ。猶ほ博士といふが如し。
【二五】子墨。子は男子の通稱。假に設けて人名となす。
【二六】太華。山の名、長安の東に在り、故に左といふ。
【二七】巖薛。山の名。
【二八】千乘。獵車千乘なり。
【二九】阹。圍陣なり。
【二〇】戎、胡。ともに夷人をいふ。
【二一】木擁。外に柵を作ることと。槍纍は竹槍を作り纍ねて柵とすること。
【二二】儲胥。藩籬なり。
【二三】其廛。廛は勤の古字。
【二四】乾豆。祭の時供物を盛る器。禮記に天子無事ナレバ則チ歲ニ三タビ田ス、一ハ乾豆ノ爲ニシ、二ハ賓客ノ爲ニシ、三ハ君ノ庖廚ニ充ツルガ爲ニスとあり。

爲ならんや。且つ人君は(二五)玄默を以て神となし、(二六)澹泊を德となす。今遠出を樂んで以て威靈を露し、數搖動して以て車甲を疲らす。本より人主の急務にあらず。(二七)蒙竊に惑へりと。翰林主人曰く、吁客何ぞ茲を謂ふや。客の若きは所謂其一を知りて、未だ其二を覩ず、其外を見て其內を識らざるなり。僕嘗て談に倦む。其詳を一二する能はず。請ふ略其凡を舉げん。客自ら其の切なるを覽よと。客曰く(二八)唯唯と。

【大意】子墨客卿、翰林主人に問うて曰く、吾聞く聖天子の民を養ふや、恩德を民に洽くして、我が身の爲にせずと。成帝今年長楊に獵し、先づ右扶風に命じて、東は華山より西は褒斜に至るまでを獵場とし、弋を巖薛に椓ちて網を繫くる橛となし、終南山の周屈を取りて網となし、車騎を山林の閒に列ねて禽獸を驅らしめ、胡人に賜ひて自ら獲しむ。此れ實に天下の壯觀なり。然れども農民を擾亂せること三十餘日にして、民の勞苦至れり而して其功なし。要するに無益の事なり。恐らくは事理を解せざる者、視て以て娛樂の爲にして乾豆の爲にあらず。民の爲に謀る所以にあらずとなさんことを。且つ天子は無爲清淨を以て德となす。今成帝遠遊を樂んで威靈を暴露し、數士卒を動して之を勞す。此れ決して天子の急務にあらず。余大に惑へりと。翰林主人之に答へて曰く、

【二五】玄默。無爲なり。
【二六】澹泊。清淨なり。
【二七】蒙。愚昧なり、謙稱なり。
【二八】唯唯。應諾の辭。

吁足下過てり。足下は所謂其一を知りて未だ其二を知らざる者なり。吾屢此事の利害を談じて今已に倦めり。其詳を說く能はず。ただ其大略を言はん。足下自ら解悟せよと。客卿答へて曰く唯唯と。主人曰く、昔彊秦あり其土を(二九)封豕し、其民を(三〇)窫窳し、(三一)鑿齒の徒、相與に牙を磨きて之を爭ひ、豪俊麋沸雲擾して、(三二)羣黎之が爲に康からず。是に於て(三三)上帝(三四)高祖を眷顧し、高祖(三五)命を奉じ(三六)斗極に順ひ(三七)天關を運し、巨海を横り崑崙に漂ひ、劒を提げて之を叱し、過ぐる所城を麾き邑を摧き、將を下し旗を降す。一日の戰殫く記すべからず。この勤に當り、頭蓬のごとくなるも梳るに暇あらず、飢うるも餐ふに及ばず。(三八)鞮鍪蟻蝨を生じ介冑霑汗を被り、以て(三九)萬姓の爲に命を(四〇)皇天に請ひ、廼ち民の屈せる所を展べ、民の乏き所を振ひ、億載を規り帝業を恢にし、七年の閒にして天下(四一)密如たり。(四二)聖文に至るに逮んで、風に隨ひ流に乘じ、方に意を至寧に垂れ、躬ら節儉を服し、(四三)綈衣は弊れざるばかり革鞜は穿たざるばかりにし、大厦には

【二九】封豕。大豬なり、人を害するに喩ふ。
【三〇】窫窳。惡獸の名、貙に類し虎の爪あり、人を食ふ。
【三一】鑿齒。惡獸の名。
【三二】羣黎。百姓なり。
【三三】上帝。天帝なり。
【三四】高祖。漢の高祖。
【三五】命。天の命なり。
【三六】斗極。北斗星なり。
【三七】天關。北斗星また天關ともいふ。
【三八】鞮鍪。兜なり。
【三九】萬姓。百姓なり。
【四〇】皇天。天なり、天帝なり、命を請ふとは、いのちごひをすること。
【四一】密如。靜肅なること。
【四二】聖文。文帝なり、高祖の子。
【四三】綈衣。黑衣なり。

居らず木器は文なし。是に於て(四四)後宮(四五)瑇瑁を賤みて(四六)珠璣を疏んじ、(四七)翡翠の飾を卻けて雕琢の巧を除き、麗靡を惡んで近づけず、芬芳を斥けて御せず。絲竹(四八)宴衍の樂を抑止し、(四九)鄭衞幼眇の聲を聞くを憎む。是を以て(五〇)玉衡正くして(五一)太階平かなり。

【大意】翰林主人曰く、昔强秦の其人民を殘害するや、暴惡の徒之に傲ひ相與に爪牙を磨き爭つて人を害す。此に因りて豪傑竝び起りて人民塗炭に苦む。此時高祖天命を受けて帝位に卽き、北斗の運轉するが如く、以て亂暴を討ち、東は海に至り西は崑崙に至るまで、過る所城邑を破り將帥を降し、頭髮修むるに遑なく飢うるに食ふに及ばず。兜は蝨を生じ甲冑汗に霑ひ、以て天下人民の爲に命を天に請ひ、人をして各其情を遂ぐるを得しめ、以て長久の道を謀り帝業を大にし、七年にして天下安寧なり。文帝また高祖の遺風に隨ひ心を安寧の術に留め、自ら節儉を行ひ、衣履弊れざれば改め造らず、大屋には住まず、器具を飾らず。後宮婦人また之に傲ひ、珠玉を貴ばず彫飾を排斥し、邪淫の樂を聞かず。是を以て天下太平なり。

【四四】後宮。宮中の婦人をいふ。
【四五】瑇瑁。鼈甲の類。
【四六】珠璣。珠玉なり。
【四七】翡翠。鳥の名、毛羽極めて美し、以て服飾となす。
【四八】宴衍。邪淫なり。
【四九】鄭衞。淫靡なる音樂。幼眇は精微なり。
【五〇】玉衡。北斗星なり。
【五一】太階。三階の星なり、此の三星正平なる時は天下平かなり。

其後、(五二)熏鬻虐を作し、東夷横に叛き、(五三)羌戎匪背し(五四)閩越相亂れ、(五五)遐邇之が爲に安からず。中國その難を蒙被る。是に於て(五六)聖武勃怒し、爰に(五七)其旅を整へ、乃ち(五八)驃衞に命じ(五九)汾沄沸渭として雲合電發し、猋騰波流し、機駭鑾軼し、疾きこと奔星の如く擊つこと震霆の如く、(六〇)轒轀を碎き(六一)穹廬を破り、(六二)沙幕に腦し(六三)余吾に髓し、遂に(六四)王庭を蹴んで(六五)橐駝を驅り、(六六)煨蠡を燒き、(六七)單于を分勢し(六八)屬國を磔裂し、(六九)阬谷を夷げ(七〇)鹵莽を拔き、山石を刊り、屍を蹂み(七一)厮を輿にし、老弱を(七二)係累し、(七三)啗鋌に瘢者し金鏃に(七四)淫夷する者數十萬人、皆(七五)稽顙して領を樹て、(七六)扶服して蛾のごとく伏し、二十餘年尚敢て(七七)惕息せず。夫れ(七八)天兵四に臨み、(七九)幽都先づ加へられ、戈を廻らして邪に指せば、南越相夷げ、(八〇)節を靡して西征すれば(八一)羌僰東に馳す。是を以て(八二)遐方疏俗、(八三)殊鄰絶黨の域、(八四)上仁の化せざる所、茂德の綏んぜざる所より、足を蹻げ首を抗げて、厥珍を獻ぜんことを請はざるはなく、海内をして(八五)澹然として、永く邊城の災、(八六)金革の患なからしむ。

【大意】匈奴我が邊民を虐害し、東夷また叛亂し、羌と戎と相和せず、閩と越と相攻伐し、邊民安からず中國亦其難を蒙る。武帝乃ち震怒し、霍去病衞青等の諸將に命じて征伐せしむ。王師盛衆にして其威雷霆の如く、頭腦を沙漠に碎き骨髓を余吾の水に投じ、遂に匈奴の王庭に至り、聚落を燒き其王を殺し、其屬臣を磔し、其屍を蹂踐し役卒を轢殺し、賊の負傷する者亦數十萬人、皆稽顙匍匐して降り、二十餘年を歷るも、尚ほ我が漢の威を懼れて屏息す。夫れ漢兵の四方を征討するや、先づ北方匈奴を伐ち、戈を回らして南に向へば南越相攻伐して以て漢に降り、旌旗を靡かして西征すれば羌僰人相率ゐて入朝す。是を以て上古有德の君主と雖も安んずる能はざりし者、來朝して珍物を獻ぜんことを請はざるはなく、海内安寧にして永く戰亂の患なきに至れり。

【五一】熏鬻。匈奴也。北狄の名。
【五二】羌戎。ともに夷狄の名。
【五三】匪背。目を怒らす貌。
【五四】閩越。ともに南夷の名。
【五五】遐邇。遠方の人民。
【五六】聖武。武帝なり。
【五七】其旅。旅は軍勢なり。
【五八】驃衞。驃は霍去病。衞は衞青。漢書に霍去病驃騎將軍トナリ、凡ソ六タビ出デテ匈奴ヲ擊ツ、また衞青大將軍トナリ凡ソ七タビ出デテ匈奴ヲ擊ツとあり。
【五九】汾沄沸渭。衆盛の貌。
【六〇】轒轀。匈奴の車。
【六一】穹廬。旃帳也、匈奴の家。
【六二】沙幕。沙漠なり。匈奴の地にあり。
【六三】余吾。川の名、匈奴の地にあり。
【六四】王庭。匈奴の王庭なり。
【六五】橐駝。駱駝なり。
【六六】煨蠡。匈奴の聚落の名。
【六七】單于。匈奴の王なり。
【六八】屬國。匈奴の屬國なり。
【六九】阬谷。山谷なり。
【七〇】鹵莽。鹵は西方の鹹地、莽は草野なり。
【七一】厮。役卒なり。
【七二】係累。しばること。
【七三】啗鋌。ホコなり。瘢者は傷を負ふこと。
【七四】淫夷。淫は過なり、負傷すること。
【七五】稽顙。叩頭して手額に至るなり。
【七六】扶服。匍匐に同じ。
【七七】惕息。惕は疾なり、息は喘なり、漢の威を懼れて敢て惕息せざるなり。

【七八】天兵。天子の兵。
【七九】幽都。北方匈奴の地。
【八〇】節。旗なり。
【八一】羌僰。西戎の名。
【八二】遐方疏俗。遠方の異國。
【八三】殊鄰絶黨。外國をいふ。
【八四】上仁、茂德。古の有德の君をいふ。
【八五】澹然。安然なり。
【八六】金革。戰亂なり。

今朝廷純仁にして道に遵ひ義を顯し、書林を幷せ包ねて聖風雲のごとく靡き、英華沈浮して（八七）八區に洋溢し、普天の覆ふ所（八八）沾濡せざるはなく、士王道を談せざる者あれば、則ち樵夫も之を笑ふ。意者に以爲へらく、事隆にして殺せざるはなく、物盛にして虧けざるはなしと。故に平かなれども險を肆てず、安けれども危きを忘れず。廼ち時に（八九）年あるを以て、兵を出し輿を整へ（九〇）戎を竦め、（九一）師を五柞に振へ、馬を（九二）長楊に習し、力を狡獸に簡び、武を（九三）票禽に校へ、廼ち（九四）萃然として（九五）南山に登り（九六）烏弋を瞰、西のかた（九七）月出を厭ぎ、東のかた（九八）日域を震はす。又恐らくは後代一時の事に迷ひ、常に此を以て國家の大務となし、（九九）田獵に淫荒し（一〇〇）陵夷して禦まざらんことを。是を以て車は（一〇一）軔を安んぜず、日は未だ旃を靡かせざるに、從者彷彿として（一〇二）骫屬して還る。亦（一〇三）太尊の烈を奉

【八七】八區。八方なり。
【八八】沾濡。德化にうるほふこと。
【八九】年あり。豐年なるをいふ。
【九〇】戎。軍旅なり。
【九一】師。軍勢なり。五柞は宮の名。
【九二】長楊。宮の名。
【九三】票禽。輕疾の禽なり。
【九四】萃然。集る貌。
【九五】南山。終南山なり。
【九六】烏弋。國の名、西域傳に長安ヲ去ルコト萬二千二百里とあり。
【九七】月出。一に月窟に作る、月の出る所の穴なり。西に在り。
【九八】日域。日の出づる處、東にあり。
【九九】田獵。狩獵なり。淫荒は耽ること。
【一〇〇】陵夷。馴致といふが如し。
【一〇一】軔。輪を支ふる木、はどめ。
【一〇二】骫屬。骫は委の古字、事を委棄すること、屬は引き續くこと。
【一〇三】太尊。高祖をいふ。烈は業なり。

（一〇四）文武の度に遵ひ、（一〇五）三王の田に復り五帝の（一〇六）虞に反る所以なり。

【大意】今帝德純厚にして道義にかなひ、書學の林を兼包し、聖風雲の如く靡靡として進み、德化八方に溢れて、人皆之に沾はざるはなし。故に士にして王道を談せざる者あれば、樵夫も之を笑ふに至れり。然も帝意に以爲へらく、凡そ事隆盛にして虧損せざるはなしと。故に平安に居て險危を忘れず。今幸に豐年に會せるを以て、車輿を整へ軍旅を勸め、以て武を練らんと欲し、南山の上に集りて西のかた烏弋國を瞰る。是に於て西は月窟を壓し東は日域に及ぶまで、聖德遠く及ぶ。然れども帝又後世今の狩獵を見て國家の大務を誤解し、狩獵に耽る者あらんことを恐る。故に永く車輿を留めず日未だ旌旗の影を移すに及ばずして歸る。是れ高祖文帝武帝の事業に遵ひ、古聖王の狩獵に倣ふ所以なり。

農をして耰を輟めず、（一〇七）工をして機を下らざらしめ、婚姻時を以てし、男女違ふなからしめ、（一〇八）愷悌を出し簡易を行ひ、（一〇九）劬勞を矜み力役を休し、（一一〇）百年を見て（一一一）孤弱を存ひ、帥ゐて之と苦樂を同うし、然る後鐘鼓の樂を陳ね（一一二）鞀磬の和を

【一〇四】文武。文帝及び武帝。
【一〇五】三王。羽獵賦、二七を見よ。
【一〇六】虞。山澤を掌る官、ここは狩獵の意に解して可なり。
【一〇七】工。女工なり。
【一〇八】愷悌。やはらぎ樂むこと。詩經に悌悌ノ君子ハ民ノ父母ナリとあり。
【一〇九】劬勞。苦勞に同じ。
【一一〇】百年、百歲の老人なり、禮記に百年ノ者ニハ就テ之ヲ見ルとあり。
【一一一】孤弱。孤はミナシゴ、弱は幼なり。
【一一二】鞀磬。鞀はフリツヅミ、磬は石にて作れる樂器。

鳴らし、碣磍の(二三)虡を建て(二四)鳴球を戛擊し、(二五)八列の舞を掉かし、(二六)允鑠を酌み(二七)樂胥を肴にし、廟中の(二八)雍雍を聽き、神人の福祜を受け、歌は頌に投じ吹は雅に合ふ。其勤此の若し。故に眞神の(二九)勞する所なり。方將に(二〇)元符を俟ちて以て(二一)梁父の基に禪し、泰山の高きに增し、光を將來に延き、榮を(二二)往號に比べんとす。豈徒に淫麗浮觀し、秔稻の地に馳騁し、梨栗の林に(二三)周流し、(二四)芻蕘を蹂踐し、(二五)衆庶に誇詡し、(二六)狖玃の收を盛にし、麋鹿の獲を多くせんと欲するのみならんや。且つ盲者は(二七)咫尺を見ざれども、(二八)離婁は千里の隅を燭す。客は徒に胡人の我が禽獸を獲るを愛み、曾て我も亦已に其王侯を獲たるを知らずと。言未だ卒らざるに、墨客席を降り再拜(二九)稽首して曰く、大なるかな(三〇)體や、允に(三一)小人の能く及ぶ所にあらず。廼ち今日(三二)矇を發き(三三)廓然として已に昭かなりと。

【大意】乃ち農夫は耕を輟めず、工女は織るを廢せざらしめ、嫁娶は時を以てして違ふことなからしめ、愷悌の道を天下に示し簡易を以て下を治め、民の苦勞を憂へ老幼を憐み、相帥ゐて民と苦樂を同うし、然る後歌舞を行ひ、信美を酌んで酒に當て、喜樂を以て肴に當て、謹んで祖廟を祭り神人の祜を受け、歌聲は頌と相投じ、吹聲は雅樂と相合ふ。其の勤勞此の如し。神祇の報を受くるも亦宜なり。今や大瑞を待ちて泰山梁父に封禪の禮を行ひ、光輝を將來に傳へ、榮華を古聖王に比せんとす。豈徒秔稻梨栗の地に馳せて狩獵を恣にし、捕獲の多きを誇らんや。それ盲者は咫尺を見るを得ざるも、離婁は千里の遠きを視る。足下は胡人の我が禽獸を獲るを吝むも、我亦已に胡王をして來朝せしめぬ。是れ卽ち胡王を獲たるなり。何ぞ禽獸を吝むを須ひんや。足下此理を悟らず。豈に盲者にあらずや。と。翰林主人の言未だ終らざるに、子墨客卿其席を降り、再拜して曰く、偉大なるかな我が國體や。誠に下愚の能く知る所にあらざるなり。今主人我が蒙を啓き給ひ、廓然として昭明ならしめたりと。

【一一】虡。鐘を懸くる架なり、猛獸を其上に刻す。碣磍は獸の怒る貌。
【一二】鳴球。玉磬なり、樂器の名。戛擊は打ち鳴らすこと。
【一三】八列。八佾なり、八行に舞人の竝ぶこと。
【一四】允鑠。信美なり。
【一五】樂胥。たのしみよろこぶこと。
【一六】雍雍。敬謹の貌。
【一七】勞。慰勞といふが如し。勤勞に報ゆること。
【一八】元符。大瑞なり。
【一九】梁父。山の名。
【二〇】往號。三王なり。
【二一】周流。周遊なり。
【二二】芻蕘。草薪なり。
【二三】衆庶。人民なり。誇詡は誇示すること。
【二四】狖玃。獸の名。
【二五】咫尺。咫は八寸、尺は一寸。眼前の近き處をいふ。
【二六】離婁。古の明目者の名。
【二七】稽首。首を垂れて地に至ること。
【二八】體。法といふが如し。
【二九】小人。子墨客卿自ら謙して言ふ。

【二〇】矇。蒙に同じ、愚蒙を開發すること。
【二一】廓然。除き去る貌。

(一)射雉の賦

潘安仁

青林を涉りて以て游覽し。(二)羽族の羣り飛ぶを樂む。(三)采毛の英麗なるを聿ぶるに、五色の(四)名翬あり。(五)耿介の專心を厲し、雄豔の婚姿を參り、丘陵を巡りて以て(六)經略し、(七)墳衍を畫りて(八)畿を分つ。是に於て(九)青陽謝を告げ、(一〇)朱明肇めて授け、木として滋らざるはなく、草として茂らざるはなし。初莖(一一)蔚として其れ新を曜かし、陳柯(一二)摵として以て舊を改め、天(一三)泱泱として以て雲を垂れ、泉(一四)涓涓として(一五)溜を吐き、麥(一六)漸漸として以て芒を擢で、雉(一七)鸛鸛として朝に雊く。(一八)箱籠を眄みて以て(一九)揭驕たり、(一〇)驍媒の變態を睨る。勁骸を奮つて以て角に搓ち、悍目を瞬りて以て旁く睞る。

【一】射雉。雉を射るなり、序に余家ヲ琅邪ニ徙ス、其俗實ニ善ク射ル、聊カ講肄ノ餘暇ヲ以テ媒翳ノ事ヲ習フ遂ニ樂ンデ之ヲ賦スとあり。媒とはチトリなり、翳は隱れて射るなり。

【二】羽族。鳥類なり。

【三】采毛。美しき羽毛なり。

【四】名翬。名高き雉。

【五】耿介。堅く節操をとり守ること。雉は性耿介なり。

【六】經略。はかりをさむること。

【七】墳衍。丘陵と平澤。

【八】畿。境界なり。

【九】青陽。春をいふ。謝は去ること。

【一〇】朱明。夏をいふ。

【一一】蔚。盛なる貌。

【一二】摵。木の葉の落つる聲。

【一三】泱泱。白雲の貌。

【一四】涓涓。泉の流るる聲。

【一五】溜。小流なり。

【一六】漸漸。麥の秀づる貌。

【一七】鸛鸛。雉の鳴く聲。

【一八】箱籠。カゴなり、媒を入れ置くなり。

【一九】揭驕。驍健なる貌。

【二〇】驍媒。勇健なるチトリ。

(二一)鶯たる綺翼ありて頰搗あり、(二二)灼たる繡頸ありて(二三)袞背あり。(二四)鬱として(二五)軒翥して以て餘怒あり、長鳴して以て能を效さんことを思ふ。爾して乃ち場を墾ひ翳を抂て、(二六)停僮葱翠、(二七)綠栢參差として(二八)文翮鱗次し、(二九)蕭森繁茂して(三〇)婉轉輕利なり。衷は(三一)料戾して以て徹鑒し、表は(三二)厭躡して以て密緻なり。吾が游の晏く起たんことを恐れ、(三三)原禽の至る罕なるを慮り、心を企て想ふに疲らすを甘んじ、目を倦ましめて以て視を寓するを分とす。

【大意】青林を經て遊覽し、鳥類の羣飛するを樂む。就中羽毛の美麗なる者を述ぶれば、五彩の燦爛たること雉に如くはなし。雉は氣象雄嚴、其色豔美にして、丘陵を周行し、墳衍に因りて疆界を立て、分ちて之を護り相侵越せず。(以上雉の形性を言ふ)春去り夏來るや、草木俱に榮え、初生の莖は其新暉を曜かし、摵摵たる枯枝も其舊色を變じ、白雲天に垂れ幽泉涓涓として流れ、麥秀で雉雊く。(以上節物氣候の射雉に適するを言ふ)因つて箱籠を顧視し、驍媒を詳察す

【二一】鶯。文章ある貌。

【二二】灼。光明の貌。

【二三】袞背。袞服の如き紋章ある背なり。

【二四】鬱。暴怒の貌。

【二五】軒翥。飛びあがること。

【二六】停僮。翳の貌。葱翠は翳の色。

【二七】綠栢。翳の上に加ふる栢葉なり。

【二八】文翮。美しき羽なり。鱗次は鱗の如くならぶこと。

【二九】蕭森繁茂。茂る貌。

【三〇】婉轉。綢繆する貌。

【三一】料戾。小窓の隙なり。徹鑒はとほりて見ゆること。

【三二】厭躡。重りて密なること。

【三三】原禽。雉なり、雉は下濕の地に居らず、故に原禽といふ。

るに、揭驕にして態を變じ、勁足を奮ひ利距を以て邪に斫り、悍戾の目を怒らし以て旁く顧視し、翼は綺文の如く、髀は赤色を帶び、頸は繡彩の如く、背は袞服の如く、高く飛んで餘怒を奮ひ、長く鳴いて技能を效さんことを思ふ。（以上媒の形勢を言ふ）乃ち地を除きて場を作り、翳を草上に抂て、翳上に栢葉の參差たるを加ふ。其狀鳥翮の鱗次するが如く、之を望めば草樹の森茂するが如く、之を執れば綢繆して輕利なり。其裏に小隙あり以て外を徹鑒るべく、其表は則ち重布緻密にして、其內を見るべからず（以上翳の形飾を言ふ）媒の起つこと早からず、野雉の至ること稀なるを恐れ、心を疲らし踵を擧げて望み、目を疲らして注視するを甘んず。（以上翳を設けて後野雉を獲るを待つ狀を述ぶ）。

何ぞ(三四)調翰の(三五)喬桀なる、(三六)疇類に邈にして才を殊にし、(三七)扇の擧がるを候ちて淸く叫き、(三八)野聲を聞いて媒に應ず。微罟を褰げて以て長く眺れば、已に(三九)踉蹡として徐に來る。朱冠の(四〇)赩赫たるを擿べ、藻翰の(四一)陪鰓たるを敷き、首に(四二)綠素を葯ひ身に(四三)黼繪を挖き、(四四)青鞦莎のごとく靡き、丹驩蘭のごとく綷る。

【三四】調翰。調練せられたる羽、媒をいふなり。
【三五】喬桀。俊逸なり。
【三六】疇類。ナカマなり。
【三七】扇。布巾なり、媒をして鳴かしめんとする時は扇を振ひて合圖するなり。
【三八】野。野雉なり。
【三九】踉蹡。雉の行く貌。
【四〇】赩赫。赤色の貌。
【四一】陪鰓。奮怒の貌。
【四二】綠素。綠と白。
【四三】黼繪。黼は繡なり、繪は畫文なり。
【四四】青鞦。尾間の青毛なり。

或は蹶り或は啄み、時に行き時に止まり、斑尾(四五)翹を揚げ、雙角特に起つ。(四六)良遊呃喔して之を(四七)規裏に引く。叱に應じて愕き立ち、身を擢んで(四八)竦峙す。(四九)黃間を捧げて以て密に彀り、(五〇)剛挂を屬けて以て潛に擬すれば、倒禽紛として以て迸り落ち、(五一)機聲振ひて未だ已まず。(五二)山鷩悍害にして(五三)猋迅なること已甚しく、壑を越え岑を凌ぎ、飛鳴して(五四)廩に薄る。(五五)牙を鯨げ鏃を低れ、心平かにして望審なり。毛體摧け落ち(五六)霍として碎錦の若し。逸羣の(五七)儁、場を擅にして(五八)兩を挾み、雌を櫟ち異を妬み、倏ち來り忽ち往く。上風の(五九)餮切たるを忌み、映日の(六〇)儻朗たるを畏れ、(六一)發布を屏けて(六二)累息し、徒に心煩ひて(六三)伎懺す。伊れ(六四)義鳥の敵に應じ、啾いて地を擾ち以て響を厲うす。彼れ音を聆いて逕に進み、忽ち距を交へて以て壤を接す。(六五)彤窻に盈ちて以て美く發すれ

【四五】翹。尾の長毛なり。
【四六】良遊。よきをとり。呃喔。鳴くこと。
【四七】規裏。射るべき範圍の中。
【四八】竦峙。立ちどまること。
【四九】黃間。弩の名。
【五〇】剛挂。矢の名。
【五一】機聲。弩機の聲。
【五二】山鷩。野雉なり。
【五三】猋迅。颱風の如く疾きこと。
【五四】廩。翳なり。
【五五】牙。弩牙なり。
【五六】霍。披散する貌。
【五七】儁。俊に同じ、すぐれたる雉。
【五八】兩。兩雌なり。
【五九】餮切。微動の聲。
【六〇】儻朗。不明の貌。
【六一】發布。巾布なり。
【六二】累息。息をころしてゐること。
【六三】伎懺。技を逞うせんと欲して能はず、もどかしく感ずること。
【六四】義鳥。媒雉なり。
【六五】彤。赤色なり。窻は翳窻なり。

ば紛として首頽つて臆仰ぐ。

【大意】　媒雉何ぞ俊逸なる。喬桀たること遙に疇類を出づ。我が巾を振つて合圖するを待ちて、乃ち淸聲を發して鳴く。野雉其聲を聞き、之に應じて來る。我乃ち翳戸を開いて長視し、已に野雉の徐行して來るを見る。朱冠高く立ち藻翰怒り張り、首に綠白毛をまとひ、身に文繡を曳き、尾間の靑毛は莎草の如く、膺色赤くして秋蘭の如く、或は走り或は啄み、或は行き或は止まり、尾毛を揚げ首角を立つ（以上野雉の壯なる貌を言ふ）媒雉鳴いて誘ひ、之を射るべきの規内に入らしむれば、野雉媒雉を望んで來ること速にして止らず。我れ規度を失はんことを恐れて之を叱す。野雉乃ち愕然として立つ。因つて弓弩を彀り、矢を弦に注ぎ、潛に以て之を射れば、弩聲尙ほ未だ已まざるに箭を被りて反り落つ。然も其性剽悍にして、媒雉を追ひて來ること飈風の如く、澗を越え岑を超え、來りて翳前に迫る。乃ち弩牙矢鏃を擎げて以て之に就き、心を用ふること和平にして、望むこと審定なり。之を飛中に射れば、毛體披散して、錦の分散するが如し。この超羣の野雉ただ場を擅にするのみならず。又兩雌を伴へり。今他雄（媒雉）の鳴くを聞き、則ち之を妬んで其雌を擊ち、忽ち往來して媒雉と鬪ふ。我風の微動し、日光の映照し、野雉の人あるを覺りて逸し去らんことを畏れ、巾布を屛けて敢て發せず。息を殺して煩悶し、伎懷の感に堪へず。媒雉敵（野雉）

の來擊に應じ、地を攫ちて鳴き、益其音聲を厲すや、野雉其聲を聽きて、忽ち進み來り、距を交へて相鬪ひ、其光彩翳窓に當る。此に乘じて矢を發すれば、正に其頸に中り、首傾いて後に回り、臆仰いで乃ち斃る。

或は乃ち崇墳夷れ靡びて、農、壠を易めず、稊(六六)叢糅して(六七)翳薈萃茸たり。鳴雄羽を振ひて其(六八)家に依り、(六九)捫として丘を降りて以て(七〇)敵に馳せ、形隱れたりと雖も草動く。(七一)挺穟の傾き掉くを瞻て、(七二)意淡躍して以て振ひ踊り、(七三)暾として苗を出でて以て場に入れば、愈情駭いて神悚る。望黶く合ひて翳皛なれば雉肩を脥めて踵を旋らす。余が志の精鋭なるを倣び、靑顱を擬して項に點つ。亦(七四)目ありて體に步せず、邪に眺て旁く剔き、聞くなくして驚き、見るなくして自ら驚き、周環廻復し(七五)繚繞盤辟すれば、翳を戾らし(七六)把を旋らし、縈りて歷る所に隨ふ。(七七)彳亍して中ごろ輟り、(七八)馥焉として鏑に中り、前には重膺を剛き、傍には疊翮を截る。若

【六六】叢糅。雜生すること。
【六七】翳薈萃茸。雜草叢茂する貌。
【六八】冢。山頂なり。
【六九】捫。疾き貌。
【七〇】敵。媒雉なり。
【七一】挺穟。草莖なり。
【七二】淡躍。躍り立つこと。
【七三】暾。漸く出づる貌。
【七四】目あり。國語に單襄公曰ク、晉侯ハ日體ニアラズ、足目ニ步セズとあり、視ること體と違ふなり。
【七五】繚繞盤辟。めぐりめぐること。
【七六】把。翳の方向を轉ずるトリテなり。
【七七】彳亍。行く貌。
【七八】馥焉。鏃にあたる聲。

夫れ疑多く決少く、膽劣く心狷く、内には固守なく、出でては交戰せず、來ること處子の若く、去ること激電の如く、蘚葉を闕ひ閤、(七九)幎歷として乍ち見ゆ。是に於て(八〇)分銖を算へ(八一)遠邇を商り、(八二)懸刀を揆り絶伎を騁すれば、轆るが如く軒るが如く、高からず埤からず、殊に當り胷に値り、膝を裂き嘴を破る。

【大意】或は田塘荒廢し、雜草繁茂する處、雉其中に隱れ、羽翼を振ひて其頂に止まり、捫然として高丘を降りて媒雉に奔馳するや、其形體草間に隱ると雖も、草の動くを覺ゆ。因つて草莖の傾動するを見て、雉の將に來らんとするを知り、我意躍動して定まらず。雉、草間を出でて射場に入れば、我が情いよいよ驚き、之を射るも或は中らざらんことを恐る。雉既に射場に入り諸處を望み、草木鬱然として四合し、たゞ翳のみ皛然として獨り顯なるを見て、其心に之を疑ひ、乃ち身を斂めて草間に歸らんとす。我乃ち志の專精なるを欣び、後より其頭を射れば、正に其項に中る。亦視と體と相違ひ、目は斜に望み足は旁く驚き、驚疑多くして周廻止まざるの雉あり。我乃ち翳の柄を轉じて、雉の赴く所に隨ひ、以て雉をして己を見ざらしめ、雉の行きて小憩するや、此に乘じて之を射、馥然として中て、前には重

【七九】幎歷。隱見する貌。
【八〇】分銖。弩牙の後に刻して矢の至る所の遠近を示すメモリなり。照準なり。
【八一】遠邇。遠近なり。
【八二】懸刀。弩牙の後の刀なり、一に機と名づく。

膺を割き、傍には疊翮を截る。亦性怯にして疑多く、膽劣にして心急に、心に堅守なく外に鬪意なく、來ること處女の人を畏るるが如く、去ること激電の飛ぶが如く、麥葉の下に在りて隱見する者あり。我將に葉下に就いて之を射んとす。故に其分銖を算へ遠近を量り、機を揆りて妙技を演ずれば、高からず低からず、正に其面を射て嘴を破り胸に中る。(八三)夷險地を殊にし、(八四)馴麤變を異にし、晷くるまで食ふに暇あらず、夕べまで勸むを告げず。昔(八五)賈氏の皐に如ける、始めて顏を一箭に解き、醜夫之が爲に貌を改め、憾妻之が爲に怨を釋けり。かの(八六)遊田の獲を致す、咸危きに乘じて以て馳騖す。何ぞ(八七)斯藝の安逸なる。嗟禽從つて其れ已に豫し。道を淸ひて行き、地を擇んで住り、尾は鑣を飾りて(八八)服に在り。肉は俎に登せて永く(八九)御せらる。豈唯(九〇)皂隸のみならんや。此れ焉に君も擧ぐ。若し乃ち(九一)耽盤流遁し、心を放にして移らず、其身の恤を忘れ、其雄雌を司り、樂んで節なく、(九二)端操虧くることあるは、此れ則ち老氏の誡むる所にして、君子のなさざる所なり。

【八三】夷險。夷は土地の平なること、險はけはしきこと。
【八四】馴麤。馴はなれたる雉、麤は粗率なる雉。
【八五】賈氏。左傳に昔賈大夫醜ナリ、妻ヲ娶ル、三年言ハズ笑ハズ、御シテ以テ皐ニ往キ雉ヲ射テ之ヲ獲、其妻始メテ笑ヒ始メテ言フとあり。
【八六】遊田。遊獵なり。
【八七】斯藝。射雉の技をいふ。
【八八】服。衣服なり。
【八九】御。食なり。
【九〇】皂隸。奴僕をいふ。
【九一】耽盤。耽り樂むこと。
【九二】端操。端直の操守。

【大意】　地に平險の殊なるあり、雉に馴麀の異なるあり。變に隨つて應じ、其樂一樣ならず。之が爲に飢倦を忘るるに至る。昔賈氏皐に獵して雉を射、其妻始めて破顏一笑す。是れ醜夫此技の爲に貌を變じ、夫の醜を憾みし妻も遂に其怨を釋けるものといふべし。且つ遊獵の禽を獲るは、皆危險に乘じ車騎を馳するも、獨り射雉の技たるや、既に安且つ逸にして、雉自ら我に隨つて來る。ただ淸閑の道を選び、止まるべきの地を擇んで場を設くるのみ。而して其尾は鏢を飾り服飾となすべく、其肉は俎に載せて食に供すべし。賤人之を爲すべきのみならず、君主と雖も尙ほ之を行ふべし。ただ耽樂して自ら放にし、其身の憂を忘れ、心を禽獸の雌雄に主として、之を獲んことを求め、節度を缺くことあらば、是れ則ち老子の誡むる所（老子に馳騁畋獵は人心をして發狂せしむとあり）にして、君子の爲さざる所なり。

紀行

(一)北征の賦

余、世の(三)顚覆するに遭ひ、(四)塡塞の阨

【一】北征。征は行なり、更始の時、班彪難を涼州に避け、長安を發して安定に至り、此賦を作る。

(二)班叔皮

【二】班叔皮。班彪。字は叔皮、扶風安陵の人。

災に罹り、舊室滅びて以て丘墟となり、曾て少くも留るを得ず。遂に袂を奮つて以て北に征き、超として迹を絕ちて遠く遊ぶ。朝に(五)軔を長都に發し、夕に(七)瓠谷の(八)玄宮に宿し、(九)雲門を歷て反顧し、(一〇)通天の(一一)崇崇たるを望み、陵岡に乘りて以て登降し、(一二)郇邠の邑鄉に息ひ、(一三)公劉の遺德を慕ひ(一四)行葦の傷らざるに及ぶ。彼れ何ぞ生の優渥にして、我獨り此の百殃に離へる。故に時會の變化にして、天命の常なきにあらず。(一五)赤須の長坂に登り、(一六)義渠の舊城に入り、(一七)戎王の淫狡なるを忿り、宣后の貞を失へるを穢しとし、秦昭の賊を討てるを嘉し、赫として斯に怒りて以て北に征く。

【大意】　余王莽の亂により、天下顚覆し王道塞がりて通ぜざるの阨に遭ひ、舊室爲に毀滅して丘墟となり、少くも留まるを得ず。遂に袂を奮ひて北行せんと欲し、朝に長安を發し夕に瓠谷の甘泉宮

【三】顚覆。王莽の亂によりて天下の顚覆せるをいふ。
【四】塡塞。王道の通ぜざること。
【五】軔。車の回轉を止むる木。發軔とは出發すること。
【六】長都。長安なり。
【七】瓠谷。谷の名。
【八】玄宮。甘泉宮をいふ。
【九】雲門。雲陽縣の門なり。
【一〇】通天。臺の名、甘泉宮の中に在り。
【一一】崇崇。高き貌。
【一二】郇邠。皆古國の名。
【一三】公劉。周の遠祖にして邠に居たり。其德草木に及べりといふ。
【一四】行葦。路傍に生ずる葦。詩經大雅に行葦篇あり、敦タル彼ノ行葦、牛羊踐履スルコト勿レの句あり。
【一五】赤須。坂の名、北地郡に在り。
【一六】義渠。城の名、北地郡に在り。戎王の居りし所なり。
【一七】戎王。秦の昭王の母宣太后戎王と通ず、昭王之を殺し兵を起して其國を伐ち滅せり。

に宿し、雲門を歴て反顧し、通天臺の高く聳ゆるを望み、山丘を上下して郇邠の間に息ひ、公劉の遺德、詩人をして行葦を傷る勿れとまで歎美せしめしを慕ひぬ。ああ彼の公劉の時、民生皆優樂を得たるに、我今日何ぞ此の殃に遭へる。此れ固に時運の變にして、天命の常なきが爲にあらず。乃ち赤須坂に登り、義渠城に入り、戎王の淫亂を忿り、宣后の不貞を惡み、昭王の討伐を嘉し、怒を含んで北行す。

(一八)紛として吾ここの　(一九)舊都を去り、騑遲遲として以て茲を歴。遂に　(二〇)節を舒べて以て遠く逝き、(二一)安定を指し以て期となし、長路の　(二二)緜緜たるを涉り、遠く紆廻して以て　(二三)樛流す。(二四)泥陽を過ぎて太息し、祖廟の修まらざるを悲み、余が馬を　(二五)彭陽に釋き、且く　(二六)節を弭めて自ら思ふ。日　(二七)晻晻として其れ將に暮れんとし、牛羊の下り來るを覩、(二八)怨曠の情を傷しむるを寤り、(二九)詩人の時を歎くを哀み、安定を越えて以て　(三〇)容與し、長城の　(三一)漫漫たるに遵ひ、(三二)蒙公の民を疲ら

【一八】紛。心緒の亂るる貌。
【一九】舊都。長安を指す。
【二〇】節を舒ぶ。其志節を縱にするなり。
【二一】安定。郡の名、涇渭の間に在り、長安を距ること三百五十里。
【二二】緜緜。長くして絶えざる貌。
【二三】樛流。曲折すること。
【二四】泥陽。縣の名。北地郡に屬す。泥陽には班氏の祖廟あり。
【二五】彭陽。地名、安定郡に屬す。
【二六】節を弭む。駕を駐むといふが如し。
【二七】晻晻。ほの暗き貌。
【二八】怨曠。不平の心を抱くこと、毛詩の序に大夫久シク役シ男女怨曠スとあり。
【二九】詩人。詩經に載する詩の作者をいふ。
【三〇】容與。行く貌。
【三一】漫漫。廣遠の貌。
【三二】蒙公。蒙恬、秦の將となり長城を築く。

し、疆秦の爲に怨を築き、(三三)高亥の切憂を捨て、蠻狄の(三四)遼患を事とし、德を耀かして以て遠きを綏んせず、顧つて厚固にして　(三五)藩を繕め、首身分れて寤らず、猶ほ功を數へて譽を辭するを劇しとす。何ぞ　(三六)夫子の妄說する、孰か地脈の　(三七)殘を生すと云はんや。

【大意】我既に長安の舊都を去り、騑馬遲遲として進まず。茲に戎王の邑を歴、遂に志を縱にし、安定を期して北行すれば、路長遠にして曲折す。泥陽を過ぎて祖廟の荒廢せるを悲み、馬を彭陽に釋き、駕を駐めて自ら沈思すれば、日將に暮れんとし牛羊の山を下り來るを見、昔時戰亂の爲に大夫遠征し、男女怨曠の情を抱きし事を思ひ、詩人の時を歎き慨世の詩を作りし事を哀み、既に安定を過ぎ、長城の長遠なるに沿ひて進む。因つて蒙恬が民力を疲らし、民怨を買ひて長城を築き、趙高の讒逆、胡亥の簒立等の近憂を忘れ、却つて外夷の遠患を事として之が備をなし、德を耀かして遠方を安んずる能はず、却つて城壁を厚固にして得たりと

【三三】高亥。高は趙高。亥は胡亥、秦の二世皇帝の名。切憂は近き憂なり。
【三四】遼患。遠き患なり。
【三五】藩。垣なり、萬里長城を指す。
【三六】夫子。蒙恬を指す。史記に趙高、公子胡亥ニ事フ、始皇崩ジ、胡亥立ツテ太子トナラント欲ス、太子已ニ立ツ、使チ遣シテ罪ヲ以テ蒙恬ニ死チ賜フ、蒙恬喟然トシテ太息シテ曰ク、我天ニ何ノ罪カアル、過ナクシテ死センカト、ヤヤ久シクシテ徐ニ曰ク、恬ガ罪固ヨリ死ニ當ス、臨洮ヨリ起リテ之ヲ遼東ニ屬ス城塹萬餘里、此レ其中地脈ヲ絶ツナキ能ハズ、乃チ恬ガ罪ナリト、藥ヲ呑ンデ自殺スとあり。
【三七】殘。害なり。

なし、身死するまで己の罪を悟らず、尙ほ己の功を數へて其罪を甘受せざるの愚を憐む。ああ彼の蒙恬、長城を築き地脈を絶ちしが爲、其祟を蒙りて死を招けりと妄說するも、人誰か地脈の殘害をなすこと此の如きを信ずる者あらんや。要は民力を疲らし、民怨を買ひ、終に死亡の禍を招けるのみ。

(三八)障隧に登りて遙に望み、聊か須臾して以て(三九)婆娑し、(四〇)獯鬻の(四一)夏を猾るを閔み、尉卬を(四二)朝那に弔ひ、(四三)聖文の克く讓り、師を勞せずして幣加はり、父兄を(四四)南越に惠み、帝號を尉佗に黜け、(四五)几杖を藩國に降し、吳濞の逆邪を折きしに從ふ。惟れ(四六)太宗の(四七)蕩蕩たる、豈(四八)曩秦の圖る所ならんや。(四九)高平に隮りて周く覽、山谷の(五〇)嵯峨たるを望めば、野の(五一)蕭條として以て(五二)莽蕩たり。千里に迥にして家なし。風猋發りて以て(五三)飄颻たり、谷水滙いで以て波を揚げ、雲霧の(五四)杳杳たるを飛ばし、積雪の(五五)皚皚たるを涉る。雁(五六)邕邕として以て羣翔し、(五七)鵾雞鳴いて以て(五八)嚌嚌たり。(五九)遊子その故鄉を悲み、心(六〇)愴恨として以て傷み懷ひ、長劍を撫して慨息し、泣(六一)漣落して衣を霑す。余が涕を攬りて以て(六二)於邑し、生民の故多きを哀む。夫れ何ぞ(六三)陰曀の陽ならざる。嗟久しく其(六四)平度を失へり。諒に時運の爲す所、永く(六五)伊鬱して其れ誰にか愬へん。

【三八】障隧。城塞なり。
【三九】婆娑。徜徉する貌。
【四〇】獯鬻。匈奴なり。史記文帝紀に匈奴邊ニ入リ寇チナシ、朝那ノ塞チ攻メ、北地ノ都尉卬チ殺スとあり。
【四一】夏。中國なり。
【四二】朝那。縣名、安定郡に屬す。
【四三】聖文。漢の文帝。
【四四】南越。史記文帝紀に南越王尉佗自立シテ武帝トナル、上佗ガ兄弟チ召シ德チ以テ之ニ報ユ、佗遂ニ帝チステテ臣ト稱スとあり。
【四五】几杖。几は坐する時臂を凭らする物、杖はツエなり。史記に文帝ノ時、吳王濞ヤヤ藩臣ノ禮チ失ヒ、病ト稱シテ朝セズ、文帝吳王ニ几杖チ賜フとあり。
【四六】太宗。文帝なり。
【四七】蕩蕩。德の廣大なる貌。
【四八】曩秦。さきの秦。
【四九】高平。縣名、安定郡に屬す。
【五〇】嵯峨。高峻の貌。
【五一】蕭條。さびしき貌。
【五二】莽蕩。曠遠の貌。
【五三】飄颻。風の馳する貌。

【大意】城塞に登りて遠望し、匈奴の中國を亂せるを悲み、都尉卬を朝那に弔ひ、文帝の讓德あり、軍旅を用ひずして、幣帛を天下に加へ、南越王尉佗を惠みて、其帝號を棄てしめ、几杖を吳王濞に賜ひて、其逆心を折きしを嘉す。夫れ文帝の德かくの如く廣大なり。豈長城を築きて遠夷を禦ぎし暴秦の能く及ぶ所ならんや。乃ち高平に登り山谷を望めば、山野蕭條として千里の間、復た人家を見ず。ただ風の飄颻として川水の波たつを聞くのみ。更に雲霧を冒し積雪を涉りて行けば、飛雁邕邕として鵾雞嚌嚌たり。余懷鄉の情に堪へず、長劍を把りて太息すれば、涙落ちて袂を沾す。因つて生民の多難を悲むこと愈甚し。ああ天下昏亂して明君出でず、天下久しく和平の度を失ふ。是れ誠に

【五四】杳杳。深冥の貌。
【五五】皚皚。白き貌。
【五六】邕邕。雁の聲なり。
【五七】鵾雞。鳥の名。
【五八】嚌嚌。衆聲なり。
【五九】遊子。班彪自ら謂ふ。
【六〇】愴恨。悲むこと。
【六一】漣落。涙の落つる貌。
【六二】於邑。心の悲むこと。
【六三】陰曀。曇りて風の吹くこと、昏亂に喩ふ。
【六四】平度。和平の法度なり。
【六五】伊鬱。憂怨なり。

時運の然らしむる所、徒に憂怨して告訴する所なき所以なり。

(六六)亂に曰く、(六七)夫子固に窮して、藝文に遊び、樂んで以て憂を忘る、惟れ聖賢なり。達人事に從ふ、儀則あり、行止(六八)屈申、時と(六九)息す。君子信を履めば、居らざるなし。(七〇)蠻貊に之くと雖も、何ぞ憂懼せん。

【大意】昔孔子窮して文藝に遊び、樂んで以て身の憂を忘れぬ。是れ實に聖賢の道なり。達人の事に從ふや皆法度あり、行止屈伸ただ時と浮沈すべきのみ。若し能く信義を履行せば、天下に居るべからざるの地なし。蠻夷の地に往くと雖も、憂懼するに足らざるなり。

【六六】亂。詩賦の末に在りて一篇の大旨を概括する詞。
【六七】夫子。孔子を指す。
【六八】屈申。屈伸に同じ。
【六九】息。消息なり。浮沈、動靜といふが如し。
【七〇】蠻貊。蠻夷なり。

東征の賦

(一)曹大家

惟れ(二)永初の有七、余、子に隨つて東に征けり。時れ(三)孟春の吉日、(四)良辰を撰む、號して大家といふ。子穀陳留の長となる、大家隨つて官に至り、東征賦を作り、洛陽を發して陳留に至るまで經歷せる所を述ぶ。

【一】曹大家。班彪の女、班固の妹、名は昭、字は惠姬、扶風の曹世叔に嫁す、世叔亡す、和帝召して宮に入れ皇后貴人をして皆之に師事せし

【二】永初。後漢の和帝の年號。有七は七年なり。
【三】孟春。初春なり。
【四】良辰。よき時。

志(五)愴恨として悲を懷き、(六)明發曙るまで寐ねられず、心遲遲として違ふあり。樽酒を酌んで以て念を弛め、(八)喟として情を抑へて自ら非とす。諒に(九)巢に登りて蟻を琢んで將に行かんとす。乃ち趾を擧げて輿に升り、夕に予(一〇)偃師に宿し、遂に故を去りて新に就き、たず、力を陳べて相追はざるを得んや。且つ衆に從つて列に就き、天命の歸する所に聽す。通衢の大道に遵ひ、(一一)捷徑を求めて誰にか從はんと欲する。

【大意】永初七年、吾子穀に隨つて東のかた陳留に往かんとし、初春の吉日良辰を選びて洛陽を發し、夕に偃師縣に宿し、遂に故居を去りて新居に就かんとす。心悲傷して天明に至るまで寐ねられず、心中違別の感に堪へず。因つて酒を酌んで憂を除き、其情を抑へて悲愴を以て自ら非となす。上古の人は巢を構へて住み、蠃蚌の肉を琢ちて食ひしも、今や既に此の如くなる能はず。焉んぞ子をして己の力を伸べ、仕に從つて追隨せしめざるを得んや。且つ既に衆に從つて官列に就き、天命に任す。ただ當に正直の大道を行ふべきのみ。邪路を求めて之を履むべからざるなり。

【五】偃師。縣名、河南郡に屬し、洛陽の東三十里に在り。
【六】愴恨。悲むこと。
【七】明發。天の將に明けんとして光明の開發する時をいふ。
【八】喟。なげく貌。
【九】巢に登り。上古の人未だ家屋あらず、巢に登りて居り、蟻蚌の肉を琢ちて之を食ふ。蟻は蠃と通ず、蚌の類、ニナ。
【一〇】捷徑。邪路なり。

乃ち遂に往いて徂き逝き、聊か目を遊ばしめて魂を遨ばしめ、(一一)七邑を歴て觀覽し、鞏縣の艱多きに遭ひ、(一二)河洛の交流を望み、(一三)成皐の(一四)旋門を看、既に峻嶮を免脱れ、(一五)滎陽を歴て(一六)武卷を過ぎ、(一七)原武に食ひて足を息め、(一八)陽武の(一九)桑閒に宿し、(二〇)封丘を渉りて路を踐み、京師を慕ひて竊に歎く。小人の性土を懷ふは、書傳よりして有り。遂に道に進んで少く前み、(二一)平丘の北邊を得、(二二)匡郭に入りて遠きを追ひ、(二三)夫子の厄勤せると、彼の衰亂の無道なる、乃ち聖人を困畏せしめしとを念ひ、悵として(二四)容與して久しく駐り、日の夕にして將に昏れんとするを忘る。(二五)長垣の境界に到り、農野の居民を察し、(二六)蒲城の丘墟を睹るに、荆棘の(二七)榛榛たるを生ず。惕として覺寤して顧み問ひ、(二八)子路の威神を想ふ。(二九)衛人其勇義を嘉し、今に訖るまで稱すと云ふ。

【大意】乃ち遂に進んで七縣を歴、鞏縣の難路を過ぎ、河洛の交流するを望み、成皐の旋門坂を超え、滎陽、武卷を過ぎて原武に食し、暫く此に休息し、陽武桑林の閒に宿し、封丘の路を渉り、始めて陳留の界に至る。因つて洛陽を思慕して竊に自ら歎息す。小人の故土を慕ふは、古書の傳ふる所なれば（論語に小人は土を懷ふとあり）固より當然なり。更に進んで平丘縣を過ぎ、匡邑に入りて古を憶ひ、彼の衰亂の世、聖人をして困厄勤苦せしめたるを念ひ、悵然として徘徊し、日の將に暮れんとするを忘れ、長垣縣に到りて農民の狀態を視、蒲城の丘墟を見て、荆棘の繁茂せるに驚き、今更に子路の神靈を追想し、衛人今に至るまで、尚ほ子路の義勇を歎稱するを聞けり。

(三〇)蘧氏は城の東南に在り、民亦その丘墳を尚ぶ。唯(三一)令德不朽をなし、身既に歿するも名存す。惟れ經典の美する所、道德と仁賢とを貴ぶ。(三二)吳札君子多しと稱す。其言信にして徵あり。後に衰微して患に遭ひ、遂に(三三)陵遲して興らず。(三四)性命

【一】七邑。鞏縣、成皐、滎陽、武卷、陽武、原武、封丘をいふ。
【二】河洛。河は黄河、洛は洛水。洛水は東のかた河南鞏縣に至りて河に入る。
【三】成皐。縣名、河南郡に屬す。
【四】旋門。坂の名。
【五】滎陽。縣名、河南郡に屬す。
【六】武卷。縣名、河南郡に屬す。
【七】原武。縣名、河南郡に屬す。
【八】陽武。縣名、河南郡に屬す。
【九】桑閒。桑林の閒をいふ。
【一〇】封丘。縣名、陳留郡に屬す。
【一一】平丘。縣名、陳留郡に屬す。
【一二】匡郭。匡は邑の名、史記に孔子マサニ陳ニ適カントシ匡ヲ過グ、匡人之ヲ聞イテ以テ魯ノ陽虎トナス、虎嘗テ匡人ニ暴ス、匡人遂ニ孔子ヲ止ムとあり。
【一三】夫子。孔子を指す。
【一四】容與。徜徉すること。
【一五】長垣。縣名、陳留郡に屬す。
【一六】蒲城。子路の治めし邑の名。
【一七】榛榛。繁茂せる貌。
【一八】子路。仲由、字は子路、孔子の弟子なり。威神は威靈といふが如し。

【一九】衛人。衛は國の名。衛の太子蒯聵亂をなす、子路之を攻め、勝たずして死す。
【二〇】蘧氏。蘧瑗、字は伯玉、衛の賢大夫なり。
【二一】令德。美德なり。
【二二】吳札。吳の公子季札なり。左傳に吳ノ公子札、衛ニ適キ蘧瑗、史狗、史鰌、公子荆、公叔發、公子朝ニ説キテ曰ク、衛ニ君子多シ、未ダ患アラザルナリとあり。
【二三】陵遲。漸次に衰微すること。
【二四】性命。運命といふが如し。

の天に在るを知り、力行に由りて仁に近づき、勉めて高きを仰ぎて「㊂景を蹈み、忠恕を盡して人に與し、正直を好んで回ならずんば、精誠明神に通ず。庶はくは㊂靈祇の鑒照し、貞良に祐して信を輔け給はんことを。

【大意】　蘧伯玉の墓は城邑の東南に在り。民今尚ほ其德を尚慕す。ただ美德あれば人をして不朽ならしむ。故に身既に死するも、其名いよいよ芳し。これ經典の贊美する所にして、道德と仁賢とを貴ぶ所以なり。昔季札衞に君子多しと稱せるは、眞に溢美の言にあらざるなり。然も其後漸く衰微し、遂に興隆せざりしは誠に遺憾なり。抑人の貴賤貧富は天に在り、力行して仁道に近づき、前賢の高德大業を仰ぎて之に傚ひ、忠恕の道を盡して、常に善人に與し、正直を好んで邪ならずんば、精誠必ず天地神明に感通すべきなり。庶はくは明神照覽し給ひ、貞良信義の人を輔け給はんことを。

㊂七亂に曰く、君子の思は必ず文を成す。盍ぞ各志を言ひて古人を慕はざる。㊂八先君行止して則ち㊂九作あり。其の不敏と雖も敢て法らざらんや。貴賤貧富は求むべからず、身を正しうし道を履み、以て時を俟つ。㊃〇脩短の運は愚智同じ、靖恭にして命に委ね、唯吉凶のままにす。敬愼して怠るなく、

【㊂五】景。大行なり。
【㊂六】靈祇。神祇なり。
【㊂七】亂。北征賦六六を見よ。
【㊂八】先君。曹大家の父班彪を指す。行止の止は助辭なり、行くこと。
【㊂九】作。班彪北行して北征賦を作れるをいふ。
【㊃〇】脩短。長短なり。

㊃一嗛約を思ひ、精靜にして欲少く、㊃二公綽を師とせよ。

【大意】　君子の思ふや必ず文を成す。我今此賦を作り以て志を言ふは、古人を慕へばなり。先君既に北征賦の作あり。我不敏と雖も之に則らざらんや。貴賤貧富は人に向つて求むべきにあらず。ただ其身を正うして時を待つべきのみ。人命の長短は智愚の別あるなし。ただ恭敬にして運命の吉凶に任すべきのみ。當に敬んで謙約を行ひて怠らず、孟公綽の清淨寡慾を師とすべきなり。

(一)西征の賦

潘安仁

㊂一歲、玄枵に次り、月㊂二蕤賓に旅り、丙丁日を統べ、乙未辰を御る。㊂三潘子㊂四軾に憑りて西に征き、㊂五京より㊂六秦に徂く。廼ち喟然として歎じて曰く、古往今來邈たるかな悠なるかな。㊂七寥廓忽恍たを紀するなり。玄枵は子の方角なり。歲次玄枵とは子の年といふ意なり。元康二年は壬子に當る。

【一】西征。晉の惠帝の元康二年、潘岳長安令となりて西行し、經る所の人物山川を論じ西征賦を作る。
【二】歲。歲星なり、星の名、十二年を以て天を一周す、故に此星の指す方角によりて年年五月なり。
【三】蕤賓。律の名、禮記に仲夏ノ月、律蕤賓ニ中ルとあり、潘岳の長安に行きしは元康二
【四】潘子。潘岳自ら謂ふ。
【五】軾。車上の横木。
【六】京。東京洛陽なり。
【七】秦。長安なり。
【八】寥廓忽恍。天地未だ分れざる貌。

り。(九)一氣を化して　(一〇)三才を甄す。此の三才とは天地人の道なり。ただ生と位と之を大寶といふ。生に　(一一)脩短の命あり、位に　(一二)通塞の遇あり。鬼神も之を要するなく、聖智も豫めする能はず。(一三)休明の盛世に當り、(一四)菲薄の陋質を託し、(一五)旌弓を　(一六)鉉台に納れ、(一七)庶績を帝室に讚し、鄙夫の常累を嗟き、固に既に得て失はんことを患へ、(一八)柳季の直道なく、(一九)士師に佐となりて一たび黜けらる。(二〇)武皇忽として其れ　(二一)升遐し、(二二)八音四海に遏え、天子　(二三)諒闇に寢ね、百官　(二四)冢宰に聽く。彼の負荷の殊重なる、(二五)伊周と雖へども其れ猶ほ殆し。(二六)七貴を　(二七)漢庭に窺ふに、譸か一姓の在るあらんや。(二八)危明の以て位を安んずるなく、秖に逼に居て以て專を

【九】一氣。一元氣なり。
【一〇】三才。天地人をいふ。
【一一】脩短。長短なり。
【一二】通塞。窮達に同じ。遇は運命なり。
【一三】休明。美明なり。盛世とは晉を指すなり。
【一四】菲薄。菲も薄なり、菲薄陋質とは潘岳自ら謙するなり。
【一五】旌弓。孟子に大夫ヲ招クニ旌ヲ以テス、詩に我ヲ招クニ弓ヲ以テスとあり、太尉府の掾となりしことを言ふ。
【一六】鉉台。三公をいふ、時に賈充太尉となり、三公の一たり、岳を召して府掾となす。
【一七】庶績。衆官の功績。
【一八】柳季。柳下惠をいふ、柳下惠士師となり三たび黜けらる、曰く道を直くして人に事へば、いづくに往くとして三たび黜けられざらんやと。
【一九】士師。獄官なり、潘岳廷尉となる。
【二〇】武皇。晉の武帝。
【二一】升遐。崩御すること。
【二二】八音。金石絲竹匏土革木八種の音聲。天子の喪中には音樂を停止す。
【二三】諒闇。天子の喪に居ること。
【二四】冢宰。宰相なり、諒闇中は百官皆冢宰に聽いて事を行ふなり。
【二五】伊周。伊尹周公なり。
【二六】七貴。呂、霍、上官、丁、趙、傅、王の七姓、並に皇后の族なり。
【二七】漢庭。漢の宮廷。
【二八】危明。高明なり。

示し、亂逆に陷りて以て戮を受く。禍を降すの天よりするにあらず。

【大意】元康二年壬子五月十八日乙未、余車を驅つて洛陽より長安に往く。乃ち喟然として嘆じて曰く、悠久なるかな古今、それ太古の世天地未だ分れず。寥廓忽恍たる一氣のみ。其後此氣分れて三才となる。三才とは天地人是れなり。而して人は生と位とを以て大寶となす。然れども生には長短あり、位には窮達ありて、各人一樣ならず。鬼神聖智と雖も之を豫期強要すべからざるなり。余この昭代に遭ひ、菲薄の身を託し、太尉府の掾となり、衆官の功を王室に讚するを掌りしが、小人の情として、常に心に累あり。既に此位を得て又之を失はんことを患へ、柳下惠の直道なきも一たび廷尉となり、忽ち之を免せられぬ。時に武帝忽焉として崩じ給ひ、天下音樂を停止し、天子喪に服し、百官ただ命を冢宰楊駿に聽く。かの楊駿人臣の身を以て、帝王の重任を荷ふ。伊尹周公の賢ありと雖も固より難しとする所なり。漢室の七貴を見るに一人として今に存する者なし。駿の終を完うせざること亦明かなり。況んや駿既に高明の道、以て重位を安んずるなく、ただ勢を以て上に逼り、其專權を示すをや。終に亂逆に陷りて誅戮を受けたるは、固より怪むに足らず。皆自ら招ける禍なり。

(二九)孔は時に隨つて以て行藏し、(三〇)遽は國と與レバ則チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ藏ル、唯我ト汝ト是アル顏回ニ謂ツテ曰ク、之ヲ用フ

【二九】孔。孔子なり、論語に子

に舒卷す。苟に微に蔽はれて章に繆る。(三二)過辟の未だ遠からざるを患ふ。山潛の(三三)逸士、卓として長く往きて反らざるを悟り、吾人の(三四)拘攣、飄として萍のごとく浮んで蓬のごとく轉ずるを陋む。寮位(三五)僞として其れ(三六)隆替し、名節(三七)灌として以て(三八)隳落し、素卵の殼を累ぬるよりも危く、玄鷰の幕に巢くふよりも甚し。心(三九)戰懼して以て(三九)兢悚し、深きに臨んで薄きを履むが如し。夕に都外に歸るを獲、宵未だ中ならざるに難作る。木を擇んで以て棲集するにあらざれば、林焚けて鳥存すること尠し。千載の嘉會に遭ひ(四〇)皇德を(四一)乾坤に合せ、秋霜の嚴威を弛め、春澤の渥恩を流し、大義を甄にして以て責を明にし、初服に私門に反す。(四二)皇鑒余の忠誠を揆り、俄に余に命ずるに(四三)末班を以てし、疲人を(四四)西夏に牧せしむ。老幼を携へて關に入る。(四五)丘は魯を去りて顧み歎き、(四六)季は沛に過りて涕零つ。伊れ故鄉の懷ふべき、(四七)聖達の幽情を疚しむ。矧や匹夫の

カナとあり。

【三〇】蘧。衞の賢大夫蘧伯玉なり、論語に君子ナルカナ蘧伯玉、邦道アレバ則チ仕ヘ、邦道ナケレバ則チ卷イテ之ヲ懷ニスベシとあり。

【三一】過辟。罪過なり。

【三三】逸士。隱士なり。

【三四】拘攣。拘牽といふが如し。

【三五】僞。壞敗の貌。

【三六】隆替。ここは退敗の意。

【三七】灌。壞るゝ貌。

【三八】隳落。やぶれ落つること。

【三九】兢悚。戰懼に同じ。

【四〇】皇。晉の惠帝を指す。

【四一】乾坤。天地なり。

【四二】初服。もとの身分。

【四三】皇鑒。惠帝の鑒識。

【四四】末班。低き官位なり、長安令を指す。

【四五】西夏。長安なり。

【四六】丘。孔丘なり、孔子魯を去りて衞に之く。歎じて曰く歸らんか歸らんかと。

【四七】季。漢の高祖劉邦なり。沛は其故鄉なり。

【四八】聖達。孔子と高祖を指す。

土に安んずる、邈として身を(四九)鎬京に投ずるをや。猶ほ犬馬の主を戀ふがごとく、竊に慕を(五〇)闕庭に託し、(五一)鞏洛を眷みて涕を掩ひ、思墳塋に纏緜たり。

【大意】孔子蘧伯玉は隱微を知り、明顯に通ずるの明あり。故に時に隨つて行藏し、治亂と共に浮沈せり。余不幸にして其明なし。遂に罪過の身に及ばんことを患へ、山中隱遁の士の卓然として長往するを美とし、吾人の名位に拘牽し、浮萍轉蓬の歸託する所なきが如くなるを陋とし、官位の替れて名節の敗れんことを懼れ、深淵に臨み薄氷を履むが如し。(潘岳は楊駿の主簿たり。故に此患あるなり)一夕都外の私宅に歸る。その夜難起り楊駿終に誅せられぬ。ああ余が駿の主簿たるは、猶ほ鳥の木を擇ばずして棲むが如し。其林燒かれて鳥獨り無事なる能はず。今駿誅せらる。余の無事なる能はざるは固より當然なり。幸にして我が皇德天地に合す。是れ實に千載一遇の好機なり。遂に我が皇の厚恩に浴し、官を免じ家に歸り、大義を明にして自ら責むるを得たり。其後皇帝余の忠誠を知り、我に命ずるに長安令を以てし、疲弊の民を長安に牧養せしむ。余因つて老幼を携へて關中(長安は關中に在り)に入る。昔孔子は魯を去りて歎じ、高祖は沛を過りて涙を落しぬ。況んや余の如き故土を懷ふの匹夫にして、遠く長安に往くをや。乃ち故鄉の墳塋を顧望し情緒纏緜

【四九】鎬京。長安なり。

【五〇】闕庭。天子の宮廷。

【五一】鞏洛。二縣の名、岳の家の墳墓ここに在り。

たるものあり。

爾して乃ち(五三)平樂を越え(五四)街郵を過ぎ、馬を(五五)皐門に秣ひ、駕を(五六)西周に稅す。遠いかな(五七)姬德、(五八)高辛より興り、思文なる(五九)后稷、厥初め民を生し、西水の滸に率ひ、化(六〇)岐豳に流れ、祚(六一)昌發に隆にして、舊邦惟れ新なり。(六二)牧野より旋りて茲を歷、いよいよ柔を守りて以て競を執り、夜は(六三)申旦まで寢ねず、(六四)天保の未だ定まらざるを憂ふ。惟れ泰山も其れ猶ほ危しとし、(六五)祀八百にして餘慶あり。(六六)亡王の驕淫を鑒み、(六七)南巢に竄して以て(六八)命を投ず。積薪に坐して以て然るを待ち、方に日を指して盛を比ぶ。(六九)人度量の(七〇)乖舛せる、何ぞ相越ゆるの遼迥なる。(七一)土中を斯邑に考へ、(七二)成都を建てて營築し、既に鼎を(七三)郟鄏に定め、

【五三】平樂。館の名。
【五四】街郵。郵亭の名。
【五五】皐門。周の故門の名。
【五六】西周。周の赧王の時、都を西周に徙す、是れより周東西に分る。稅とは馬を車より取り離すこと。
【五七】姬德。周の德なり、姬は周の姓なり。
【五八】高辛。帝嚳高辛氏、上古の帝王なり。
【五九】后稷。堯舜の時農官たりし人、周の先祖なり。
【六〇】岐豳。ともに地名なり。
【六一】昌發。昌は文王の名、發は武王の名。
【六二】牧野。武王殷の紂王を破りし地。
【六三】申旦。曉に達するまで。
【六四】天保。天子の位。
【六五】祀。年なり。
【六六】亡王。亡國の王、夏の桀王を指す。
【六七】南巢。地名、書經に成湯桀ヲ南巢ニ放ツとあり。竄は放逐すること。
【六八】命を投ず。いのちを捐つること。
【六九】人。武王と桀とを謂ふ。
【六九】乖舛。齊しからざること。
【七〇】土中。地の中央なり。
【七一】成。周の成王。武王の子なり。
【七二】郟鄏。地名なり。

遂に龜を鑽りて(七三)繇を啓く。(七四)平道を失つて來り遷る。緊(七五)二國而も是れ祐く。豈時王の僻なるなからんや。先哲に賴りて以て長く懋なり。(七六)圉北の兩門を望み、虢鄭の惠を納れ、子頹の禍を樂めるを討ちしに感じ、闕西の戾に效へるを尤む。(七七)重(七八)帶を戮して以て襄を定め、大順を弘めて以て世に霸たり。(七九)靈川を壅ぎて以て鬪を止めんとし、(八〇)晉義を演べて以て說を獻ず。咨(八一)景悼より以て(八二)丐に迄るまで、政(八三)凌遲して彌季なり。(八四)庶朝をして逆を構へ、(八五)兩王を歷て位を干めしむ。(八六)十葉を踰えて以て(八七)赧に逮り、邦分崩して(八八)二となり、竟に(八九)虎口に噬まれて、文武の神器を輸せり。

【七三】繇。うらなひの辭。
【七四】平。周の平王。犬戎の難に遇ひ都を遷せり。
【七五】二國。晉と鄭となり。
【七六】圉北。門の名、左傳に初メ姚姬、周ノ莊王ニ嬖セラレ子頹ヲ生ム、子頹寵アリ、惠王ノ位ニ卽クニ及ビ、衞燕ノ軍周ヲ伐チ子頹ヲ立ツ、子頹五大夫ヲ享シ樂徧舞ニ及ブ、鄭伯之ヲ聞キ虢叔ニ見エテ曰ク、今王子頹歌舞シテ倦マズ禍ヲ樂ムナリ、盍ゾ王ヲ納レザルト、虢公曰ク、寡人ノ願ナリト、同ジク王城ヲ伐ツ、鄭伯ハ王ト圉門ヨリ入リ、虢叔ハ北門ヨリ入リテ子頹ヲ殺ス、鄭伯王ヲ闕ノ西辟ニ享シ樂備ハル、原伯曰ク、鄭伯尤ニ效フ、其レ亦咎アラントとあり。
【七七】重。晉の文公。名は重耳。
【七八】帶。周の襄王の庶弟、王子帶なり、寵に因りて位を簒ふ。晉の文公之を討ち襄王を王城に納る。
【七九】靈。周の靈王。國語に靈王ノ三十二年、穀洛ノ二水鬪フとあり。註に鬪とは二水會して鬪ふが如きなりとあり。
【八〇】晉。靈王の太子晉なり。
【八一】景悼。周の景王悼王。
【八二】丐。周の敬王の名。
【八三】凌遲。陵遲に同じ。漸次に衰ふること。
【八四】庶朝。景王の庶子王子朝なり。
【八五】兩王。悼王敬王なり。
【八六】十葉。十代なり。
【八七】赧。周の赧王。
【八八】二。東周西周の二に分裂せること。
【八九】虎口。秦に喩ふ。

【大意】　平樂館、街郵を過ぎて皐門に秣ひ、西周に馬を息はしむ。ああ周德久遠にして遙に高辛より起り、后稷初めて民を生し、西水の滸より德化延いて岐豳に及び、文王昌、武王發に至り、始めて天命を受けて王位に卽く。武王紂を伐ち、牧野より還りて此地に居り、柔道を守りて强威を保ち、天位の未だ定まらざるを憂へて、徹宵寢ねず。既に殷紂に克ち安きこと泰山の如きも、猶ほ以て危しとなし、戒愼して已むことなし。故に子孫相繼ぎ天下を有つこと八百餘年なり。殷湯桀王の無道なるを見、之を伐ちて南巢に放ち、以て其命を絕つ。桀王の危きこと薪中に坐して燃ゆるを待つが如し。然も自ら悟らず。天日を指して其身の隆盛を比較す。ああ武王は戒愼して安きを得、桀王は驕淫にして亡を取る。何ぞ度量の同じからざること此の如きや。成王、武王の後を承け、地の中央を定めて都を奠め、世を歷ること三十、年を歷ること七百の吉卜を得たり。平王に至り東遷の厄あり、しも、晉鄭二國よく之を助けぬ。當時の王者邪僻の行なきにあらざるも、祖先の餘澤に賴りて、長く其盛を保つを得たり。余今圉北の二門を望み、虢鄭二國の惠王を納れ、王子頹の禍を樂めるを討てるに感じ、又鄭伯闕西に於て子頹の罪戾に傲ひしを尤めぬ。重耳（晉の文公）の王子帶を戮して、襄王の位を定め、順道を履みて霸業を成し、靈王の川を壅がんとするや、太子晉の之を諫止せるに感ず。其後景王悼王より敬王に至るまで、政いよいよ衰へ、庶子朝大逆を構へ、悼王敬王と

王位を爭ふに至り、十世を歷て赧王に至り、邦分れて東西二周となり、竟に暴秦の滅す所となり、文武以來の神器を秦に授くるに至れるを悲む。

(九〇)孝水に澡ぎて　(九一)纓を濯ひ、　(九二)善名を嘉して茲に在り。(九三)赤子を　(九四)新安に夭し、路側に(九五)坎して之を瘞む。(九六)亭に千秋の號あるも、子に　(九七)七旬の期なし。(九八)延吳より勉勵すと雖も實に余が慈を憯慟せしむ。山川を眄みて以て古を懷ひ、悵として轡を(九九)中塗に攬る。虐なるかな　(一〇〇)項氏の暴を肆にし、降卒の辜なきを坑にする。秦人を激して以て德に歸せしめ、(一〇一)劉后の　(一〇二)來蘇を成す。事(一〇三)洄洑して還らんことを好む。卒に　(一〇四)宗滅びて身屠らる。(一〇五)澠

【九〇】孝水。川の名、河南郡に在り。
【九一】纓。冠のひも。
【九二】善名。一本に美名に作る。
【九三】赤子。嬰兒なり。潘岳の子生れて六十日にして夭死す。
【九四】新安。縣名。
【九五】坎。穴を掘ること。
【九六】亭。邑といふが如し。
【九七】七旬。七十日なり。
【九八】延吳。延は延陵の季子、吳は東門吳なり。延陵の季子齊に往く、子死す、嬴博の閒に葬り、深さ泉に及ばず。魏に東門吳といふ者あり。子死すれども憂へず、人怪んで之に問へば曰く、吾れ子なき時憂へず、今子死す、乃ち子なき時と同じ、吾何ぞ憂へんやと。
【九九】中塗。中途に同じ。
【一〇〇】項氏。楚の項羽なり。史記に秦將章邯項王ニ降ル、秦ノ吏卒多ク竊ニ言ツテ曰ク、今能ク關ニ入リ秦ヲ破ラバ大ニ善シ、モシ能ハズバ秦必ズ盡ク吾ガ父母妻子ヲ誅セント、諸將其計ヲ聞キ以テ項羽ニ告ゲ、是ニ於テ楚軍夜擊ツテ秦卒二十餘萬ヲ新安城南ニ坑ニスとあり。
【一〇一】劉后。后は君なり、漢の高祖劉邦をいふ。
【一〇二】來蘇。來りて人民を蘇生せしむること。
【一〇三】洄洑。邪僻なること。
【一〇四】宗。宗族、項羽の宗族を指す。
【一〇五】澠池。縣の名、弘農郡に屬す。秦王趙王と會せし地なり。

池を經て長く想ひ、余が車を停めて進まず。秦は虎狼の彊國なり。趙は侵弱の餘燼なり。超として險に入りて（一〇五）高會し、（一〇六）命世の（一〇七）英藺に杖けられ、（一〇八）東瑟の（一〇九）偏鼓を恥ぢ、（一一〇）西缶を提げて刃を接し、（一一一）十城の虛壽を辱ぢ、（一一二）咸陽を奄ひて以て（一一三）儁を取る。出でて威を（一一四）河外に申ぶ。何ぞ猛氣の（一一五）咆勃たる。（一一六）入りて節を（一一七）廉公に屈し、四體の骨なきが若し。智勇の（一一八）淵偉に處し、（一一九）鄙吝の忿悁に方ぶるに、日を改めて歲を易ふと雖と、等級の以て言を寄するなし。（一二〇）光武の（一二一）蒙塵に當り、（一二二）王誅を（一二三）赤

【一〇五】高會。趙王が秦王と會合せしこと。
【一〇六】命世。一世に名あること。
【一〇七】英藺。英傑藺相如。
【一〇八】東瑟。瑟は樂器の名。趙は東に在り故に東瑟といふ。史記に趙王秦王ト澠池ニ會ス。秦王曰ク、寡人趙王音ヲ好ムト聞ク、請フ瑟ヲ奏セヨト、趙王瑟ヲ鼓ス、藺相如ススンデ曰ク、趙王竊ニ聞ク秦王善ク秦聲ヲナスト、請フ缶ヲ奏セヨト、秦王怒ツテ許サズ、相如曰ク請フ頸血ヲ以テ大王ニ濺グヲ得ント、左右相如ヲ刃セント欲ス、相如之ヲ叱ス、皆靡ク、秦王懌バズ、爲ニ一タビ缶ヲ擊ツとあり。
【一〇九】偏鼓。趙王のみ獨り瑟を鼓すること。
【一一〇】西缶。缶は瓦器なり。秦は西に在り故に西缶といふ。
【一一一】十城。史記に秦ノ羣臣趙ノ十五城ヲ以テ秦王ノ壽ヲナサンコトヲ請フ、藺相如亦曰ク、請フ秦ノ咸陽ヲ以テ趙王ノ壽ヲナセト、秦王終ニ勝ヲ趙ニ加フル能ハズとあり。壽とは贈物として獻上すること。
【一一二】咸陽。秦の都なり。
【一一三】儁。勝利なり。
【一一四】河外。澠池を指す。
【一一五】咆勃。怒る貌。
【一一六】廉公。趙將廉頗なり、史記に廉頗曰ク、我趙將トナリ攻城野戰ノ功アリ、而ルニ藺相如ハ徒ニ口舌ヲ以テ勞トナシ、而シテ位我カ上ニ居ル、我相如ヲ見バ必ズ之ヲ辱メント、相如出デテ廉頗ヲ見レバ車ヲ引イテ避ケ匿ルとあり。
【一一七】淵偉。深大なり。
【一一八】忿悁。躁怒なり。
【一一九】光武。後漢の光武帝。
【一二〇】蒙塵。天子の賊を避けて都を逃ろること。
【一二一】王誅。天誅に同じ。
【一二二】赤眉。賊軍の名。

眉に致し、（一二四）異辭を奉じて以て罪を伐ち、初め翅を（一二五）廻谿に垂れしも、昔を尤めて以て德を掩はず、終に翼を奮つて高く揮び、（一二六）佐命の（一二七）元勳を建て、皇綱を振ひて更に維ぐ。

【大意】孝水に至りて口を澡ぎ、冠纓を濯ひ、其美名を嘉して徘徊し、新安に至りて赤子を喪ひ、之を路傍に埋む。此地千秋亭と名づくと雖も、吾が子七十日の齡を保たずして死せるを悲む。悲哀を忍ぶこと延吳より勉むと雖も、余が慈愛の情を慟ましむること甚し。因つて新安の山川を顧望して古事を追懷し、項羽の暴虐を逞うし、無辜の秦卒を坑殺し、遂に秦人を激して高祖の德に歸せしめ、暴虐反りて我身に報い、宗族滅びて身は烏江の露となりしを思ひ、澠池を經て强秦と弱趙と此地に會合し、藺相如の輔により趙王ひとり瑟を鼓するの恥を免れ、秦王をして缶を擊つて之に報いしめ、咸陽を以て趙王の壽をなせと傲語して勝を取り、出でては澠池に猛氣を振ひ、入りては廉頗に屈して國家の急を憂へし事を思ふ。ああ相如の深大なる智勇を以て、之を廉頗の鄙吝なる躁怒に比すれば、共に日を同うして

【一二四】異。光武帝の將馮異なり。
【一二五】廻谿。阪の名。東漢觀記に、馮異征西將軍ニ拜セラレ赤眉ト相距グ、光武諸將士ニ命ジ澠池ニ屯セシム、赤眉ノ乘ズル所トナリ反リ走リテ廻谿阪ニ上ル、異復タ兵ヲ合セ追擊シテ大ニ之ヲ殺底ニ破ル璽書シテ異ヲ勞シテ曰ク、翅ヲ廻谿ニ垂レシモ翼ヲ澠池ニ奮ヘリトとあり。
【一二六】佐命。天命を受けたる天子を輔けて大業を成さしむること。
【一二七】元勳。大功なり。

語るべからず。光武帝の蒙塵せし時、馮異命を承けて赤眉の賊を誅伐し、初め廻谿に敗れしも、光武よく一旦の敗を以て異の德を棄てざりしかば、異終に澠池に大捷を得、遂に帝を輔けて王業を維持したるを思ふ。

(一二八)崤坂の威夷たるに登り、(一二九)崇嶺の(一三〇)嵯峩たるを仰ぐ。(一三一)皐墳を南陵に託し、(一三二)文風を(一三三)北阿に違く。(一三四)蹇(一三五)孟を哭して以て敗を(一三六)審にし、(一三七)襄墨縗して戈を授け、曾て(一三八)隻輪も反らず。(一三九)三帥を絲へて以て河を濟る。(一四〇)庸主の(一四一)矜愎に値はば、殆ど(一四二)叔を朝市に肆さんとす。(一四三)任好綽として其れ餘裕あり、獨り過を引いて以て己に歸す。(一四四)明三たび敗れて黜けられず、卒に晉を陵ぎて以て恥を雪ぐ。豈虛名の立つべけんや。良に霸を致すこと其れ以あり。(一四五)曲崤を降りて(一四六)虢を憐む。與國を

【一二八】崤坂。崤は山の名。
【一二九】威夷。險なり。
【一三〇】嵯峩。高き貌。
【一三一】皐。夏后皐なり。左傳に秦ノ穆公、孟明、西乞、白乙ヲ召シ師ヲ出シテ鄭ヲ襲ハシム、蹇叔ノ子師ニ與レリ、哭シテ之ヲ送リテ曰ク、晉人師ヲ禦ゲ必ズ殺ニ於テセン、殺ニ二陵アリ、其北陵ハ文王ノ風雨ヲ避ケシ所ナリ、必ズ此間ニ死セン、余爾ガ骨ヲ收メント、秦ノ師還ル、晉ノ文公ノ子墨縗經シテ秦ノ師ヲ殺ニ敗リ百里孟明視、西乞術、白乙丙ヲ獲テ歸ル、文嬴（晉の文公の夫人）三師ヲ請フ、公之ヲ許スとあり。
【一三二】文。周の文王。
【一三三】北阿。北陵に同じ。
【一三四】蹇。秦の蹇叔なり。
【一三五】孟。秦の將孟明視なり。
【一三六】襄。晉の襄公、文公の子なり。
【一三七】墨縗は喪服なり。
【一三八】隻輪。車の輪一つ。
【一三九】三帥。秦の三將、孟明視西乞術、白乙丙なり。
【一四〇】庸主、凡庸なる君主。
【一四一】矜愎。傲慢なること。
【一四二】叔。蹇叔なり。
【一四三】任好。秦の穆公の名。
【一四四】明。孟明視なり。
【一四五】曲崤。地名なり。
【一四六】虢。國の名。

(一四七)亡虞に託し、(一四八)誘賂を貪りて以て(一四九)鄰を賣り、(一五〇)臘に及ばずして拘に就き、(一五一)垂棘、故府に反り、(一五二)屈產晉輿に服す。德建たずして民援なく、(一五三)仲雍の祀(一五四)忽諸たり。我安陽に徂き、言に(一五五)陝郛に陟り、(一五六)漫瀆の口に行き、(一五七)曹陽の墟に憩ふ。美なるかな邈たるかな、茲土の舊きや。固に乃ち(一五八)周邵の分ちし所、(一五九)二南の交る所、(一六〇)麟趾は關雎より信に、(一六一)騶虞は鵲巢に應ず。漢氏の剝亂を愍む。朝に流亡して以て離析し、(一六二)卓天に滔りて以て(一六三)大滌し、宮廟を劫して迹を遷し、萬乘の盛尊をして遙思を征役に降さしむ。顧つて旋を儺汎に請ひ、既に許を獲て中ごろ惕む。皇駕を追ひて驟戰ひ、(一六四)王輅を望んで鏑を縱つ。(一六五)百

【一四七】亡虞。亡びたる虞國。
【一四八】誘賂。誘惑賄賂なり。左傳に晉ノ荀息、屈產ノ乘ト垂棘ノ璧トヲ以テ道ヲ虞ニ假リ以テ虢ヲ伐タント請フ。虞公之ヲ許ス、宮之奇曰ク、虞臘セジ（年末の臘祭を行ふに及ばずして滅亡すべしとの意）ト、晉虢ヲ伐ツ、虢公醜京師ニ奔ル、晉師還リテ虞ニ館シ、遂ニ虞ヲ襲ヒテ之ヲ滅スとあり。
【一四九】鄰。鄰國、虢國を指す。
【一五〇】臘。年末に行ふ祭の名。
【一五一】垂棘。璧の名。故府はもとの庫なり。
【一五二】屈產。屈地に產する馬。
【一五三】仲雍。虞の祖先。
【一五四】忽諸。忽にして亡ぶると。
【一五五】陝郛。陝は縣名、弘農郡に屬す。郛は郭なり。
【一五六】漫瀆。澗水の名。
【一五七】曹陽。亭の名。
【一五八】周邵。邵は召なり、周公且、召公奭なり、公羊傳に陝ヨリ以東ハ周公之ヲ主ル、以西ハ召公之ヲ主ルとあり。
【一五九】二南。詩經の周南、召南なり、周南は周公の領内より得たる詩、召南は召公の領内より得たる詩なり。
【一六〇】麟趾、關雎。周南の詩篇の名。
【一六一】騶虞、鵲巢。召南の詩篇の名。
【一六二】卓。董卓。後漢の靈帝の時の將軍なり。
【一六三】大滌。滌は除なり。
【一六四】王輅。天子の車。
【一六五】百寮。百官なり。

寮の勤王を痛む。成く力を畢して以て死を致し、身首を鋒刃に分ち、胷腋を洞くに流矢を以てし、裳を蹇げて以て岸に投ずるあり、或は袂を攘げて以て水に赴くあり。(一六五)桴檝の中に撮つて指を掬す。(一六六)褊小なるを傷み、舟

【大意】 崤坂に登りて崇嶺を仰ぎ、夏后皐の墳の在る所、文王の風雨を避けし所を望み、昔蹇叔の秦將孟明視の敗戰を豫知し、晉の襄公喪服を著て秦將を伐ち、秦軍敗績して隻輪も歸る者なく、晉軍秦の三將を執へ、河を濟りて國に歸りし事を思ふ。かの蹇叔の敗戰を豫言せし時、若し矜愎なる庸主ならば、必ず蹇叔を殺して之を市朝に肆ししならん。然も秦の穆公は綽然として寛裕の德あり。故に敗戰の過を己の不明に歸し、三たび戰つて敗れたる孟明視を黜けず。卒に晉を破りて恥を雪ぎぬ。穆公の終に霸業を成せる固より宜なり。進んで曲崤を降り、虢國虞國と黨與たりしも、虞は晉の賄賂(垂棘の璧と屈產の馬)を貪りて虢國の交誼に背き、一年ならずして自國も亦晉に亡され、垂棘の璧は晉の府庫に歸り、屈產の馬は晉車に駕するに至り、仲雍以來の國家忽ちにして滅亡せしを憐む。更に進んで安陽に往き陝縣を經、曹陽の城墟に憩ふ。ああ陝の地たる周召以來の舊土にして、永く詩上に其名を留む。降つて漢の騷亂に及び、董卓宦官を除かんとして大兵を擧げ、洛陽の宮室を燒きて都

【一六五】桴檝。桴は舟、檝は棹なり。
【一六六】褊小。狹小なり。

を長安に遷し、天子を奉じて亂賊を擊滅せんことを謀る。呂布卓を誅す。卓の將李傕郭汜朝政を擅にし、天子を營內に質とす。天子歸還を請ひて洛陽に還る。傕汜後之を悔い、相與に追ひて天子に及び、曹陽に於て大に戰ふ。其後百官士卒大に王事に勤め、力屈して敗れ岸に投じ水に赴いて死し、獻帝纔に船に登る。諸の渡るを得ざる者爭つて船に攀づ。船上の人刃を以て其指を斬る。船中の指掬ひて取るべし。今其事を想ひて憐愍の情に堪へず。

(一六七)曲沃に升りて惆悵し、(一六八)亂を兆して兄の替れしを惜む。枝末大にして本披く。(一六九)都國に偶ひして禍結ぶ。(一七〇)臧札その高厲を飄し、(一七一)曹吳を委てて節を成す。何ぞ(一七二)莊武の恥なき。徒に利開いて義閉づ。(一七三)函谷の(一七四)重阻を蹠み、天險の(一七五)衿帶を看、諸侯の勇怯を跡ね、(一七六)嬴氏の利害を算ふ。或は關を開いて以て敵を延く。競つて遁逃して以て奔竄するあり。門を噤ぢて啓く

【一六七】曲沃。地名、今の山西聞喜縣、晉の昭侯其叔父成師を此地に封ず、後遂に代りて晉國を有つに至りぬ。
【一六八】亂を兆す。左傳に晉ノ穆侯ノ夫人姜氏、條ノ役ヲ以テ太子ヲ生ム、之ヲ命ジテ仇トイフ、其弟千畝ノ戰ヲ以テ生ル、之ヲ命ジテ成師トイフ、師服曰ク、今君太子ヲ命ジテ仇トイヒ、弟ヲ成師トイフ、始メテ亂ヲ兆セリ、兄ソレ替レンカトあり。
【一六九】都。封邑をいふ。
【一七〇】臧札。臧は曹君の子子臧なり。國を讓らるることを辭せり。札は吳の公子季札なり太子となるを辭せり。
【一七一】曹吳。二國の名。
【一七二】莊武。莊公武公、曲沃の君にして成師の後なり、其の宗國たる晉を伐ちて之を滅せり。
【一七三】函谷。關所の名。
【一七四】重阻。險阻の地。
【一七五】衿帶。衿はエリ、帶はオビ。
【一七六】嬴氏。秦なり。

なく、兵を山外に窺はざるあり。連雞互にして栖まず、小國合ひて大を成す。豈地勢の安危ならんや。信に人事の(一七七)否泰なり。漢(一七八)六葉にして畿を拓き、(一七九)弘農を縣として關を遠くし、(一八〇)紫極の(一八一)閑敞を厭ひ、微行し以て(一八二)遊盤するを甘んず。長く賓に(一八三)柏谷に傲る。妻貌を覩て餐を獻ず。匹婦に疇ゆると其れ已に泰なり。胡ぞ厥夫の官を謬れる。昔明王の巡幸するや、固に道を清ひて後に往く。(一八四)銜縻の或は變せんことを懼れ、(一八五)徒御を峻にするに誅賞を以てす。彼の白龍の(一八六)魚服せる、(一八七)豫且の密網に挂れり。帝の重きを天下に輕くす。爰ぞ斯漸の長すべき。(一八八)戾園を(一八九)湖邑に弔ふ。諒に世の(一九〇)巫蠱に遭ひ、隱伏を明にし難きに探り、讒賊の(一九一)趙虜に委ね、(一九二)戮を(一九三)儲貳に加へ、肌膚を絶つて顧みず。(一九四)歸來の悲臺を作り、徒に望思するも其れ何の補あらん。(一九五)紛として吾既に此の(一九六)全節を邁き、又之に繼いで以て(一九七)桃園に(一九八)盤桓し、休牛の故林を問ひ、感じて名を(一九九)徵す。

【一七七】否泰。安危といふが如し。
【一七八】六葉。六世なり、高祖より六代目、武帝の時。
【一七九】弘農。漢書に武帝ノ元鼎三年、函谷關ヲ新安ニ徙シ故關ヲ以テ弘農縣トナスとあり。
【一八〇】紫極。天子の宮殿をいふ。
【一八一】閑敞。宏大なること。
【一八二】遊盤。遊びあるくこと
【一八三】柏谷。地名、武帝故事に帝微行ナナシ、嘗テ柏谷ニ至ル、逆旅ニ宿ス、逆旅翁惡少年十餘人皆弓矢刀劍ヲ持チ、主嫗ヲシテ出デテ客ニ遇ハシム、婦其翁ニ謂ツテ曰ク、吾コノ丈夫ヲ觀ルニ常人ニアラズ、圖ルベカラザルナリト、天寒シ、嫗酒ヲ酌ミ多ク其夫ニ與フ、夫醉フ、嫗自ラ其夫ヲ縛ス、諸少年皆走ル、嫗出デテ客ニ謝シ、雞ヲ殺シテ食ヲ作ル、平旦ニ帝去ツテ宮ニ還リ、乃チ逆旅ノ夫妻ヲ召シテ之ヲ見、嫗ニ金千斤ヲ賜ヒ其夫ヲ擢デテ羽林郎トナスとあり。
【一八四】銜縻。馬のクツワ。
【一八五】徒御。隨從の士卒。
【一八六】魚服。魚のよそほひをすること。
【一八七】豫且。人名なり。說苑ニ吳王民ニ從ツテ飲マント欲ス伍子胥曰ク、昔白龍化シテ魚トナル、豫且射テ目ニ中ツ、白龍化セズンバ豫且射ズ、君今萬乘ノ位ヲ棄テテ臣ニ從ハバ、豫且ノ患アランコトヲ恐ルトあり。
【一八八】戾園。武帝の太子の陵。
【一八九】湖邑。邑の名、戾太子の墓のある所。

【一九〇】巫蠱。女巫術を以てマジナヒをなし以て人を詛ふなり。漢の武帝病む、時に江充戾太子と隙あり、太子巫蠱を以て帝を詛ふなりと讒す。太子湖邑に至り、自ら縊れて死す。
【一九一】趙虜。江充をいふ。
【一九二】儲貳。太子なり。
【一九三】歸來。武帝太子の罪なきを知り、乃ち思子宮を作り、歸來望思の臺を湖に作る。
【一九四】紛。心緒の亂るる貌。
【一九五】全節。地名、戾太子死せし處。
【一九六】盤桓。徘徊すること。
【一九七】桃園。地名、古の桃林なり、周の武王殷を伐ちて歸り馬を華山の南に歸し、牛を桃林の野に放ち、復た用ひざるを示す。

【大意】曲沃に升りて、晉の穆公其子に名づくるに成師を以てし、其後を封じて遂に亂兆を開き、宗國の衰替を招きし事を悲む。かの子臧、季札は高義を守りて曹吳を棄てたるに、莊武の二公何ぞ兄弟の國を滅すの無恥をなせる。此れ所謂利門開いて義路閉づるものなり。進んで函谷關を越え、山河衿帶の天險を見、六國諸侯の强弱と秦國攻守の利害とを思ふ。秦或は關を開いて諸侯を待ち、諸侯奔竄して敢て進まざりし事あり。此れ秦の利にして諸侯の怯なるなり。或は關を閉ぢて開かず、敢て山東諸侯を窺はざりし事あり。此れ秦の害にして諸侯、勇なるなり。夫れ諸侯の心力齊しからざること連雞の如し。

俱に止棲する能はず。心力或は齊しければ、小弱の國と雖も亦よく相合して強大を成すに足る。要するに國家の興廢は地勢の如何に由るにあらず、皆人事の然らしむる所なり。漢の武帝の時、王畿を開拓し函谷關を徙して弘農縣となす。武帝屢微行をなし、嘗て柏谷に至る。逆旅の主人之に傲りしも、其妻武帝の容貌を見、常人にあらざるを知り、厚く之を饗す。武帝因つて千金を其妻に賜ひ、其夫に羽林郎の官を授けたりといふ。何ぞ其の謬れるの甚しきや。昔明王の巡幸するや、先づ道を清はしめて、然る後行き、急變の馬首の間に起らんことを恐れ、法を峻にし惠を厚うして、以て徒御の人を賞罰せり。白龍も魚化すればこそ豫且の網に挂るなれ、天子の重きを以て屢微行するが如きは、下民上を凌ぐの漸にして、天子たる者は決して此風を長ぜしむべきにあらず。更に湖邑に戾太子を弔ふ。武帝巫蠱の事を信じ、讒賊江充の言に惑ひ、誅戮を其子に加へて顧慮する所なし。後過を悔い歸來望思の臺を作り、太子の死を悲みしも、復た及ばざるなり。既に太子全節の地を過ぎて徘徊顧望し、武王の牛を放ちたりと傳ふる桃林を尋ね、桃園の名によりて其地を徵するを得たり。

(一九八)閿鄉を發して　(一九九)警策し、(二〇〇)黃巷に憩ひて以て　(二〇一)潼を濟り、(二〇二)華岳の陰崖を眺め、(二〇三)高掌の

【一九八】閿鄉。地名なり。
【一九九】警策。馬に鞭ちて勵すこと。
【二〇〇】黃巷。坂の名。
【二〇一】潼。川の名。
【二〇二】華岳。山の名。
【二〇三】高掌。華岳の北面に巨靈神の掌の跡あり。

遺蹤を覿、江使の璧を反し、(二〇四)亡期を(二〇五)祖龍に告げしを憶ふ。怪を語りて以て異を徵せずとは、我之を(二〇六)孔公に聞けり。(二〇七)韓馬の(二〇八)大憝、(二〇九)關谷を阻み以て亂を稱げしを慍り、(二一〇)魏武赫として霆のごとく震ひ、義辭を奉じて以て叛を伐つ。彼衆なりと雖も其れ焉んぞ用ひん。故に勝を(二一一)廟算に制す。(二一二)砰として桴を揚げ以て塵を振し、(二一三)繾として瓦のごとく解け冰のごとく泮く。超遂に遁れて狄に奔り、甲卒化して(二一四)京觀となる。狹路の迫隘にして軌崎嶇として以て低仰するに倦みしも、秦郊を蹈んで始めて闢け、(二一五)爽塏を豁にして以て宏壯なり。黃壤千里にして沃野望に彌ち、華實紛敷して桑麻(二一六)條暢す。邪に(二一七)褒斜に界し、右のかた(二一八)汧隴に濱ひ、(二一九)寶雞前に鳴き(二二〇)甘泉後に涌き、(二二一)終

【二〇四】亡期。死期なり。
【二〇五】祖龍。秦の始皇帝をいふ。史記に秦ノ始皇帝ノ三十六年、鄭ノ使者華陰ノ野ニ至ル、人アリ使者ニ璧ヲ與ヘテ曰ク、我ガ爲ニ鎬池君ニ遺レト、因ツテ言ツテ曰ク、明年祖龍死セント、璧ヲ置イテ去リ。忽チ見エズ、始皇璧ヲ視シムレバ、乃チ二十八年ニ江ヲ渡リシ時沈メシ所ノ璧ナリ、とあり。
【二〇六】孔公。孔子をいふ。
【二〇七】韓馬。魏志に建安十六年關中ノ諸將馬超韓遂等反ス、超等潼關ニ屯スとあり。
【二〇八】大憝。大惡人をいふ。
【二〇九】關谷。潼關と函谷關とをいふ。
【二一〇】魏武。魏の武帝曹操なり。
【二一一】廟算。戰に先だちて宗廟に方略を考ふること。
【二一二】砰。鼓の聲。
【二一三】繾。破るる聲。
【二一四】京觀。尸を積み土を其上に築く。戰爭の記念塚なり。
【二一五】爽塏。高燥なること。
【二一六】條暢。長く伸ぶること。
【二一七】褒斜。谷の名。
【二一八】汧隴。ともに山の名。
【二一九】寶雞。陳倉に寶雞祠あり。
【二二〇】甘泉。山の名。
【二二一】終南。山の名。

南に面して(二三三)雲陽に背き、平原に跨りて(二三四)蟠家に連り、(二三五)九嵕截薛として(二三六)太一龍從たり。清風の(二三七)飂戾たるを吐き、歸雲の(二三八)鬱蓊たるを納れ、南に(二三九)玄灞、素滻、(二四〇)湯井、溫谷あり。北に(二四一)清渭、濁涇、(二四二)蘭池、周曲あり。浸は(二四三)鄭白の渠を決し、漕は淮海の粟を引き、林は(二四四)有鄠の竹を茂らし、山は(二四五)藍田の玉を挺んで、(二四六)班は陸海の珍藏を述べ、(二四七)張は(二四八)神皐隩區を敍ぶ。此れ(二四九)西賓の(二五〇)東主に言へる所以、(二五一)安處の(二五二)憑虛に聽ける所以なり。然りと謂はざるべけんや。

【大意】 閿鄉を發して警策を加へ、黃巷坂に向つて潼水を渡り、華山の陰を望みて神掌の跡を見、江水の使者秦皇に璧を反し、其死期を告げし事を憶ひぬ。然れども怪神を語らず

【二三三】雲陽。縣の名。
【二三四】蟠家。山の名。
【二三五】九嵕。山の名。薛は高き貌。
【二三六】太一。山の名。龍從は高き貌。
【二三七】飂戾。風の聲。
【二三八】鬱蓊。雲の貌。
【二三九】玄灞。灞は川の名、玄は水色黑きなり。滻も川の名、水色白し、故に素といふ。
【二四〇】湯井。溫湯なり。溫谷は溫泉なり。
【二四一】清渭。渭は川の名、其水清し。涇も川の名、其水濁れり。
【二四二】蘭池。宮觀の名。周曲は陂の名。
【二四三】鄭白。鄭國渠、白渠の二渠なり。
【二四四】有鄠。鄠縣をいふ。
【二四五】藍田。玉の名產地。
【二四六】班。西都賦の作者班固を指す。
【二四七】張。西京賦の作者張衡を指す。
【二四八】神皐隩區。皐は澤なり、神靈の地をいふ。
【二四九】西賓。西都より來れる賓なり、西都賦に見ゆ。
【二五〇】東主。東都主人なり、西都賦に見ゆ。
【二五一】安處。安處先生なり。西京賦に見ゆ。
【二五二】憑虛。憑虛公子なり、西京賦に見ゆ。

とは、孔子の教なれば、此事固より信を置くに足らず。潼關を越えて韓遂、馬超の叛旗を飜し、魏武曹操君命を奉じ鼓を鳴して之を攻むるや、叛軍遂に瓦解して涼州に遁れ、其身化して終に京觀となりし事を憶ふ。此間狹路崎嶇として車の高低に難みしも、秦郊に至りて、始めて開豁なるを覺え、沃野千里、桑麻の繁生するを見たり。因つて四方を眺望するに、西に褒斜汧隴の險あり。寶雞甘泉終南太一の諸山前後に聳え、風を吐き雲を呑み、南に灞滻、北に渭涇の川あり。巨浸には鄭白の二渠あり。江淮地方の粟を運ぶべし。鄠縣の竹、藍田の玉、亦世に名あり。嘗て班固は西都賦を作り、張衡は西京賦を作りて、詳に此を記述せり。皆其の言ふ所の如し。

勁松は歲の寒きに彰はれ、貞臣は國の危きに見はる。(二五三)鄭都に入りて掌を抵ち、(二五四)桓友の忠規を義とす。(二五五)股肱を(二五六)昏主に竭し、(二五七)塗炭に赴いて移らす。世職を(二五八)司徒に善くし、(二五九)緇衣弊れて改

【二五三】鄭都。漢の鄭縣なり、
【二五四】桓友。鄭の桓公、名は友、犬戎周の幽王を驪山の下に殺すや、桓公また周の司徒として其難に死せり。忠規とは忠義の行をいふ。
【二五五】股肱。臣たるの職責。
【二五六】昏主。愚なる君主、周の幽王を指す。
【二五七】塗炭。水火の難儀。
【二五八】司徒。官名。鄭の桓公、其子武公竝に周の司徒となり其職を善くす。
【二五九】緇衣。詩經鄭風緇衣篇に緇衣ノ宜シキ、弊レバ子又改メ爲ラントあり。緇衣とは黑衣にして司徒の服なり、詩意は父死せば其子代りて司徒となれかしとの意。

め爲る。(二五九)犬戎の侵地を履み、(二六〇)幽后の詭惑を疾む。(二六一)僞烽を擧げて以て衆を沮み、(二六二)嬖褒に淫して以て(二六三)慝を縱にし、軍(二六四)戲水の上に敗れ、身(二六五)驪山の北に死し、赫赫たる宗周戚びて亡國となる。又此に繼ぐ者あり。異なるかな秦の始皇の君たるや。天下を傾けて以て厚く葬り、開闢よりして未だ聞かず、(二六六)匠人勞すれども圖らず、生きながら埋めて以て勤に報いしむ。外は(二六七)西楚の禍に離り、內は(二六八)牧豎の焚を受く。語に曰く無禮を行へば必ず自ら此に及ぶと。其効にあらずや。乾坤は親あるを以て久しかるべく、君子は厚德を以て物を載す。夫の(二六九)漢高の興るを觀るに、徒に聰明神武豁達大度なるのみにあらず。乃ち實に終を愼み舊を追ひ、篤誠(二七〇)款愛して、澤漸はざるなく、恩逮ばざるなし。(二七一)率土すら且つ猶ほ遺れず。而るを況んや隣

【二五九】犬戎。夷の名。
【二六〇】幽后。幽王なり。后は君なり。
【二六一】僞烽。いつはりの烽火。幽王褒姒を寵愛す、褒姒笑ふを好まず、或時烽火を擧げたるに褒姒乃ち大に笑ふ、幽王之を悅び爲に屢烽火を擧ぐ。犬戎幽王を攻む、幽王烽火を擧げて兵を徵す、諸侯の兵僞ならんと思ひて至らず、幽王因つて犬戎の殺す所となる。
【二六二】嬖褒。寵愛する褒姒。
【二六三】慝。邪惡なり。
【二六四】戲水。川の名。
【二六五】驪山。山の名。
【二六六】匠人。工人なり、漢書に秦ノ始皇驪山ノ阿ニ葬ル、石槨ヲ游館トナシ、生キナガラ工匠ヲ埋ム、後項籍其宮室ヲ燔キ、其後牧兒羊ヲ亡ヒテ其鑿中ニ入シ、牧兒火ヲ持チ照シテ羊ヲ求ム、火ヲ失シテ其藏槨ヲ燒ク云云とあり。
【二六七】西楚。項羽をいふ、項羽西楚霸王と稱したればなり。
【二六八】牧豎。牧童なり。
【二六九】漢高。漢の高祖。
【二七〇】款愛。款は誠なり。
【二七一】率土。天下といふが如し。

里に於てをや。而るを況んや卿士に於てをや。斯時に于て乃ち(二七二)舊豐を摹寫し、新邑を制造し、(二七三)故社を易へ置き、(二七四)枌榆を遷し立て、街衢一の如く、庭宇相襲ひ、雞犬を渾めて以て亂し放ち、各家を知りて競ひ入る。(二七五)籍怒を(二七六)鴻門に含み、(二七七)沛踢蹐して來王す。(二七八)范害を謀れども許さず。陰に劒を授けて以て(二七九)莊に約す。白刃を撫いて以て(二八〇)萬舞す。冬葉の霜を待つよりも危し。虎尾を履んで噬まれず。寔に(二八一)伯を(二八二)子房に要す。(二八三)樊憤を抗ぐるに(二八四)巵酒を以てし、(二八五)㷭肩を咀ひ以て(二八六)激揚す。忽ち虵變じて龍のごとく攄び、霸上に雄として高く驤る。(二八七)曾怒を遷して橫に撞き、(二八八)玉斗を碎けども其れ何ぞ傷らん。(二八九)嬰組を(二九〇)軹塗に胥け、(二九一)素車に投じて(二九二)肉

【二七二】舊豐。豐は邑の名、漢の高祖は沛の豐邑の人なり、高祖故鄉を慕ひ豐邑の人を徙して別に新豐邑を立てたり。
【二七三】故社。豐邑に在りし社。
【二七四】枌榆。高祖の里社なり。
【二七五】籍。項羽の名。
【二七六】鴻門。地名。
【二七七】沛。沛公、卽ち高祖なり。
【二七八】范。范增なり。項羽の臣なり。
【二七九】莊。項莊なり。
【二八〇】萬舞。大舞なり。
【二八一】伯。項伯なり、項羽の季父。
【二八二】子房。張良、字は子房。高祖の臣なり。
【二八三】樊。樊噲なり、高祖の臣。
【二八四】巵酒。酒器に盛りし酒。
【二八五】㷭肩。豚の肩肉。
【二八六】激揚。意氣軒昂すること。
【二八七】曾。增なり、范增をいふ。
【二八八】玉斗。玉にて作りし杓。
【二八九】嬰。秦王子嬰なり。
【二九〇】軹塗。軹は亭の名、長安城の東十三里にあり、塗は途に同じ。
【二九一】素車。白色の馬車。
【二九二】肉袒。はだぬぎになること、人の臣僕たるを示すなり。

祖す。(二八三)疎　(二八四)東都に飲餞し、極位の盛滿を畏る。(二八五)金墉鬱として其れて以て繩のごとく直し。(二八六)飲馬の陽橋に戻り、(二八九)宣平の清闕を踐む。

【大意】夫れ歲寒くして松柏の凋に後るるを知り、國危くして忠臣乃ち現る。余今鄴都に入りて、桓公友の臣節を幽王に竭し、父子相繼いで其職を守り、一身を捧げて君の難に殉したるを嘉す。進んで犬戎の侵略せる地域に至り、幽王暗愚にして屢僞烽を擧げて、諸侯の信を失ひ、襃姒を寵して邪惡を縱にし、犬戎の攻擊に遇ひて、驪山の下に死し、宗周ここに滅びしを疾む。かの秦の始皇帝の如き、亦幽王の惡虐に傚へる者なり。其の驪山に葬るや、開闢以來未だ聞かざる所の厚葬にして、工匠の勤勞に報ゆるに褒賞を以てせず、却つて之に報ゆるに生埋の苦を以てす。然も外は項羽の破る所となり、內は牧豎の燒く所となれり。古語に無禮を行へば、必ず自ら此に及ぶといふ。始皇の此禍に遇へるも、亦當然の應報のみ。抑天地の心は有德に親み其をして長久ならしめ、君子は純厚の德を以て萬物を載育す。かの漢の高祖の興れるは、ただ聰明大(二八八)萬雉なり、(二八七)峻嶮峭とし

【二八三】疎。漢書に疎廣太子太傅トナリ、兄ノ子受少傅トナル、廣受ニ謂ツテ曰ク、吾聞ク足ルヲ知レバ辱メラレズト、今官成リ名立チテ去ラズンバ懼ラクハ後悔アラント、遂ニ上疏シテ骸骨ヲ乞フ、上皆之ヲ許ス、故人邑子爲ニ祖道ヲ設ケ東都門外ニ供帳スとあり。

【二八四】東都。都一本に門に作る。長安の東門なり。

【二八五】金墉。長安城なり。

【二八六】萬雉。一丈四方を堵といひ、三堵を雉といふ。

【二八七】峻嶮峭。高峻の貌。

【二八八】飲馬。橋の名。陽橋は橋陽に同じ、橋の南なり。

【二八九】宣平。長安城門の名。清闕は清らかなるシキヰ。

度なりしのみにあらず。よく終を愼み舊を追ひ、誠篤款愛して洽く恩澤を及ぼしたればなり。夫れ恩澤を天下に及ぼせり。況んや其隣里卿士に於てをや。故に鄉里を慕ひて別に新豐邑を立て、枌榆社を遷し、庭宇街衢皆鄉里の制を襲ひ、雞犬を通途に放ち、屢其民家に出入せり。項羽の關中に入らんとするや、沛公(後の高祖)已に關中を平定せりと聞き、大に怒り、將に之を破らんとす。沛公因つて跼蹐して鴻門に來り、罪を項羽に謝す。范增羽に勸めて沛公を殺さんとす。羽許さず。增因つて劍を項莊に授け、劍舞に託して沛公を剸さしめんとす。沛公の危きこと冬葉の霜を待つが如く、猛虎の尾を履むが如し。ただ項伯と張良とに依りて、事なきを得たり。時に樊噲沛公の急を聞いて憤を發し、巵酒を手にし彘肩を食ひて、氣を項羽の前に吐く。此に因つて沛公忽ち蛇の變じて龍となりしが如く、霸上に歸りて威氣頓に驤りぬ。范增終に沛公を逸せるを惜み、怒りて沛公の贈りし玉斗を撞き破りしも、今更及ぶなきなり。沛公の關に入るや、秦王子嬰素車白馬にして組を頸に加へ軹道の傍に降る。余今其遺跡を過ぎ、進んで長安の東門に至る。昔疎廣疎受の二人、太子の傅なりしが、官位の盛滿を畏れ、官を辭して鄉に歸らんとす。時に友人送別の宴を都門外に張れりと傳ふるは、卽ち此處なり。近く長安城の高峻なるを望み、飲馬橋を渡り宣平門を過ぎ、ここに始めて長安に達しぬ。

都中(二九〇)雜遝、戶千にして人億、華夷の士女、(二九一)駢田逼側す。(二九二)名京の(二九三)初儀を展べ、新館に卽いて職に莅み、(二九四)疲鈍を勵して以て朝に臨み、勗めて自ら彊めて息まず。是に於て(二九五)孟秋爰に謝る。聽覽の餘日、農功を巡省し、廬室を周行す。街里蕭條として邑居散逸し、營宇(二九六)寺署、肆廛管庫、城隅に(二九七)蓑芮たる者、百一に處らず。所謂(二九八)尙冠、脩成、黃棘、宣明、建陽、昌陰、北煥、南平、皆(二九九)夷漫滌蕩し、其の處を亡ひて其名のみあり。爾して乃ち(三〇〇)長樂に階り、未央に登り、太液に汎び、建章に凌り、駿婺を縈りて駘盪に款り、柃詣を輞ぎて承光を轢き、桂宮に徘徊して柏梁に惆悵す。(三〇一)鷩雉(三〇二)臺陂に雊き、狐兎殿傍に窟す。何ぞ黍苗の(三〇三)離離として、余が思の(三〇四)芒芒たる。(三〇五)洪鐘毀廟に頓ち、(三〇六)乘風廢れて縣からず、(三〇七)禁省鞠まりて茂草となり、(三〇八)金

【二九〇】雜遝。雜沓に同じ。
【二九一】駢田。ならびて耕すこと。逼側は混雜すること。
【二九二】名京。長安は舊都なり。故に名京といふ。
【二九三】初儀。初對面の禮儀。
【二九四】疲鈍。潘岳自ら謙して言ふ。
【二九五】孟秋。初秋なり。
【二九六】寺署。役所なり。肆廛は商店。
【二九七】蓑芮。陋小の貌。
【二九八】尙冠。以下皆里の名。
【二九九】夷漫滌蕩。平滅の貌。
【三〇〇】長樂。未央、建章、桂宮は宮の名。太液は池の名。駿婺、駘盪、柃詣、承光、柏梁は臺の名。
【三〇一】鷩雉。鳥の名。
【三〇二】臺陂。臺殿陂池なり。
【三〇三】離離。穗の垂下せる貌。
【三〇四】芒芒。茫茫に同じ。
【三〇五】洪鐘。大鐘なり。
【三〇六】乘風。鐘を懸くる架なり。
【三〇七】禁省。禁裡なり。
【三〇八】金狄。銅人なり。秦銅人十二を鑄、以て長狄に象る、董卓壞りて以て錢となす。餘の二箇、魏の明帝洛陽に徙さんと欲す、霸城に到り重くして致すべからず、乃ち之を留む故に霸川に遷るといふ。

狄霸川に遷る。かの(三〇九)蕭曹魏邴の相、(三一〇)辛李衞霍の將を懷ふ。使を銜むは則ち(三一一)蘇屬國、遠きを震ふは則ち(三一二)張博望。(三一三)彝倫敍で、兵擧りて皇威暢び、危に臨んで智勇奮ひ、命を投じて高節亮なり。(三一四)秺侯の忠孝淳深なる、(三一五)陸賈の優遊宴喜する、(三一六)長卿淵雲の文、(三一七)子長政駿の史、(三一八)趙張三王の京に尹たる、(三一九)定國釋之の理を聽ける、(三二〇)汲長孺の正直なる、(三二一)鄭當時の士を推せる、(三二二)終童は山東の英妙、(三二三)賈生は洛陽へて優遊す。後陳平妓婢百人車馬五十乘、錢五百萬を以て賈に遣り食飲の費となす。

【三〇九】蕭曹魏邴。蕭何、曹參、魏相、邴吉、いづれも漢の宰相なり。
【三一〇】辛李衞霍。辛慶忌、李廣、衞青、霍去病、いづれも漢の將軍なり。
【三一一】蘇屬國。蘇武匈奴に使し留ること十九年にして歸り、典屬國に任ぜらる。
【三一二】張博望。張騫西域を討ちて功あり。博望侯に封ぜらる。
【三一三】彝倫。人の常道なり。
【三一四】秺侯。漢の金日磾、忠孝を以て秺侯に封ぜらる。
【三一五】陸賈。高祖に仕へて太中大夫となる、常に安車駟馬に乘り瑟を鼓する侍者十人を從
【三一六】長卿。司馬相如、字は長卿。王褒、字は子淵、揚雄、字は子雲、皆文に巧なり。
【三一七】子長。司馬遷、字は子長、史記の著者なり。劉向、字は子政、列女傳新序說苑等を著す。劉歆、字は子駿、七略を著す。
【三一八】趙張。趙廣漢京兆太尹となり姦を發き伏を擿すること神の如し。張敞、京兆尹となり、市に偸盜なし。三王は王尊、王章、王駿なり、皆京兆尹となり治績あり。
【三一九】定國。于定國廷尉として名聲あり。釋之は張釋之なり、亦廷尉となる。
【三二〇】汲長孺。汲黯、字は長孺、武帝に仕へて屢直諫す。
【三二一】鄭當時。大司農となり、朝するごとに賢士を推薦せざるはなし。
【三二二】終童。終軍、字は子雲、山東濟南の人、年十八選ばれて博士の弟子となり上書して事を言ふ、武帝其文を奇とす、死せる時年二十餘、故に世之を終童といふ。
【三二三】賈生。賈誼なり、洛陽の人、年十八能く詩を誦し書を屬す、文帝召して博士となす、時に年二十餘。

の才子なるに暨ぶまで、(三四)翠緌を飛ばし、(三五)鳴玉を拖らし、以て禁門に出入する者衆し。

【大意】既に長安に入れば、民家は千を以て數ふべく、人口は億を以て數ふべし。華夷の士女相雜りて駢び耕せり。余禮儀を備へて公館に就き、其職に膺り、微力を盡くし勉勵す。初秋既に終れば、政務を執るの餘暇、農功を巡檢して民間の間を周行す。今や舊城毀廢し、官署市廛蕭條として纔に城隅に殘存するのみにして、之を昔時に比すれば、復た百分の一にも及ばず。尙冠、脩成等の邑里は、今皆亡滅して只其名を存するのみ。余乃ち長樂、未央等の宮殿に登り徘徊惆悵すれば、鷲雉は臺殿陂池荒敗の中に鳴き、狐兎は廢殿毀室の間に窟宅し、禾黍離離として茂る。余悲思して思茫然たり。大鐘は毀廟に懸りて將に墜ちんとし、鐘架は傾いて鐘を懸くべくもあらず。禁裏の蹤は茂草と化し、銅人は霸川に遷りて其跡を留めず。飜つて漢の盛時を懷ふに、宰相には蕭曹魏邴あり。將軍には辛李衞霍あり。使臣には蘇武あり。遠征家には張騫あり。相は政敎を敷きて人倫大に張り、將は兵を四夷に擧げて皇威宣暢し、危きに臨んで智勇を奮ひ、身命を擲ちて高節を顯す。忠孝を以て著れし稚侯、優遊を以て名ありし陸賈、司馬相如等の文人、司馬遷等の史家、趙張の如き市尹、于定國の如き判官、汲長孺の如き直臣、終軍、賈誼の如き才子、いづれも禁門に出入する者極めて多かり。

【三四】翠緌。冠纓の飾なり。
【三五】鳴玉。腰に佩ぶる玉。

或は髮を被り衽を左にして、(三六)泥滓より奮迅し、或は(三七)從容傅會して、表を望み裏を知り、或は勳績を著して時戮に嬰り、或は大才ありて貴仕なし。皆清風を上列に揚げ、令聞を垂れて已まず。珮聲の遺響を想ふに、(三八)鏗鏘として耳に在るが若し。(三九)音鳳恭顯の勢に任せるに當り、乃ち四方を(三〇)熏灼し、都鄙を震耀す。而して死するの日、曾て夫の(三一)十餘公の徒隷と齒するを得ず。名才の難き其れ然らずや。(三二)漸臺を望んで扼腕し、(三三)巨猾を梟して餘怒あり。(三四)不疑に北闕に揖し、(三五)樗里に武庫に(三六)軾し、泗池

【三六】泥滓。卑賤なるをいふ。金日磾はもと夷狄の人、今盛貴に至る。
【三七】從容傅會。漢書の贊に陸賈陳平周勃ノ間ニ從容シ、將相ニ附會スとあり、陸賈呂太后の一族を平げて功あり、故に表を望み裏を知るといふ。
【三八】鏗鏘。珮玉の音。
【三九】音鳳云云。王鳳大司馬大將軍となる、鳳薨じ從弟王音鳳に代りて司馬車騎將軍となる。弘恭、中尙書となり、法令故事を明習す。石顯、黃門中尙書となり、元帝疾を被り政事を親らせず、事大小となく顯に因りて決す。
【三〇】熏灼。威勢を震ふこと。
【三一】十餘公。蕭何、曹參等を指す。
【三二】漸臺。臺の名、王莽の誅せられし處。
【三三】巨猾。大惡人、王莽を指す。
【三四】不疑。漢書に雋不疑、字ハ曼倩、京兆尹トナル、一男子アリ黃犢車ニ乘リテ北闕ニ詣リ自ラ謂フ衞太子ナリト、不疑之ヲ收縛シテ曰ク、昔蒯聵命ニ違ヒテ出奔ス、輒拒ンデ納レズ、春秋ニ之ヲ是トス、衞太子罪ヲ先帝ニ得、亡ゲテ死ニ卽カズ、今自ラ來ル、是レ罪人ナリト、遂ニ詔獄ニ送ルとあり。
【三五】樗里。史記に名ハ疾、秦ノ惠王ノ弟ナリ、卒シテ渭南章臺ノ東ニ葬ル、曰ク後百歲、當ニ天子ノ宮我カ墓ヲ夾ムアルベシト、漢ノ興ルニ至リ、長樂宮其東ニ在リ、未央宮其西ニ在リ、武庫正ニ其墓ニ値ルとあり。
【三六】軾。車上の橫木に倚りて禮すること。

を（三三七）商辛に鑒み、覆車を追ひて寤らず。（三三八）曲陽白虎に僭し、化奢淫にして度なし。命始あれば必ず終あり。孰か長生して久視せん。（三三九）武の雄略なるも其れ焉にか在る。近く（三四〇）文成に惑ひて（三四一）五利に溺れ、造化に倖うして以て制作し、山海の奥祕を窮め、（三四二）靈若神島に翔り、奔鯨浪つて水を失ひ、鱗骼を（三四三）漫沙に曝し、（三四四）明月を隕して以て雙び墜ち、（三四五）仙掌を擢んでて以て露を承け、（三四六）雲漢を干して上り至り、（三四七）邛蒟を致すこと其れ奚ぞ難からん。惟余欲を是れ恣にし、逸遊を角觝に縱にし、（三四八）甲乙を絡ふに珠翠を以てし、生民の減半を忍び、（三四九）東岳に勒するに虛美を以てす。超として長く懷ひて以て遐に念へば、循環の賜るなきが若し。（三五〇）面

【三三七】商辛。殷の紂王なり。酒池肉林の傲奢を極め終に國を亡せり。
【三三八】曲陽。王根曲陽侯となり第宅を修め白虎殿に象る。
【三三九】武。漢の武帝。雄略は雄才大略なり。
【三四〇】文成。齊人李少翁、方術を以て武帝に見ゆ、武帝拜して文成將軍となす。言ふ神と通ぜんと欲せば宮室被服神に象るにあらざれば不可なりと。武帝乃ち甘泉宮中に臺を作り天地泰一諸鬼神を畫き祭具を置いて天神を致す。
【三四一】五利。欒大、武帝に見えて曰く、不死の藥得べく、仙人致すべしと。武帝乃ち大を拜し五利將軍となす。
【三四二】靈若。海若、卽ち海神なり。
【三四三】漫沙。ひろき沙原。
【三四四】明月。鯨魚の目化して明月の珠となるといふ。
【三四五】仙掌。武帝仙人を作り露盤を捧げて雲表の露を挹る。玉屑に和して之を服すれば不老不死なるを得ると誤信せるに因る。
【三四六】雲漢。天河なり。
【三四七】邛蒟。邛は邛竹杖、蒟は蒟醬なり、武帝かかる珍奇の物を遠方より取寄せたり。
【三四八】甲乙。武帝甲乙の帳を造り、絡ふに隨珠和璧を以てす。
【三四九】勒。石に刻すること。
【三五〇】面朝。表面の朝廷なり、周禮に朝ヲ面ニシ市ヲ後ニスとあり。煥炳は明なる貌。

朝の煥炳たるを較にし、後庭の（三五一）猗靡たるを次にし、（三五二）熊に當るの忠勇を壯とし、（三五三）輦を辭するの明智を深しとす。（三五四）衞は鬢髮以て光鑒し、（三五五）趙は輕體にして纖麗なり。咸善く立ちて聲流れ、亦寵極りて禍侈なり。

【大意】或は被髮左衽の夷狄より起りて高位に陞れるあり。或は將相の閒に從容附會し表裏を察知して、漢室を扶持せしあり。或は勳績を著して誅戮せられ、或は大才ありて高官に列するを得ざりし者あり。皆清風を上代に揚げ、令聞後世に傳はり、今尙ほ其珮聲を聞くが如し。又王音、王鳳、弘恭、石顯の徒あり。邪佞にして勢を天下四方に震耀せるも、其の死するや夫の蕭曹等十餘公の僕隷にすら相伍するを待ず。名器の難きこと其れ此の如し。昔王莽大逆をなし漸臺に誅せられ、其首を梟さる。余今之を望み扼腕して怒を發し、北闕を望んで雋不疑を憶ひ、武庫を見て樗里子を懷ふ。昔殷の紂王酒池を作りて以て國を亡せる。漢の武帝復た之をなし、

【三五一】猗靡。美なる貌。
【三五二】熊に當る、元帝虎圈に幸し獸と鬪はしむ、熊、圈より逸し檻を攀ぢ殿に上らんと欲す、左右皆驚き走る、馮婕妤直ちにすすんで熊に當りて立つ、元帝問ふ何の故に熊に當ると、婕妤曰く、猛獸は人を得れば止る、妾御坐に至らんことを恐る、故に身之に當れるなりと、帝嗟嘆し益之を敬重す。
【三五三】輦を辭す。成帝後庭に遊ぶや、常に班婕妤と輦を同うして乘らんことを欲す、婕妤辭して曰く、古の圖畫を觀るに、賢聖の君は皆名臣の側に在るあり、三代の末王乃ち嬖女あり、今輦を同うせんと欲するは之に近似するなきを得んやと。
【三五四】衞。武帝の皇后衞氏。
【三五五】趙。漢の成帝の宮人趙飛燕。

其の覆轍を履んで改め寤らず。曲陽侯王根邸宅を作り白虎殿に象り、奢淫にして法度なし。夫れ生ある者は必ず死あり。孰か長生久視する者あらんや。かの武帝今何にか在る。文成將軍李少翁、五利將軍欒大の言に迷ひ、神仙の宮居に擬して、種種の造營をなし、海神は神島に翔り、長鯨は背を沙磧に曝し、仙人掌を建てて雲外に聳えしめ、遠方の奇物を致し、ただ自己の慾望を恣にし、角觝技を行ひ帳を飾るに珠玉を以てし、海内疲弊して、戸口半減するも肯て顧みず。泰山を封じて虛美を刻せり。然も今や死して跡を留めず。余今此等の事を追懷すれば、循環の盡くる時なきが如し。乃ち先づ面朝を觀て、然る後に後庭に及び、馮婕妤の熊に當りし忠勇を思ひ、班婕妤の同乘を辭せし明智を憶ひ、衞皇后の鬢髮雲の如く、以て人を鑑すべく、趙飛燕の輕體にして纖麗なりしを想ふ。馮班二婕妤に、盛德を立てて美名今に傳はり、衞趙二后は寵極まりて禍を受くること亦大なり。

(三五六)便門を津りて以て右に轉じ、吾が境の暨ぶ所を究め、(三五七)細柳に掩りて劒を撫し、(三五八)孝文の帥に

【三五六】便門。橋の名。

【三五七】細柳。地名。漢の文帝の時、匈奴大に邊に寇す、劉禮をして霸上に軍せしめ、徐厲をして棘門に軍せしめ、周亞夫をして細柳に軍せしめ、以て之を禦ぐ。帝軍を勞して霸上棘門に至る、次に細柳に至る、衞士門を開かず、帝入るを得ず、乃ち將軍周亞夫に詔して門を開かしむ、壁門の士車騎に謂つて曰く將軍約すらく軍中には馳驅するを得ずと、文帝卽ち轡を按じて徐行す、文帝曰く、此れ眞の將軍なり、嚮の霸上棘門の軍は兒戲のみと。

【三五八】孝文。漢の文帝。帥は將軍周亞夫を指す。

命ぜるを快とす。(三五九)周命を受けて身を忘れ、(三六〇)戎政の果毅を明にし、(三六一)華蓋を(三六二)曼和に距ぎ、乘輿の尊轡を案ぜしめ、天威の臨顏を肅み、軍禮に率ひて以て(三六三)長揵す。(三六四)棘霸の兒戲を輕んじ、(三六五)條侯の倨貴を重んず。(三六六)杜郵を索むるに其れ焉にか在る。云に孝里の前號なり。(三六七)憫として駕を輟めて(三六八)容與し、(三六九)武安を哀み以て悼を興す。趙を伐ちて以て國を徇ふるを爭ひ、廟算の勝負を定む。(三七〇)矢言を扞いで納れず、反つて怨を推して以て咎を歸し、未だ遷路に十里ならざるに、尋で劒を賜ひて首を刎ぬ。嗟主闇くして臣嫉む。禍何に於てか有らざらん。秦墟を(三七一)渭城に窺へば、(三七二)冀闕緬にして其れ堙盡し、陛殿の餘基を覓むれば、裁に(三七三)岐岋として以て隱嶙たり。(三七四)趙使の璧を抱き、(三七五)瀏として楹を睨んで以て憤を抗げしを想ふ。燕圖窮り白起曰く趙は未だ攻め易からざるなりと、終に往かず、秦趙を圍みしも拔く能はず、白起曰く、王臣が言を聽かず今如何と、秦王之を聞いて怒り白起をして咸陽に留まるを得ざらしむ、白起咸陽の西門を出で十里にして杜郵に至る、秦王使を遣し劒を賜ひて白起に自殺せしむ。

【三五九】周。周亞夫なり。

【三六〇】戎政。軍政なり。

【三六一】華蓋。天子の馬車の蓋。

【三六二】曼和。曼は軍營なり、和は軍營の正門なり。

【三六三】長揵。揵は揖なり。

【三六四】棘霸。棘門と霸上。

【三六五】條侯。周亞夫なり。

【三六六】杜郵。亭の名。咸陽の西に在り、今之を孝里といふ。

【三六七】憫。志を失ふ貌。

【三六八】容與。徘徊なり。

【三六九】武安。白起なり、秦の昭王に事へ武安君となる。

【三七〇】矢言。直言なり。秦王白起をして趙を攻めしめんとす、

【三七一】渭城。古の咸陽なり。

【三七二】冀闕。秦の闕の名。緬は盡くる貌。

【三七三】岐岋、隱嶙。頽るる貌。

【三七四】趙使。藺相如をいふ。

【三七五】瀏。目を怒らす貌。

て(三七六)荆發し、紛として袖を絶ちて自ら引く。(三七七)筑聲厲くして高く奮ひ、狙つて鉛を潛して以て臏を脱てり。天位に據ること其れ茲の若きも、亦狼狽せること愍むべし。

【大意】乃ち便門橋を渡りて右に轉じ、長安の境を出でて細柳に至り、昔文帝周亞夫に命じて細柳に將たらしめし時、亞夫君命を受けて其身を忘れ、軍政を明肅にし、天子をして軍門に入らしめず、一たび軍門に入れしも、轡を按じて徐行せしめ、既に天顔に咫尺せるも、僅に長揖の禮を行ひしのみ。文帝その嚴肅なるに感じ、亞夫の倨傲を稱美せるを快とす。進んで杜郵に至り、惘然として徘徊し、白起の最期を悲む。昔秦の昭王、白起をして趙を攻めしめんとせしも、白起勝算なきを以て肯んせず。秦趙を伐ちて果して勝たず。昭王卻つて怨を推して咎を白起に歸し、遂に之を咸陽城外に遷逐す。白起咸陽を出でて未だ十里ならず、杜郵に至りて死を賜ひて自殺す。ああ昭王は暗愚にして、其臣范雎白起を嫉む。白起の此禍を被るも亦宜なり。去つて渭城に秦墟を索むるに、纔に頽然たる痕跡を留むるのみ。因つて藺相如の璧を奉じて秦に來り、秦王の欺いて璧を取らんとする

【三七六】荆。荆軻なり、史記に荆軻、燕ノ督亢ノ地圖ヲ獻ズ、圖窮リテ匕首見ユ、因ツテ左手ニ秦王ノ袖ヲ把リ右手ニ匕首ヲ持チテ秦王ヲ刺ス、秦王驚イテ自ラ引キテ起ツ、袖絶ユ、其匕首ヲ以テ秦王ニ擲ツ、中ラズとあり。

【三七七】筑聲。筑は樂器の名。荆軻の客高漸離よく筑を擊つ、秦の始皇之を召し、其目を矐して筑を擊たしめ、漸く之を親近す、高漸離乃ち鉛を以て筑中に置き、始皇に扑ち、其臏を絶つ。臏は膝蓋骨なり。

や、極を睨んで憤を發せし事を想ひ、燕の太子丹の客荆軻、燕の地圖を秦王の前に呈し、圖中に隱し置きたる匕首を把りて、秦王を刺さんとするや、秦王自ら引いて其袖を絶ちし事と、高漸離筑中に鉛を隱し置き、之を始皇に擲ちて其膝を絶ちし事とを想ふ。時に始皇は身皇帝の尊位に在りしも、周章狼狽せしは誠に憐むべきなり。良人を簡んで以て自ら輔けんとし、(三七八)斯忠にして(三七九)鞅賢なりと謂ひ、苛制を灰を揖るに寄せ、(三八〇)扶蘇を朔邊に矯き、(三八一)儒林坑穽に塡まり、詩書煬かれて煙となり、(三八二)國滅亡して以て後を斷ち、(三八三)身刑轘せられて以て(三八四)先を啓く。商が法焉んぞ以て宿するを得ん、黄犬何ぞ復た牽くべけん。(三八五)野蒲變じて脯となり、苑鹿化して以て馬となる。(三八六)讒逆に假すに天權を以てし、衆口を鉗して寄坐せしむ。兵頸に在りて顧み問ふ、何ぞ早く我に告げざると。(三八七)黔黎たらんことを願へども其れ誰か聽さん、惟死を請うて可さるるを獲たり。(三八八)子嬰の果決に逮び、敢て賊を討ちて以て禍を紓う

【三七八】斯。李斯なり。秦の丞相となり、始皇の長子扶蘇を矯殺せり。

【三七九】鞅。商鞅なり。其法極めて嚴酷にして、灰を道に棄つれば刑せらる。

【三八〇】扶蘇。秦の始皇帝の長子。朔邊は北邊なり。

【三八一】儒林。多くの學者。坑穽はオトシアナなり。

【三八二】國。李斯商鞅ともに食邑あり、故に國といふ。

【三八三】刑轘。車裂せらるるを轘といふ。

【三八四】先。先を啓く。刑轘せらるるは李斯商鞅その始なり、故に先を啓くとい。

【三八五】野蒲。草の名がマなり。脯は乾肉なり。

【三八六】讒逆。趙高を指す。

【三八七】黔黎。平民なり。

【三八八】子嬰。秦王の名。始皇の孫なり。

せるも、勢土崩して振ふなく、路左に降王となれり。(三八九)蕭圖を收めて以て(三九〇)劉に相たり、險易と衆寡とを料る。(三九一)羽天の與ふるに取らず、(三九二)沐猴に冠して火を縱つ、(三九三)三光を貫いて九泉に洞る。曾て未だ以て其高下を喻ふるに足らず。市閭の(三九四)菆井に感じ、(三九五)尸韓の舊處に歎ず。(三九六)蒸屬號いて闕を守り、人〻身を百にして以て贖を納る。豈生命の投じ易からんや、誠に惠愛の洽著なればなり。望之を訐いて以て直を求めしは、亦余が心の惡む所なり。(三九七)夫人の政術を思ふに、實に(三九八)幹時の良具なり。苟も法を明にして以て憾を釋き、才を愛して以て務を成さず。大體を弘めて以て高貴ならんは、(三九九)蕭傅に望む所にあらず。(四〇〇)長山に造りて慷慨し、(四〇一)龍顏の英主を偉とす。胷中豁にして其れ洞開し、つ、望之因つて御史をして之を案問せしむ、延壽亦望之馮翊に在りし時、官錢百餘萬を放散すと劾奏す、帝之を案問せしむるも事實なし、延壽竟に誅せらる。

【三八九】蕭。蕭何、漢の高祖の臣。圖は秦の圖書なり。
【三九〇】劉。漢の高祖劉邦なり。
【三九一】羽。項籍、字は羽。
【三九二】沐猴。獼猴なり。
【三九三】三光。日月星をいふ。三光を貫くとは高祖の勢威赫赫たるをいふ。九泉に洞るとは項羽の恨を呑んで死するをいふ。
【三九四】菆井。渭城の東なる麻蒸を賣る市なり。
【三九五】尸韓。韓延壽の死屍なり。韓延壽東郡太守たり。蕭望之に代りて左馮翊となり、望之御史大夫に遷る、延壽東郡に在りし時、官錢千餘萬を放
【三九六】蒸屬。蒸は李善本に丞に作る、今之に從ふ。
【三九七】夫人。韓延壽を指す。
【三九八】幹時。時務を辨ずること。良具は良材といふが如し。
【三九九】蕭傅。蕭望之、後太子太傅に左遷せらる。
【四〇〇】長山。漢の高祖の陵なり
【四〇一】龍顏。龍の如き顏なり、高祖は鼻高くして龍顏なりきといふ。

羣善湊りて必ず擧ぐ。(四〇二)存威天區に格れるも、(四〇三)亡墳掘かれて禦ぐなし。(四〇四)掩坎に臨んで累に抃し、毀垣に步して以て(四〇五)延佇す。(四〇六)安陵を越えて譏ることなし。諒に惠聲の寂寞たり。(四〇七)爰絲の正義、(四〇八)梁劒に東郭に伏せしを弔ふ。(四〇九)景皇を陽丘に訊ふ。奚ぞ譖を信じて矜諱なる。(四一〇)吳嗣を局下に隕す。蓋し怒を(四一一)一博に發し、七國の亂を稱ぐるを成す。翻つて逆を助けて以て(四一二)錯を誅す。恨むらくは聽を過りて討つなかりしことを。茲れ善を沮んで惡を勸むるなり。

【大意】始皇賢良の士を選んで自ら輔けんとし、李斯商鞅を認めて忠賢となす。然も此の二人は道に灰を棄つる者を刑し、扶蘇を北邊に矯殺し、或は儒生を坑殺し、詩書を燒き、暴虐至らざるなし。されば其國忽ち滅び商鞅は車裂せられ、李斯は腰斬せられぬ。商鞅法を立て人の驗なき者を宿すれば、刑戮を加ふる事となせり。鞅嘗て逃れて關下に至りしに、之を宿泊せしむ

【四〇二】存威。高祖の生時の威力。
【四〇三】亡墳。高祖死後の墳墓。王莽の亂に漢の諸陵皆發掘せらる。
【四〇四】掩坎。掩はれし墓穴。
【四〇五】延佇。低回といふが如し。
【四〇六】安陵。漢の景帝の墓。
【四〇七】爰絲。袁盎、字は絲、楚の相となり、病んで免じ家居す、梁の孝王嗣たらんことを求めんと欲す、盎說を進む、王此を以て盎を怨み、人をして盎を安陵郭門の外に刺殺せしむ。
【四〇八】梁劒。梁の孝王の劒。
【四〇九】景皇。漢の景帝。陽丘は其陵なり。
【四一〇】吳嗣。吳王の太子なり。局は博局、將棊盤の如きもの。
【四一一】一博。博は雙陸の如き遊戲の名。
【四一二】錯。晁錯なり。

る者なかりしは、是れ所謂自繩自縛といふべし。李斯の戮に就くや、其子を顧みて言つて曰く、汝と復た黄犬を牽いて上蔡の東門を出で、狡兎を逐はんと欲するも能はざるなりと。その言や亦憐むべし。秦の趙高亂をなさんと欲するも、羣臣の聽かざらんことを恐る。乃ち驗を設け蒲を以て脯と稱し、鹿を以て馬と稱し、以て二世皇帝に獻じ、羣臣の蒲といひ鹿といふ者をば、陰に之を誅し、以て己に盲從せしむ。二世皇帝亦之に假すに天權を以てす。乃ち羣臣口を噤んで坐するのみ。趙高の女婿閻樂をして二世を害せしめんとするや、左右惶擾して鬪はず。傍に宦官一人あり。帝に侍して敢て去らず。二世之に謂つて曰く、汝何ぞ早く我に此事あるを告げざると。宦官曰く、臣敢て言はず、故に全きを得たり、臣をして早く言はしめば、安んぞ今に至るを得んやと。二世閻樂に請ひて曰く、願くは一郡を得て王とならんと。閻樂許さず。又曰く願くは萬戶侯とならんと。亦許さず。又曰く、願くは庶民とならんと。亦許さず。二世乃ち自殺す。子嬰立ちて果決を振ひ趙高を殺して國禍を緩うせしも、秦の積惡久しくして人心離散し、復た國威を振ふに由なく、遂に沛公に軹道の傍に降るに至れり。沛公の咸陽に入るや、蕭何秦の圖書を收めて之を藏し、高祖（沛公）因つて戶口の多少と地形の險易とを知るを得たり。項羽は勢力を一時に震ひしも、天與を取らずして卻つて其咎を受け、咸陽を屠りて、秦の宮室を燒く。是れ所謂沐猴にして冠する者のみ。ああ高祖は威

勢赫赫として三光を貫き、項羽は恨を呑んで九泉に入る。其高下の差譬ふるに物なしといふべし。去つて市閭の菆井に感じ、韓延壽の舊處に嘆ず。延壽の誅せらるるや、吏民數千送りて渭城に至り、闕下に號泣し身を百にして其罪を贖はんことを願へり。夫れ人命は至重なり。然も之を棄てて其罪を贖はんとせるは、延壽の惠愛洽く民に及びたればなり。ただ蕭望之の罪を訐いて直を求めしは、余が心に非とする所なり。延壽の政術を思ふに、實に時務を辨ずるの良材なり。望之法を明かにして私怨を霽さんことを務め、人材を愛して國家の務を成さず。大體を弘めて高貴に陞るが如きは、望之に望むべきにあらざるなり。長陵に至りて高祖の爲人を偉とす。其心豁達にして大度あり。賢士の至る者あれば、必ず之を擧用す。故に生きては其威天に震ひしも、王莽の亂に遇ひて其陵其の發く所となれり。余今其墓穴に臨み、膺を撫でて低回す。去つて安陵に至る。惠帝の名聲寂寞として人の褒貶するなし。安陵の郭門外に往き、袁盎の正義なるも、竟に梁の孝王に刺殺されしを弔ひ、陽丘に至りて景帝を弔ふ。帝は吳の太子と博して爭ひ、遂に博局を投じて太子を殺し、爲に吳楚七國の亂因を釀しぬ。然も聽を過りて晁錯を誅したるは、是れ却つて逆臣を助くるものにして、善を沮止して惡を勸むるものといふべし。

(四三) 孝元を　(四四) 渭陵に皆る、(四五) 奄尹を執りて以

【四三】孝元。漢の元帝。
【四四】渭陵。陵は墓なり、元帝渭陵に葬る。
【四五】奄尹。宦官弘恭、石顯を

て貶を明にす。(四一六)夫の君に善行を襲す、(四一七)園邑を廢して以て儉を崇ぶ。(四一八)延門を過ぎて(四一九)成を責む。忠何の辜ありて戮となる。社稷の(四二〇)王章を陷れ、幽死して(四二一)鞠むるなからしむ。(四二二)淫嬖の凶忍を恣にし、皇統の孕育を勦し、(四二三)鼻氏の(四二四)奸漸を張り、漢宗に貽すに傾覆を以てす。(四二五)哀主を(四二六)義域に刺る。天爵を(四二七)高安に僭す。堯に法らんと欲して(四二八)羞を承め、永に(四二九)終古して刊られず。(四三〇)康園の孤墳を瞰、(四三一)平后の專契を悲む。その父の簒逆を殃とし、漢の恥を蒙りて雪がず、義誠を激して引決し、(四三二)丹燭に赴いて以て節を明にし、宮火に投じて(四三三)焦糜し、(四三四)灰燻に從つて俱に滅ぶ。(四三五)横橋に鶩せて軫を旋らし、(四三六)敝邑の(四三七)南垂を歷。磁石を門にして木蘭を梁にし、(四三八)阿房の屈奇たるを構へ、(四三九)南山を疏りて以て闕を表し、(四四〇)樊川を停にして以て池を激す。(四四一)鬼傭を役するも其れ猶ほ否らず。矧んや人力の爲す所ならんや。工徒斲りて未だ息まざるに、(四四二)義兵紛として以て交り馳せ、(四四三)宗祧汙れて沼となる。豈斯宇の獨り隳れしのみならんや。(四四四)僞新の(四四五)九廟に由り、虞を宗とし黃を祖とするを誇る。(四四六)吁嗟を驅りて(四四七)妖臨し、佞哀を搜りて以て郎に拜す。六藝を誦して以て姦を飾り、詩書を焚いて(四四八)牆に面す。心德義に則らざれば、術を異にすと雖も亡を同うす。(四四九)孝宣を(四五〇)樂遊に宗とす。衰緒を紹いで以て中興す。敬養を事とするを獲ず、盡く隆を園陵に加ふ。(四五一)兆は惟れ奉明、邑を千人と號す。諸を故老に訊ふに、之を封じて高安侯となす。賢後丁明に代りて大司馬となる。卽ち三公の職なり。

【四一六】夫君。元帝を指す。
【四一七】園邑。陵墓に附屬する縣邑。
【四一八】延門。成帝の陵、延陵也。
【四一九】成。漢の成帝。
【四二〇】王章。成帝の時封事を奏していふ、王鳳をば任用すべからずと、帝章に謂つて曰く汝の直言なくんば吾社稷の計を聞かすと、後帝鳳を退くるに忍びず、章遂に王鳳に陷れられ獄中に死す。
【四二一】鞠。罪情を窮問すること。
【四二二】淫嬖。趙飛燕を指す。
【四二三】鼻氏。皇室の外戚たる王氏なり。
【四二四】奸漸。惡事のキザシ。
【四二五】哀主。漢の哀帝。
【四二六】義域。哀帝の義陵なり。
【四二七】高安。董賢美色あり哀帝
【四二八】羞。六臣本に禪に作る、今李善本に從ふ。
【四二九】終古。永久に續くこと。
【四三〇】康園。漢の平帝康陵に葬る。
【四三一】平后。平帝の皇后、王莽の女なり。漢兵王莽を誅せんとし未央宮を燒くに及び、后曰く何の面目ありて漢家に見えんやと、自ら火中に投じて死す。
【四三二】丹燭。赤き焰。
【四三三】焦糜。こげただるること。
【四三四】灰燻。燻はヒノコなり。
【四三五】横橋。橋の名。
【四三六】敝邑。岳の治むる所の邑、卽ち長安をいふ。
【四三七】南垂。南界なり。

【四三八】阿房。宮の名。
【四三九】南山。終南山なり。
【四四〇】樊川。川の名、秦川ともいふ。
【四四一】鬼傭。鬼工なり。
【四四二】義兵。沛公の兵なり。
【四四三】宗祧。宗廟なり。
【四四四】僞新。王莽漢の皇位を簒ひて國を建て、國號を新といふ。
【四四五】九廟。王莽九廟を建つ。一に黃帝、二に虞帝、三に陳王、四に齊敬王、五に濟北愍王、六に濟南伯王、七に元城孺王、八に陽平頃王、九に新都顯王。
【四四六】吁嗟。嘆き悲むこと。
【四四七】妖臨。臨とは廟に哭泣すること。漢書に鄧曄、于匡兵ヲ南鄉ニ起ス、莽愈愛ヘテ出ヅル所ヲ知ラズ、崔發曰ク、周禮ニ國ニ大災アレバ則チ廟ニ哭シテ以テ之ヲ厭スト、莽乃チ羣臣ヲ率キテ南郊ニ至リ胸ヲ搏ツテ大ニ哭ス、諸生甚ダ悲哀ス、能ク策文ヲ誦スルニ及ンデ除シテ以テ郎トナスとあり。
【四四八】牆に面す。書經に學バザレバ面ニ牆スとあり。
【四四九】孝宣。漢の宣帝。
【四五〇】樂遊。宣帝の陵なり。
【四五一】兆。墓なり。

(四五三)帝詢より造まる。(四五四)王母の悲命を隱み、聲樂を縱にして以て神を娛ましむ。舊典に率ふなしと雖も、亦(四五五)過を觀て仁を知る。(四五六)高望の陽隈に憑りて、川陸の(四五七)汙隆を體し、襟を(四五八)清暑の館に開き、目を五柞の宮に遊ばしむれば、(四五九)交渠引漕して、激湍風を生ず。

【大意】渭陵に元帝を弔ひ、帝の弘恭、石顯等の宦官を重用したるを貶し、又祖宗の廟の禮典に合はざるを以て園邑を廢して險を尚びたるを襃す。延陵に成帝を弔ひ、社稷の臣王章を罪に陷れ、窮問を用ひずして幽死せしめたる罪を責め、又趙飛燕をして殘忍凶惡を恣にし、宮人の子を生む者あれば輒ち之を殺さしめ、王氏簒弑の端を開き、終に漢室を傾覆するに至れるを責む。義陵に哀帝を弔ふ。帝の天爵を僭して董賢を高安侯に封じ、堯舜の禪讓に倣ひて、位を董賢に讓らんとし、王閎の切諫によりて止みしは、千古不滅の大失態なり。余今乃ち之を刺る。康陵に平帝を弔ひ、皇后王氏の貞潔なる、其父王莽の簒逆を謀るや、義誠を引いて節を明にし、火中に投じて自殺せるを悲む。橫橋に至りて車を還し、

【四五二】帝詢。宣帝名は詢。
【四五三】王母。宣帝の母なり。漢の武帝の戾太子巫蠱の事によりて自殺す、太子の子史皇孫其妻王夫人皆害に遇ふ、史皇孫の遺子詢位に卽く、是を宣帝となす。史皇孫の墓を奉明園と稱し、母を悼夫人といひ、其墓に優倡千人を以て樂す、千人邑の名此より起る。
【四五四】過を觀。論語に人ノ過ツヤ各其黨ニ於テス、過チ觀テ斯ニ仁チ知ルとあり。
【四五五】高望。堆の名。陽隈は堆の南をいふ。
【四五六】汙隆。高低といふが如し。
【四五七】清暑。宮觀の名。
【四五八】五柞。宮觀の名。
【四五九】交渠。溝渠の名。

長安の南界を經て、阿房宮址に至る。此宮たる木蘭を以て梁となし、磁石を以て門となし、終南山を以て門闕となし、樊川を以て池となし、壯麗宏敞を極む。鬼神を使役して之を營むも猶ほ及ばず。況んや人力の能く爲す所ならんや。然も彫斲未だ終らざるに、沛公の義兵其中に交馳し、この宮獨り破壞せられしのみならず、宗廟亦汙れて池沼となりしは憐むべし。轉じて僞新王莽の故墟を經る。王莽九廟を作り虞舜黃帝を祖宗とするを誇りしも、鄧曄于匡の攻擊に遇ひ、吁嗟して廟に哭泣したる、亦憐むに足る。莽は六藝の文を誦して己の奸を飾り、秦は詩書を燒きて墻に面す。惡をなすこと同じからざるも、同じく滅亡に歸せるは固より當然なり。進んで樂遊原に宣帝を弔ひ、衰運を承けて中興の大業を成しを偉とす。帝は生前父母を孝養する能はざりしを以て、其陵墓を壯麗にし、奉明園千人邑の名今に存す。故老に問ふに實に宣帝に創まるといふ。帝の此事必ずしも禮典に合はざれども、父母非命の死を悼み、厚く死後に報いんとせるは、人情の然らしむる所にして、亦以て其仁を知るに足る。進んで高望堆の南崖に登りて水陸高低の狀を見、清暑館、五柞宮に憩ひて眺望すれば、交渠交流して激湍に風を生ずるを見る。乃ち其中に(四六〇)昆明池あり。其池は則ち(四六一)湯湯汗汗、(四六二)混瀁として彌漫し、浩として河漢の如

【四六〇】昆明池。池の名。
【四六一】湯湯汗汗。湯湯は流るる貌。汗汗は水の廣き貌。
【四六二】混瀁。水の廣き貌。

く、日月天に麗きて東西に出入し、旦には(四六五)暘谷に似、夕には(四六六)虞淵に類たり。昔(四六七)豫章の名宇、玄流を披いて特に起り、(四六八)景星に天漢に儀り、(四六九)牛女を列ねて以て雙び峙て、萬載にして傾かざらんことを圖りしも、(四七〇)奄として(四七一)十紀に擢落せり。百尋の層觀を擢んでしも、今數仞の餘址あるのみ。振鷺于に飛び、鳧躍り鴻漸み、雲に乘りて(四七二)頡頏し、波に隨つて(四七三)澹淡たり。驚波に(四七四)瀺灂し、(四七五)菱芡を咳喋し、華蓮綠沼に爛として、(四七六)青蕃翠瀲に蔚たり。伊れ茲池の肇めて穿てる、水戰を荒服に肄はせ、志遠きを勤めて以て武を極めんとなり。良に(四七七)後福を要むるなし。而かも菜蔬(四七八)芼實、水物惟れ錯り、乃ち原陸より贍なるあり。(四七九)皇代に在りて(四八〇)物土なり。故に之を毀ちて又復す。凡そ厥の(四八一)寮司既に富まして敎ふ。咸く貧惰を帥ゐて同じく(四八二)機櫂を整へ、罟を收めて獲を課し、繳を引いて(四八三)效を擧げ、(四八四)鰥夫室あり、愁民以て樂む。

【四六三】暘谷。日の出づる處。
【四六四】虞淵。日の沒する處。
【四六五】豫章。宮觀の名。
【四六六】景星。瑞星なり。
【四六七】牛女。牽牛星と織女星。
【四六八】奄。忽なり。
【四六九】十紀。十二年を一紀といふ。武帝の元狩三年昆明池を穿ち、王莽の敗に至るまで凡て百十三年なり。
【四七〇】頡頏。飛んで上るを頡といひ、飛んで下るを頏といふ。
【四七一】澹淡。浮ぶ貌。
【四七二】瀺灂。出沒する貌。
【四七三】菱芡。水草の名、咳喋は啄み食ふこと。
【四七四】青蕃。蕃は草の名。翠瀲は水際なり。蔚は茂ること。
【四七五】後福。水物の利をいふ。
【四七六】芼實。芼は草なり。
【四七七】皇代。晉をいふ。
【四七八】物土。特產物なり。
【四七九】寮司。百官なり。
【四八〇】機櫂。舟をこぐ棹。
【四八一】效。果なり、獲なり。
【四八二】鰥夫。妻なき男、室は妻なり。

徒に其の枻を鼓ち輪を廻らし、釣を灑し罔を投じ、餌を垂れて出入し(四八五)叉を挺きて來往するを觀るに、(四八六)纖經白を連ね、(四八七)梭を鳴らし響を厲し、鰓を貫き尾を罥け、掣くこと三にして牽くこと兩なり。是に於て(四八八)青鯤を網鉅に弛め、(四八九)頰鯉を黏徽に解けば、(四九〇)華魴鱗を躍らし、(四九一)素鱮鬐を揚ぐ。(四九二)雍人縷のごとく切り、(四九三)鑾刀飛ぶが若く、刃に應じて俎に落ち、(四九四)霾霾霏霏たり。(四九五)紅鮮紛として其れ初めて載り、(四九六)賓旅竦ちて(四九七)御せんことを遲つ。既に(四九八)餐服して以て(四九九)屬厭し、(五〇〇)泊恬靜にして以て無欲なり。小人の腹を廻らして、君子の慮となす。

【大意】中に昆明池あり。廣大にして日月其中に出入するかと疑はる。池中に豫章觀を起し、二石人を立て牽牛織女の二星に象る。昔漢の武帝の此觀を建つるや、萬歲を經るも猶は破れざらしめんと謀りしも、纔に百餘年にして傾壞し、今只數仞の遺址を存するのみ。池中に振鷺鳧鴻あり、雲に乘りて高く飛び、流に隨つて輕く浮び、蓮蕃波際に輝く。武帝の始めて此池を穿つや其志

【四八三】叉。末の二つ以上に分れたるもの、魚を刺す具なり。
【四八四】纖經。網の細き絲なり。
【四八五】梭。長木なり。
【四八六】青鯤。鯤は魚の名。網鉅は網に著けある鉤なり。
【四八七】頰鯉。赤き鯉。黏徽は網。
【四八八】華魴。魴は魚の名。
【四八九】素鱮。鱮は魚の名、素は白なり。
【四九〇】雍人。饔人に同じ、料理人なり。
【四九一】鑾刀。鑾はスズなり、鑾のつける刀。
【四九二】霾霾霏霏。細く淨き貌。
【四九三】紅鮮。鱠の色なり。
【四九四】賓旅。多くの客。
【四九五】御。食ふこと。
【四九六】餐服。食ふこと。
【四九七】屬厭。滿足すること。
【四九八】泊恬靜。無欲の貌。欲は音ユ、叶韻。